

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第200集

枚方市

津田遺跡Ⅱ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年3月

財団法人 大阪府文化財センター



調査区遠景（南から）

津田08-1・2調査区は道路建設用地の右手前 平成21年4月撮影



第1面3建物遺物出土状況







62墓出土灰釉陶器四耳壺



119墓出土灰釉陶器長頸壺(瓶)



114墓出土遺物



埴仏



青銅製品



鋳型



須恵器



灰釉陶器



緑釉陶器





序 文

生駒山地は大阪のことに河内の地からは常に間近な山なみである。その山なみが淀川流域の平野に寄り付く北河内の地に、大阪と京都を結ぶ新たな道—第二京阪国道(緑立つ道)—が築かれようとしている。

それに先立ち財団法人大阪府文化財センターは、国土交通省と西日本高速道路株式会社の委託を受けて、北東から南西にかけて、枚方市の杉中賣谷、杉、津田城、津田、交野市の東倉治、倉治、有池、上私部、私部南、交野市と枚方市にまたがる上の山、茄子作、交野市の平池、寝屋川市の寝屋東、寝屋南、奥山、打上、太秦・太秦古墳群、大尾、高宮、小路、寝屋川市と門真市にかけての讚良郡条里、四条畷市の砂、門真市の栗本、三ツ島の各遺跡において、平成8年度から確認調査を、平成12年度からは本格的な発掘調査を実施してきた。その延長は実に13kmに及ぶ。

星霜ここに十数年。委託者も建設省が国土交通省に、日本道路公団が分割され西日本高速道路株式会社に、そしてわが財団法人も大阪府文化財調査研究センターから大阪府文化財センターに変わるほどの歳月を経た。この平成22年3月の道路供用開始を控え、その予定地の発掘調査も終盤を迎えたのである。

その掉尾を飾る津田遺跡の地には、古代に津田寺なる寺院が営まれ、その後の円通寺につながるという伝承がある。一方、近年の厳密な史料批判に基づく研究により、その拠りどころとする文書の信憑性に疑問符が付いていた。

調査では、山裾にしがみつくようにその存在を主張する礎石群、墓、鍛冶工房が見つかった。薄紙をはがすようにそれらを掘り出し、記録した。加えて、山上から流れ来たり、あるいは置かれた位置に踏みとどまった多量の瓦や土器、輝きを秘めた埴仏と懸仏、そして並んでたたずむ石仏がわれわれの眼前に姿をあらわした。これらを取り上げ、検討した。

つまるところ、伝承や文書を囁呑みにはできないとしても、この地が古代から中近世にいたる人びとの祈りと悼みの場であったことが明らかになったのである。

津田遺跡の発掘調査および整理作業では、国土交通省、西日本高速道路株式会社、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会をはじめとする方々に多大なご理解とご協力を賜った。衷心よりお礼申し上げますとともに、今後ともなおいっそうのご支援をお願いするものである。

平成22年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、大阪府枚方市津田南町1・2丁目他に所在する津田遺跡（津田遺跡08-1・08-2）の発掘調査報告書である。

2. 調査は国土交通省近畿地方整備局浪速国道事務所ならびに西日本高速道路株式会社関西支社の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。現地調査および報告書作成にかかわる受託契約と契約期間、工事請負契約の名称、期間は以下のとおりである。

平成20年度（08-1調査）

受託事業名【国土交通省】第二京阪道路（大阪北道路）津田遺跡発掘調査（その2）

【西日本高速道路株式会社】平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡その2）

委託期間 平成20年6月1日～平成21年3月31日

調査期間 平成20年6月20日～平成20年12月26日

平成20年度（08-2調査）

受託事業名【国土交通省】第二京阪道路（大阪北道路）津田遺跡発掘調査（その3）

【西日本高速道路株式会社】平成20年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡その3）

委託期間 平成20年10月1日～平成21年3月31日

調査期間 平成20年10月29日～平成21年3月31日

平成21年度（08-2調査・整理作業）

受託事業名【国土交通省】第二京阪道路津田遺跡発掘調査

【西日本高速道路株式会社】平成21年度第二京阪道路（一般国道1号）建設事業（大阪府域）に伴う埋蔵文化財発掘調査（津田遺跡）

委託期間 平成21年4月1日～平成22年3月31日

調査期間 平成21年4月1日～平成21年5月29日

3. 調査・整理は以下の体制で実施した。

〔調査〕平成20年度

調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘、京阪調査事務所長 山本 彰、主査 上野貞子〔写真〕、
調査第一係長 三好孝一、主査 村上富喜子、副主査 本間元樹、副主査 森本 徹、技師 河端 智、
技師 湯本 整、技師 内田真雄

〔調査・整理〕平成21年度

調査部長（兼調査課長） 福田英人、調整グループ長 金光正裕、調査グループ長 寺川史郎、
主査 上野貞子〔写真〕、京阪総括主査 三好孝一、副主査 本間元樹

4. 金属器などのX線撮影およびその保存処理については、調査グループ主査 山口誠治・専門調査員 橋本俊範が行った。
5. 調査の実施にあたっては、大阪府教育委員会、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、枚方市津田南自治会をはじめとし、下記の方々にご指導、ご教示を賜った。記して謝意を表したい。(順不同・敬称略)
平尾政幸・網 伸也・南 孝雄(京都市埋蔵文化財研究所)、久保智康・尾野善裕(京都国立博物館)、大脇 潔(近畿大学)、安部みき子(大阪市立大学大学院医学研究科)、奥田 尚(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員)、三宅俊隆(財団法人枚方市文化財研究調査会)、馬部隆弘(枚方市立中央図書館市史資料室)、横田 明(大阪府教育委員会)
6. 本書の編集は本問元樹が担当した。執筆分担については目次に記載したとおりである。
7. 本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面 (T.P.) を使用している。
2. 遺構平面図の座標値は、世界測地系 (測地成果2000) に基づく国土座標第Ⅵ系で表記する。報告書内での単位はkmである。
3. 本書で用いた北は国土座標第Ⅵ系の座標北を基準とし、磁北は西に $6^{\circ} 54'$ 、真北は東に $0^{\circ} 10'$ 振っている。遺構実測図等に付す方位針は、全て座標北を示す。
4. 発掘調査及び整理作業の実施に際しては当センター制定の『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003年8月)に準拠した。
5. 本書で用いた土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帖』2006年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。
6. 遺構番号は、08-1調査区・08-2調査区とも遺構種類に関わらずそれぞれ通し番号とした。なお、検討の結果、遺構ではないと判断したものについては欠番とした。
7. 掲載図面の縮尺は、調査区平面図 $1/400$ 、遺構図 $1/10 \cdot 1/20$ 、土器 $1/4$ 、磨製石器 $1/2$ 、打製石器 $2/3$ 、石仏 $1/8$ 、青銅製品 $1/2$ 、鉄製品 $1/3$ を基本とするが、適宜縮尺を変更したものがあつた。個々の縮尺については各図のスケールバーを参照されたい。
8. 土器類の断面は、須恵器を黒塗り、瓦・瓦器・瓦質土器をアミフセ10%、その他を白抜きとした。土器表面に付着した釉や赤色顔料はアミフセ5%、油の炭化物は実物に即して濃淡をつけて表現した。転用碗の磨られた範囲もアミフセ5%とした。図上復元できない土器の小片は、「内面-断面-外面」と配置した。打製石器の新欠部分は黒塗りとした。遺構断面図にかかる遺物や石は右上がりの斜線、基盤層はアミフセ10%とした。
9. 本書における遺物番号は実測図、写真図版とも一致する通し番号とした。
10. 各報文作成者による見解の相違や文章表現法については敢えて統一していない。
11. 写真掲載遺物の縮尺は任意である。

目 次

カラー写真図版	1～8
序文	i
例言	ii
凡例	iv
目次	v
カラー写真図版目次	vi
図目次	vi
表目次	ix
写真図版目次	ix
第1章 調査にいたる経緯と経過	(本間元樹) 1
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	(本間) 3
第2節 歴史的環境	(本間) 3
第3章 調査・整理の方法	(本間) 6
第4章 08-1 調査区の調査成果	
第1節 概要	(三好孝一) 9
第2節 層序	(三好) 9
第3節 遺構	(三好) 9
第4節 遺物	(村上富喜子) 18
第5章 08-2 調査区の調査成果	
第1節 概要	(本間) 25
第2節 層序	(本間) 25
第3節 第1面の遺構と遺物	(本間) 34
第4節 第2面の遺構と遺物	(本間) 72
第5節 第2-2面の遺構と遺物	(本間) 91
第6節 第3面の遺構と遺物	(本間) 96
第7節 包含層出土遺物	(本間) 101
第8節 まとめ	(本間) 124
第6章 津田遺跡出土石材の石種とその採石地	(奥田 尚) 129

土器・瓦等観察表(表5).....	132~146
写真図版.....	1~48
報告書抄録.....	巻末

カラー写真図版目次

カラー写真図版1	調査区遠景 08-2調査区 第1面3建物遺物出土状況
カラー写真図版2	08-2調査区 第1面3建物出土青銅製品
カラー写真図版3	08-2調査区 第1面2墓出土遺物
カラー写真図版4	08-2調査区 第2面62・114・119墓出土遺物
カラー写真図版5	08-2調査区 出土埴仏、青銅製品、鋳型
カラー写真図版6	08-2調査区 出土須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器
カラー写真図版7	08-2調査区 出土青磁、青白磁
カラー写真図版8	08-2調査区 出土褐釉陶器

図目次

図1	遺跡分布.....	2
図2	周辺地形.....	4
図3	地区割り.....	7
図4	グリッド配置.....	8
図5	08-1調査区 西壁断面.....	10
図6	08-1調査区 第1面.....	11
図7	08-1調査区 第1面1溝、2土坑.....	12
図8	08-1調査区 第1面3・4土坑.....	13
図9	08-1調査区 第1面5井戸.....	14
図10	08-1調査区 第2面.....	16
図11	08-1調査区 第3面.....	16
図12	08-1調査区 第3面50溝遺物出土状況.....	17
図13	08-1調査区 出土石器.....	18
図14	08-1調査区 出土弥生土器.....	18
図15	08-1調査区 第3面50溝出土遺物.....	19
図16	08-1調査区 第3面20・50溝出土遺物.....	20
図17	08-1調査区 第3面51流路出土遺物.....	20
図18	08-1調査区 第3面出土五輪塔空風輪.....	21
図19	08-1調査区 中世洪水砂出土遺物.....	22

図20	08-1 調査区 第1面1溝、耕土層、近世洪水砂出土遺物	23
図21	08-2 調査区 調査前地形	26
図22	08-2 調査区 A断面	27
図23	08-2 調査区 B断面	29
図24	08-2 調査区 C断面	30
図25	08-2 調査区 D断面	32
図26	08-2 調査区 E断面	33
図27	08-2 調査区 第1面	35
図28	08-2 調査区 第1面における金属探査	36
図29	08-2 調査区 第1面3建物検出状況	37
図30	08-2 調査区 第1面3建物断面	38
図31	08-2 調査区 第1面3建物遺物出土状況	39
図32	08-2 調査区 第1面3建物青銅製品等出土状況	40
図33	08-2 調査区 第1面3建物出土軒丸瓦(1)	42
図34	08-2 調査区 第1面3建物出土軒丸瓦(2)	43
図35	08-2 調査区 第1面3建物出土軒平瓦	44
図36	08-2 調査区 第1面3建物出土丸瓦	45
図37	08-2 調査区 第1面3建物出土平瓦	46
図38	08-2 調査区 第1面3建物出土土行基葺丸瓦、竹管文のある平瓦、隅瓦、面戸瓦	47
図39	08-2 調査区 第1面3建物出土雁振瓦	48
図40	08-2 調査区 第1面3建物出土その他の道具瓦類	49
図41	08-2 調査区 第1面3建物出土菊花文軒丸瓦、剣頭文軒平瓦(1)	50
図42	08-2 調査区 第1面3建物出土剣頭文軒平瓦(2)	51
図43	08-2 調査区 第1面3建物出土土器、石製品、金属製品	53
図44	08-2 調査区 第1面29土坑出土遺物	54
図45	08-2 調査区 第1面26石仏列	56
図46	08-2 調査区 第1面26石仏列ほか出土石仏	57
図47	08-2 調査区 第1面3建物、26石仏列完掘状況	58
図48	08-2 調査区 第1面2墓	59
図49	08-2 調査区 第1面2墓出土遺物	60
図50	08-2 調査区 第1面18竪穴、24炉、23・25・30ピット	62
図51	08-2 調査区 第1面18竪穴出土遺物	63
図52	08-2 調査区 第1面235溝	64
図53	08-2 調査区 第1面31・235溝出土遺物	64
図54	08-2 調査区 第1面1石群	65
図55	08-2 調査区 第1面4石組(1)	66
図56	08-2 調査区 第1面4石組(2)	67
図57	08-2 調査区 第1面17・236石群	68

図58	08-2 調査区 第1面石組、土坑、ビットほか出土遺物	69
図59	08-2 調査区 第1面8土坑、27・28ビット	70
図60	08-2 調査区 第2面	73
図61	08-2 調査区 第2面32石群	74
図62	08-2 調査区 第2面89石群	75
図63	08-2 調査区 第2面84石囲い	76
図64	08-2 調査区 第2面93焼土坑	77
図65	08-2 調査区 第2面62・114・119墓	79
図66	08-2 調査区 第2面62・114・119墓出土遺物	80
図67	08-2 調査区 第2面50・76・90土坑	83
図68	08-2 調査区 第2面110・111・121・125土坑	84
図69	08-2 調査区 第2面土坑、ビット出土遺物	88
図70	08-2 調査区 第2面43落ち込み出土遺物	89
図71	08-2 調査区 第2面83落ち込み出土遺物	90
図72	08-2 調査区 第2-2面	92
図73	08-2 調査区 第2-2面134土坑、135焼土坑	93
図74	08-2 調査区 第3面	97
図75	08-2 調査区 第3面231石群、227ビット	98
図76	08-2 調査区 第3面191ビット、225落ち込み出土遺物	100
図77	08-2 調査区 包含層出土石器	102
図78	08-2 調査区 第2層出土縄文土器、弥生土器	103
図79	08-2 調査区 包含層出土鋳型、埴仏	103
図80	08-2 調査区 包含層出土古代の丸瓦、平瓦(1)	104
図81	08-2 調査区 包含層出土古代の平瓦(2)	105
図82	08-2 調査区 包含層出土古代の土師器	106
図83	08-2 調査区 包含層出土古代の須恵器(1)、転用硯	108
図84	08-2 調査区 包含層出土古代の須恵器(2)	109
図85	08-2 調査区 包含層出土古代の須恵器(3)	110
図86	08-2 調査区 包含層出土緑釉陶器、灰釉陶器	111
図87	08-2 調査区 包含層出土中世の土師器	112
図88	08-2 調査区 包含層出土瓦器	113
図89	08-2 調査区 包含層出土瓦質土器	114
図90	08-2 調査区 包含層出土東播系須恵器、古瀬戸、常滑焼	116
図91	08-2 調査区 包含層出土輸入陶磁器	117
図92	08-2 調査区 包含層出土中世の軒瓦、丸瓦	118
図93	08-2 調査区 包含層出土中世の平瓦	119
図94	08-2 調査区 包含層出土滑石製品	120
図95	08-2 調査区 包含層出土五輪塔火輪、地輪(1)	121

図96	08-2 調査区 包含層出土五輪塔地輪(2)	122
図97	08-2 調査区 包含層出土金属製品	123
図98	08-2 調査区 飛鳥時代～奈良時代の遺構	125
図99	08-2 調査区 平安時代の遺構	125
図100	08-2 調査区 鎌倉時代の遺構	127
図101	08-2 調査区 安土桃山時代の遺構	127
図102	08-2 調査区 第1面3建物石材	131

表 目 次

表1	08-2 調査区 第1面土坑・ピット一覧	71
表2	08-2 調査区 第2面土坑・ピット一覧	85～87
表3	08-2 調査区 第2-2面土坑・ピット一覧	94～95
表4	08-2 調査区 第3面土坑・ピット一覧	99～100
表5	土器・瓦等観察表	132～146

写真図版目次

写真図版1	08-1 調査区 第1面(1)
写真図版2	08-1 調査区 第1面(2)、第3面(1)
写真図版3	08-1 調査区 第3面(2)、第3面遺物出土状況
写真図版4	08-2 調査区 遠景、調査前状況
写真図版5	08-2 調査区 第1面、第1面3建物(1)
写真図版6	08-2 調査区 第1面3建物(2)
写真図版7	08-2 調査区 第1面3建物(3)
写真図版8	08-2 調査区 第1面3建物(4)
写真図版9	08-2 調査区 第1面26石仏列、1石群
写真図版10	08-2 調査区 第1面2墓、4石列
写真図版11	08-2 調査区 第1面18竪穴、235溝
写真図版12	08-2 調査区 第2面
写真図版13	08-2 調査区 第2面32石群
写真図版14	08-2 調査区 第2面89石群
写真図版15	08-2 調査区 第2面84石囲い
写真図版16	08-2 調査区 第2面93焼土坑、121ピット
写真図版17	08-2 調査区 第2面62・114・119墓
写真図版18	08-2 調査区 第2-2面

- 写真図版19 08-2 調査区 第2-2面134土坑、135焼土坑
- 写真図版20 08-2 調査区 第3面
- 写真図版21 08-1 調査区 出土遺物
- 写真図版22 08-2 調査区 第1面3建物出土軒丸瓦
- 写真図版23 08-2 調査区 第1面3建物出土軒平瓦
- 写真図版24 08-2 調査区 第1面3建物出土丸瓦・平瓦
- 写真図版25 08-2 調査区 第1面3建物出土道具瓦類(1)
- 写真図版26 08-2 調査区 第1面3建物出土道具瓦類(2)
- 写真図版27 08-2 調査区 第1面3建物出土遺物、29土坑出土瓦、26石仏列(1)
- 写真図版28 08-2 調査区 第1面26石仏列(2)、石仏
- 写真図版29 08-2 調査区 第1面2墓出土遺物
- 写真図版30 08-2 調査区 第1面各遺構出土遺物
- 写真図版31 08-2 調査区 第1面31・235溝出土土器
- 写真図版32 08-2 調査区 第2面各遺構出土遺物
- 写真図版33 08-2 調査区 包含層出土石器
- 写真図版34 08-2 調査区 包含層出土縄文土器、弥生土器、古代の瓦(1)
- 写真図版35 08-2 調査区 包含層出土古代の瓦(2)、土師器
- 写真図版36 08-2 調査区 包含層出土須恵器(1)
- 写真図版37 08-2 調査区 包含層出土須恵器(2)
- 写真図版38 08-2 調査区 包含層出土須恵器(3)
- 写真図版39 08-2 調査区 包含層出土中世の土師器(1)
- 写真図版40 08-2 調査区 包含層出土中世の土師器(2)
- 写真図版41 08-2 調査区 包含層出土瓦器(1)
- 写真図版42 08-2 調査区 包含層出土瓦器(2)、瓦質土器
- 写真図版43 08-2 調査区 包含層出土陶器
- 写真図版44 08-2 調査区 包含層出土古瀬戸、中世の瓦、滑石製品
- 写真図版45 08-2 調査区 包含層出土地輪
- 写真図版46 08-2 調査区 包含層出土銭貨
- 写真図版47 08-2 調査区 第1面18竪穴、25ピット出土鉄釘・滓
- 写真図版48 08-2 調査区 第1面22土坑出土鉄釘・滓等、第2面119墓出土骨

第1章 調査にいたる経緯と経過

津田遺跡は、大阪府枚方市津田南町1・2丁目他に位置する周知の遺跡である。昭和47(1972)年の発見以来、地元の枚方市教育委員会および財団法人枚方市文化財研究調査会により多くの調査が実施されてきた。古墳時代～中世の生産遺跡として遺跡分布図に記載されている。

財団法人大阪府文化財センターでも、一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴い平成15(2003)年度に津田遺跡の範囲および遺構の時期や内容の確認を行ったところ、弥生時代から戦国時代の遺構や遺物の存在が判明した。

平成18(2006)年度には、津田遺跡05-1調査として発掘調査を行った。その結果、弥生時代の集落および鎌倉時代の居館などを検出した。弥生時代中期前葉の竪穴住居群は、枚方市・交野市地域ではまとまって調査されたものとしては数少ない例となった。鎌倉時代の居館は、大溝と堀によって区画された掘立柱建物群である。立地する山裾は山から流れ出す水を把握できる場所であり、平野部の水田開発との関係で注目される成果であった。

今回の津田遺跡08-1・08-2調査は、一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路の建設工事に伴い埋め立てられた大原池・新池の代替池を築造する工事に先立つものである。この範囲は05-1調査区の東側にあたり埋蔵文化財の存在が充分予測された。そこで、平成19(2007)年度末に事業計画地内において確認調査を実施したところ、古代から中世にかけての須恵器や土師器をはじめとする土器や、耕作に関連する遺構が検出された。この成果を受けて平成20(2008)年度に発掘調査を実施するよう関係各機関で調整がなされた。

08-1調査区 確認調査の結果、第3層に18世紀後半代のくらわんか手肥前系磁器が含まれており、第4層は無遺物の自然堆積であることが判明していた。

平成20(2008)年6月20日から着手した現地調査では、確認調査の結果を踏まえて、第4層の途中までを機械力にて除去し、以下を人力に変更するという方法を採用し、作業効率を高めるよう配慮した。また、平面図の作成についても、写真測量を積極的に導入し、図化の省力化と迅速化を図った。平成20年12月26日を以て現地での調査を終了した。

08-2調査区 確認調査において、深い所では山砂が2m以上も堆積していることが判明し、その下に中世の瓦や石が敷きつめられた平坦面、古代の土器を含む地層、さらに下層からも遺物を含む可能性の高い地層が見つかった。

平成20(2008)年10月から調査に入り、大量の山砂を重機により慎重かつ迅速に掘削した。本格的な人力掘削に移行してから、主に古代から中世にいたる多くの遺構・遺物が出土した。平成21(2009)年5月末に現地調査を完了した。

普及広報活動 現地調査で礎石建物や石仏などが検出されるとともに見学希望も多く寄せられたため、平成21(2009)年2月21日(土)、08-2調査区の第1面調査中に現地を公開した。それ以外にも随時、多くの研究者・見学者が訪れた。

整理作業 平成21(2009)年6月～12月に行った。基礎整理作業からはじめ、専門家のご指導や同僚諸氏の援助を受けながら、図・表・写真・原稿などを作成し、報告書にまとめた。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

津田遺跡の所在する枚方市は、大阪府の北東部、淀川左岸に位置する。大阪市と京都市のほぼ中間にあたる。東部は生駒山地の山裾とそれに連なる丘陵であり、中部以西の市域の大部分は段丘上にある。その段丘を生駒山地を源流とする船橋川、穂谷川、天野川が開析し、市域の北西側を琵琶湖から大阪湾に流れ下る淀川に注いでいる。

津田遺跡は、枚方市の南部、生駒山地北端近くの西麓部に位置する。生駒山地は花崗岩を主体としており、それらの風化土壌が流下することにより数多くの扇状地が形成されている。今回の調査地は、穂谷川と天野川にはさまれた交野台地の最も山寄り、扇状地と山地との接点にあたる(図2)。

津田遺跡08-1調査区は、円通谷と呼ばれる谷部とその前面に形成された扇状地の扇頂部に位置する。標高はおおよそ T.P. +80m前後で、調査前までは水田として利用されていた。

津田遺跡08-2調査区は、円通谷北側の中段段丘面に立地し、調査前は棚田であったという。標高はおおよそ T.P. +90～93mであったが、最終的には低い部分ではおおよそ T.P. +85.3mまで掘り下げた。調査地から西方の交野台地とその遠方に摂津の山なみを望むことができる。

08-2調査区のすぐ北側に、おおよそ T.P. +93m(08-2調査区の最高所とほぼ同じ高さ)で東西約35m、南北約25mの範囲の山裾から西に張り出した平坦地がある。現在は畑として利用されている。調査区の東側は山である。一方、西側は昭和40年代までは耕作地であったが、その後、山裾まで宅地化が進んだ。大規模な第二京阪道路の建設が進む現在、その景観はさらに大きく変わろうとしている。

第2節 歴史的環境

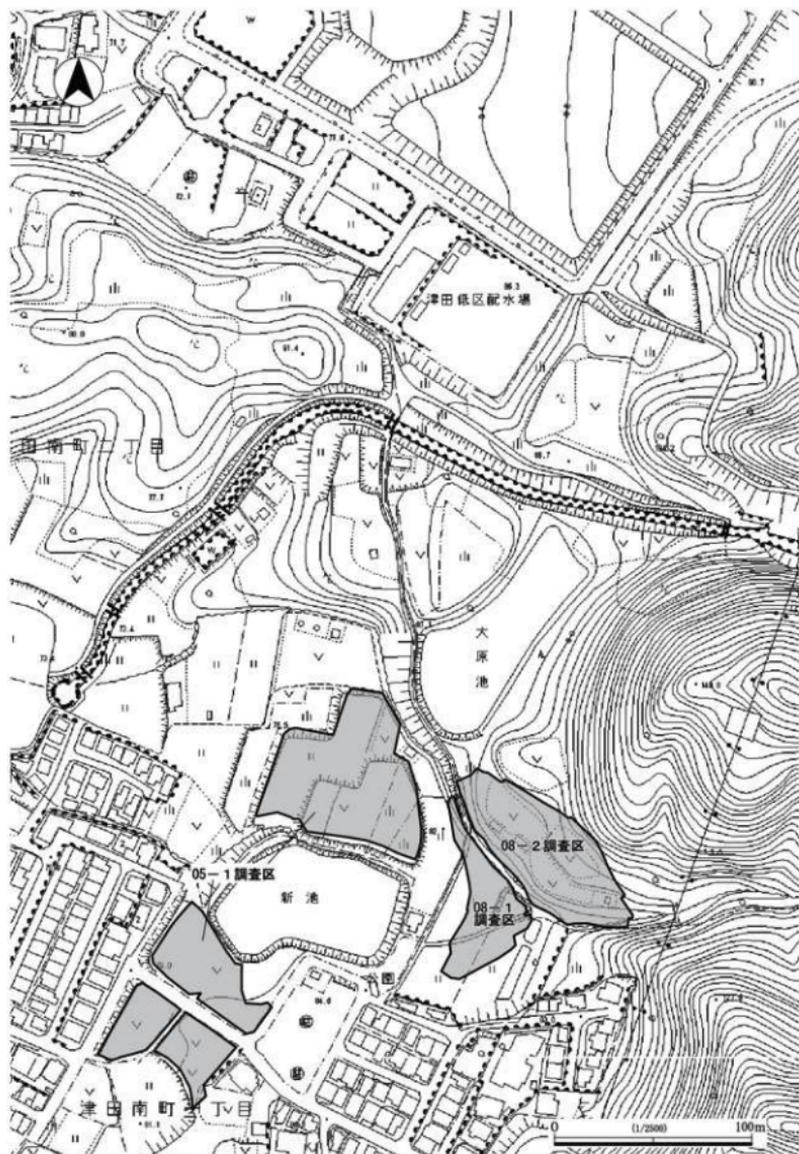
津田遺跡周辺では旧石器時代から近世に至る多くの遺跡が周知されている。図1の範囲を中心に時代順に概観する。

旧石器時代 谷口扇状地などに遺跡が立地している。穂谷川流域の藤阪宮山遺跡では跡跡と細石器が検出された。津田三ツ池遺跡は国府型ナイフなどの散布地である。津田トッパナ遺跡、津田城遺跡城坂地区、神宮寺遺跡などからも有舌尖頭器、ナイフ形石器や剥片が出土した。

縄文時代 台地上を中心に遺跡が分布する。穂谷川流域に前期の津田三ツ池遺跡などあり、天野川流域では、押型土器が出土し早期の神宮寺式の標式遺跡となった神宮寺遺跡が知られる。

弥生時代 台地上に加えて、水稲耕作に伴い低湿地にも集落が進出するようになる。天野川流域の私部南遺跡では縄文時代晩期の長原式土器から弥生時代前期の遠賀川系土器への変遷がみられる。

中期には遺跡数が増大し、特に中期後半になると高地性集落も出現する。穂谷川流域の田口山遺跡からは鉄器が多数出土した。津田城遺跡古城地区では焼失住居も検出された。天野川流域では村野遺跡、大型円形竈穴住居をもつ私部南遺跡、独立棟持柱のある大型掘立柱建物や方形周溝溝を含む上の山遺跡などがある。



この地図は、大阪府が平成11～13年にかけて作成した大阪府ベクトル地形データ1/2500を編纂したものである。

図2 周辺地形

後期には比較的小規模な集落が広範囲に分布する。徳谷川水系の長尾西遺跡は高地性集落で焼失住居もみられる。藤阪東遺跡、ごんぼう山遺跡、出屋敷遺跡も成立する。津田城遺跡城坂地区も高地性集落である。天野川流域でも円形竪穴住居をもつ東倉治遺跡、環濠のある寺村遺跡、南山遺跡、星丘遺跡などの集落が新たに出現する。

古墳時代 前期には天野川流域の丘陵部にバチ形の前方部を持つ古墳を含む森古墳群が出現する。集落は徳谷川流域の藤阪南遺跡、津田トッパナ遺跡などで見つっている。

中期になると天野川流域では、多様な墳形で構成される車塚古墳群が森古墳群に続いて造営される。また車塚古墳群の南側に隣接する森遺跡では、中期から後期にかけて大規模な製鉄が行われる。私部南遺跡では掘立柱建物や竪穴住居がみられる。

後期には天野川流域の倉治古墳群、寺古墳群などで群集墳が造営され、津田古墳や清水谷古墳も築造される。須恵器窯の操業も盛んで、徳谷川流域に山田池窯跡群、天野川流域に大谷窯跡、大谷北窯跡が展開する。上私部遺跡には飛鳥時代にまで続く大規模な集落が営まれる。

奈良時代 山麓部に須恵器窯などがみられる。徳谷川流域の藤阪遺跡、天野川流域の大谷北窯跡や津田城遺跡城坂遺跡では、古墳時代後期から引き続き須恵器窯が操業している。私部南遺跡の集落からは硯も見つかった。

平安時代 現代にも踏襲される耕地の整備が進む。天野川流域の有池遺跡では鎌倉時代に最盛期を迎える集落の萌芽がみられる。森遺跡では9世紀後半の溝や井戸などが検出され、荘園などとの関連も指摘されている。

鎌倉時代 徳谷川流域の津田トッパナ遺跡では方形居館、掘立柱建物、大溝がみられ、輸入陶磁器も出土する。津田エンサキ遺跡では徳谷川の氾濫原が耕地化された。天野川流域の有池遺跡に溝で囲まれた屋敷地を複数含む大規模な集落が営まれ、隣接する上私部遺跡では水田が拓かれた。

室町時代 徳谷川流域の津田エンサキ遺跡では多数のピット群と区画溝がみられる。藤阪南遺跡も中世以降の集落である。天野川流域の津田城遺跡の古城地区や本城地区では断面V字形の堀が掘削される。私部城跡は南北朝時代から戦国時代に至る平城である。

主要参考文献

片山長三 1957『津田史』津田小学校創立八十周年記念事業発起人会

枚方市史編纂委員会 1986『枚方市史 第1巻 本文編 地理・考古』枚方市

枚方市史編纂委員会 1986『枚方市史 第12巻 年表・索引・考古補遺編』枚方市

交野市史編纂委員会 1992『交野市史 考古編』交野市

財団法人大阪府文化財センター 2008『津田遺跡』財団法人大阪府文化財センター調査報告書 第175集

その他、財団法人大阪府文化財センターの第二京阪道路関係の各報告書

第3章 調査・整理の方法

調査区の位置 津田遺跡08-1・08-2調査区は、遺跡範囲内の東部、枚方市津田南町1・2丁目に位置する(図1・2)。

調査区の呼称 「津田遺跡」の後の「08」は、調査を実施した2008(平成20)年度の下2桁。次の「-1」または「-2」はその年度の発注(工事請負)を表す。

地区割 当センターの「遺跡調査基本マニュアル【暫定版】(2003年)に定められた方法で地区割を行った。世界測地系(2002年4月以降)の国土座標軸に準拠し、調査対象地にメッシュをかける方法である(図3)。

当センターが調査領域とする大阪府内は、全て国土座標軸(世界測地系)の第VI座標系に相当する。大阪府の南西端は、第VI座標系の $X = -192\text{km}$ ・ $Y = -88\text{km}$ にあたる。

第I区画は、ここを基準とし大阪府全域を南北(縦)6kmごとにA～Oに、東西(横)8kmごと0～8に分割したもので、1/10000地形図の範囲に相当する。今回の調査範囲は「J7」。

第II区画は、第I区画を南北(縦)1.5km、東西(横)2kmごとに各4分割、すなわち16等分したもので、1/2500地形図(都市計画図)の範囲に相当する。第II区画は、南西端を1とし、東へ4まで、1から順に北に5・9・13、北東端を16と平行式に表示する。今回の調査範囲は「15」。

第III区画は、第II区画内の北東端を基点とし、1辺100mの正方形に、南北(縦)をA～Oの15に、東西(横)を1～20に区画したもので、今回の調査範囲の大部分は「9K」で、西端のごく一部は「10K」。

第IV区画は、第III区画内の北東端を基点に、南北(縦)をa～jの15に、東西(横)を1～20の1辺10mの正方形に区画したもので、表示は横・縦の順に「8d」など。

したがって、今回の調査範囲の内10×10mグリッドは、「J7(第I区画) - 15(第II区画) - 9K(第III区画) - 8d(第IV区画)」などと表示される。第I・II区画の「H6-2」は全域共通なので、図4に第III・第IV区画名を表示した。第IV区画が、遺物取り上げなどの基本単位となる。

方位 国土座標軸の座標北を採用した。第1次調査中に航空測量を実施した2008(平成20)年では遺跡周辺の座標北は、磁北より東へ6°54'、真北より西へ10'振れていた。

高さ 東京湾平均海面(T.P.)を適用した。T.P.と大阪湾最低干潮面(O.P.)とは、 $T.P. + 0.0\text{m} = O.P. + 1.3\text{m}$ の関係にある。

面と層の呼称法 08-2調査区では、最初に調査した面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付す。層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下同様である。なお、ここでいう算用数字の「層」はあくまでも掘削と遺物取り上げの単位であり、ある面と次の面との間の堆積は観察の結果○付き数字の地層に細分されることがある。

なお、08-2調査区の第2面では、堆積状況に鑑み中央部から北西部にかけての範囲を2面に細分して調査した。その範囲を含め全域を調査した面を「第2面」とし、部分的なその範囲の下面を「第2-2面」として記録した。また、第2面と第2-2面との間を「第2層(上層)」とした。

遺構番号 遺構種類に関わらず通し番号とした。具体的には、08-1調査区では1～51、08-2調査区では1～236である。番号の後に遺構の種類を付けた。

遺物の取り上げ 遺構出土の遺物は検出遺構別に、包含層の遺物は層位的には「層」ごとに、平面的に

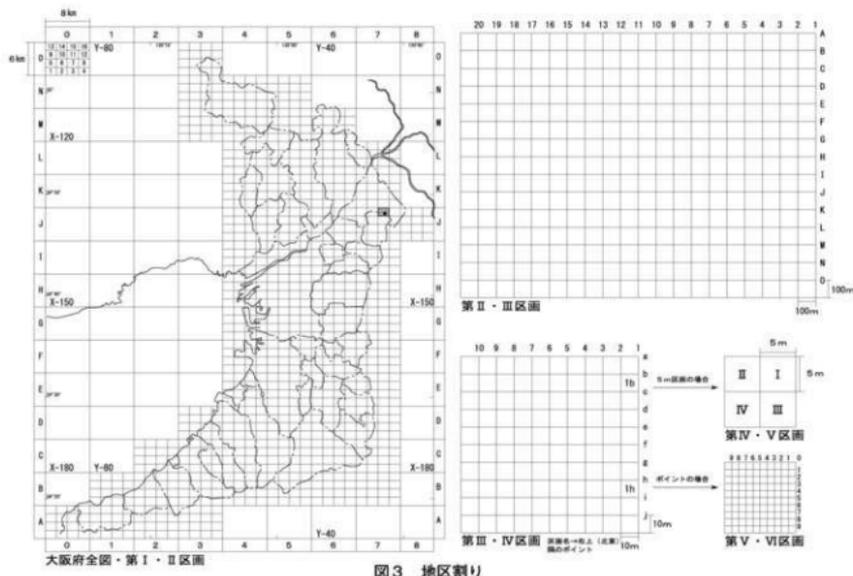


図3 地区割り

は国土座標の10×10mの区画(第IV区画)ごとの取り上げを基本とした。さらに必要に応じて、国土座標上において3次元で出土位置を特定して取り上げた遺物もある。

図面作成 各区の調査区全体図は、航空測量、平板測量、または地区杭を基準とした測量で縮尺1/50ないし1/100で作成した。地層断面図は縮尺1/20に統一して幅10mごとに1枚の図面に記録した。単独の遺構や遺物出土状況などは対象物に応じて1/10ないし1/20で適宜図化した。

各種分析 石材の鑑定を奥田 高氏(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員)、骨の同定を安部みき子氏(大阪市立大学)にお願した。

遺物整理 調査現場で登録と洗浄を優先し、注記も行った。整理期間に入り、それら作業と並行し、登録番号ごとに分類と集計を行った後、報告書掲載のものを優先して復原、実測、写真撮影などを進めた。

遺物の編年観 土器をはじめとする遺物の年代は、一般的な年代観に従った。なお、主要遺物の編年や用語については、主に次の文献を参考とした。

古代の土師器・須恵器：古代の土器研究会編 1992～1994『古代の土器 1～3 都城の土器集成 I～III』古代の土器研究会

緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器：平尾政幸 1994『第四部平安京の遺物 第二章土器と陶磁器 4 緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器』『平安京提要』角川書店

瓦器・東播系須恵器・滑石製石鍋：中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

輸入陶磁器：山本信夫 2000『大宰府桑坊跡 XV - 陶磁器分類編 - 大宰府市の文化財第49集』大宰府市教育委員会

中世瓦：山崎信二 2000『中世瓦の研究 奈良国立文化財研究所学報第59冊』雄山閣出版株式会社

石仏：藤沢典彦 1999『茨木市依保周辺地区の石造物調査』『彩都(国際文化公園都市)周辺地域の歴史・文化総合調査報告書』

財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第40集

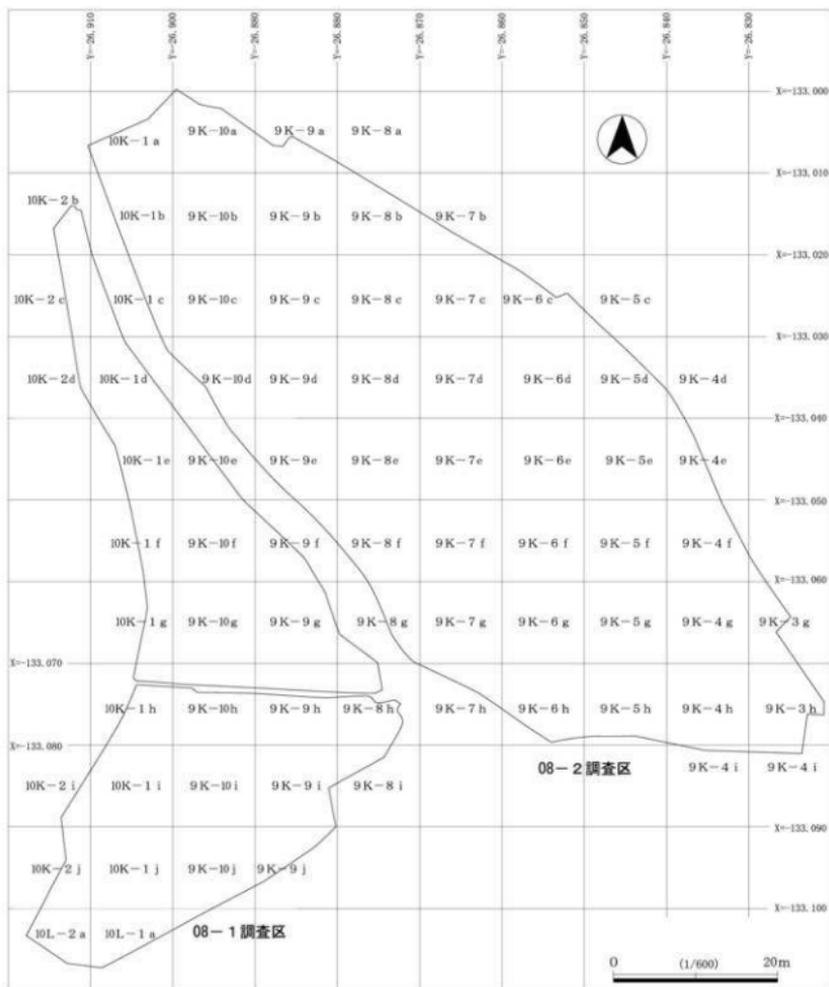


図4 グリッド配置

第4章 08-1 調査区の調査成果

第1節 概要

08-1 調査区は、今回報告する調査範囲の南西部に位置する。調査対象地は南北を尾根筋に挟まれた谷地形部に相当し、調査実施面積は1808㎡を測る。調査前の地目は階段状に造成された水田および畑作地で、附近の地盤高は東から西に向かって緩やかに傾斜するものの、およそ T.P. + 82.00m前後を測る。

第2節 層序

調査地内の基本層序は、以下と図5に記す通りである。

- 第1層：調査着手以前まで水田として使用されていた耕作土層。
- 第2層：耕作地化に伴い敷き均された砂層。
- 第3層：耕作地化に先立ち敷設された粘土ブロックを多く含む砂質土層（漏水防止用）。
- 第4層：中世以降の耕作面を覆う粗砂を中心とする自然堆積層。
- 第5層：中世以降の耕作土として使用されたシルトから砂質土層。
- 第6層：粗砂から粘土質土を中心とする扇状地性の堆積土（基盤層）。

以上のうち、2から4層については、調査着手前まで使用されていた水田造成に伴う地形変化により大きく削平されている部分も確認され、第1層除去後、直ちに第6層が露呈する部分も観察された。この傾向は調査区北東部の山側に隣接する部分において特に顕著であった。

第3節 遺構

第1面

今回の調査区において検出された遺構は図6に示す通りで、中世以降の遺物を少量伴う溝や素掘小溝群、土坑などを中心とする。これらは、その形状や堆積土および、検出された位置から考えて、土地を区画する溝、耕作に伴う犁溝、水溜施設など、耕作に関連するものが大半を占めるが、その中で、出土遺物の時期や内容からみて唯一これに関連しないものが、第3面で検出された奈良時代の遺物が出土した50溝である。また、調査区南部では第6層を削削する形で形成された自然流路が1条検出され、その流れの中心に相当する砂礫を中心とする堆積土から中世段階の土師質土器などが出土した。

a. 溝

調査区北部を中心に数条の溝を検出した。

1溝は、東から張り出した丘陵先端部を削り取るように掘削され、南東部は削平を受け消滅している。この溝の西側にはそれに沿うようにして並行する小溝が存在し、また後述する54溝を境として西側に低い段差が形成されていることから、耕作地を区画する溝であると考えられる。



图 5 08-1 調査区 西線断面

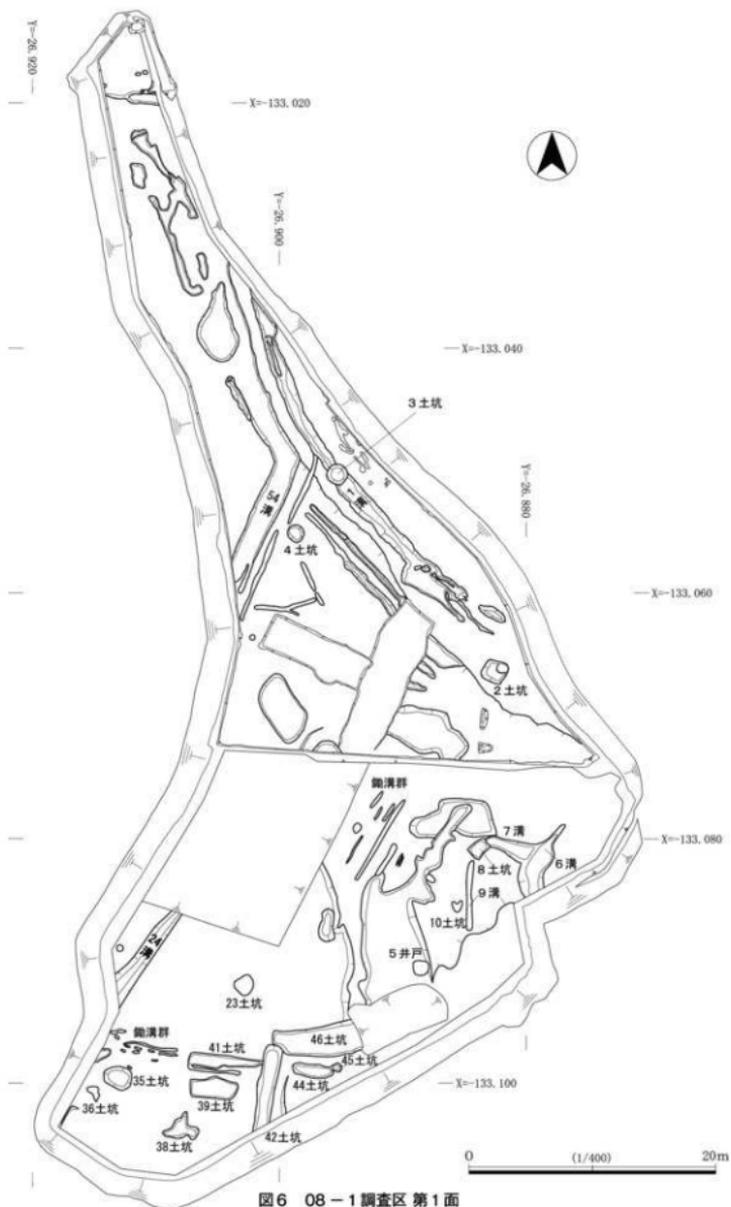
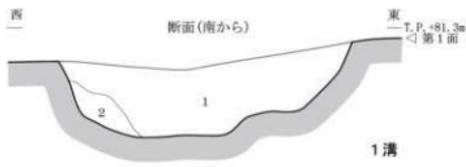


图6 08-1 调查区 第1面



1 : 2.5Y5/1黄灰色 砂質礫
2 : 2.5Y4/1黄灰色 砂質礫 偽礫を含む

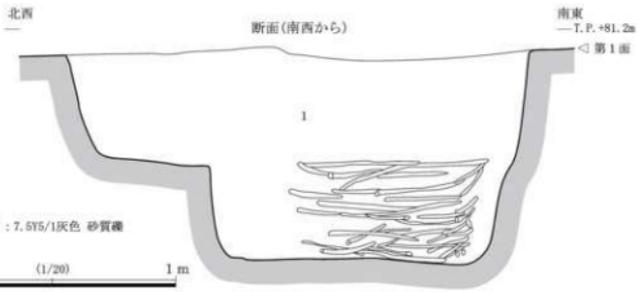
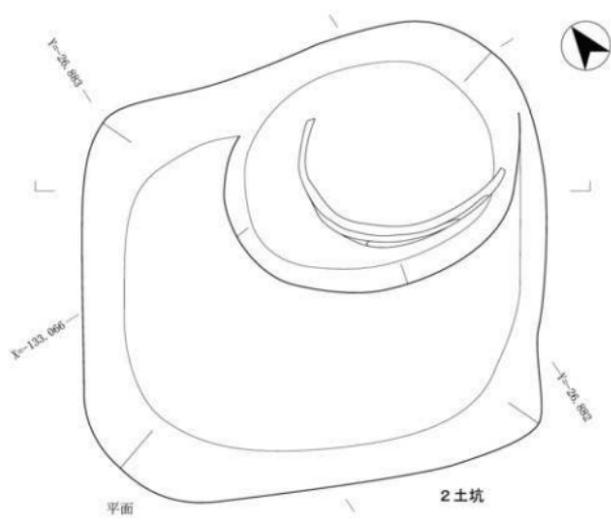


図7 08-1調査区 第1面1溝、2土坑

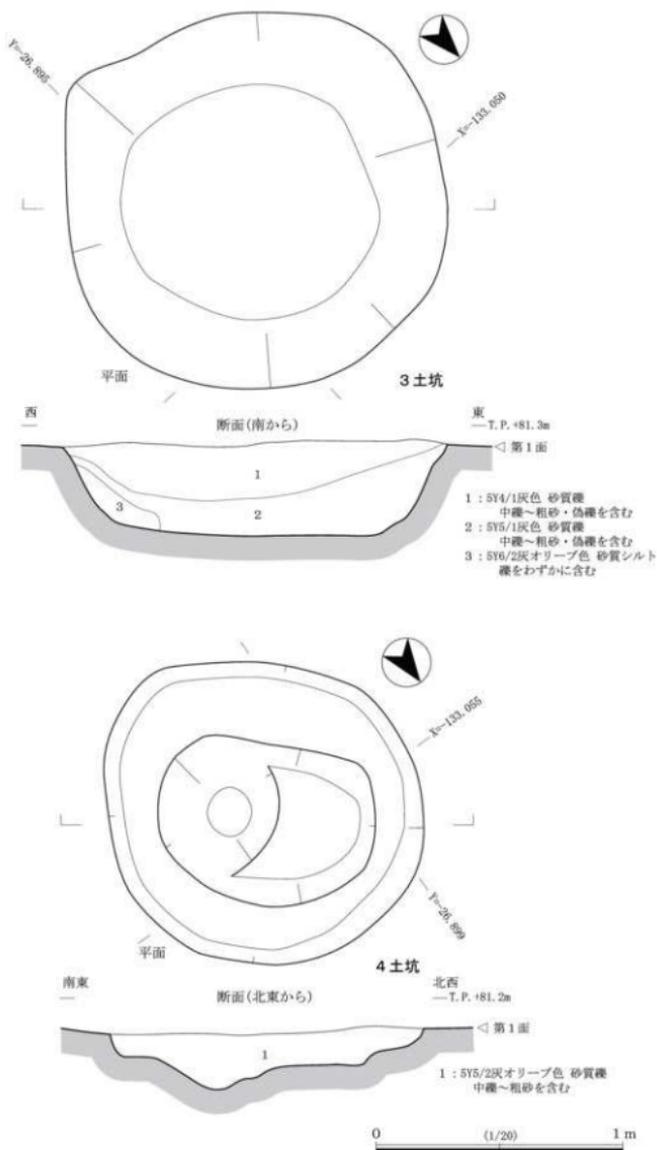


図8 08-1調査区 第1面3・4土坑

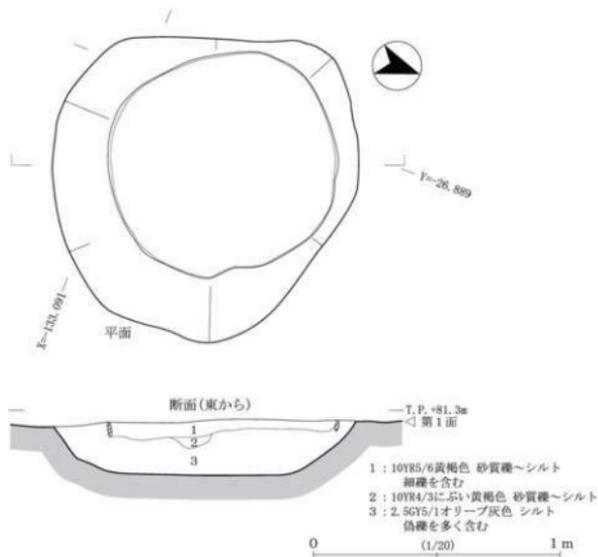


図7 08-1調査区第1面5井戸

54溝は、調査区中央からやや西北よった位置で検出され、平面形は逆「く」の字形を呈する。断面形は偏平な矩形を呈し、埋土は砂からシルト分の強い砂質土の堆積が観察された。

これら2条の溝については、特に北半分において互いが一定の間隔を置きながら並行して伸びていることから、強い関連性のもとに開削されたものと想定され、それが青紫に当たるものであるならば、両者の間にみられる高まりは、土地区画を兼ねた畦畔とみなすことが可能となる。

なお、これらの時期については、互いの埋土から遺物が出土しなかったために、そこからの情報を得ることはできなかったが、溝を覆う周辺の堆積土から瓦器の細片や、近世の焼き締め陶器などが出土したことから類推するならば、中世以降、近世にかけてのものと考えることがゆるされよう。

50溝(図12)は、調査区南半部の第3面で検出された。溝は、南側に向かってゆるやかに下降する斜面地形の縁辺に沿うような場所に位置し、南肩部は、中世段階の流水堆積層が直上に堆積していることから、この段階に削割されたものと考えられる。断面形はゆるやかな「U」字形を呈しており、埋土の上位から、図12や写真17のような状態で、ほぼ完形の須恵器杯B 2点が重なりあって出土したほか、確認調査段階でも図15に示す土師器杯Aや、須恵器の杯類や獸脚などが出土し、これらが、本調査を行う根拠とされた。遺物の時期については、平城宮土器編年のⅡ期を中心とする段階のものとみなされる。

b. 素掘小溝群

調査区第1面のほぼ全域で検出され、それらが最も集中するのが写真図版1に示す調査区北部を中心とする地域である。それらの形状や、互いが平行して掘削されている状況からみて、耕作に伴う犁溝群であると判断される。

溝の埋土からはほとんど遺物が出土していないため明確な時期は判別しがたいが、上記の1溝や54溝

と同様、溝群を覆う堆積土や周辺の包含層から、ほぼ同時期の遺物が同じような状態で出土していることから、これらと同様に中世から近世にかけてのものと考えられる。

e. 土坑

調査区北半分において3基検出された。平面形は2基が円形、他の1基は隅丸方形となる。円形のものうち3土坑(図8)は、1溝と重複する関係で、その前後関係より、溝より後の段階に掘削されたことが明らかである。埋土を除去したところ、断面形は矩形をなし、そこから肥前系色絵磁器の細片が得られたことから、近世段階に開鑿されたものであることが判明した。

同じく平面円形をなす4土坑(図8)についても、平面や断面の形状および、埋土の堆積状況から、先述した3土坑に類似する性格の遺構であろうことが推定されるが、時期については遺物が得られていないため不明と言わざるを得ない。

唯一平面隅丸方形を呈する2土坑(図7)は、断面形が矩形を呈することでは上記2例と共通しているが、底面北東隅を不整形に一段掘り下げ、壁面に籐状の植物繊維が遺存している点において上記2遺構と様相が異なる。なお、時期判別を行いうる資料が得られていないため、これを成し得ない。

これら3基の土坑については、平面形や底面の状況が一部異なるものの、検出された位置が土地区画を意図したと考えられる溝の縁辺や隅に接するような地点に位置していること、掘削深度や断面の形状が近似していることから、耕作に関連する水溜状の掘り込みとして機能していたとみなしておきたい。

d. 井戸

調査区南部において5井戸(図9)を検出した。平面形は不正円形を呈し、断面形は偏平な「U」字形となる。断面には直径0.9mを測る円形を呈した籐状の植物遺体が一条遺存しており、そこを境として堆積土を遡ることから、三寸の桶を据え置いた枠を設置していたものと考えられる。

掘方および枠内双方から出土遺物がみられなかったため、構築、機能した時期ともに不詳である。

e. 流路

調査区南部で検出された幅約10m、深さ約1.5mを測る自然流路で、断面形は逆台形を呈している。その位置や周辺地形から考えて、現状では北側に位置している円通川の旧流路と考えられ、さらに、その位置が、ここを扇頂部として西側に展開する扇状地とほぼ重なることから、これを形成するに至った砂礫の供給源ともなった流路の最終形態であると考えられる。

流路内は砂礫で充填され、各所で築理が明瞭に発達した堆積層が観察されたことから、往時絶え間ない流水と土砂の供給があったものと推定される。それら堆積層の中には、転磨の激しい奈良時代から中世にかけての須恵器や土師器、瓦のほか、弥生時代中期初頭の甕、同時代後期の壺や甕の破片が少量含まれていた。それらのうち最も新しい段階の資料が中世の土師質小皿であった。これについては遺物総体の中でも比較的磨蝕が少ないこともあいまって、当該期にこの流路が機能を停止したと考えられる。

なお、ここから溢流した砂礫層は、一時期、今回検出された遺構面のほぼ全面を覆う状況であり、その中には図18に示すような中世後半段階の花崗岩製五輪塔の空風輪が遊離した状態で検出された。その時期は他の遺構や包含層から出土した遺物の下限とも時期をほぼ同じくしていることから、これら一連の遺構との整合性に矛盾をきたさないものと認識される。

また、この流路の延長部は、新池に連続していることから、この流路の下流をせき止め、かつ、円通川を北側に迂回させることによって水量を制御し、灌漑用水を確保したものと想定される。すなわち、新池の築造は最も古くさかのほってもこの段階以降であったことがうかがい知れる。

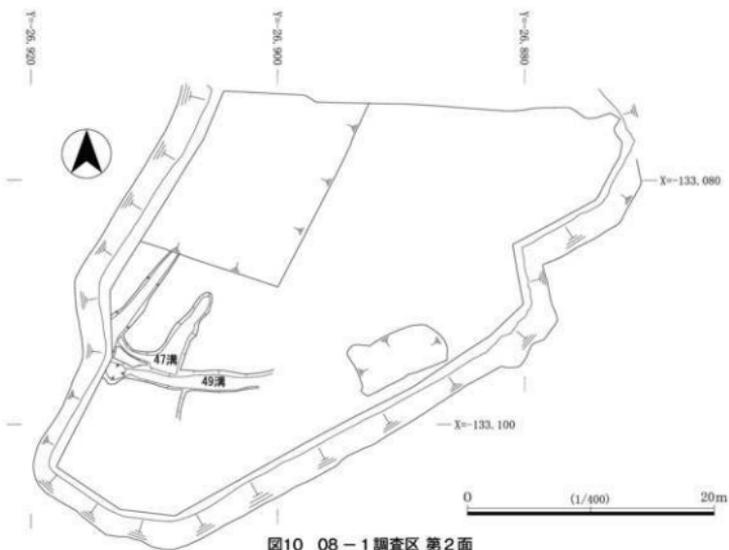


図10 08-1調査区 第2面

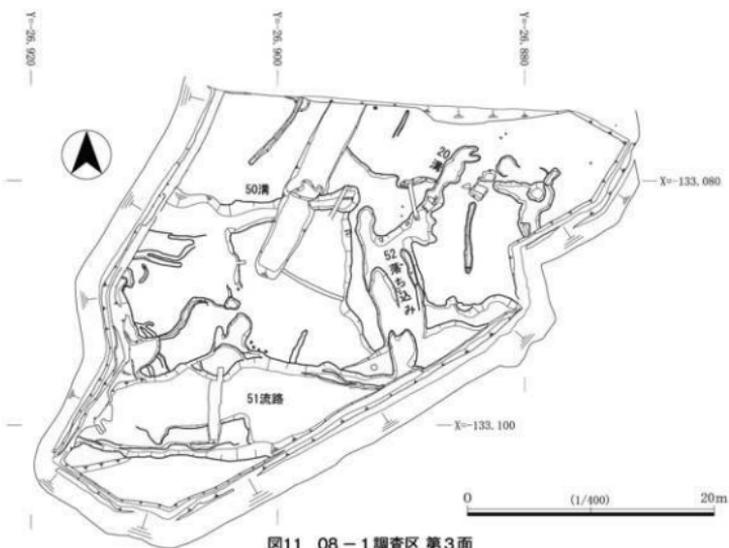


図11 08-1調査区 第3面

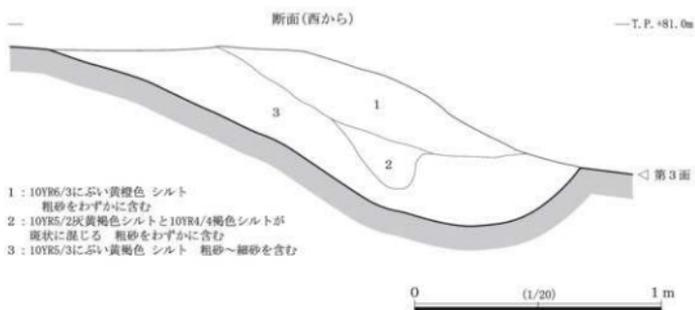
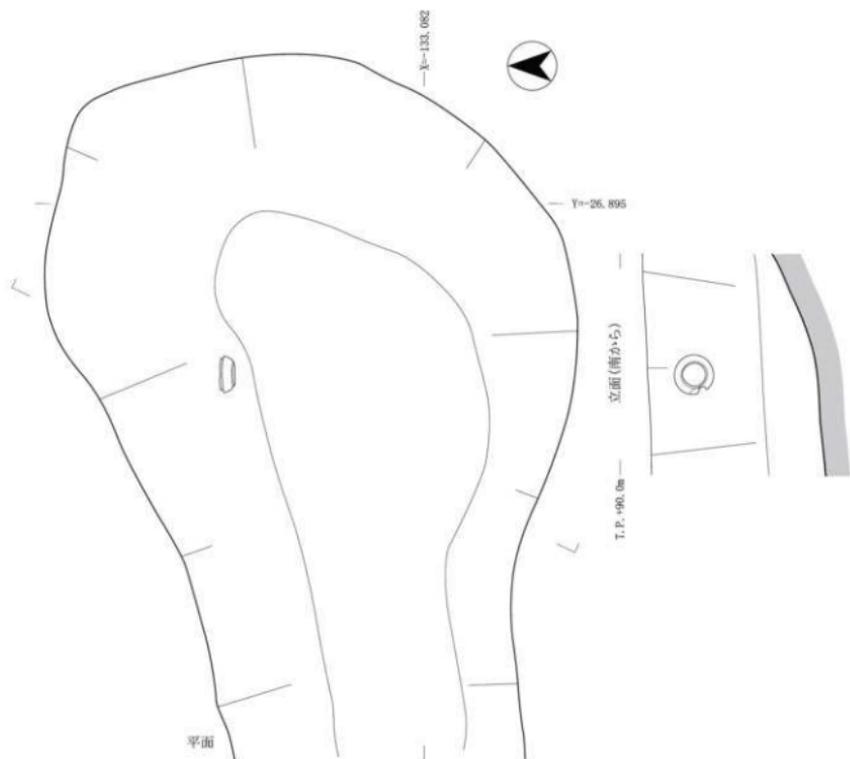


図12 06-1 調査区 第3面50溝遺物出土状況

第4節 遺物

08-1調査区からはコンテナで12箱分の遺物が出土した。それらには縄文時代かと考えられるものから近世のものまで含まれているが、奈良時代と鎌倉・室町時代の遺物が主体である。

以下、遺物の記述に際しては、遺構出土遺物は遺構の時代順にその特徴を述べる。

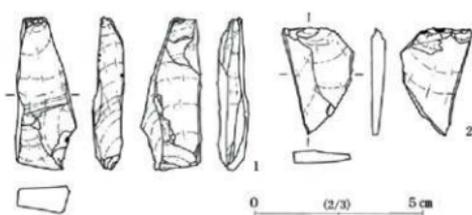


図13 08-1調査区 出土土器

弥生時代以前
表面が風化した縄文時代の可能性が考えられるサヌカイトの楔形石器1点がある。これは後世の溝からの出土である。
図13-1は上辺が潰れ、下辺は鋭いエッジをなし、両側辺に剪断面のみられる点から、楔形石器と思われるものである。全体に風化しており、縄文時代の可能性がある。この他、図化していないもので縄文土器片と思しきものが20溝から1点だけ出土しているが、表面の摩滅が著しく、詳細は不明である。2は大剥離面を表面に残し、打点が剥離により取り除かれた二次加工のある剥片である。

弥生時代中・後期の土器片が数片、サヌカイト剥片が1点出土している。これらは後世の落ち込みや包含層から出土した。

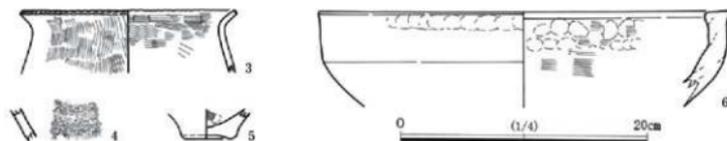


図14 08-1調査区 出土弥生土器

図14-3は口縁端部に刻み目、外面は縦方向の、内面は横方向の粗いハケ調整を施した、Ⅱ様式の甕である。4は外面に櫛描直線紋を施したⅡ様式と思われる壺の頸部破片である。5は底部内面にハケ調整のみられる底部である。平底で器壁の薄い点から、中期のものと思われる。6は52落ち込みから出土した、かなり器壁が厚い受け口状の壺口縁部である。外・内面にはユビオサエの痕跡が残り、内面には横方向のハケ調整が施されている。後期のものか。

奈良・平安時代

土師器、須恵器が出土しており、この時期の遺物出土遺構としては第3面50溝上層以外のものがある。50溝出土遺物(図15)

図15-7～11・17・19は土師器である。それ以外のものは須恵器である。

7・8は内面に放射状暗文を1段施した杯で、底部まで遺存する8の内面には螺旋状暗文もみられる。底部外面は双方とも4方向からのヘラケズリが施されている。2点は共に平城宮Ⅲの時期にあたる。9は小形の杯で、内外面とも下半分をナデ、上半部をヨコナデ手法によって仕上げている。10・11は甕の

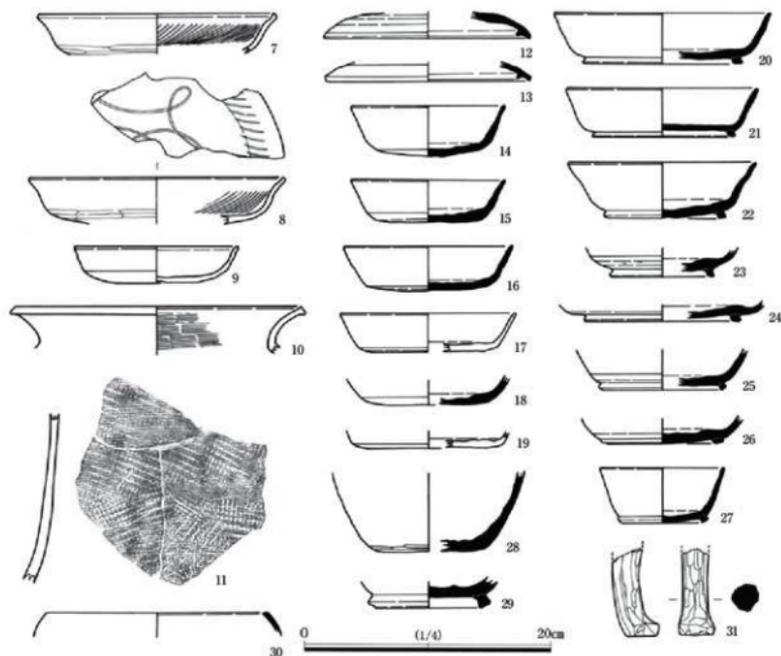


図15 08-1調査区 第3面50溝出土遺物

口縁部と体部の破片である。口縁部は内面にハケが残るが、内外面ともにナデである。11は体部外面に格子叩きの後カキメを施した須恵器の手法を用いた土師器で、図化していないが、内面には縦方向のヘラケズリが施されていることから長胴甕の可能性が高い。

12・13は杯蓋である。2点はかえりの特徴から飛鳥Vであろう。14～19は杯身である。17・19は須恵器の手法を用いた土師器である。底部は17・18が回転ヘラ切り未調整、14～16・19は回転ヘラ切り後雑な静止ナデを施している。20～27は高台付きの杯身である。底部外面は26が回転ヘラ切り未調整、20・24が回転ヘラケズリ、25が回転ナデ、他は回転ヘラ切り後、雑な静止ナデないし回転ナデである。高台が若干外側に位置する26が平城宮Ⅲ、27が平安京Ⅰ以外は平城宮Ⅰ～Ⅱに該当すると思われる。28は壺底部と思われるもので、底部外面は回転ヘラ切りのままである。29は高台付きの壺底部である。28は7世紀、29は8世紀のものと思われる。30は奈良時代の鉄鉢形の須恵器である。31は須恵器の獸脚であり、長軸方向に8面体位の面取り状にヘラケズリを施して成形し、脚部裏面は5角形状をなす。つま先に該当する部分には爪の表現はみられない。奈良から平安時代の壺に付随するものかと思われるが、類例が乏しく不明である。

鎌倉・室町時代

中世の遺物には土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦、五輪塔がみられ、それらは第3面20溝、

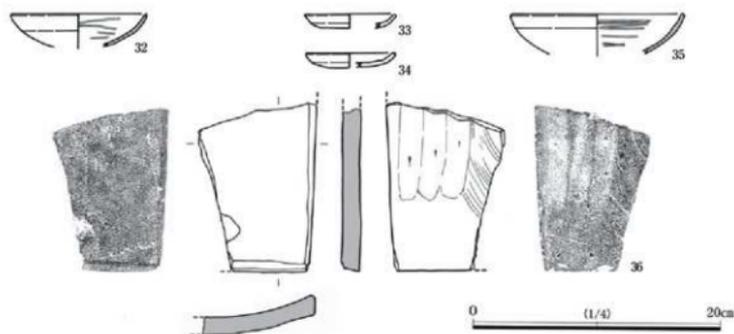


図16 08-1調査区 第3面20・50溝出土遺物

50溝上層、51流路、第3面、中世洪水砂層から出土している。

20溝からは図16-32の瓦器碗が出土している。全体に炭素の吸着がみられず、外面の一部は被熱したように僅かに赤みを帯びる。口径が小さめで、内面の暗文がまばらな点から森島編年桶葉型Ⅳ-1～2に該当すると思われる。20溝からは他に平安時代の須恵器甕体部と思われるもの1点と、縄文土器と考えられる体部破片が1点出土しているのみであり、これらは図化していない。

奈良・平安時代で記述した50溝の上層から出土したと考えられる遺物には33・34の土師器小皿、35の瓦器碗、36の平瓦がある。33・34はユビオサエ、ナデによる調整であり、12～13世紀頃のものと思われる。35は外面に粘土紐の縦目目を留め、内面には疎らな圏線状の暗文がみられることから、桶葉型Ⅲ-2～3の時期に該当すると思われる。36は須恵質の平瓦である。狭端と思しき辺の凹面側に幅7mmの面取りが施され、凹面には離れ砂と布目が一部観察される。凸面側には離れ砂と斜め方向の緩い張りの糸で粘土板を挽いたコピキ痕(コピキA)を留め、一部には離れ砂と共に縦方向のナデが観察される。鎌倉時代の平瓦であろうと思われる。

51流路からは図17-37の須恵器杯蓋、38～40の土師器小皿、41の瓦器碗、42の丸瓦が出土している。37は焼け歪のある須恵器杯蓋で、外面に灰を被る。調整は外面に回転ヘラケズリを施している。平城宮Ⅲか。38～40はユビオサエ、ナデによる調整である。時期は12～13世紀のものと思われる。41は細片であるが、口縁部外面および内面に暗文がみられる事から、桶葉型Ⅱ-3～Ⅲ-1に該当すると思われる。42は丸瓦で、凹面の側縁と玉縁部分に面取りが施され、凸面には長軸方向のナデがみられる。

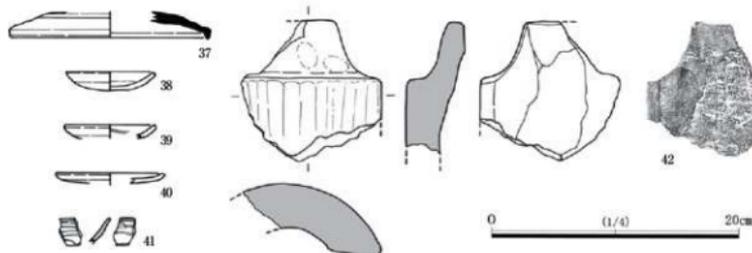


図17 08-1調査区 第3面51流路出土遺物

規格が大きめで面取り幅が広めである点から、室町時代のものである。この他、51流路からは図化していないが、瓦質土器三足釜の脚片や須恵質の平瓦などが出土している。

第3面からは花崗岩製の五輪塔空風輪が1点出土している。図18-43は全体にやや風化してもろい。風輪下部には直径4.9cmの柄がみられる。空・風輪ともに直径約16cmで、空輪は直径よりも少し丈が高く、上端は丸みを帯びる。空輪の上下に加工痕が残るが工具の幅は不明である。空・風輪の境には幅8mmの工具痕が残る。空・風輪ともに文字は刻まれていない。この五輪塔は空輪が尖っておらず全体に整った形をなし、風輪下部に柄のみられる点から室町時代のものかと推測する。

中世洪水砂層からは古代の土師器、須恵器、中世の土師器、須恵器、瓦器、陶器が出土している。このうち、古代の遺物は50溝に関連する可能性がある。

図19-44・45は内面に連弧状と放射線状の2段の暗文がみられ、外面にはヘラミガキが施された土師器の杯である。平城宮Ⅱに該当する。46は内面に1段の放射状暗文が、底部外面にはヘラケズリが施された土師器の杯であり、平城宮Ⅲに該当する。47は土師器杯高台である。内面に微かに暗文の痕跡があるが、詳細は不明である。平城宮Ⅲか。48は内面を板状のものでナデ調整した土師器の小形碗である。49～51は土師器の鍋と思われるものであり、51のみハケ調整が施されている。52・53は土師器甕である。54は土師器の把手付鍋体部である。鍋・甕ともに奈良時代のものである。55は土師器甕把手である。把手が小さく体部に接着しており、平安京Ⅰである。

56～58は天井部外面を回転ヘラケズリした須恵器杯蓋である。58はかなり焼重み、外面には灰を被り、直径11cmの溶着痕がみられる。56は外面に灰を被る。57は焼成不良である。57が平城宮Ⅱで、56・58もそれと同時期位と思われる。59は須恵器杯身であり、底部外面を回転ヘラ切り後僅かにナデている。60・61は須恵器杯身の口縁部である。62・63は須恵器高台付杯である。64の壺底部外面には粘土紐巻上げ痕を留め、回転ヘラ切り後軽く回転ナデを施している。これらの須恵器は平城宮Ⅰ～Ⅲに該当すると思われる。65は奈良時代の鉄鉢形の須恵器である。以上の古代の遺物は50溝の下位出土遺物とはほぼ同時期に属するため、溝に堆積した一連の遺物が洪水砂で巻き上げられた可能性が考えられる。

中世の遺物について以下に述べる。66は土師器小皿、67～70は土師器大皿である。いずれも調整はユビオサエ、ナデである。12～13世紀ころのものであろう。71・72は口縁端部に沈線を1条巡らせた瓦器碗で、口縁部外面には疎らなヘラミガキが、内面にはやや疎らな横方向のヘラミガキが施されている。71は口縁部がやや外反気味で大和型Ⅲ-A(新)、72は楠葉型のⅡ-3～Ⅲ-2に該当すると思われる。73は高台が断面三角形をした瓦器碗底部であり、体部には圏線状の、見込みには螺旋状か不明の暗文が施されている。73は楠葉型Ⅲ-3に該当すると思われる。以上の事から、これらの瓦器碗は12世紀後半から13世紀前半に所属すると考えられる。74は須恵質鉢で、東播系Ⅲ期3段階の14世紀後半か。75は常滑焼の鉢底部であり片口鉢Ⅱ類の5型式、13世紀前半であろうか。これらの事から14世紀後半以降に洪水が起きた事が推測される。

江戸時代

陶磁器が少量出土している。それらは第1面1溝、耕土層、近世洪水砂層からの出土であり、耕土層、

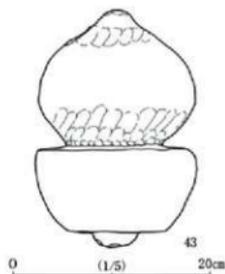


図18 08-1調査区
第3面出土五輪塔空風輪

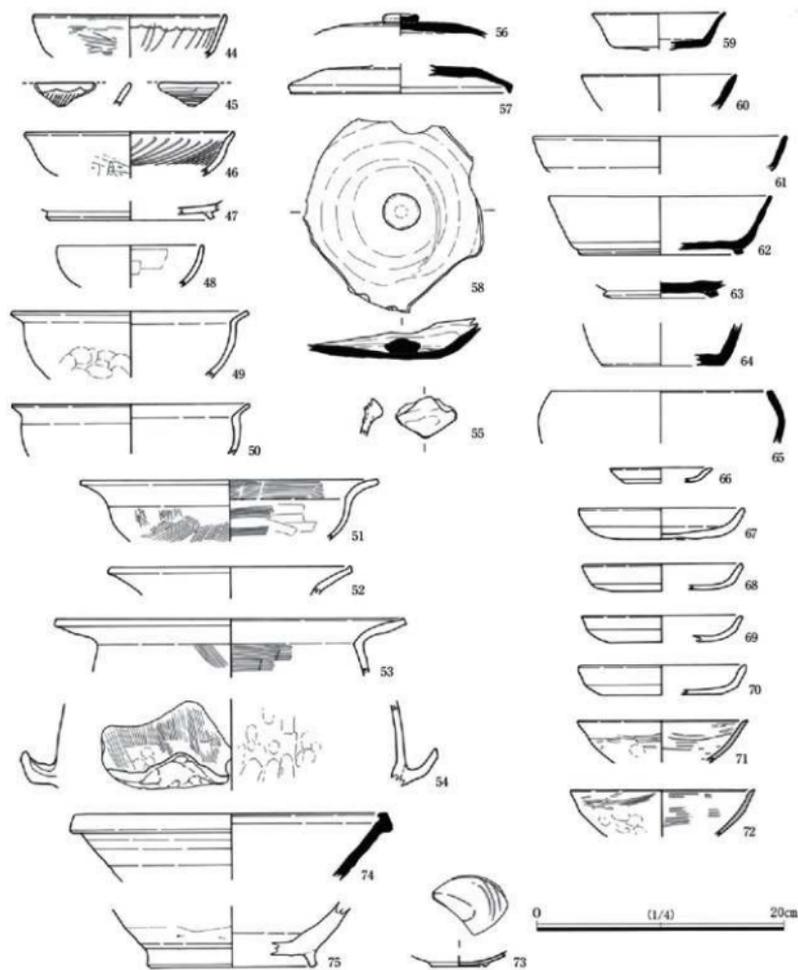


図19 08-1調査区 中世洪水砂出土遺物

近世洪水砂層では古代、中世の遺物をも含む。

1溝出土の図20-76は備前焼壺であり、内面には轆轤目が顕著である。外面は静止ヘラケズリを施している。内面に付着物は認められないが、お菌黒壺か。

耕土層出土の77は器種不明の瓦質土器の底部であり、内面にハケ、外面にユビオサエの痕がある。

近世洪水砂層からは古代の遺物が少量出土している。78は須恵器杯身の高台であり、底部外面を回転ヘラ切り後軽くナデ調整を施している。平城宮Ⅲの時期にあたる。79・80の土師器甕は口縁部内面に横

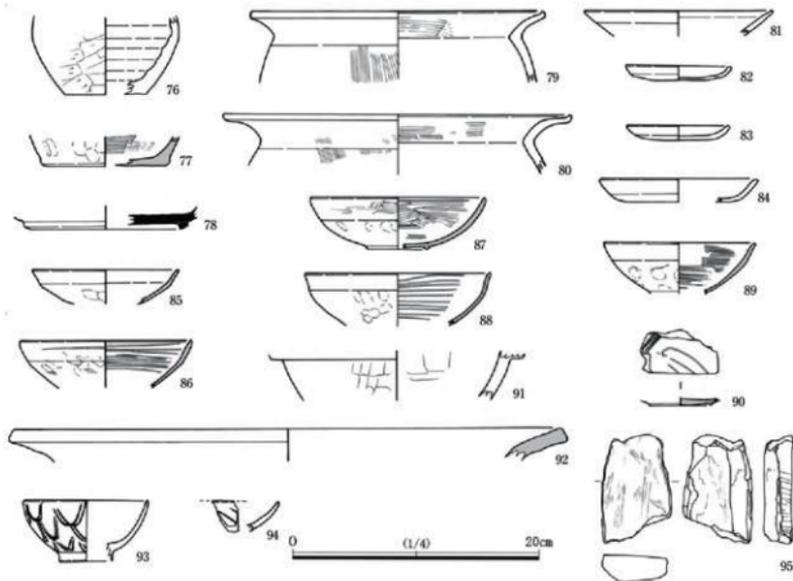


図20 08-1 調査区 第1面1溝、耕土層、近世洪水砂出土遺物

方向のハケが残り、体部外面には縦方向のハケが施されている。これらの土器器甕は奈良時代のもと思われる。81は土器器杯であり、残存状態が不良で調整は不明であるが、平安京Ⅰの時期のものか。

近世洪水砂層には中世の遺物も含まれている。82・83は土器器小皿、84は土器器大皿であり、いずれもユビオサエ、ナデによる成形・調整であり、83の底部外面には粘土継接合痕が残る。いずれも12～13世紀のものと思われる。85～90は瓦器碗である。85は表面が摩滅し詳細は不明である。86の口縁端部内面には沈線が1条廻り、体部外面には粘土を貼り足して補修した痕跡が残る。86の外面体部には僅かにヘラミガキの痕跡が残り、内面はやや密な圓線状の暗文を施している。87は口縁端部内面に沈線が退化したような痕跡がみられる。外面は口縁部にヘラミガキ、内面にはやや密な横方向の暗文がみられる。88は内面に細くて疎な圓線状の暗文が施されている。89は外面体部に粘土継接合痕が残る。外面口縁部に疎なヘラミガキ、内面に細くてやや密な横方向の暗文が施されている。90は高台断面が三角形状をし、内面には圓線状と螺旋状の暗文がみられる。これらの瓦器碗の時期は楠葉型のⅢ-1～3の範疇に該当し、12世紀終わりから13世紀前半の中におさまるとと思われる。91は石鍋の鐙下半から体部にかけてのものである。体部の内外面には工具痕が残る。Ⅲ-a～cの段階にあたり、13～14世紀のものか。92は瓦質土器甕口縁部であり、口縁端部が肥厚せずそのまま外反する点から14世紀前半のものと考えられる。

近世遺物としては93・94がある。93は二重網目紋の染付碗である。見込みには釉剥ぎがみられず、高台内面に軸がかかる。94は国産青磁皿である。内面の軸下に片切り彫りのような紋様が施されている。

これらの磁器は18世紀前半に類例がある。

95は頁岩製砥石である。表面はほぼ平坦で長軸ないし斜め方向に研磨した痕跡が残る。表面の長軸両端寄りに横ないし斜め方向の稜がわずかに認められるが、使用により形成されたものか。裏面には表面よりも幅狭の研ぎ面があり、斜め方向の条痕が残る。片方の側面には砥石を成形した際についたものか長軸に直交する線状痕が複数みられる。

遺物の小結

今回の整理対象となった津田遺跡の遺物には縄文時代と推定されるもの、弥生時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代の各時期のものがみられた。これらの遺物は各時代の遺構に伴うものが少ないが、主な遺構に伴う遺物として第3面50溝下位から出土の奈良時代を中心とした遺物、51流路から出土の中世の遺物をあげることができる。

時代順に遺物を概観すると、縄文時代と思われる遺物では、かなり磨耗した土器1片と若干風化したサヌカイトの楔形石器1点が出土したのみであり、殆ど人の活動した痕跡は認められなかった。

弥生時代の遺物では、中期初頭の壺、甕と後期の壺、サヌカイト剥片が後世の遺構や洪水砂層などから僅かながら出土した。平成18年度の調査時に中期の堅穴建物が検出され、遺物は中期・後期の土器が出土していることから、それに関連した遺物であろう。

奈良・平安時代の遺物では、50溝が1条検出され、その下位からは奈良時代から平安時代初頭にかけての土器が出土した。出土土器には土師器・須恵器の杯類の食器、煮炊き用の鍋、甕、他には壺類、鉄鉢形土器がある。時期は平城宮Ⅰ～Ⅲが中心で、まれに平安時代初期のものが含まれている。須恵器の杯では2点がほぼ完形に近い状態で出土しており、他の破片もあまり摩滅していない点から、近くに生活の場があったことが伺われる。これらの中でも壺かと思われる獣脚は類例をあまり見ず、この遺跡の性質を考えるうえで一つの指標となると思われる。

他に、中世洪水砂層から焼け歪の著しく溶着痕のみられる須恵器杯蓋や51流路出土の焼け歪のある須恵器杯蓋がみられることから、近くに奈良時代の須恵器の窯が存在する可能性がある。あるいは北側に所在する城坂窯跡に関連する資料であることも想定される。

鎌倉・室町時代の遺物では、51流路と洪水砂層から土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器、陶器、瓦、五輪塔が出土した。遺物の中心は鎌倉時代である。器種は土師器皿、須恵質鉢、瓦器碗、瓦質甕、瓦質羽釜、常滑焼の甕や鉢、丸瓦、平瓦などである。輸入陶磁器は出土していないが、常滑焼の甕や鉢が出土していることにより、東海地方の陶器が搬入されていることが分かった。当調査区からは耕作に関連する遺構が検出されており、生活用品である遺物の出土により、近くに人々が暮らした痕跡を留めているといえる。

その他、中世の遺構面からは室町時代かと思われる花崗岩製の五輪塔の空・風輪が1点出土しており、近くに墓があったことが伺われる。

近世遺物では18世紀代の磁器や瓦質土器などが出土しているが、特筆すべきものは認められなかった。

第5章 08-2調査区の調査成果

第1節 概要

08-2調査区は、08-1調査区の北東、山側に位置する。08-1調査区と同様に第二京阪道路建設によって埋め立てられた池(大原池、新池)の代替池築造に伴い調査した。

調査地は北東から南西に傾斜する地点に位置する北西-南東約110m、北東-南西約40mの紡錘形の範囲で、調査面積は2018㎡である。

図21のように調査地は、傾斜地にもかかわらず調査前地盤はほぼ平坦に造成されており、調査範囲の北東部約4分の1がT.P.+92.0m、その他の大部分はT.P.+89.5mであった。現在の表土層および山側から大量に流下した土砂を重機で除去し、それ以下の遺構面と包含層を人力掘削した。

3面(一部では4面)を調査し、約230か所の遺構を検出した。

出土遺物は、陶器、磁器、瓦、瓦器、瓦質土器、土師器、須恵器、金属器など約27000点である。

第2節 層序

08-2調査区では図21に示す位置で、現地表面から調査を終了した第3面あるいはその下層まで堆積状況を記録した。A・C・E断面は等高線にはほぼ直交し、B・D断面はおおむね等高線に並行する。

なお、第3章調査の方法でも述べたように、08-2調査区では、最初に調査した面を第1面と呼び、以下調査順に面の番号を付す。層名は、機械掘削停止面から第1面までの層を第0層と呼び、第1面と第2面との間の層を第1層とし以下同様と呼ぶ。ある面と次の面との間の堆積は観察の結果○付き数字の地層に細分されることがある。

A断面(図22)

機械掘削層・第0層 ①は現在の表土層で5Y3/1オリーブ黒色粗砂に礫を含む。②は5Y4/2灰オリーブ色粗砂に礫を含む。

③～⑥は斜面に盛土されたものが、その後の平坦面造成に伴い一部カットされている。③は10YR6/8明黄褐色粗砂～シルトに礫を含む。④は北東の山側は7.5YR4/3褐色粗砂～細砂に礫を含み、南西の谷側では10YR6/8明黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。⑤は2.5Y7/2灰黄色粗砂～細砂に礫を含む。⑥も④と同様に山側と谷側では若干異なり、山側では7.5YR4/2灰褐色粗砂～細砂に礫を含み、谷側では2.5Y5/3黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。

⑦は⑥を盛土する前の整地層で2.5Y7/3浅黄色粗砂～細砂に礫を含む。

⑧は旧表土と考えられる。2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～細砂に礫を含むが、谷側の方が粒子が細かい。

⑨は2.5Y6/4にぶい黄色粗砂～細砂に礫を含む。ラミナが発達し、層も厚いことから、斜面上方より一気に流下したものと考えらえる。

⑩は10YR6/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。⑪は2.5Y7/2灰黄色粗砂～細砂に礫を含む。

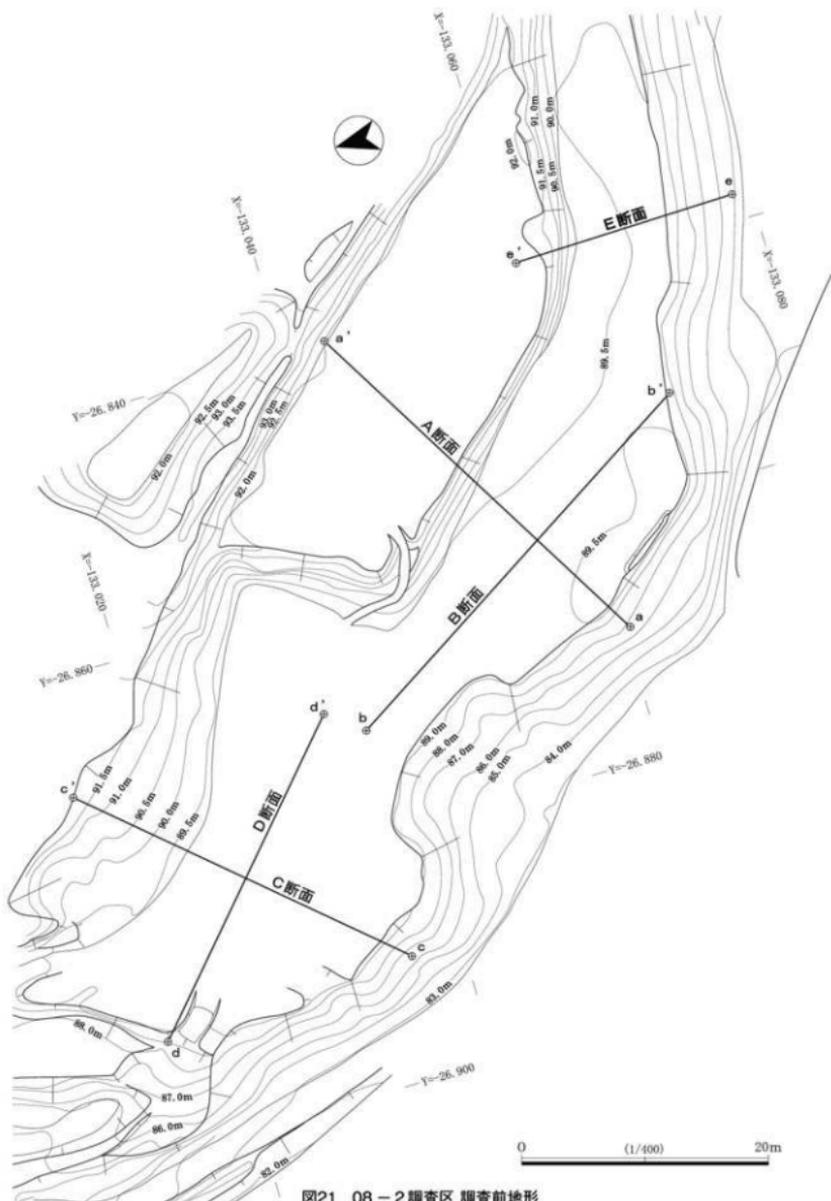


图21 08-2 調査区 調査前地形

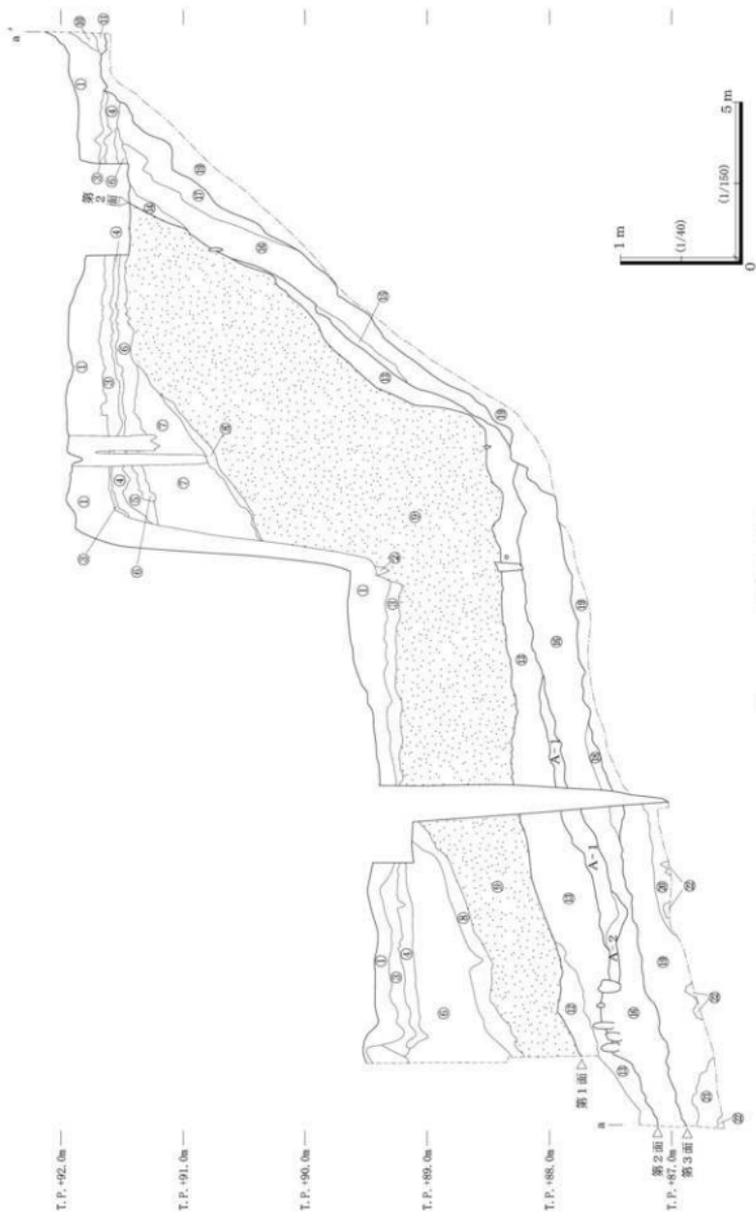


图22 08-2调查区A断面

第1層 ⑫は谷側に分布し、2.5Y6/3にぶい黄色シルト～粘土に礫を含む。第1層の主体となるのが⑬で、山側では10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂、谷側では10YR4/4褐色粗砂～シルトに礫を含む。

第2層 ⑭は山側に分布し、7.5YR5/4にぶい褐色粗砂～シルトに礫を含む。山側の斜面にみられる⑮は10YR5/3にぶい黄褐色粗砂～シルトに礫を含む。

Aは第2面83落ち込みで、上層山側の10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～シルトに礫を含む(A-1)と下層谷側の7.5YR4/2灰褐色粗砂～細砂に礫を含む(A-2)に細分できる。

第2層の主体となる⑯は、山側では10YR4/3にぶい黄褐色粗砂～細砂に礫を含む、谷側では7.5YR5/6明褐色粗砂～シルトとなる。山側の⑰は10YR4/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。中央部の⑱は7.5YR5/2灰褐色粗砂～シルトに礫を含む。

第3層 第3層はいわゆる地山で、⑲とした層は基本的に同一だが、山側では2.5Y6/3にぶい黄色シルト質粗砂～細砂に礫を含む、中央部では2.5Y6/4にぶい黄色シルト質粗砂～細砂、谷側は花崗岩が風化した5Y3/2オリーブ黒色粗砂～細砂に礫を含む、と地点によって変化する。⑳は2.5Y4/1黄灰色粗砂に礫を含む。㉑は10YR5/4にぶい黄褐色粗砂～細砂。㉒は10YR3/4暗褐色の細砂～シルトで花崗岩が風化した小礫を多く含む。

B断面(図23)

機械掘削層・第0層 ①は現在の表土層で10YR5/1褐灰色粗砂に礫を含む。

②～⑦は盛土である。②は5Y4/2灰オリーブ色礫を含むシルト質粗砂～細砂。③は7.5YR4/4褐色粗砂～シルトに礫を含む。④は10YR6/6明黄褐色粗砂～シルトに礫を含む。⑤は10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。⑥は10YR4/1褐灰色シルト質粗砂～細砂。⑦は10YR7/8黄橙色細砂～シルトに礫を含む。

⑧の2.5Y5/2暗灰黄色粗砂に礫を含むは、斜面上方より一気に流下したもので、A断面の⑨に対応する。⑨の2.5Y6/1黄灰色細砂～シルトは⑧と⑩との間層である。⑩は中央谷を一気に埋めたもので、北西部の10YR7/4にぶい黄橙色粗砂に礫を含む部分から、南東部の5Y3/1オリーブ黒色粗砂に漸移的に変化している。

第1層 ⑪は第1層の主体となる10YR4/4褐色シルトで礫～細砂を含む。北西部に分布する⑫は、10YR5/4にぶい黄褐色シルトに礫～細砂を含む。

第2層(上層) 北西側のAは第2面73土坑で10YR3/4暗褐色シルトに粗砂～細砂を含む。中央部のBは第2面83落ち込みで、その大部分を10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む(B-1)が占め、下部に10YR3/3暗褐色シルトに粗砂～細砂を含む層(B-2)が堆積している。Cは第2面85ピットで10YR4/3にぶい黄褐色に粗砂～細砂を含む。

⑬・⑭は第2面の中央部にのみ分布する。⑬は10YR3/4暗褐色シルト、⑭はそれよりわずかに暗い10YR3/3暗褐色シルトで、これらの範囲の下面を「第2-2面」として記録した。

第2層 ⑮は7.5YR5/6明褐色シルトに粗砂～細砂を含む。⑯は7.5YR5/6明褐色シルトで粗砂～細砂を含む。⑰は7.5YR5/4にぶい褐色シルトに粗砂～細砂を含む。⑱と⑲とは⑩の中央谷をはさんでわずかに色調が異なるが、基本的に同一層である。

第3層 Dは第3面197落ち込みで10YR5/8黄褐色シルトに細砂と木の根を含む。

⑳は2.5Y5/6黄褐色シルトで粗砂を多く含む。㉑は10YR5/4にぶい黄褐色シルトに礫～細砂を多く含む。㉒は10YR3/4暗褐色シルトで細砂と花崗岩の小礫を含む。㉓と㉔は混じりあって堆積している。

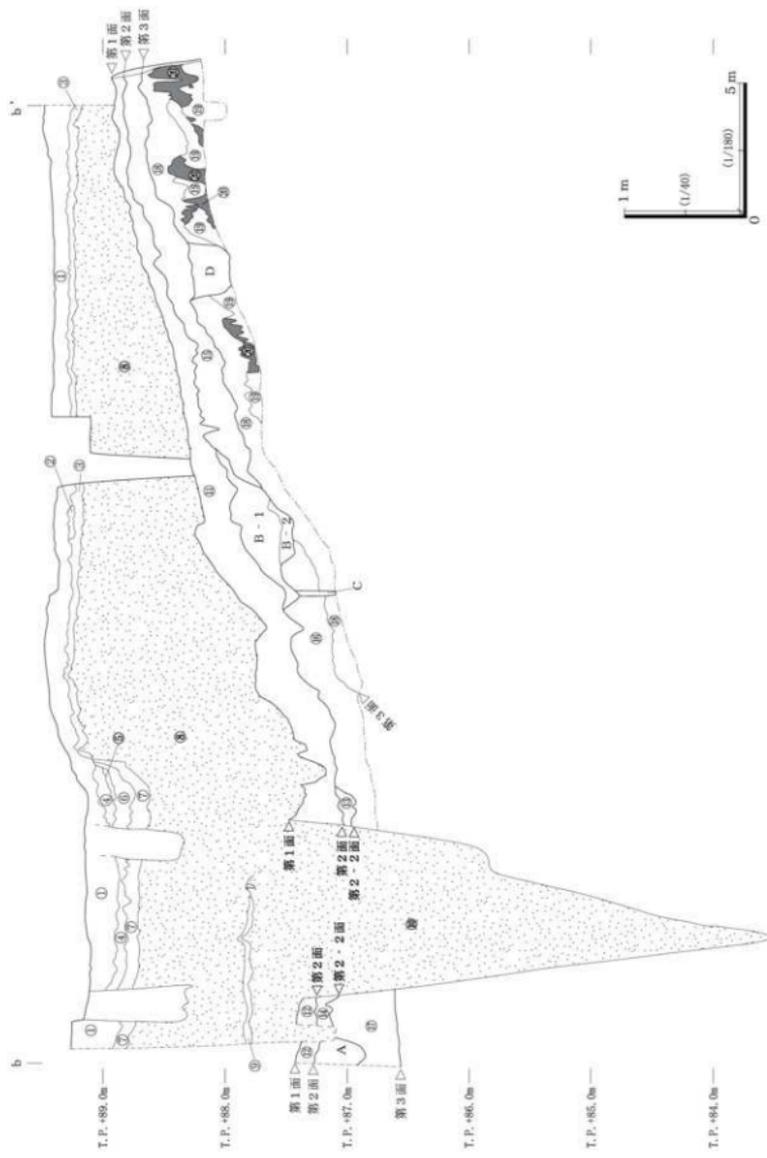


图23 08-2調査区B断面

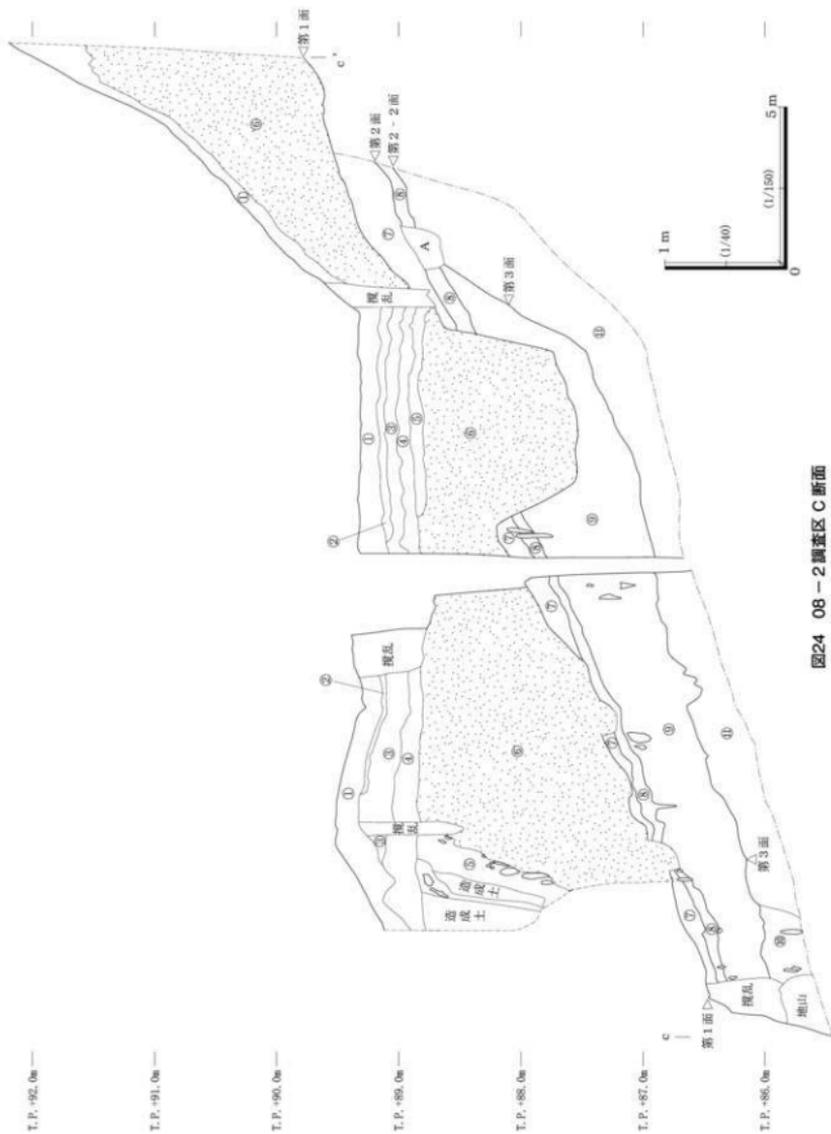


图24 08-2调查区C断面

C断面(図24)

機械掘削層・第0層 ①は現在の表土層で10YR4/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。

②～⑤は盛土である。②は10YR5/2灰黄褐色細砂に礫を含む。③は10YR5/3にぶい黄褐色細砂に礫を含む。④は7.5YR6/6橙色細砂に礫を含む。⑤は中央部では10YR5/2灰黄褐色細砂に礫を含み、谷側の斜面に沿って傾斜している部分は10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂で少量の粘土ブロックと礫を含む。②～⑤はほぼ水平に盛られている。

⑥のラミナの発達した2.5Y6/3にぶい黄色粗砂に礫を含むは、A断面の⑨やB断面の⑧に対応する。斜面上方より流下し一気に堆積したものである。

第1層 ⑦は7.5YR6/2灰褐色粗砂～細砂に礫を含む。

第2層(上層) Aは第2面38土坑で10YR4/4褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

⑧は一見してかなり黒味が強く明瞭に判別できる。しかし、詳細にみると北西部の山側では5YR4/4にぶい赤褐色粗砂～シルトに礫を含み、中央部では10YR4/1褐灰色粗砂に礫を含み、南西部の谷側では10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫と粘土ブロックを含む、と変化している。この⑧の上面を「第2面」、下面を「第2-2面」とした。

第2層 ⑨は7.5YR5/4にぶい褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

第3層 ⑩は10YR5/8黄褐色シルトに粗砂～細砂を含み、さらに木の根を多く含む。⑪は花崗岩が風化した地山で10YR4/4褐色礫～シルトである。

D断面(図25)

機械掘削層・第0層 ①は現在の表土層で10YR4/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。

②～⑤は盛土。②は7.5YR6/6橙色細砂に礫を含む。③は北西部では10YR5/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含み、南東部では10YR6/6明黄褐色細砂に礫を含む、と北西部に向かうにつれて色調が明るくなる。④は北西部では10YR5/3にぶい黄褐色粗砂～細砂に礫を含み、南東部では7.5YR6/6橙色細砂に礫を含む。③同様に北西側で色調が明るくなる。⑤は10YR7/6明黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。

⑥は後述する⑨よりは小規模だが斜面上部から流れてきた2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂で礫を含む。⑦は10YR5/8黄褐色細砂～シルトに礫を含む。⑧は7.5YR6/6橙色細砂に礫を含む。

⑨はラミナのみられる2.5Y6/3にぶい黄色粗砂に礫を含む。A断面の⑨、B断面の⑧、C断面の⑥に対応する。⑩もラミナのみられる10YR5/3にぶい黄褐色シルト。

⑪は10YR6/4にぶい黄褐色粗砂～シルト。⑫は10YR4/4褐色シルト。

第1層 ⑬は10YR4/4褐色粗砂に礫を含む。

第2面(上層) Aは第2面43落ち込みで10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。Bは第2面52土坑で10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。Cは第2面53土坑で10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

⑭は10YR2/2黒褐色細砂～シルトに炭化物の小粒を多く含む。⑮は10YR4/1褐灰色粗砂に礫を含む。この⑭と⑮の上面を含め全域を「第2面」、⑭と⑮の分布範囲の下面を「第2-2面」とした。

第2層 ⑯は10YR3/4暗褐色シルトで礫～細砂および炭化物を多く含む。⑰は第2層の主体となる層で、7.5YR5/4にぶい褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

第3層 ⑱は10YR4/4褐色礫～シルト。花崗岩が風化した地山で、C断面の⑬に対応する。

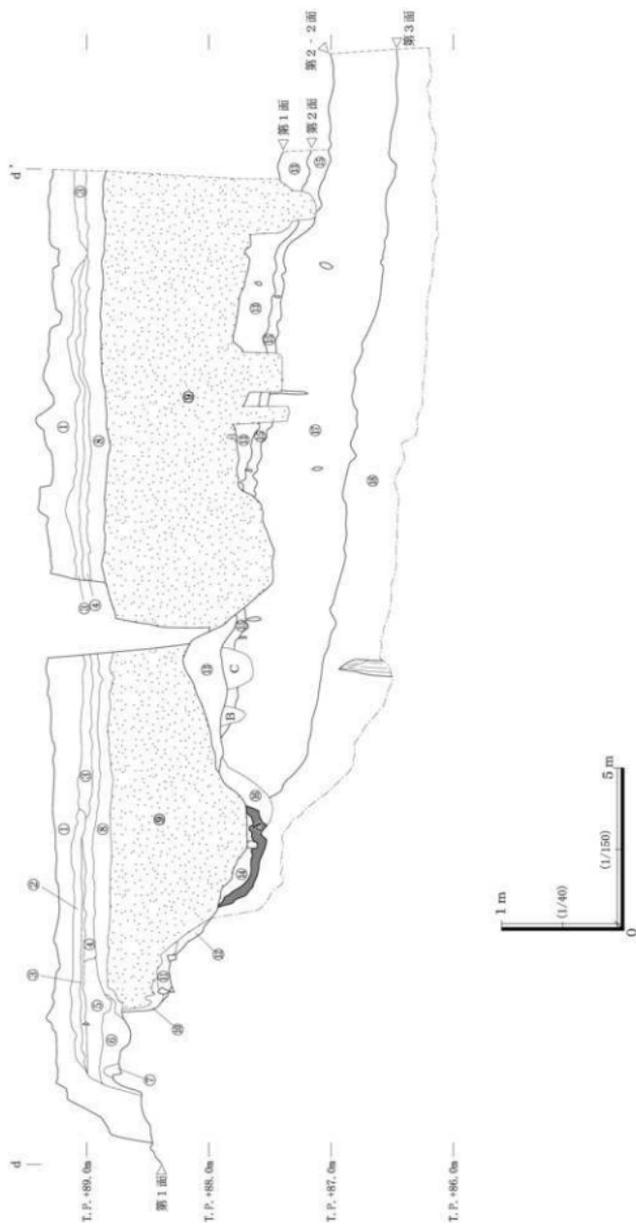


图25 08-2调查区D断面

E断面 (図26)

E断面は、08-2調査区南東部の堆積状況を確認するために調査区機械掘削停止後に設定した。

第0層 ①～⑦は盛土である。①は10YR5/3にぶい黄褐色粗砂～細砂に礫を含む。②は10YR6/1褐灰色粗砂～細砂。③は7.5YR6/4にぶい橙色粗砂～細砂。④は2.5Y5/1黄灰色細砂～シルトに粗砂を多く含む。⑤は7.5YR6/4にぶい橙色細砂～シルトに粗砂を多く含む。⑥は7.5YR5/2灰褐色細砂～シルトに粗砂を多く含む。⑦は10YR6/2灰黄褐色細砂～シルトに粗砂を多く含む。

⑧は10YR6/3にぶい黄橙色粗砂～細砂。

第1層 ⑨は7.5YR4/2灰褐色細砂～シルトに礫～粗砂を多く含む。谷側では第1面が東谷によって削られているため、山側にしか存在しない。

第2層 Aは第2面116ピットで、7.5YR2/1黒色細砂～シルトに10YR5/3にぶい黄褐色細砂～シルトのブロックを含む。

⑩は10YR5/4にぶい黄褐色細砂～シルトに粗砂を多く含む。⑪は10YR5/2灰黄褐色細砂に粗砂を多く含む。⑫は10YR6/4にぶい黄橙色粗砂～細砂でラミナがみられる。

第3層 ⑬は10YR6/1褐灰色粗砂に水平方向のラミナがみられ、さらに10YR3/1黒褐色細砂～シルトがラミナ状に入る。地山である。

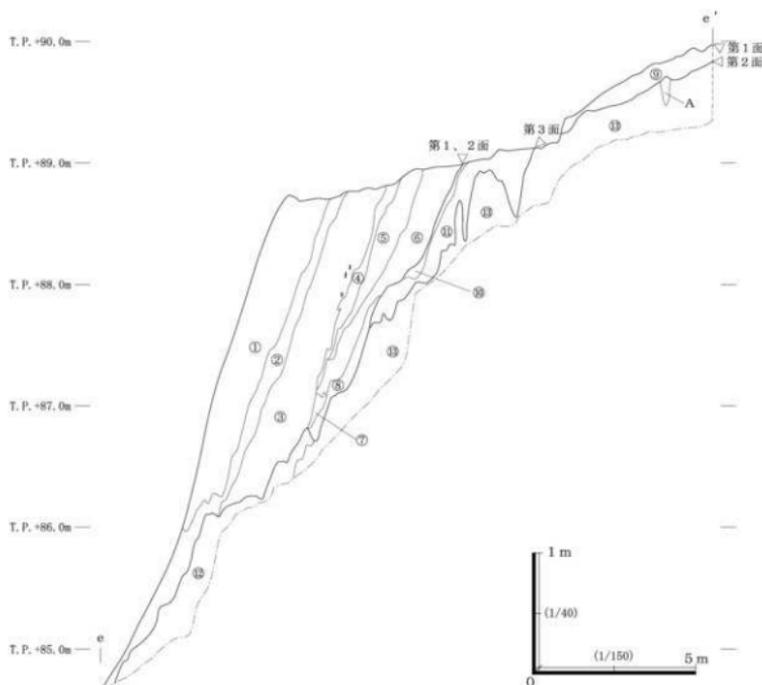


図26 08-2調査区 E断面

第3節 第1面の遺構と遺物

第1面(図27 写真図版5)は、基本的に機械掘削層・第0層のラミナの発達した砂層を除去した面である。ただし、調査区中央部から北西部にかけては、中央谷を埋めた砂層の上面において3建物や26石仏列などが姿を現したため、その面で記録しその後当該の遺構を掘り上げて下層を確認した。

第1面は北東から南西に傾斜しており、高い部分ではおよそT.P.+93m、低い部分では北西端でT.P.+85m、南西側でおよそT.P.+86.5mと高低差がある。遺構として、礎石建物、石仏列、石列・石群、土坑、ピット、溝など、計35か所[番号1～31・235・236～244(欠番7・9・10・11・13・14)]を調査した。

第0層を掘削し第1面を検出中に鉄釘などの金属製品がしばしば見つかったため、第1面の遺構調査と併行して金属探査を行った。鉄製品は錆びると土の色と見分けがつきにくく、しかも概して小さい。第1面では、寺院と思しき瓦を伴う礎石建ちの建物や鍛冶工房らしき土坑も検出されつつあり、ますます金属製品の出土が予想された。しかし、当センターに金属探知機はない。そこでレンタル数社の見積りを取り、費用と性能とを比較して、フジテコム社の金属探知機F-90Mを1週間借りることにした。

その探知性能は感度(Hi)時で、「鉄板(φ100×20):42cm、制水弁蓋(φ180):65cm」という。長さ10cm程度以下、太さ数mm、しかも錆びた鉄釘などにどう反応するのかわからなかった。

2000㎡以上に及ぶ調査区全域を図28のように5mメッシュで探査し、反応の有無を確認した。さらに、寺院と推定される3建物と鍛冶工房である18堅穴については全面探査した。

3建物では、反応のあった地点を中心に鉄釘や青銅製品が多く出土した。ただし、反応があってもその周辺から金属が出土しなかった場合や、反応地点と出土地点が数10cmずれる場合もあった。

18堅穴では、堅穴の北部でしばしば反応はあったが、掘削の結果、堅穴全面からはほとんど鉄釘や鉄滓が出土した。また、18堅穴北部の30ピットでは、その中心部に金属反応があったものの、金属は出土しなかった。一方、18堅穴南東部にある24坑と25ピットでは、ピット上面での探査では反応がなかったが、両遺構の埋土から鉄釘や鉄小塊が出土した。

以上、金属探査の結果、反応があっても遺物のないケースやその逆もあったが、おおむね金属製品の検出につながった。

以下、3建物、29土坑、26石仏列、18堅穴と関連遺構、溝、石組・石群、土坑・ピット、第1面出土遺物の順に報告する。

3建物(図29～32 カラー写真図版1・写真図版5～8)

調査区中央部や北西側に位置する。機械掘削中に人頭大あるいはそれ以上の石が見つかったため、人力掘削に切りかえ礎石群を検出した。

構築順は、まず北東から南西に傾斜する面を建物の北方に約5m、東方には約5～6mまでカットし、平坦面を造りだす。次に、穴を掘り、根石を入れ、礎石を据え、穴を埋める。この段階で、掘方のない石も置かれた。その後、建物の建つ範囲内の石の周辺に図30の第1層の4(5YR5/6明赤褐色シルトに粗砂～細砂を含む)を亀腹状に敷きならしている。

第1層の4の上面では、その層以下に含まれている遺物はほとんど露出していない。建物北列西側の237礎石の周辺は黒っぽくなっているが、これはこのあたりがわずかにくぼんでいたために雨水などにより第1層の2(10YR3/2黒褐色シルトで上部に植物遺体層)が流入したためで、人為的なものではな



図27 08-2調査区 第1面

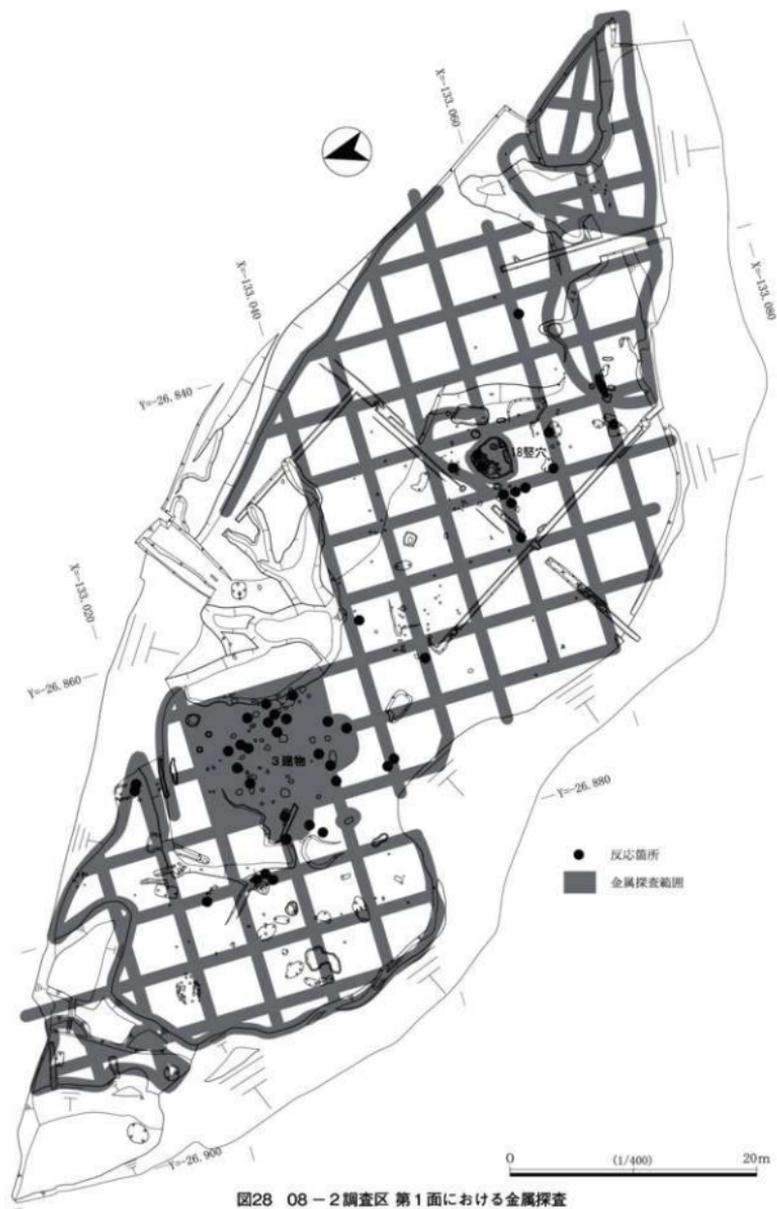


図28 O8-2調査区 第1面における金属探査

いと考えられる。一方、建物南側の沓脱石の南から南東側にかけて数mの範囲内は、周辺の同じ層よりも踏み固められ三和土のように締りが良い。

瓦などの遺物を取り上げ石を除去して確認したところ、掘方は237～244礎石の8個で認められた。それらを基準に建物の規模を推定する(図29)と、建物北辺と考えられる237礎石と241礎石の心々距離(以下同じ)が4.1m、東辺の241礎石と242礎石の間が3.9m、西辺の237礎石と238礎石の間が3.8m、南辺の238礎石と242礎石の間が4.5mと、南辺が1割方長い、6尺5寸を1間(1.97m)とする京間のおおむね2間×2間に相当する。この部分は2間×2間の宝形(方形)堂に復原できる。

ところが、建物南側の沓脱石を中心としその左右にある240礎石と244礎石の間は3.5m、その1.1～1.2m北側の239礎石と243礎石の間は3.4m、238礎石の0.9mほど東にある石と242礎石の間は3.6mと、6

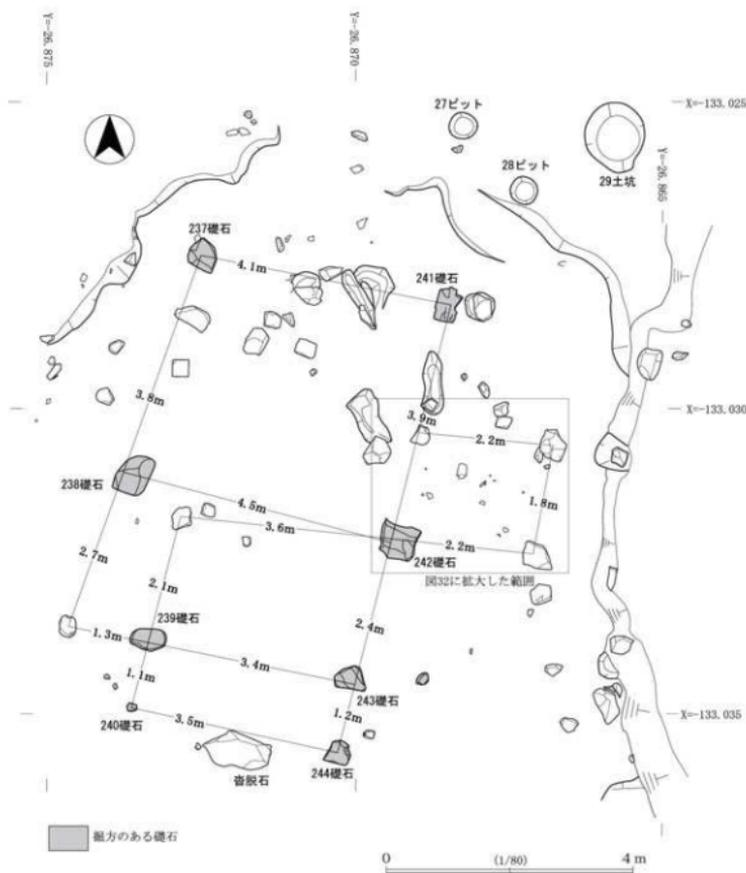


図29 08-2調査区 第1面3建物検出状況

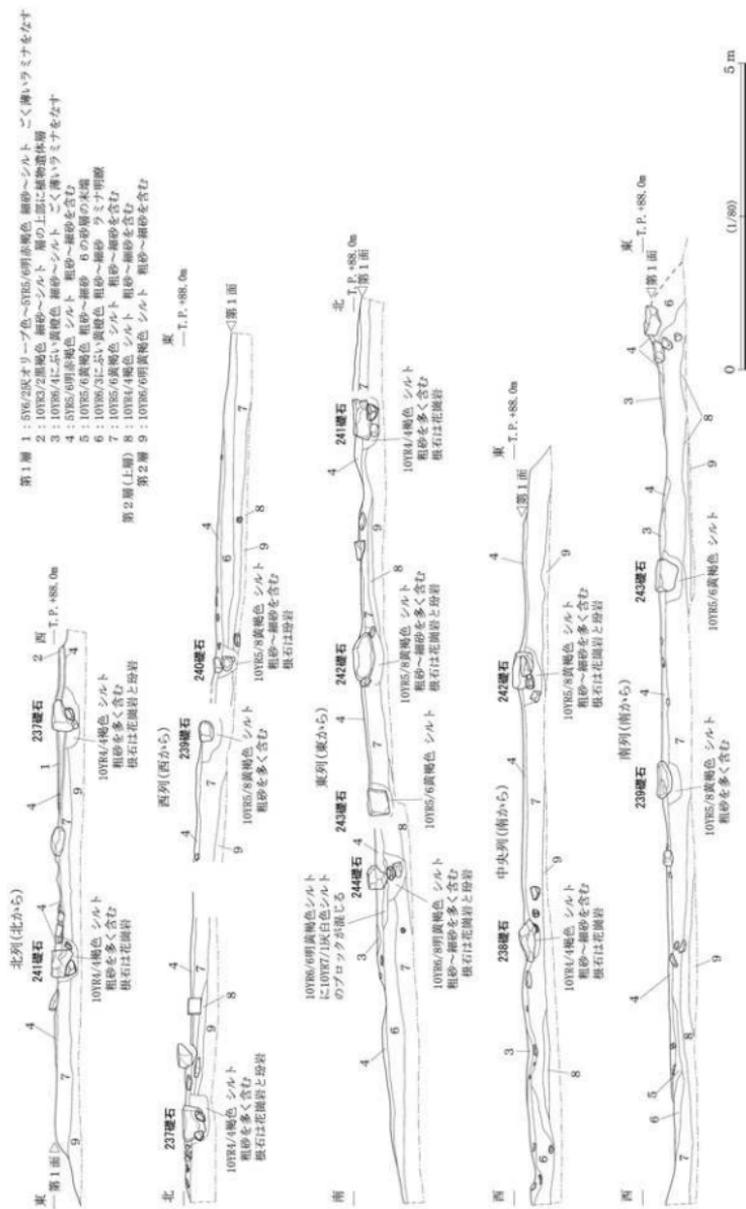


図30 08-2調査区 第1面3建物断面



図31 08-2調査区 第1面3建物遺物出土状況

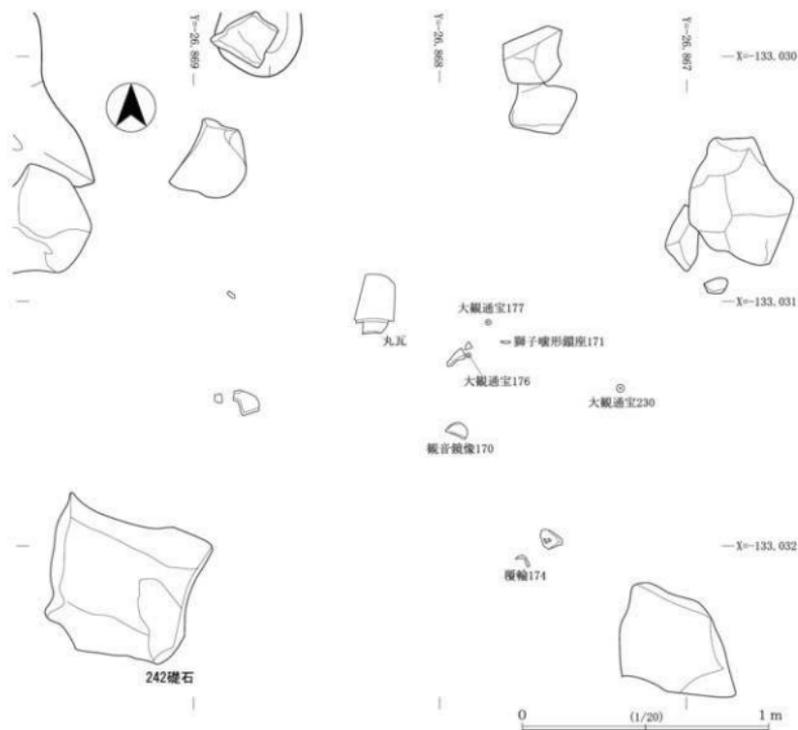


図32 08-2調査区 第1面3建物青銅製品等出土状況

尺を1間とする江戸間(1.82m)の倍数に近い。

242礎石の北東側には、掘方はないが大きめの石が存在し、南北約1.8m東西2.2mの長方形を構成する。その内側からは図32のように線刻十一面観音鏡像、獅子喚形銀座、大観通宝、覆輪といった青銅製品などがまとまって出土した。このほか、241礎石の南西側から懸仏の尊像、237礎石の南西側部から金鍍金の鈴などが出土した。鎮壇具であろうか。

さらに各礎石間の心々距離を計測すると図29のようになり、京間と江戸間の倍数に近い値が混在する。北側の京間の建物と南側の江戸間の建物とが時期の異なるものとの仮定も成り立つが、断面(図30)をみると、237～244礎石の8個はいずれも掘方の上面を第1層の4(5YR5/6明赤褐色シルトに粗砂～細砂を含む)で覆われており、同時並存あるいは大きな時期差はないと考えられる。

奥田 尚氏により、石材は237・240・242・244礎石がアブライト質黒雲母花崗岩、238・243礎石が黒雲母花崗岩、239・241礎石が珸岩と鑑定されている(「第6章 津田遺跡出土石材の石種とその採石地」参照)。

3建物の第1層の4からは約5000片の瓦が出土した。割れた平瓦が多く、丸瓦、軒瓦、道具瓦などの比率は低い。これらの瓦の分布範囲は図31のように第1層の4(5YR5/6明赤褐色シルトに粗砂～細砂

を含む)の範囲内に限られるので、この層を敷く時点ですでに瓦が存在したと考えられる。特に建物の西外方、南西外方、南の香殿石の周辺に集中しており、中央部から東部にかけては希薄である。ただし、242礎石北東部の瓦が少ない部分から、図32のように青銅製品が集中的に出土していることは注意すべきであろう。先述のように237～244礎石は瓦よりも後に据えられたと考えられるので、瓦の分布状況からみて、3建物に先行してほぼ同位置にこの瓦を用いていた建物が存在した可能性がある。なお、数m以上離れて出土した瓦同士が接合するのは、建物の西半に限られる。

3建物の時期は、16世紀後半の瓦を礎石周囲に敷いて再利用しているので、それ以降である。

瓦の数を推計する方法としては、四周の長さ、面積、重量を計測する、あるいは破片数や四隅などを数える方法がある。ここでは破片と四隅の数を掲げる。

3建物の第1層の4から出土した平瓦の破片数は2097である。平瓦には狭端部と広端部とがあるが、判断に迷う破片も多いので一括して数えた。このうち1隅のある破片は644片、2隅が10片、3隅以上残るものはなく、平瓦の隅は $1 \times 644 + 2 \times 10 = 664$ 隅になる。平瓦は四角形なので、664を4で割ると166。すなわち最少でも166枚の平瓦が含まれている。

同様に丸瓦の破片数は378である。丸瓦の場合、平瓦よりも狭端部と広端部の判別が容易なのでこれを分けると、狭端部1隅が115片、同2隅が5片、広端部1隅が63片、狭端部1隅+広端部2隅が1片、狭端部2隅+広端部1隅が1片である。狭端部の隅でみると $1 \times 115 + 2 \times 5 + 2 = 127$ 隅で、最少個体数は64となる。広端部では $1 \times 63 + 2 = 65$ 隅で、最少個体数は33となる。すなわち、狭端部で数を数えた方が多く、丸瓦は64枚以上含まれている。

以下、3建物の第1層の4から出土した各種の瓦を掲げる。

図33-96～図34-102(写真図版22)は全て同範の左巻き三巴紋軒丸瓦である。巴の先端はやや丸みを帯びており内側に巻き込む。巴の1単位は界線と結合するが、残りの2単位は結合しない。外区には珠紋を18単位配する。ただし珠紋の数は、完形の個体がないため推測となる。周縁の高さは8mm程度、幅は25mmである。焼成は硬質で、色調は基本的に表面灰色、断面灰白色である。96～98・100の断面観察から、丸瓦の接合は外縁部よりも下部に粘土を詰め、その後外縁部に丸瓦を差し込んでされている。97の丸瓦部凹面にはコビキ痕が確認できる。101の丸瓦部凹面にはコビキ痕と吊り紐痕が確認できる。図34-101と102は、瓦当面上半と丸瓦部が残る。100以外は磨耗している。

図35-103～109(写真図版23)は宝珠唐草紋軒平瓦。中心飾りの宝珠の両側に3回反転の唐草紋が配置されるが、宝珠と唐草は接続しない。103～106はいずれも瓦当上縁が面取りされ、瓦当外区が平滑に仕上げられている。また、左側唐草第3単位の外側に範傷が認められる。108には向かって右側面に水切り用縦棧が付く。103～108の宝珠唐草紋軒平瓦は同範とみられ、瓦当部の接合方法や紋様構成から16世紀後半の所産と考えられる。

109も宝珠唐草紋だが先の2種とは別範である。唐草の展開は2回反転のみで、かつ紋様表現がさきの2種と比べ退化している。

図36-110～113(写真図版24)は玉縁を有する丸瓦。いずれも凹面には、布目と吊り紐痕とコビキ痕がみられる。113の凹面には滑り止めが付く。103～109の瓦当接合方法はいずれも、平瓦に顎部分を貼り付ける顎貼り付け式である。

図37-114～117(写真図版24)は平瓦。凹凸面両面とも丹念にナデ消されているため、ナデ以前の調整方法はわからない。

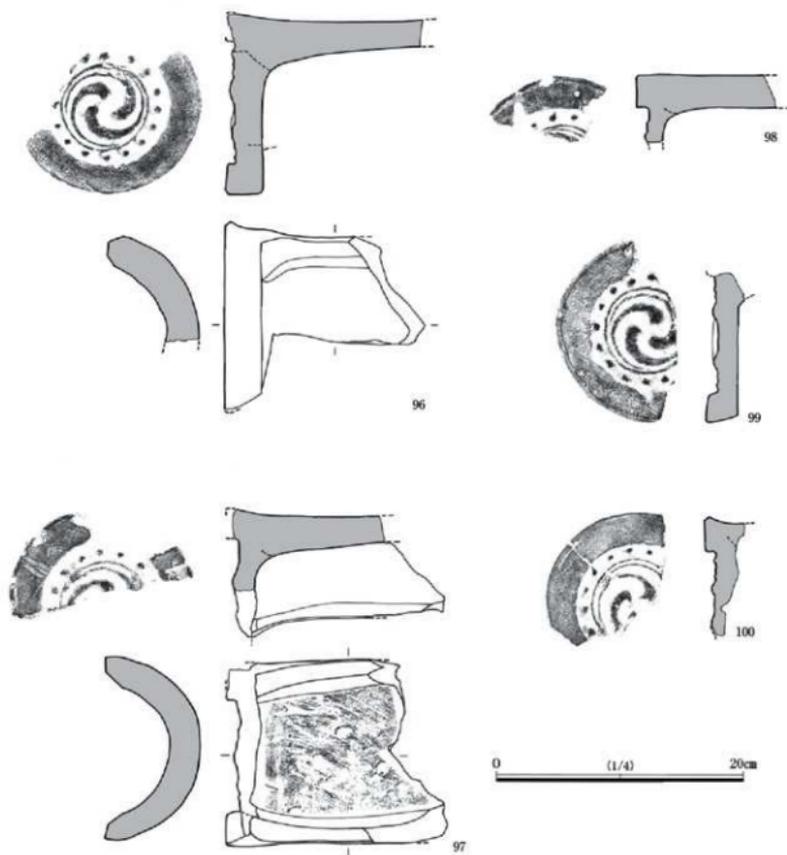


図33 08-2調査区 第1面3建物出土軒丸瓦(1)

図38-118は行基葺丸瓦。凹面にはコビキ痕が認められる。

119～124(写真図版25)は、いずれも端面に竹管状工具による○印の刻印がみられる平瓦。その部位は側面寄りではなくむしろ端面の中央部に近い。119には隣接して接し合う2単位の刻印があるが、その他は1単位のみである。

125は隅瓦。

126～128(写真図版25)は面戸瓦。126は丸瓦の玉縁付近を焼成前に加工したものの。127の凹面には布目とともに吊り紐痕もみられる。おそらくこれらも焼成前の丸瓦を加工したと考えられる。

図39-129～132(写真図版25)は雁振瓦(衾瓦・伏間瓦)、凸面はナデ調整を施し、凹面にはコビキ痕がみられる。

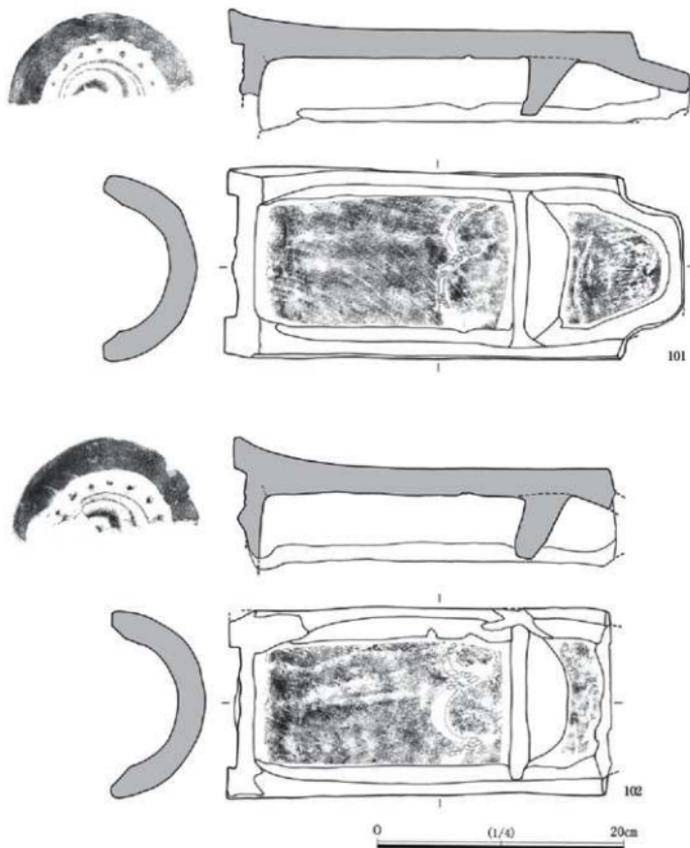


図34 08-2調査区 第1面3建物出土軒丸瓦(2)

図40-133(写真図版26)は、行基尊丸瓦に文字がヘラ書きされたもの。四周を欠くが、他の破片とは接しなかった。破片下部やや右は^ア、その右は^イで、金剛界五仏の一部分と考えられるが、真言の可能性もある。左側の文字は上が「菩」で下が「日」の右上部としてよければ「提」と推定され、2文字合わせて「菩提」となる。

134(写真図版25)は水煙形の瓦。穴がある。

135(写真図版26)は隅木蓋瓦。内面は粗くケズられて、その周囲は強くナデられたため溝状に浅くくぼんでいる。

136は平瓦の凹面に滑り止めを施したものか。

137は平瓦の破片を円板状に加工したものである。

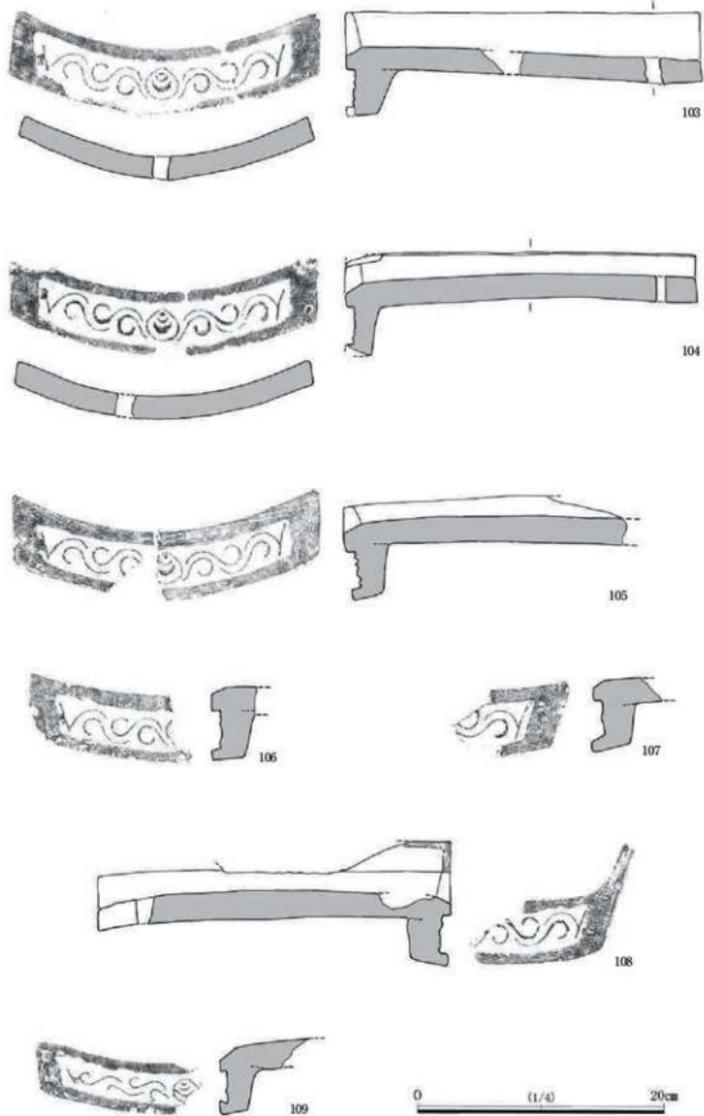


图35 O8-2调查区 第1面3建物出土軒平瓦

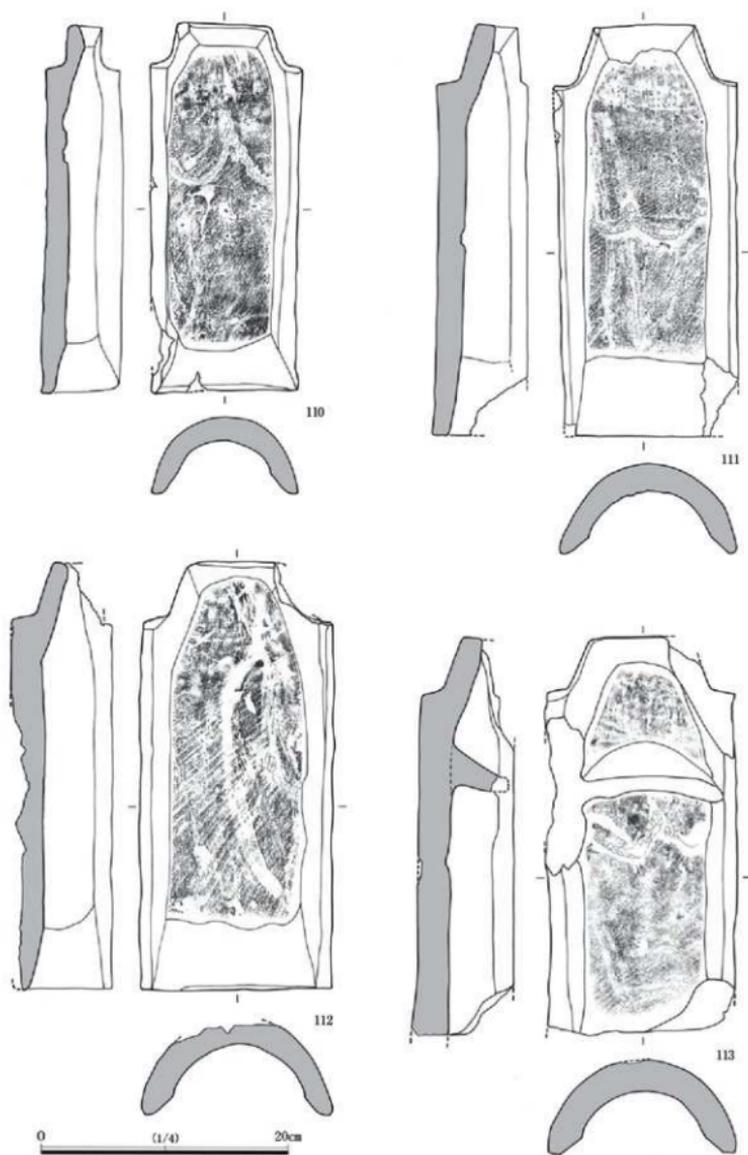


图36 08-2调查区 第1面3建物出土丸瓦

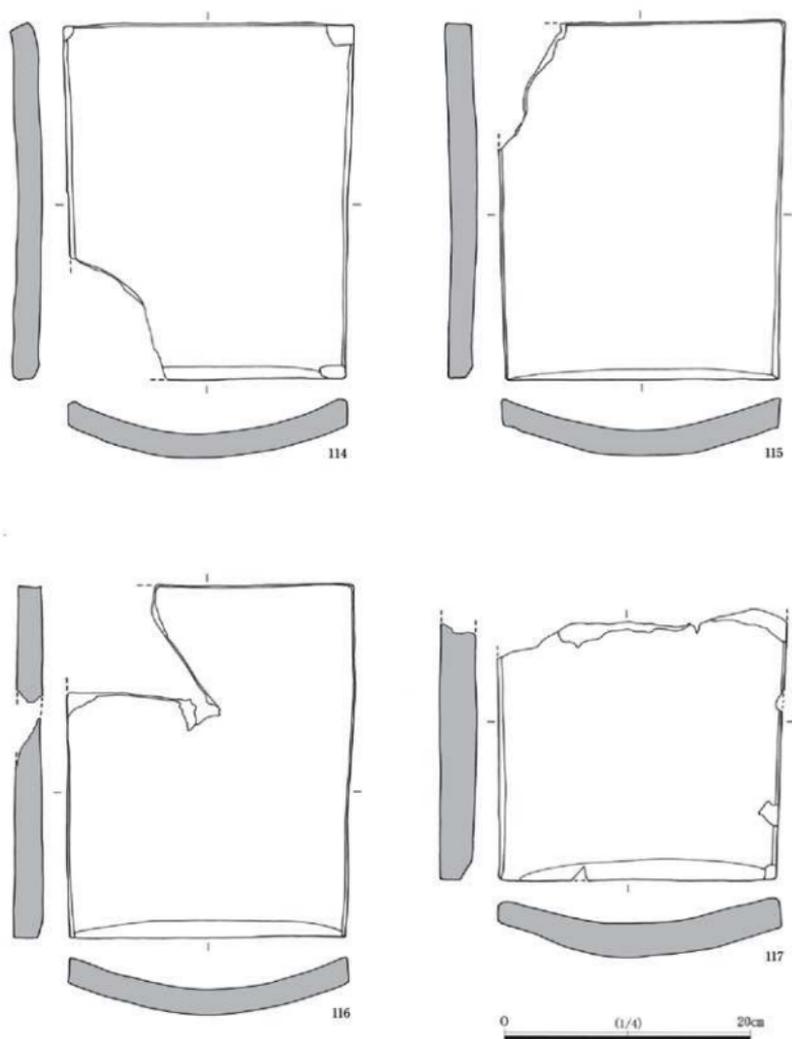


图37 08-2调查区 第1面3建物出土平瓦

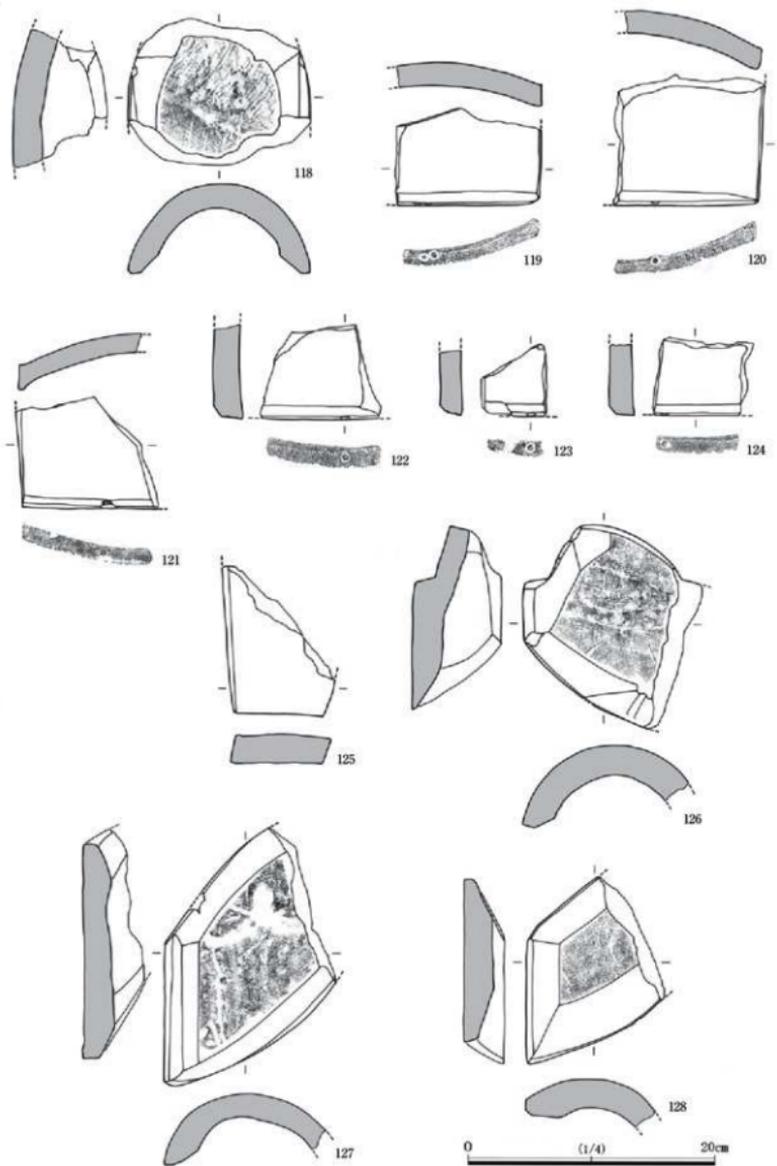


図38 08-2調査区 第1面3建物出土行基葺丸瓦、竹管文のある平瓦、隅瓦、面戸瓦

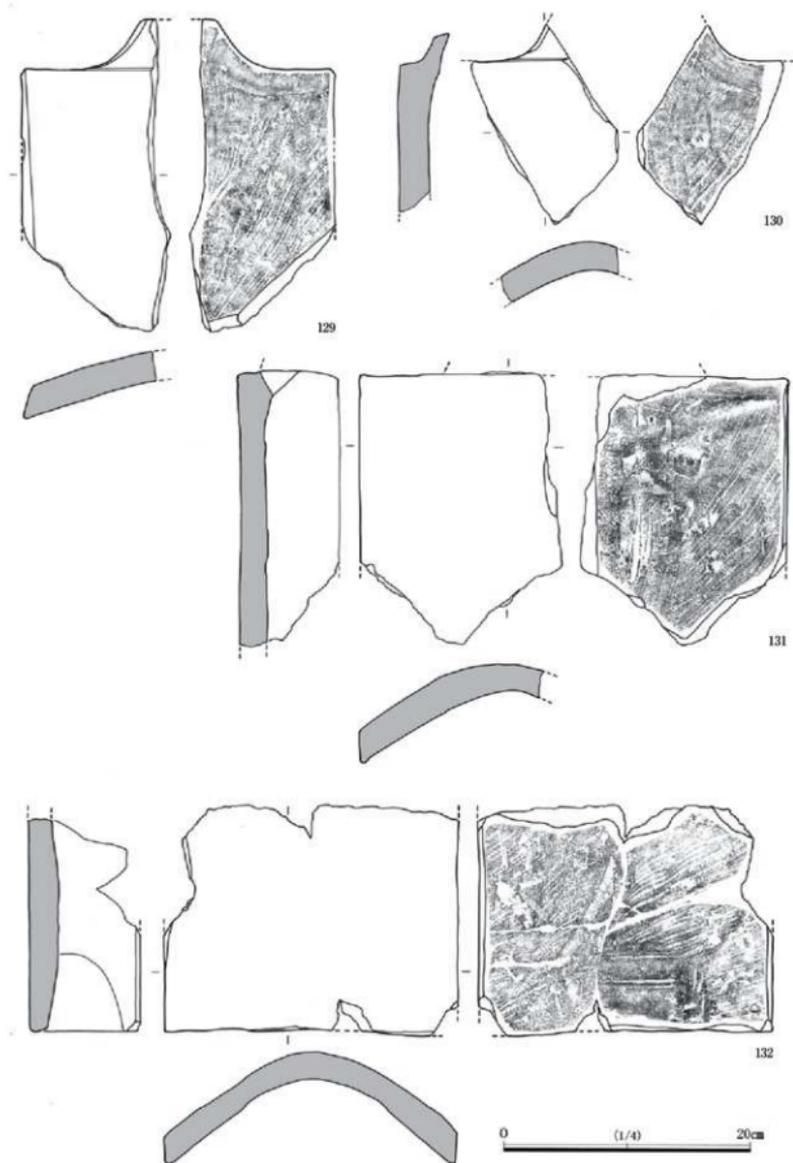


图39 06-2调查区 第1面3建物出土層板瓦

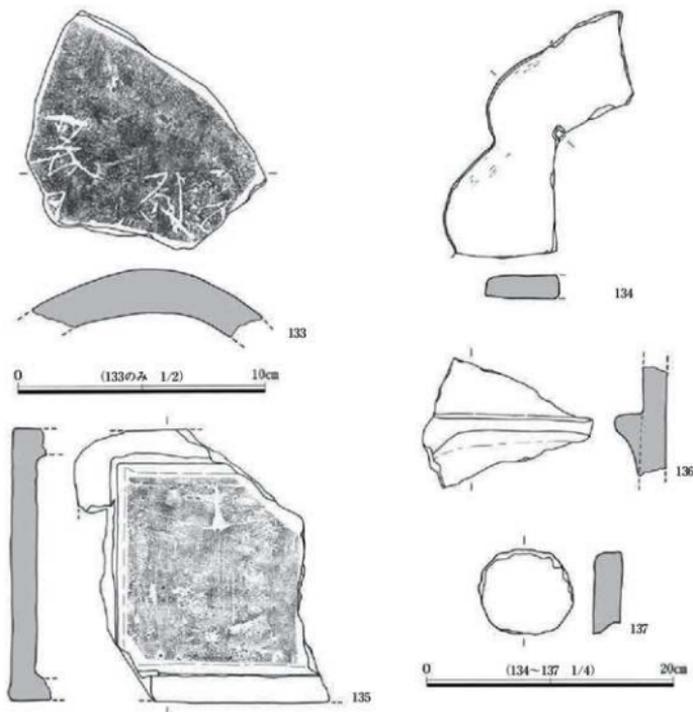


図40 08-2調査区 第1面3建物出土その他の道具瓦類

図41-138～147(写真図版26)は小型菊花紋軒丸瓦。瓦当径はいずれも10.0cm、推定長は20cm程度と小振りである。内区には12単位の花弁を配し、外区には推定20単位の珠紋を配する。瓦当范には、外縁上部と丸瓦部、内区より下部にそれぞれ粘土を詰め、瓦当と丸瓦との接合用粘土はほとんど用いない。凸面はナデ調整が施されており、凹面には布目痕跡が認められるが、釣り紐痕跡は確認できない。色調は灰色ないし褐灰色を基調とし、明らかに二次的焼成を受けている。146・147は瓦当面を欠くが、形状から同類と判断した。山崎編年中世Ⅲ期、13世紀の後半所産であろう。

図41-148～図42-158(写真図版26)は剣頭紋軒平瓦。軟質で表面が磨滅しており必ずしも鮮明ではないが、剣頭紋は陽刻の蓮弁状でその左右に各6単位認められる。向かって右から2～4単位目と左から2・4単位目が上下にやや長い。右から4単位目と5単位目の間に高まりがある。以上の特徴が共通することから、これらの剣頭紋軒平瓦は同范と考えられる。凸面はナデ調整され、凹面にはわずかに布目痕跡が残る。瓦当幅は約16cm、全長は約20cm。小型菊花紋軒丸瓦と同様に、灰色ないし褐灰色を基調とし、明らかに二次的焼成を受けている。寸法および色調から上記の小型菊花紋軒丸とセットになると考えられ、ともに13世紀後半に位置づけられる。

図43-159～161は土師器皿。159は底部が丸みを帯び、口縁部が外反する赤色系の皿。16世紀に属す

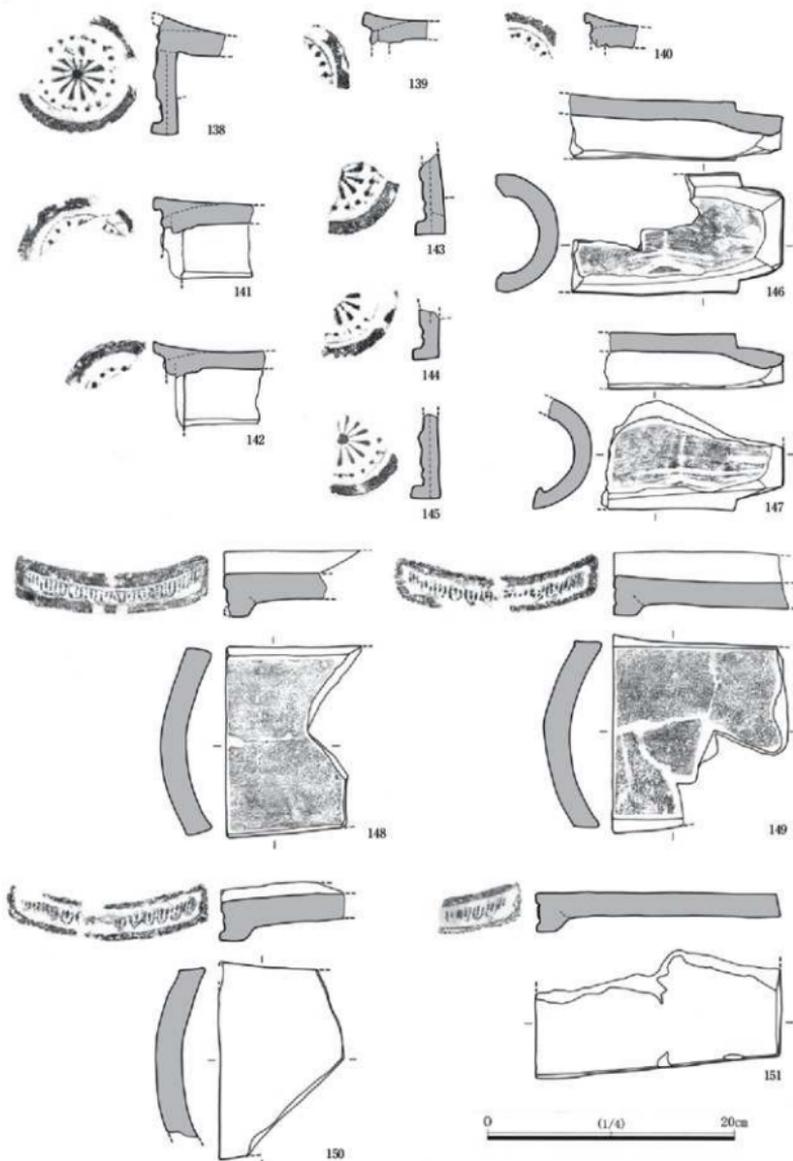


图41 08-2調查区 第1面3建物出土菊花文軒丸瓦、劍頭文軒平瓦 (1)

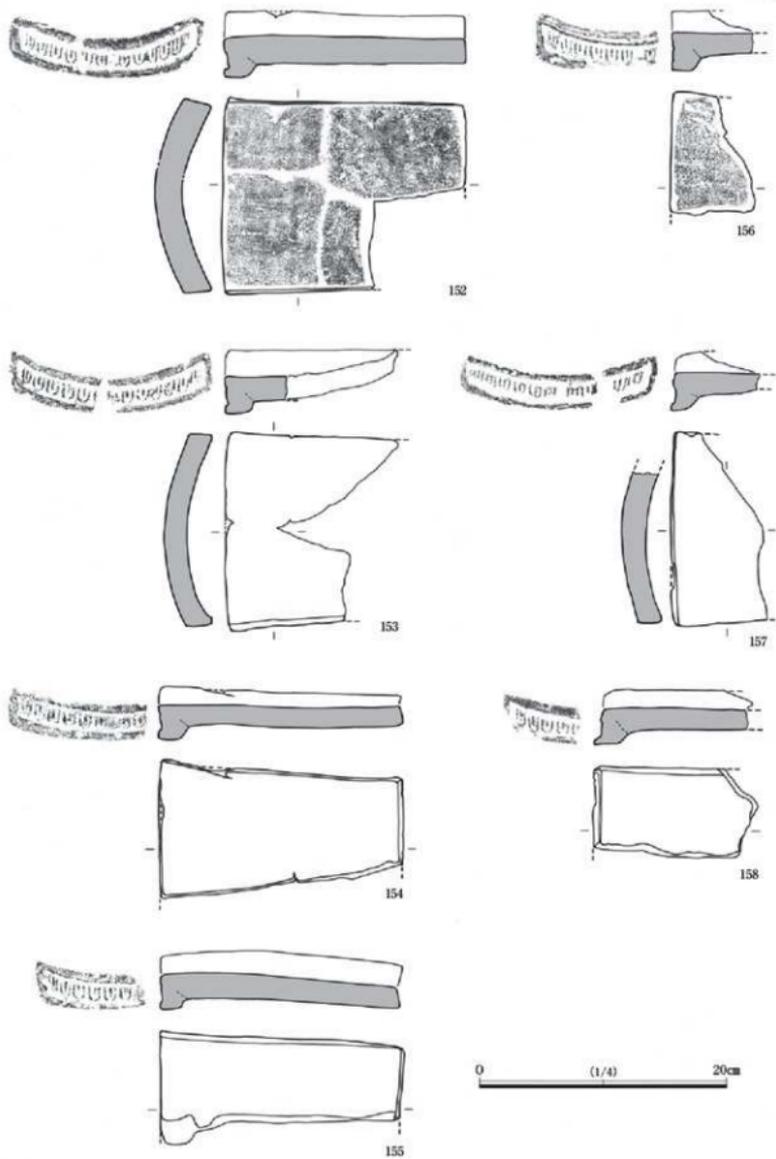


图42 08-2 调查区 第1面3 建物出土剑头文軒平瓦(2)

る。160・161(写真図版27)は灯明皿として使用されたもの。油の炭化物が付着している。16世紀後半、瓦と同時期の所産としてよい。

162・163は瓦質土器。火舎であろうか。163の胴部にはすくなくとも1孔が穿たれている。14～15世紀に属するか。

164(写真図版27)は石塔の相輪。上部は折損し、基部は削られている。九輪の下部には、不明瞭だが請花状の凹凸が認められる。花崗岩製。

165～168は鉄製品。

165・166は鉄釘。頭部はわずかに屈曲している。胴部の断面はほぼ正方形である。167・168は鉄製の鏡であろう。断面は縦長の長方形を呈する。

169～177は青銅製品。

169(カラー写真図版2)は懸仏の尊像(本尊)部。蓮上に坐し、右手を下げ、左手に何かを持っている。これが蓮華を挿した花瓶であれば菩薩坐像、薬壺であれば薬師如来坐像と考えられる。背面には鏡板に固定するための突起があり、上下に貫通する穴が開いている。腹部に穴が開いているが、その輪郭は不明瞭なので銅の薄い部分が腐食したものと推定する。高さ3.6cm、現状で重さ7.6g。14世紀頃の所産と考えられる。

170(カラー写真図版2)は線刻十一面観音鏡像(御正体)。直径8.4cmの素紋の鏡面に彫影りによる十一面観音菩薩がみられる。像の後上方に火頭型の光背、顔の向かって右側に蓮、像の頭上には小さな円と目鼻のような点からなる小さな顔が約10個描かれている。像上部の左右に直径2mmの穴を開け、紐などで吊り下げられるようにしてある。像の腹部で像に対して水平方向に鑿を入れ意図的に鏡を半截している。背面の周縁はかまほこ状に肥厚し、背面中央には取手状の鈕がある。現状で28.8g。懸仏が169のように立体化する以前の形態で、12世紀の所産と考えられる。

171(カラー写真図版2)は獅子喙形銅座。懸仏の鏡板を吊るすための金具で、円板状の鏡板の左右上部に付く。形状からみて鋳造品であろう。14～15世紀に類例がみられる。8.7g。

172(カラー写真図版2)は金銅製の鈴の破片。外面に金鍍金が施されている。現状で0.5g。

173(カラー写真図版2)は取手の一部と推定される。現状で1.8g。

174(カラー写真図版2)は覆輪。表面と側面に金鍍金が施されている。屈曲部にある釘穴の径は約1.5mm。この外面左右は鑿状のもので打たれたものか、線状に窪んでいる。図示したものの他に、同一個体の破片が2片ある。

175～177(写真図版46)は銭。175は聖宋元宝。1.6g。北宋1101年初鑄。176は大觀通宝。1.3g。北宋1107年初鑄。銭文がやや不鮮明だが177も同様であろう。1.5g。

29土坑

3建物の北東側、241礎石の約3m北東に位置する。平面は南北に長い楕円形で、長径112cm、短径95cm、深さ56cmである。埋土は2.5Y6/2灰黄色シルトに粗砂～細砂を含む。瓦と鉄釘が出土した。

図44-178・179(写真図版27)は左巻き三巴紋軒丸瓦。巴紋の先端は丸く、尾は2分の1周ほど伸びる。珠紋は16個、界線はその内側にのみ巡る。3建物出土の96～102と同範。

180は丸瓦。玉縁の凸面側には細かな面取りがみられる。凹面には布目と吊り紐痕がみられる。

181は剣頭紋軒平瓦。3建物出土の148～158と同範である。

182・183は鉄釘。断面四角形の和釘。

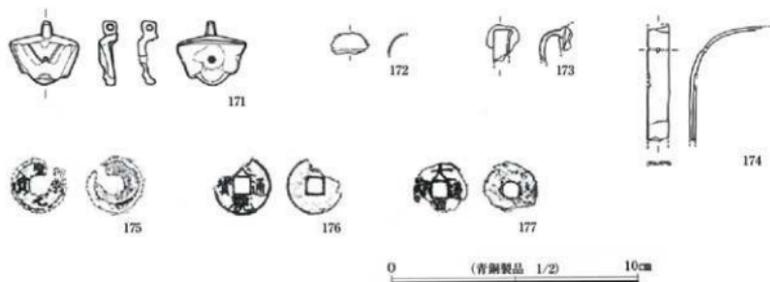
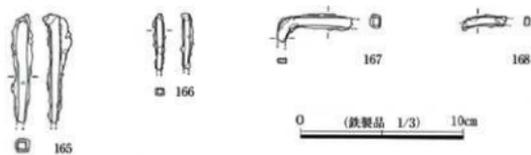
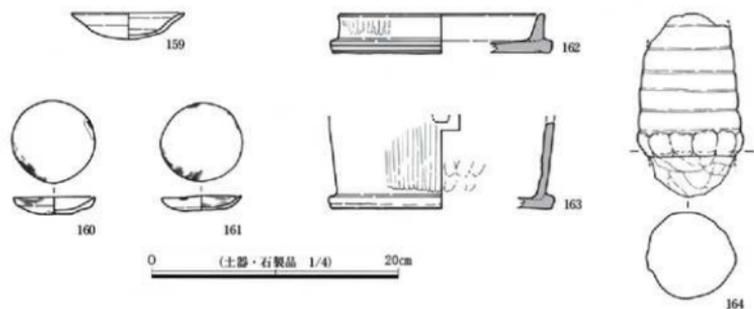


图43 08-2調査区 第1面3建物出土土器、石製品、金属製品

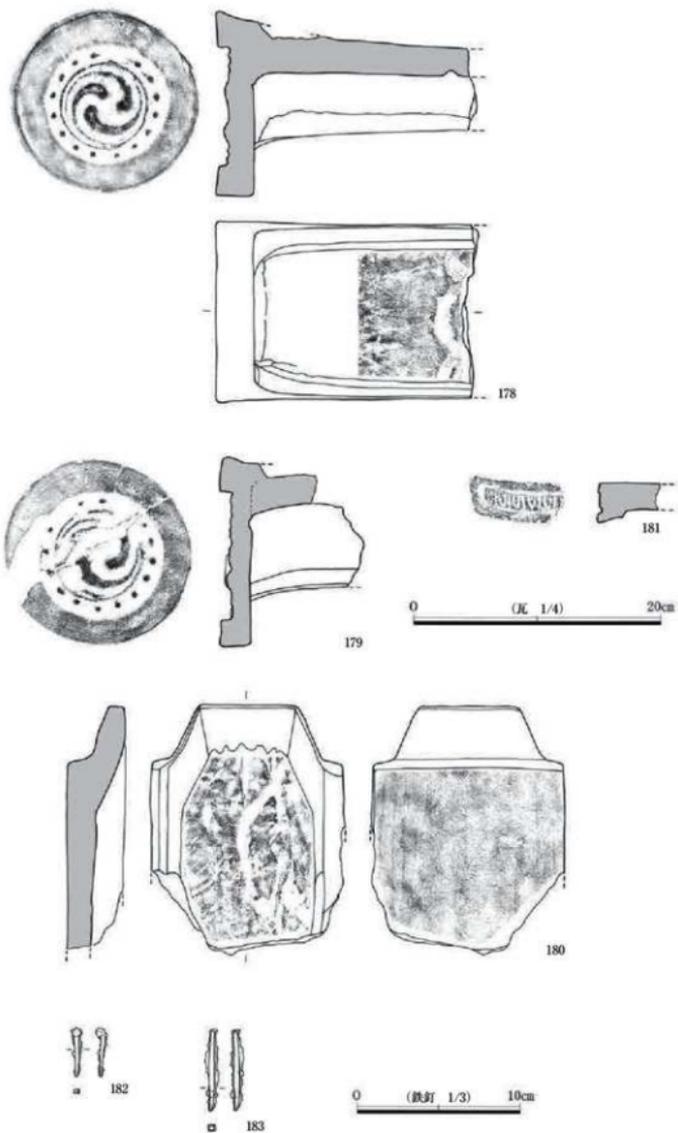


图44 08-2调查区 第1面29土坑出土遗物

26石仏列(図45 写真図版9)

調査区中央部に位置する。図46-184～187(写真図版27・28)の4体は図45の様に、顔を西に向け、南北に並んで立っていた。石仏に膝から下の表現はなく、その部分以下は土に埋まっていた。188(写真図版28)はその南側で頭を南西に向け伏した状態で検出した。この石仏は表面の磨耗が特に著しく顔の表情はうかがえない。189(写真図版28)は機械掘削の排土から回収したもののだが、他の石仏と一連で、本来は6体が並んでいたものと考えたい。

184～189は、いずれも光背と像容を一石で作る光背石仏。像容は阿弥陀如来である。顔の輪郭は丸い。指先の形までは詳らかではないが左右の手を胸の下で合わせ定印を結んでいる。膝から下の表現はない。16世紀後半の所産と推定される。

石材は6体とも弱片麻状黒雲母花崗岩と鑑定されている(「第6章 津田遺跡出土石材の石種とその採石地」参照)。

図47は、3建物と26石仏列を完掘した状況である。それらの下層には遺構はみられなかった。

2墓(図48 写真図版10)

調査区北西部、3建物の北約8m、調査範囲の北限に近い法尻に位置する。3建物と同様に機械掘削中に石が頭をのぞかせたため、人力掘削に切りかえ検出した。

主軸方位は北北東-南南西で、掘方は明瞭ではないので石列の外側で計測すると、南側は流失していると考えられ長径1.6m以上、短径約1.4mとなる。石は人頭大のものを主体に15個確認できた。花崗岩と玢岩と思われる石が用いられている。西列の南端の花崗岩は北東側にずれており、その抜けた後に砂が流れ込んでいる。東列の南から2つめにも同様な穴があり、石の抜け跡と推定される。

石で囲まれた内部の底面は平坦で、土の盛り上がりや石など棺座と思しきものは検出されていない。しかし、東と西の石列の内法は約90cmあり、埋葬空間として充分な幅がある。

出土遺物は、青磁碗、青磁皿、瓦器、土師器皿、鉄刀、鉄釘(カラー写真図版3 写真図版29)などである。図49-190と191の青磁碗は石列内部の北寄りから、伏せた状態で190が上、191は下に重なって出土した。青磁皿は192が北の石列の下から上を向いて、193はその下から伏せた状態で、194は北の石列の南に接して伏せた状態で出土した。196の瓦器碗は石列外の北にあった。199の土師器皿は石列内の北東隅にあり、油の炭化物が付着していることから灯明皿として用いられたと考えられる。200の鉄製短刀は、石列内のほぼ中央部から、切先を南、刃を東に向けた状態で出土した。被葬者の胸上に置かれたものと推定できる。木棺の痕跡は確認できなかったが、鉄釘が出土している。鉄釘201と202は同一個体の可能性がある。これらと鉄釘203との間は約40cmで成人を納めた木棺にしては幅が狭く、原位置とは限らない。204は西の石列外方約40cmから出土した。

図49-190(カラー写真図版3)は青磁碗。口縁端部は直口だが、内外面とも口縁部下でわずかに窪む。口縁端部には小さな打ち欠きがある。体部外面は無紋。内面の口縁部下には3条の沈線が巡らされる。体部内面は櫛刀により5分割されその間に飛雲紋が、見込み部には草花紋が描かれる。削り出し高台は断面四角で外側は面取りされている。高台内部の削りは浅く、そのため底部は肉厚である。高台の壘付けとその内側は露胎である。大宰府分類龍泉窯系青磁碗I-4a類で、12世紀中頃～後半の所産である。

191(カラー写真図版3)も龍泉窯系青磁碗。口縁端部には190よりも多くの小さな打ち欠きがある。体部内面は片彫りにより5分割されその間に飛雲紋が描かれている。内面見込み部は無紋である。大宰

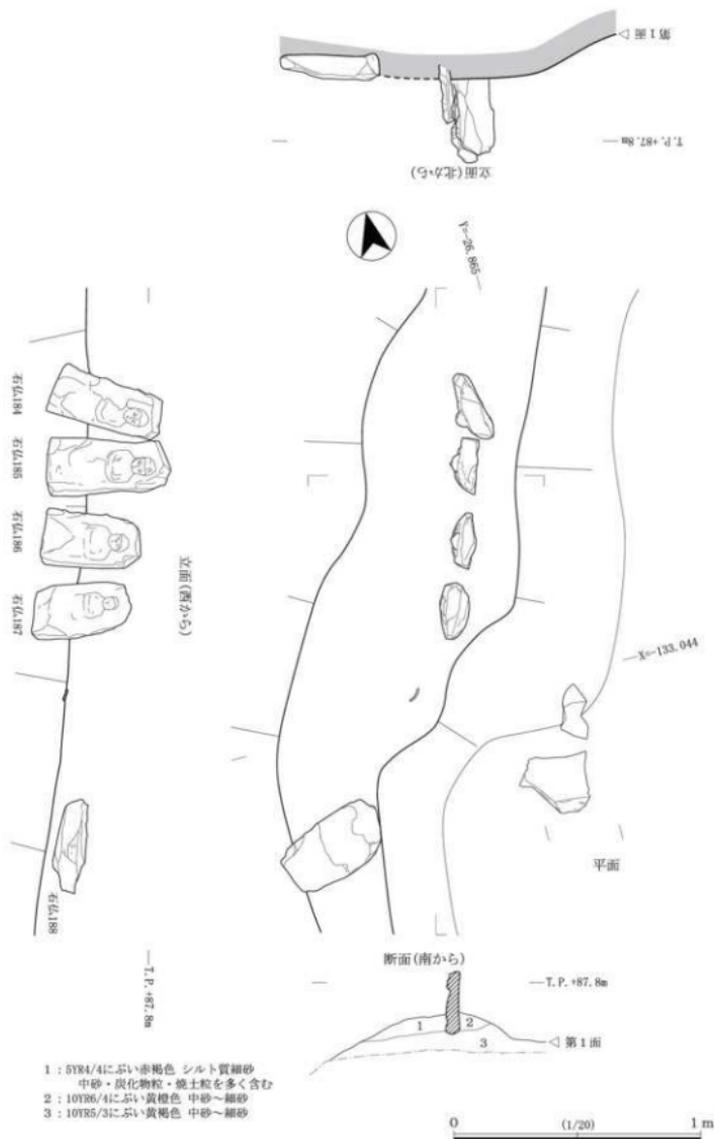


図45 08-2調査区 第1面26石仏列

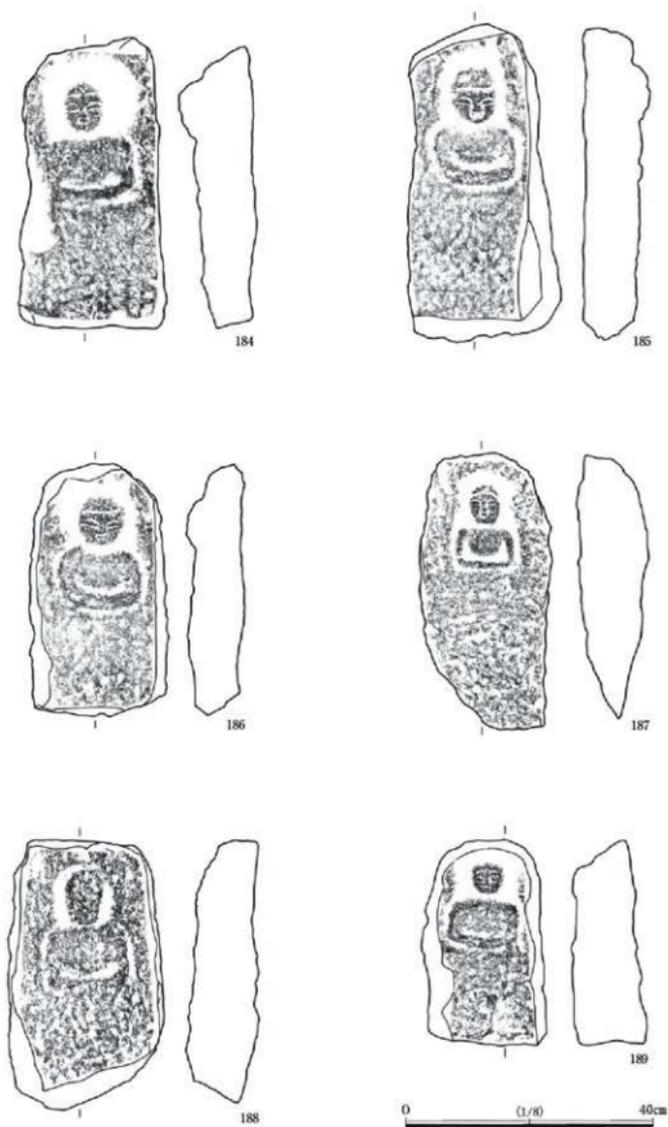


図46 08-2調査区 第1面26石仏列ほか出土石仏

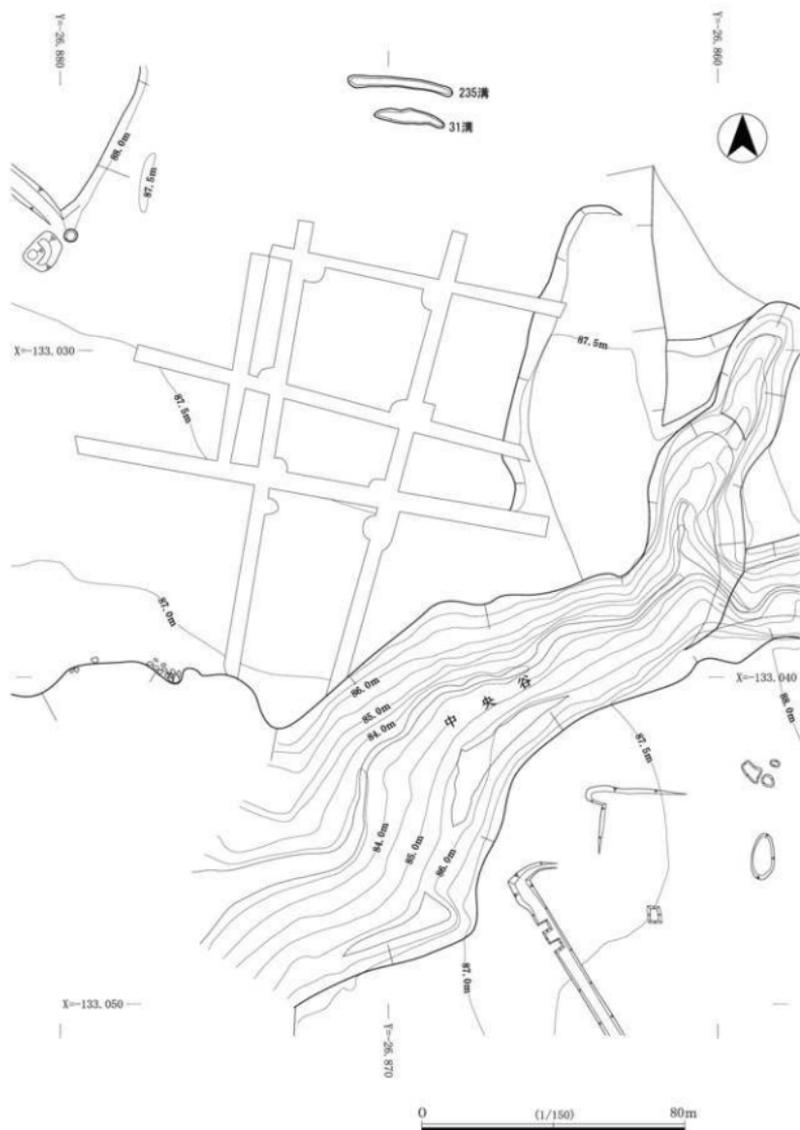


图47 06-2 调查区 第1面3 建物、26石列完掘状况

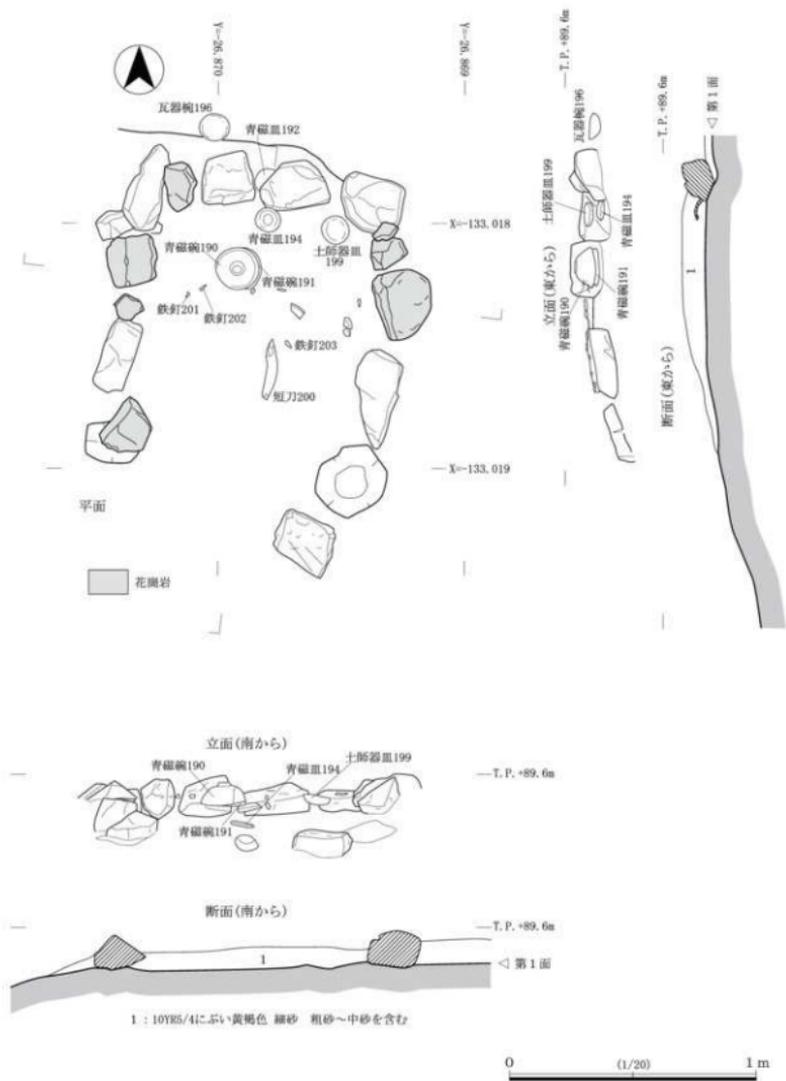


図48 08-2調査区 第1面2基

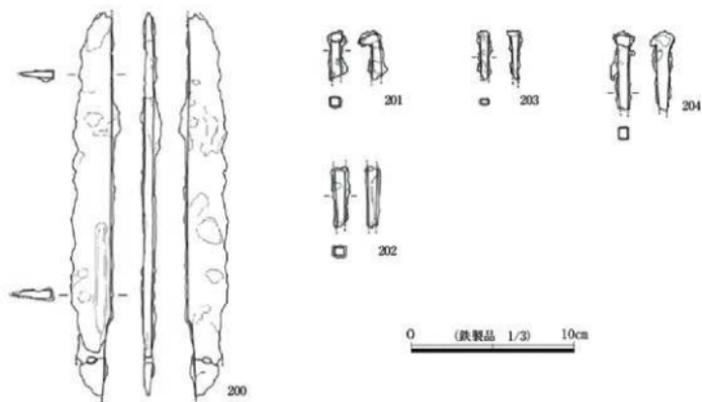
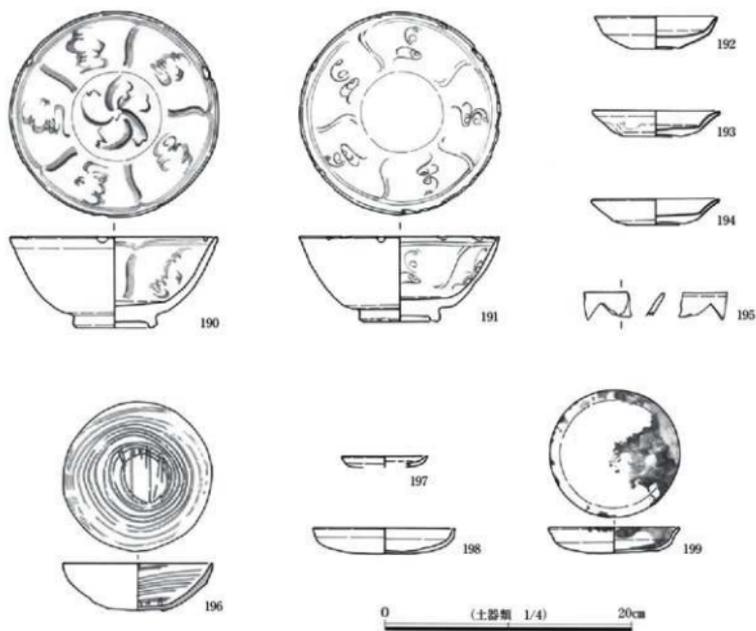


图49 08-2调查区 第1面2墓出土遗物

府分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類。

192(写真図版29)は龍泉窯系青磁皿。体部中位で屈曲し、口縁部は外上方にまっすぐ伸び薄くなる。無紋である。口縁端部の一部に打ち欠きがある。底部外面は焼成前に軸を掻き取っている。大宰府分類龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2a類で、12世紀中頃～後半の所産。

193(写真図版29)も龍泉窯系青磁皿。口縁部がわずかに外反する。無紋で、底部外面の軸は掻き取られている。大宰府分類龍泉窯系青磁皿Ⅰ-3a類か。

194(写真図版29)は同安窯系青磁皿。器形は193に似るが、胎土が疎である。体部中位で屈曲し、その内面は段状になっている。口縁部は外反する。無紋で、体部外面下半以下には施軸されていない。大宰府分類の同安窯系青磁皿Ⅰ-1a類で、12世紀中頃～後半の所産。

195は青磁碗の口縁部。2墓と第1層出土の破片が接合した。

196(写真図版29)は瓦器碗。内面に幅1mm程度の細い圈線ミガキが施されているが、口縁部近くにはハケメが残る。体部外面にヘラミガキはみられない。高台は断面三角形で低い。口径12.0cm、高さ3.9cm、器高指数33。楠葉型瓦器碗Ⅳ-1期で、13世紀中頃～後半に属する。

197～199は土師器皿。197は口径7.0cm、高さ0.9cmの小形品。198は口径11.6cm、高さ2.1cmの中形品。

199(写真図版30)は灯明皿として使用されており、口縁部内面から底部にかけて油の炭化物が付着している。

200(写真図版29)は鉄製短刀。現存長23.5cm、反りはなく、棟(鋒)は直線状で、指表に腰樋が1筋みられる。茎の目釘穴は1個確認できる。他に接合はしないが目釘穴が開いた茎の破片があり、茎はさらに長い。鞘や柄は伴っていない。

201～204(写真図版29)は鉄釘。断面四角形の和釘。201と202は墓の西部から近接して出土した。直接は接合しないが、出土状況と形状からみて同一個体の可能性もある。

青磁碗・皿は大宰府編年によると12世紀中頃～後半だが、196の瓦器碗とそれと同時期としても矛盾ない土師器皿の存在から、2墓の造営時期は13世紀中頃～後半であろう。

18 堅穴(図50 写真図版11)

調査区南東部に位置する。平面は不整形で、直径29～33m、第1面からの深さは5～23cmである。埋土は図50のように4層に分かれる。

堅穴内の北西部に珉岩の大石がある。その上面はほぼ平坦だが、下部は尖り気味で堅穴の底に食い込んでおり、その周辺は不整形にくぼんでいる。

堅穴の底は、南西部が比較的平坦であるが、北から南東にかけて、30ビット・23ビット・24ビット・25ビットが並び、そのほかにも大石の周辺や堅穴の南端をはじめとして溝やビット状のくぼみが数か所みられる。18堅穴からの出土遺物には、瓦器、土師器、青磁碗、鉄釘などがある。

図51-205・206は瓦器小碗。205で口径8.0cm、高さ3.0cm。206の口縁直下内面は沈線状にくぼむ。断面三角形の高台や渦巻状の暗文がまばらに施される状況から、13世紀後半前後の所産と考えられる。

207(写真図版30)は土師器皿。口径8.2cm、高さ1.3cmの小形品。13世紀後半頃の所産。

208(カラー写真図版7)は青磁碗。口縁部はごくわずかに外反する。内面は無紋。底部はないが外面に鎧蓮弁紋がみられることから、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類あるいはⅢ-2C類に該当し、13世紀頃の所産である。周辺各グリッドの第0層や第1層から出土した破片とも接合した。

209・210は鉄釘。頭部はわずかに屈曲している。胴部の断面はほぼ正方形である。

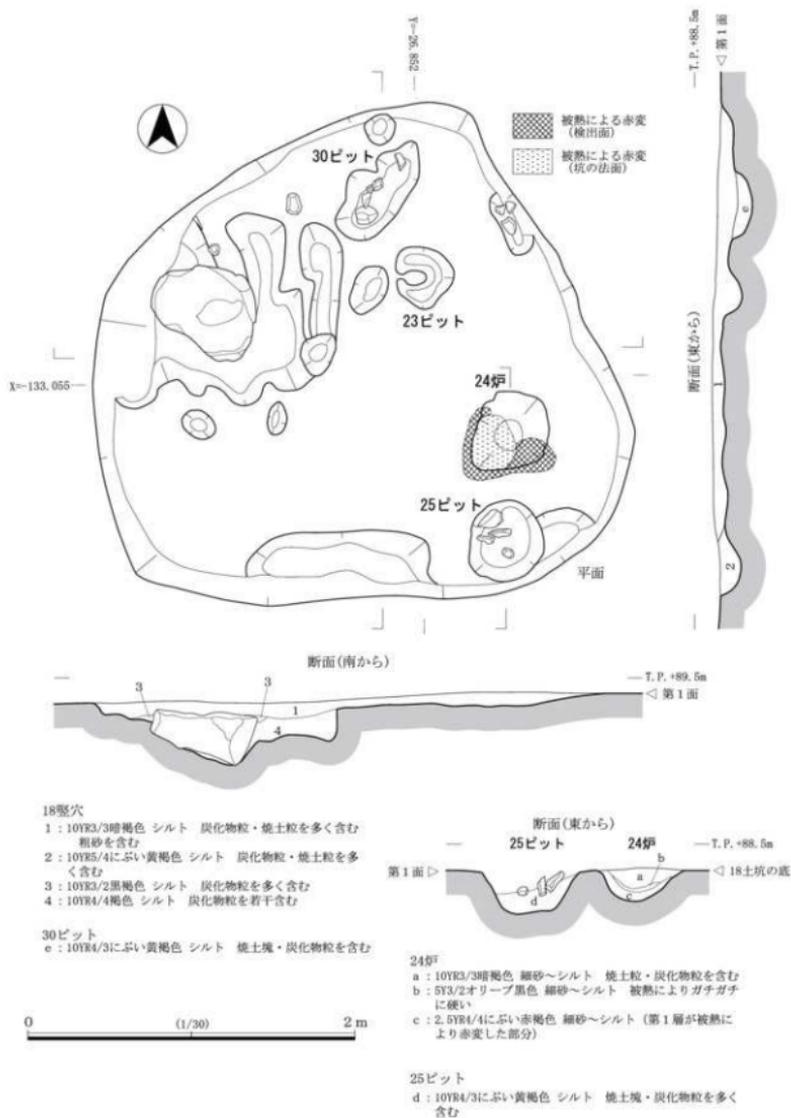


図50 08-2調査区 第1面18竪穴・24炉・23・25・30ピット

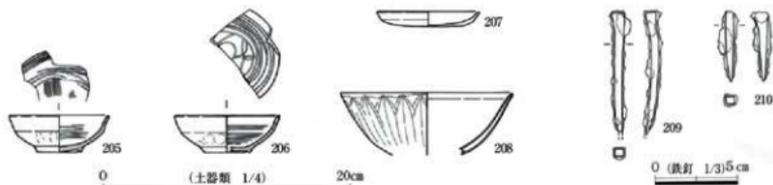


図51 08-2調査区 第1面18竪穴出土遺物

その他にも鉄釘、滓、輪の羽口(写真図版47)が出土した。

24炉(図50 写真図版11)

18竪穴の南東部床面で検出された。平面不整形形で、直径47～56cm、18竪穴床面からの深さは12cmである。埋土は、10YR3/3暗褐色細砂～シルトに焼土片や炭化粒を含む。ピットの底は5Y3/2オリーブ黒色細砂～シルトだが、被熱によりガチガチに硬くなっている。さらに、ピットの南西半は、周辺の第1層と同様に細砂～シルトだが、被熱により2.5YR4/4にぶい赤褐色を呈している。

埋土を全て洗浄した結果、瓦器碗と土師器の小片に加えて、鉄釘、滓、焼土塊、などが見つかった。被熱状況や出土遺物から、24炉は小鍛冶炉と考えられる。

25ピット(図50 写真図版11)

24炉のすぐ南に位置する。平面円形で、直径45～50cm、18竪穴床面からの深さは25cmである。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルト。鉄釘や滓(写真図版47)と拳大の閃緑玢岩が4個出土した。

位置と出土遺物から、24炉に関連する施設と推定される。

30ピット(図50)

18竪穴の北部床面で検出した。平面不整形円形で、北東-南西を主軸とし、長径71cm、短径36cm、18竪穴床面からの深さ11cmを測る。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルトで、焼土塊や炭化物粒を含む。

瓦器と土師器の小片が出土した。

以上の状況から、この18竪穴は炉(24炉)と作業台(大石)、その他作業ピットを備えた13世紀後半の鍛冶工房であったと考えられる。

31溝

3建物の北方で検出した。ほぼ東西を主軸とし、検出長2.2m、幅45cm、深さ約10cm。埋土は、10YR5/6黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。土師器、瓦器、鉄製品が出土した。

図53-211～213は土師器皿。211(写真図版31)は口径7.0cm、高さ1.1cmの小形品、212は口径11.2cm、高さ1.9cm、213は口径11.8cm、高さ1.8cmの中形品である。

214は鉄製の釘。本遺跡出土例としては比較的大きく、現状で長さは11.7cmある。頭部はL字状に曲げられ、上から叩かれ、犬の頭部のように変形している。

瓦器碗は細片で図示していないが、桶葉型が含まれている。

以上、31溝は13世紀頃の所産である。

235溝(図52 写真図版11)

調査終盤に調査区北部の法面を整形したところ、31溝のさらに北側で検出した。出土遺物からみて、第1面に属するものと考えられる。

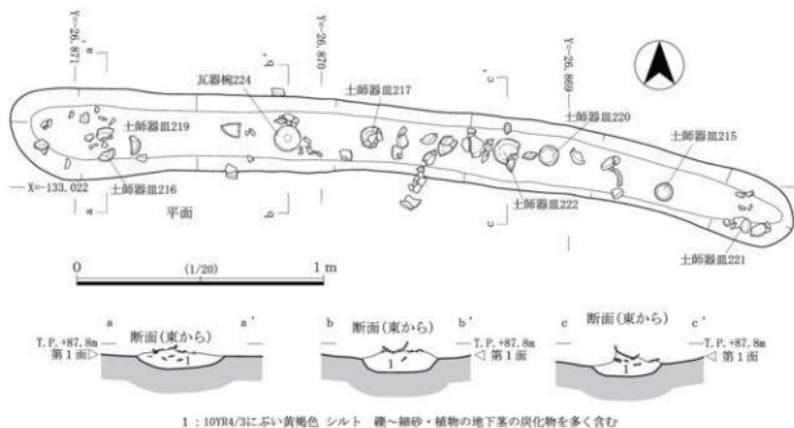


図52 08-2調査区 第1面235溝

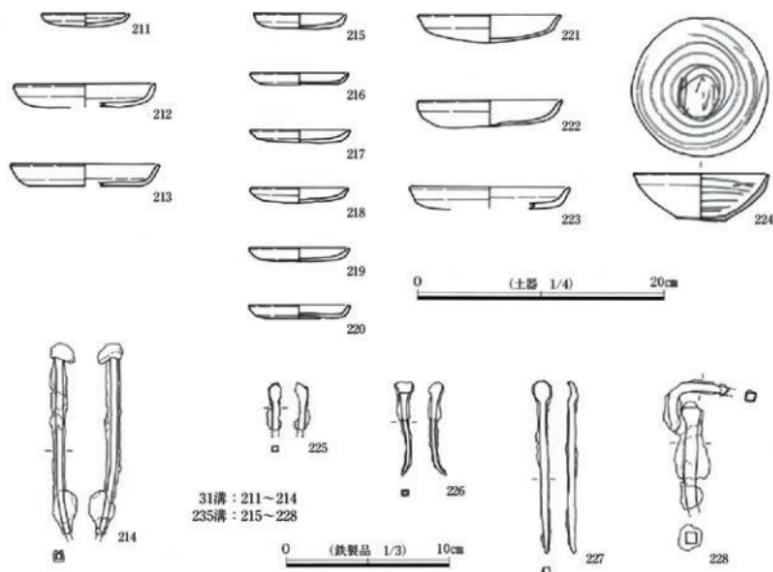


図53 08-2調査区 第1面31・235溝出土遺物

31溝と同様にほぼ東西を主軸とし、検出長3.2m、幅25～38cm、深さ約10cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルトに礫～細砂を含み、植物の地下茎の炭化物が多く混じる。

図53-215～223(写真図版31)の9点は土師器皿。直径約8cmの小振りなもの(215～220)と約12cmのもの(221～223)とがある。いずれも橙褐色系を呈する。

224(写真図版31)は楠葉型瓦器碗。体部外面のヘラミガキはみられず、内面に幅1mm程度の細い圈線ミガキが施されている。高台は断面三角形で低い。口径は11.0cm、高さは4.0cm、器高指数36。楠葉型IV-1期で、13世紀後半に属する。215～223の土師器皿も同時期として矛盾はない。

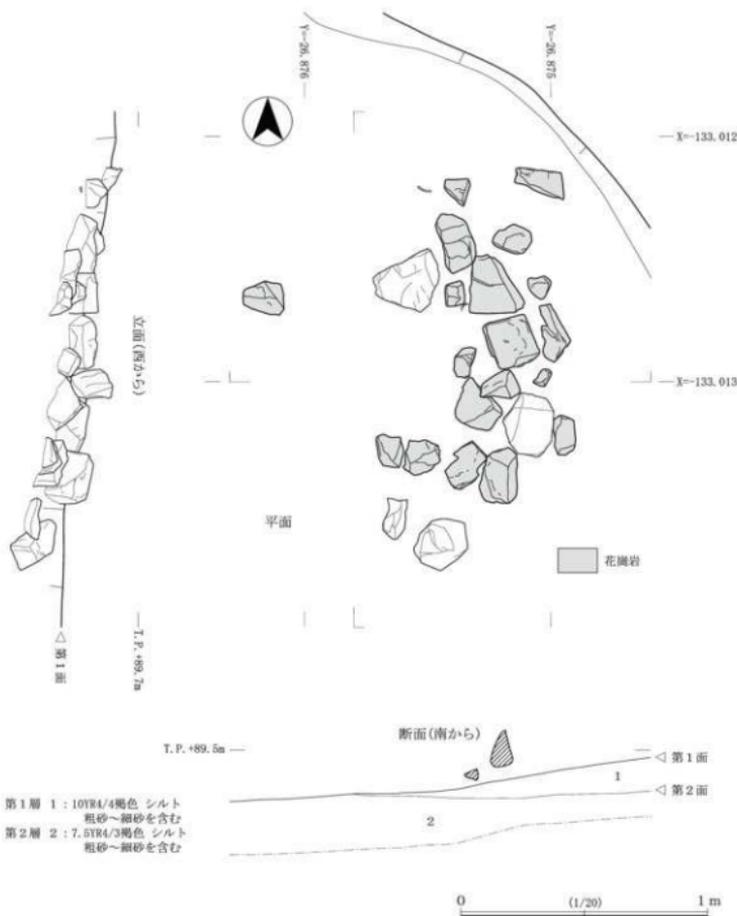


図54 08-2調査区 第1面1石群

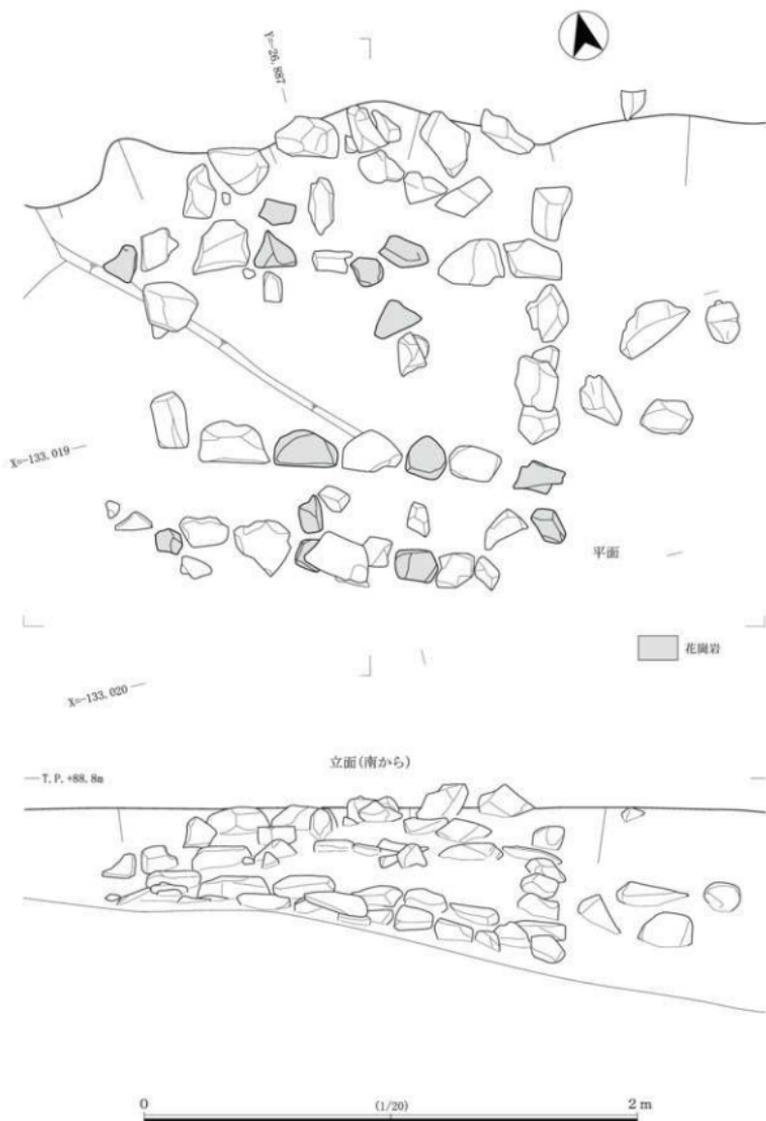


図55 08-2調査区 第1面4石組(1)

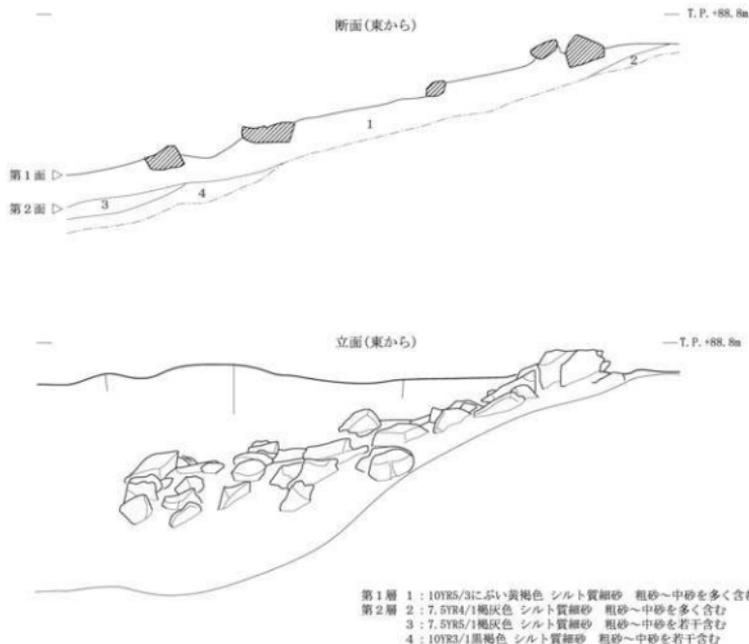


図56 08-2調査区 第1面4石組(2)

225～227は鉄釘。いずれも断面はほぼ正方形を呈する。227の頭部は匙状になっている。

228は特異な形状で鏝などの可能性も想定したが、レントゲン撮影の結果2つの鉄製品が錆で一体化したものと判明した。寸法や形状からみて、鏝と釘と考えられる。

1石群(図54 写真図版9)

調査区北部、南西にゆるやかに傾斜する斜面で検出した。機械により上層の砂層を掘削中に、数個の石が南北に並ぶように見つかった。そこで、人力調査に切替え慎重に砂層を除去したところ、長径20～30cm程度から拳大の石が20数個現れた。

石群は、南北1.6m、東西0.8mの範囲に集中するが、配列に明確な規則性は認めにくい。石は、約40cm離れた西側にもう1個存在する。墓のようにも見えるが、石群の下には構造物はない。火を使った形跡もない。石は花崗岩が多く、その他の4個は珩岩と思われる。

周辺から、13世紀頃の土師器と瓦器、青磁碗片などが出土した。

4石組(図55・56 写真図版10)

調査区北西部に位置する。南に傾斜する斜面の南北1.9m、東西1.7mの範囲に石を並べている。基本的に平面長方形を指向しているようだが、北辺は傾斜変換線に沿って、半円形に外側にふくらんでいる。石の並びが直線的なのは、中央部の東西1.7m、南北0.9mの長方形をなす部分で、特にその南列(全体では南から2列目)の南辺は石の面がほぼ直線に揃っている。この形状から、石段、何らかの基礎、墓

や埋納施設の地上標識などの可能性を考えた。しかし、石段とした場合、下にあたる南面が揃っている面が南から2列目(下から2段目)しかなく、また2列目と3列目との間隔が他と比べて広いという点
が、否定的要素となる。また、下層を確認したところ何ら構造物はなかったため、基礎や地上標識とい
う予測も肯定できなかった。

図58-231は平瓦。4石組の南辺石列中央部の石の下に挟まっていた。凹面布目、凸面縄タタキで、
古代の所産。

232(写真図版30)は4石組付近から出土した五輪塔の空風輪。全体の形状は優美だが、空輪と風輪
との間の彫り込みが浅い。凝灰岩製。15世紀代に属するか。

図示した2点の遺物は古代と中世後半のものであるが、検出面や上下層の出土遺物からみると、4石
組は1石群や235溝などと同時期の13世紀頃の遺構である可能性が高い。

17石群(図57)

3建物の南西約8mの地点で検出した。北西の3建物に向かって緩やかに上る斜面に、上面の平らな
南北76cm東西33cmの石があり、その北東に接して人頭大の石がもう1つある。掘方は認められないので
偶然の産物かもしれないが、階段石として置かれたように見える。石材は2個とも肉眼観察では珩岩と
思われる。

この石群に直接関わる遺物はない。周辺の出土遺物からは13世紀頃に地表面に露出していたと考えら
れるが、位置と形状からは16世紀後半の3建物に関連する階段である可能性も否定できない。

236石群(図57)

調査区北西部、4石組の約2m西側、地山面に近い南東に傾斜する斜面で検出した。3個の石からな
り、西側の2個が北北東-南南西を長軸として並び、その東側中央の少し下がった所にもうひとつの石
が存在し、階段状になっている。石材は、北が砂岩、南と東は珩岩であり、この遺跡に多い花崗岩は含
まれていない。周辺からの出土遺物はない。

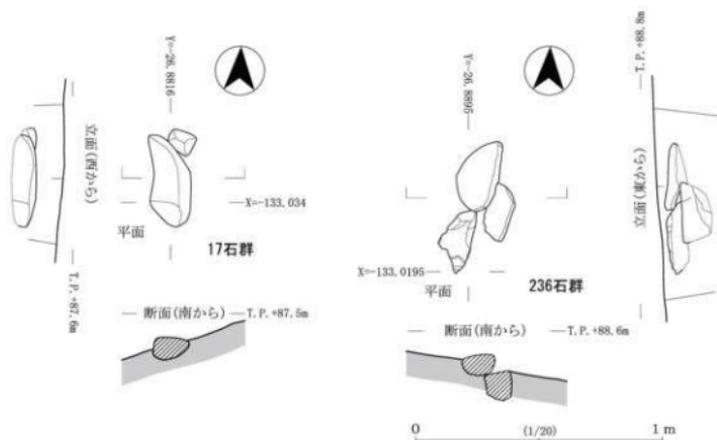


図57 08-2調査区 第1面17・236石群

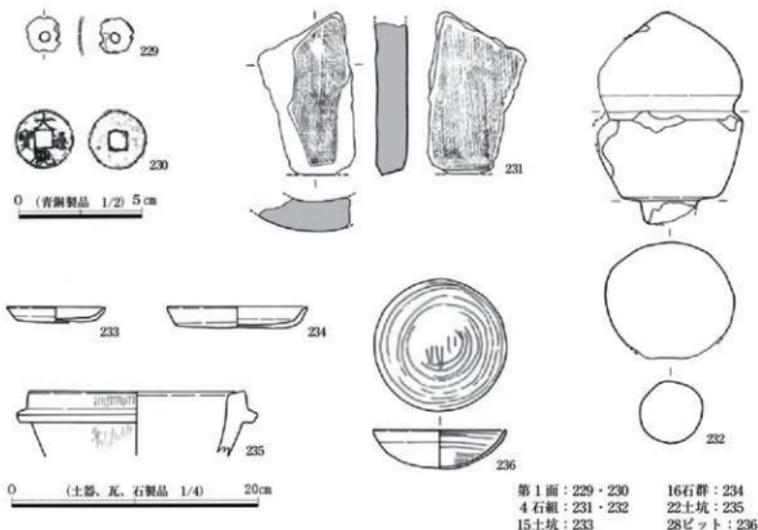


図58 08-2調査区 第1面石組、土坑、ピットほか出土遺物

土坑やピットについては、埋土が複数の層に分かれるものや遺物実測図を掲載したものを以下に記述し、その他は表1にまとめた。

8土坑(図59)

調査区北西部、3建物の西約8mに位置する。平面楕円形で、北西-南東を主軸とし、長径112cm、短径79cm、深さ14cm。埋土は10YR4/4褐色シルトに粗砂～細砂を含む。出土遺物は、中世の土師器片と須恵器の小片。他に拳大の花崗岩が2個、人頭大の花崗岩が1個、人頭大の岩が2個出土した。

22土坑

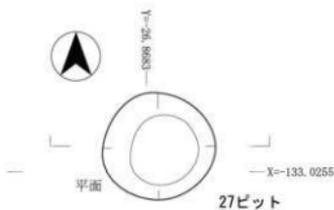
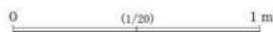
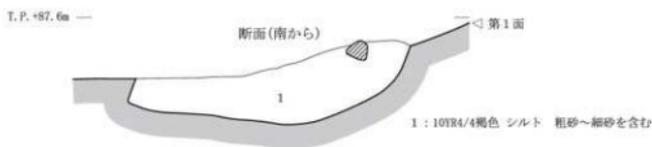
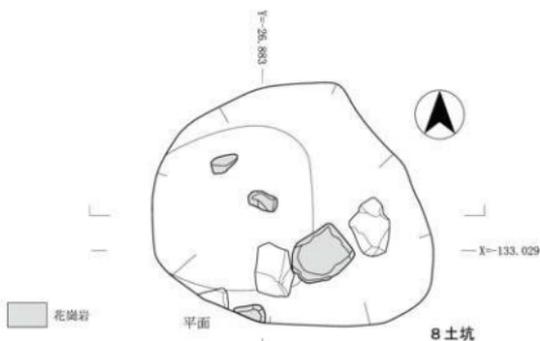
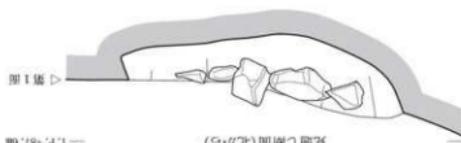
調査区南東側、18堅穴の北東約2mに位置する。平面楕円形で、北北東-南南西を主軸とし、長径302cm、短径146cmと平面規模は大きい。検出面からの深さは8cmと浅い。なお、土坑周辺の土は特には被熱していない。炭層のような黒い埋土を持ち帰り洗浄した結果、土師器、瓦器、瓦質土器、石鍋の他に、鉄釘と塊状や粒状の鉄滓(写真図版48)などが見つかった。

検出時には若干高まっていた中央部で小面積の黒い層が頭をのぞかせ、その周辺を精査していくにつれて黒い層の範囲が広がっていった。このような検出状況に加え、遺物組成や位置からすると、工房である18堅穴から出た廃棄物の捨て場所とも考えられる。

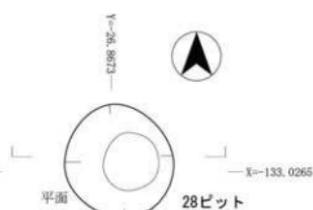
図58-235(写真図版30)は滑石製石鍋。口縁部の12分の1周の破片資料で現存部には隻取手穴はみられない。口縁部はわずかに外反し、その下に削り出された跗は垂れ下がり気味である。木戸分類Ⅲ類-b。12世紀後半に属する。

27ピット(図59)

3建物の北約2.4mに位置する。平面円形で、直径41～44cm、深さ10cm。埋土は図59のように2層に分かれる。出土遺物は、瓦器と土師器の小片のみ。



- 1: 10YR5/4にぶい黄褐色 細砂～シルト 粗砂を多く含む
炭化物粒をわずかに含む
2: N1.5/ 黒色 炭化物 わずかに1層が混じる



- 1: 5YR4/4にぶい赤褐色 細砂～シルト 粗砂を多く含む
2: 5YR3/6鮮赤褐色 細砂～シルト 被熱により赤変
3: 7.5YR4/3褐色 細砂～シルト

図59 08-2調査区 第1面8土坑、27・28ピット

表1 08-2調査区 第1面土坑・ピット一覧

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土	出土遺物
				長径	短径	深さ		
6ピット	9K-8c	円		48	36	6	7.5YR5/6明褐色シルト 粗砂を多く含む 炭化物粒多く混じる	土師器 瓦器
8土坑	9K-9c	楕円	北西	112	79	14	図8参照	土師器 須恵器
12土坑	9K-9c-9d	不整円	北東	311	198	5	5YR4/4にぶい赤褐色シルト 粗砂～細砂を多く含む 炭化物粒多く混じる 焼けているか?	土師器 須恵器 鉄釘
15土坑	9K-8d	楕円	北北西	142	44	4	10YR6/2灰黄褐色 細砂～シルト 粗砂を多く含む 炭化物粒多く混じる	土師器 瓦器
19ピット	9K-6f	楕円	北北東	57	42	6	10YR4/1褐灰色シルト 粗砂を多く含む 炭化物粒混じる	土師器 瓦器 鉄小塊
20ピット	9K-5f	楕円	北	67	26	7	2.5Y5/3黄褐色シルト 粗砂～細砂を多く含む 炭化物粒混じる	土師器
21ピット	9K-5f	円		70	61	6	2.5Y5/3黄褐色シルト 粗砂～細砂を多く含む 炭化物粒混じる	鉄小塊 土師器
22土坑	9K-5f	楕円	北北東	302	146	8	炭	土師器 瓦器 瓦質土器 鉄滓 鉄釘 炭 石鏝
23ピット	9K-6f	C字		38	36	11	10YR3/3暗褐色シルト 粗砂を含む 焼土塊・炭化物粒多く混じる	瓦器 土師器
24炉	9K-6f	不整円	北東	56	47	12	図50参照	瓦器 土師器 鉄釘 焼土塊 滓
25ピット	9K-6f	円		50	45	25	図50参照	瓦器 鉄釘 滓
27ピット	9K-7c	円		44	41	10	図59参照	瓦器 土師器
28ピット	9K-7c	円		43	40	15	図59参照	瓦器 土師器 鉄釘
29土坑	9K-7c	楕円	北	112	95	56	2.5Y6/2灰黄色シルト 粗砂～細砂を含む	瓦 鉄釘
30ピット	9K-6f	不整	北東	71	36	11	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 焼土塊・炭化物粒混じる	瓦器 土師器

28ピット(図59)

27ピット南東約1mに位置する。平面円形で、直径40～43cm、深さ15cm。埋土は図59のように3層に分かれる。出土遺物は、瓦器、土師器、鉄釘である。

図58-236(写真図版30)は瓦器機。内面の圏線ミガキは疎になり、高台も消失している。口径10.6cm、高さ3.2cm、器高指数30。楠葉型IV-2期で、13世紀末～14世紀初頭に属する。

以上の他に、第1面およびその遺構から次の遺物が出土した。土坑とピットのデータは表2を参照されたい。

図58-229(カラー写真図版5)は、第1面の9K-9cグリッドから出土した。箱(容器)の蓋を括るための紐の座金具であろう。四葉で中央部に穴が開いている。わずかにふくらんだ表面には金鍍金が施されている。

第1面の3建物東側から、写真図版7のように図58-230(写真図版46)の大観通宝が出土した。2.6g。北宋1107年初鑄。

15土坑から233(写真図版30)の土師器皿が出土した。口径8.0cm、高さ1.3cmの小形品。

16石群から234(写真図版30)の土師器皿が出土。口径11.4cm、高さ1.8cmの中形品。これらの土師器皿は13世紀後半頃の所産であろう。

第4節 第2面の遺構と遺物

第2面(図60 写真図版12)は、調査区北西部では褐色系の粗砂が主体で南東部では褐色ないし黄褐色の粗砂～シルトが主体となる第1層を除去して検出した面である。除去されたのは、具体的にはA断面(図22)の⑬、B断面(図23)の⑪・⑫、C断面(図24)の⑦、D断面(図25)の⑬、E断面(図26)の⑨の各層である。

第2面も第1面と同様に北東から南西に傾斜しており、面の高さはT.P.+86.5m～93mだが第1面の同一地点よりも10～45cm程度低い。遺構として、石群、石囲い、焼土坑、墓、土坑・ピット、落ち込みなど、計96か所[番号32～125・132・133]を調査した。

なお、08-2調査区の第2面では、堆積状況に鑑み中央部から北西部にかけての範囲を2面に細分して調査し、その範囲を含め全域を調査した面を「第2面」とした。

「第2-2面」として記録した部分は次節で述べる。また、第2面と第2-2面との間を「第2層(上層)」とした。

以下、第2面の32・89石群、84石囲い、93焼土坑、3基の墓、土坑・ピット、落ち込みの順に報告する。

32石群(図61 写真図版13)

調査区西部の谷側、南法面際に位置する。ほぼ水平な面に、西北西-東南東を主軸方位とし、長径約3.4m、短径約1.5mの範囲に石が分布している。ただし、南側が崖状になっているので、本来はさらに南側に広がっていた可能性はある。石は北辺と西辺は面が揃っているが、東側は一面に石が密集している。石は長径20cm程度のものが多い。石材は大半が花崗岩で、玢岩らしき石が数個混じる。

この石群の上層は第1層で覆われており、構造物などはなかった。また、サブトレンチを掘削して下層を確認したが、やはり埋葬施設や構造物はなかった。したがって、性格としては石敷であろう。

石群の間から、土師器、瓦器碗、瓦などの小片が出土しており、鎌倉時代以前の所産と考えられる。

89石群(図62 写真図版14)

調査区中部の谷側に位置する。ほぼ水平な面に、32石群とはほぼ90°方位を違えて北北東-南南西を主軸方位とし、長径約2.9m、短径1.1～1.8mの範囲に石が分布している。北、東、南の各辺の外周は整然とした面を形成しており、明らかな企画性が認められる。それに反して西面は乱雑で、石群の幅は中部以北で狭く、南部では広がっている。また、東辺の中央部に接して、半円形の張り出しが設けられている。89石群に使用された石は32石群よりも大きい傾向にあり、特に北、東、南の各辺の外周には大きい石が多く、東辺南端の石は長径60cmに及ぶ。石材は花崗岩と玢岩が半々で、玢岩は石群の南北と東に半円形に張り出した部分に多くみられる。

この石群も上層は第1層で覆われており、構造物などはなかった。また、石を除去しながら下層を確認したが、平面的にも断面観察でも埋葬施設や構造物は見つからなかった。したがって、32石群と同様に石敷であろう。

89石群からは遺物は出土していないが、上下層の出土遺物や32石群との類似性から、鎌倉時代以前の所産として矛盾はない。

84石囲い(図63 写真図版15)

調査区中央部、89石群の北約10mに位置する。平面ほぼ正方形で、89石群と同様に北北東-南南西を



図60 08-2調査区 第2面



図61 08-2調査区 第2面32石群

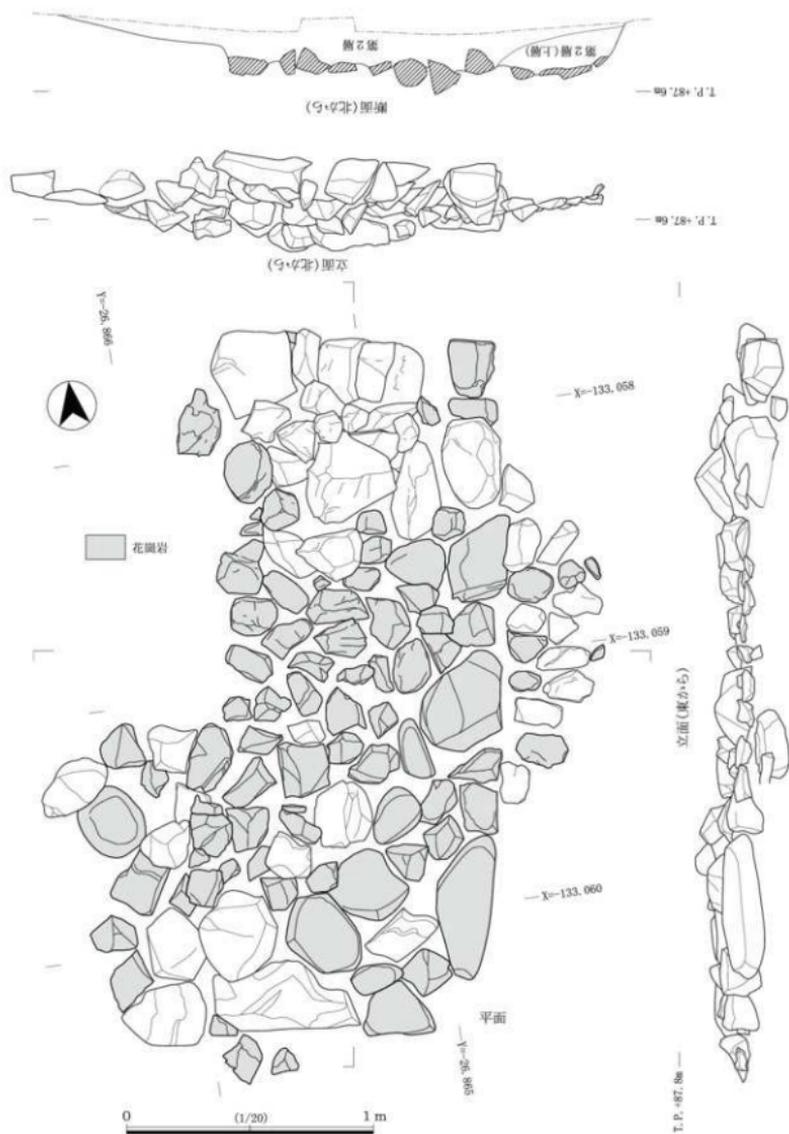


図62 08-2調査区 第2面89石群

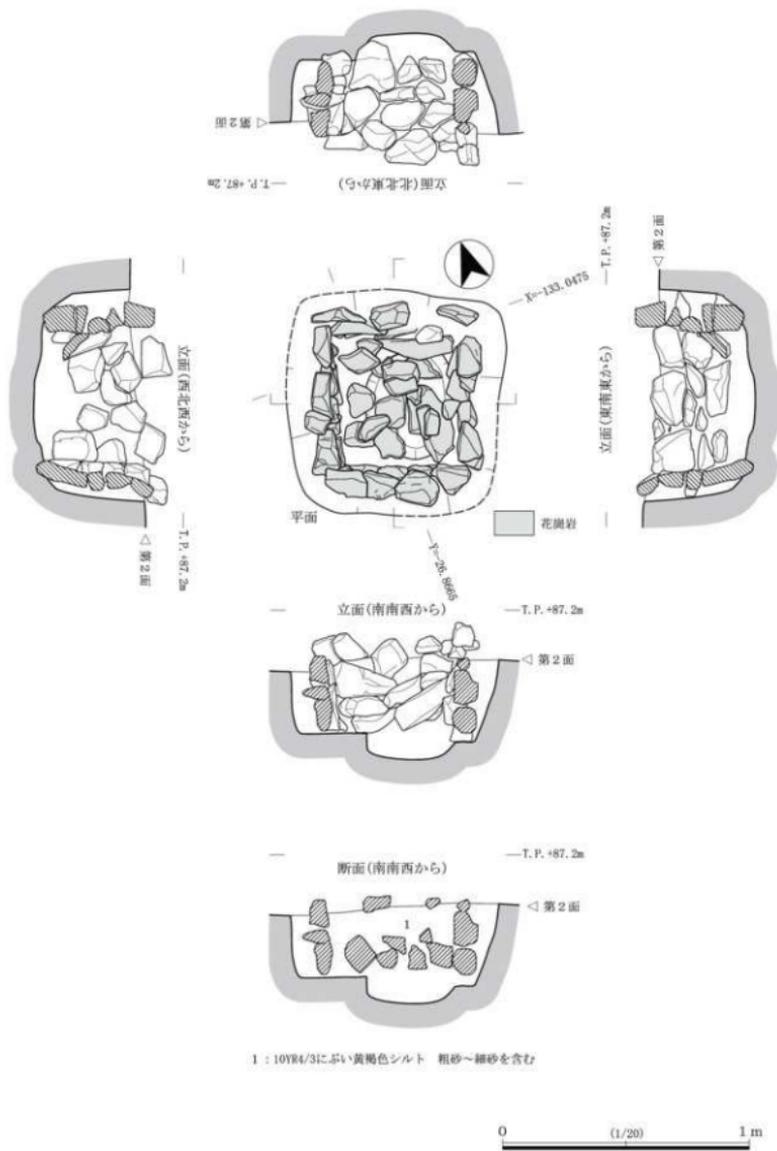


図63 08-2調査区 第2面84石囲い

主軸方位とし、石列の外周は長径82cm、短径69cm、石の頂部から底までの深さは55cmである。拳大～人頭大の石が井戸状に4程度積み上げられている。石材は北辺上部の1つ以外は全て花崗岩である。底部中央わずかに東寄りに南北45cm、東西38cm、底面からの深さ10cmのピット状のくぼみがある。井戸の水溜のようではあるが、現在は湧水はない。

微細な遺物も検出するために、レベル20cmごとに上層(検出面～T.P.+87.0m)、中層(T.P.+87.0～86.8m)、下層(T.P.+86.8～86.59mの底)に分けて全ての埋土を洗浄した。上層から瓦器皿と塊状の鉄滓が検出されたが、それ以外は指頭～米粒大の土器細片ばかりであった。あえて点数を示せば、上層からは上記に加えて瓦器6片と土師器38片、中層から瓦器2片と土師器17片、下層から瓦器1片と土師器6片である。これらの遺物から、84石囲いは13世紀に位置づけられる。石囲いの内部からは、土器類の他に石も出土した。人頭大が12個、拳大が7個、計19個全て花崗岩であった。

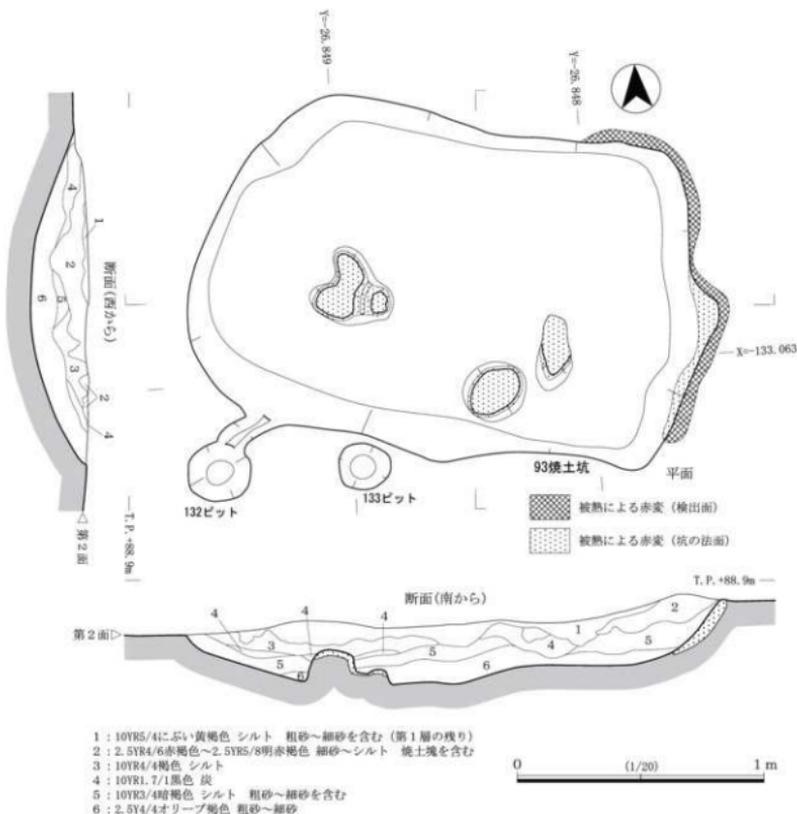


図64 08-2調査区 第2面93焼土坑

構造的には井戸に類似するが、湧水の望める位置ではないので、何らかの貯蔵施設であろうか。

93焼土坑(図64 写真図版16)

調査区南東部に位置する。主軸方位は西北西-東南東で、平面形は、長い辺である北辺と南辺が直線的で、東辺の一部が東に突出しており、西辺が半円形にふくらんでいる。長径2.1m、短径1.4m、深さは25cmである。底面の盛り上がった部分と東辺が被熱により赤変している。

埋土は図64のように6層に分かれる。微細な遺物の出土が予想されたので、埋土を各層ごとに北西・北東・南西・南東の4区画に分けて持ち帰り水洗した。その結果、被熱している2層(2.5YR4/6赤褐色～2.5YR5/8明赤褐色細砂～シルト層)の各区画からは焼土塊と炭片がまんべんなく出土した。焼土塊は拳大～指頭大で、内部にササの痕跡が認められる。他には南西部から土師器が1片出土したのみであった。炭層である4層(10YR1.7/1黒色炭層)からも焼土塊と炭片が出土した。4層の焼土塊は2層のそれとは異なり、灰黄褐色系で指頭大～米粒大の小さなものが多い。炭も細片が多く、特に南東部では焼土塊・炭ともに小さい傾向がある。また、4層は北西部では層が薄くなり、埋土の採取はできなかった。他には北東部から中世と思しき土師器の小片が4片出土した。

このような被熱した遺構の性格としては、製炭窯、炉、火化施設、土器焼成土坑などが考えられる。後述する第2-2面の135製炭窯が壁面の全周が被熱していることを参考にこの遺構をみると元々は全周が被熱していたものの上層がかなり削平された可能性もある。93焼土坑の特徴は、壁面が被熱により赤変しており、また、炭層(4層)が広がっていることである。一方、土器はきわめて少なく、金属滓や骨などは検出できなかった。

以上の状況から、この遺構は火化施設あるいは製炭窯と考えられる。前者の場合、2層や4層は焼成時に被熱した結果と考えられる。後者の場合、2層は落下した天井部、窯の焚口は西となる。なお、同様な遺構について、『久安寺モッテン墓地跡』(奈良県文化財調査報告書第70集 1995年)では中世の「火葬施設」(S X111・S X112・S X125)、『小畑遺跡』(財団法人大阪府文化財センター調査報告書第36集 1998年)では鎌倉から室町時代の「石組墓」(15号墓・84号墓・102号墓ほか)、『津田遺跡』(財団法人大阪府文化財センター調査報告書第175集 2008年)では古代以前の「製炭窯」(44焼土坑・723焼土坑)と考えられている。

62墓(図65 写真図版17)

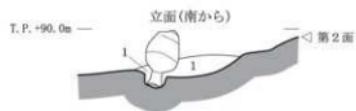
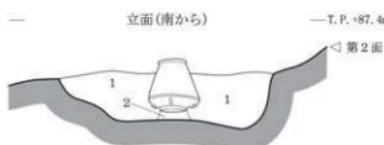
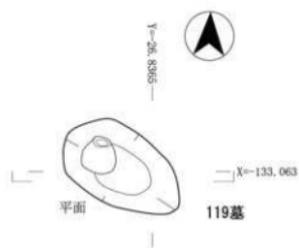
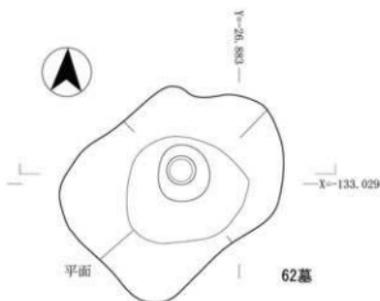
調査区北西部に位置する。平面不整形形で、直径66～93cm、深さ23cm。その中央に灰軸陶器四耳壺が逆位に置かれていた。掘方内には、見た目にも黒い10YR2/3黒褐色シルトに粗砂～細砂の混じった土が充満し、壺の下部には内部からこぼれた灰がみられた。

図66-237(カラー写真図版4)は灰軸陶器四耳壺。口縁部が打ち欠かれている。肩部全周と体部の一部分には軸がかり黄緑色に発色している。体部の一部に付着したものは自然軸と推定されるが、肩部の軸は人工的に施された可能性が高い。尾張地域の9世紀中頃～後半の所産であろう。

四耳壺を取り巻く10YR2/3黒褐色シルトに粗砂～細砂が混じった土(図65の1層)からは、埋土水洗によって、土師器や須恵器の小片、鉄釘、焼土塊、指頭大以下の炭化物が手のひらに乗る程度の分量出土した。

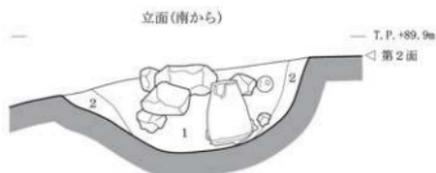
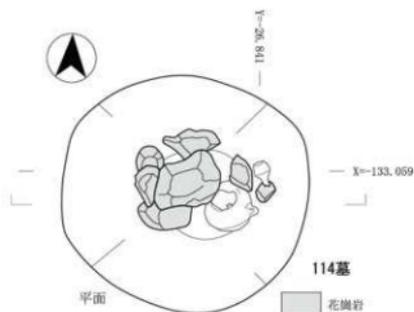
238・239は鉄釘。断面四角形のいわゆる和釘である。238の頭部は叩かれ、犬の頭のように変形している。

土器内部に焼けた藁のような柔らかな植物遺体が入っており、器が逆位に置かれていたために、内面



- 1 : 10YR2/3黒褐色 シルト 粗砂～細砂を含む
 2 : 10YR1.7/1黒色 灰 (蔵骨器の内容物)

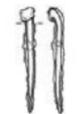
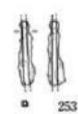
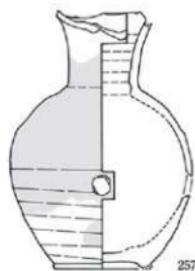
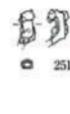
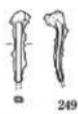
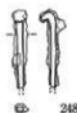
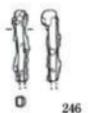
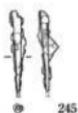
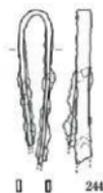
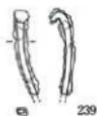
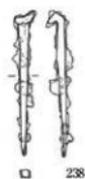
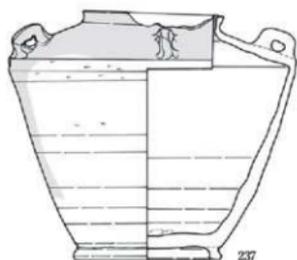
- 1 : 10YR4/4褐色 シルト 粗砂～細砂を含む



0 (1/20) 1m

- 1 : 10YR3/4暗褐色 シルト 粗砂～細砂を含む
 2 : 10YR2/2黒褐色 シルト 炭化物粒を多く含む

図65 08-2調査区 第2面62・114・119基



62墓：237~239
114墓：240~256
119墓：257

0 (鉄製品 1/3) 10cm

0 (土器 1/4) 20cm

图66 08-2調査区 第2面62・114・119墓出土遺物

の上部が黒く変色している。その内容物を精査したところ、炭化物と小石と土師器皿の小片が出土したが、骨は見つからなかった。

逆位に据えられた土器の口縁部の下(図65の2層)からは、土師器と須恵器の小片、指頭大以下の炭片が拳ひとつ位の分量、米粒大以下の微細な焼骨片が少量検出された。

以上、62墓は火葬骨を納めた、平安時代前期、9世紀中頃～後半の墓と考えられる。

114墓(図65 写真図版17)

調査区南東部、北東から南西に傾斜する斜面に位置する。平面円形で、直径96～101cm、深さ41cm。墓坑の中央やや南東寄りに須恵器双耳壺(瓶)が逆位に置かれていた。上面中央には人頭大の花崗岩があり、その周囲にも拳大程度の石がみられた。掘方内には、見た目にも黒い10YR2/3黒褐色シルトに粗砂～細砂の混じった土が充満し、壺の下部には壺の内部からこぼれ出た灰がみられた。

埋土は図65のように2層に分かれる。そのうち1層(粗砂～細砂混じり10YR3/4暗褐色シルト層)の北半を土嚢袋3袋持ち帰り、遺物検出のために水洗した。その結果、土師器の細片と炭片が出土した。

図66-240(カラー写真図版4)は戒骨器として用いられた須恵器双耳壺(瓶)。口縁部は打ち欠かれている。肩部に突帯が巡る。耳が2か所に付くが、その付け方は丁寧とはいえない。播磨地方に類例がある。9世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。内部から炭片が出土した。

241(カラー写真図版4)は墓坑内東部から出土した灰釉陶器小瓶。口縁部を欠く。頸部内面と外面の一部に自然釉がかり黄緑色に発色している。9世紀後半～10世紀初頭の所産。242・243は土師器「て」の字皿。10世紀前半に位置づけられる。

244(カラー写真図版4)は鉄製毛抜き。幅7mm、厚さ2mm程度の断面長方形の扁平な鉄棒を折り曲げて成形している。245～256は鉄釘。太さにばらつきはあるが、いずれも断面四角形の和釘である。加撃により頭部が変形しているものが多く、247は頭部からやや下がった頭部で屈曲している。

以上の状況から、114墓は平安時代、10世紀前半の墓と考えられる。

119墓(図65 写真17)

調査区南東部、114墓よりもさらに南東約5.5m、やはり北東から南西に傾斜する斜面に位置する。平面楕円形で、長軸方向は北西～南東、長径54cm、短径31cm。検出面からの深さは7cmしかないが、土器が10数cm露出してしまったので、本来は20cm以上の深さがあったと考えられる。墓坑の北西寄りの底が数cm掘りくぼめられ、その小穴に口縁を打ち欠いた灰釉陶器長頸壺(瓶)が逆位に据えられていた。

図66-257は灰釉陶器長頸壺(瓶)。口縁部は打ち欠かれており、埋土にその部分は存在しない。なで肩で体部はやや縦長の球状を呈する。外面の頸部下半から体部中位以上にかけてハケにより釉が塗られ、頸部上半と底部は無施釉である。体部中位に直径10数ミリの外側からの焼成後穿孔がある。東濃(美濃東部)地域の9世紀後半～10世紀初頭の所産と考えられる。

この長頸壺(瓶)内には、焼骨(写真図版48)が納められていた。骨の表面は白色ないし灰白色で、内部は黒い。安部みき子氏より「火葬で骨の変形が強く、復原できたものは下顎骨の切歯部のみ。ほかに同定できた箇所は頭骨の縫合部で、下顎の大きさと縫合の様子から、成人と推測される」とのコメントを頂いた。

その他、出土遺物はない。

以上、119墓は平安時代、9世紀後半～10世紀初頭の火葬骨を納めた墓である。

土坑やピットについては、特徴的なものや遺物が出土したものを以下に記述し、その他は表2にまとめた。

50土坑(図67)

調査区北西部に位置する。平面は南北に長い卵形で、南北144cm、東西117cm、検出面からの深さは規模の割りに浅く8cmしかない。埋土は、7.5YR5/6明褐色シルトに細砂が混じる。3個の花崗岩が土坑南半にみられた他に、奈良時代と考えられる土師器甕片が出土した。

76土坑(図67)

中央谷の北西側に位置する。平面は北北東-南南西に主軸を持つ楕円形で、長径100cm、短径79cm、検出面からの深さは14cmを測る。埋土は、10YR4/4粗砂～細砂が混じり褐色シルト。土坑中央部から珎岩、南部から花崗岩、埋土から瓦器片が出土した。鎌倉時代の土坑であろう。

90土坑(図67)

調査区南東部に位置する。南東部は角をなし、東辺および南辺は直線的である。幅42cmの側溝の北西側までは広がらないので、隅丸方形と仮定すれば、東西1.0m、南北0.8m程度と推定される。深さは39cm。埋土は図67のように2層に分かれるが、東辺の立ち上がり部が被熱により赤変している。出土遺物はない。

110土坑(図68)

調査区東部、南西に傾斜する斜面に位置する。平面楕円形で、東西88cm、短径76cm、深さ28cmを測る。埋土は、図68のように2層に分かれる。出土遺物は、土師器小片1片と炭片のみ。時期不詳である。

111土坑(図68)

110土坑の南約50cmに位置する。平面は東西に長い楕円形で、東西97cm、短径77cm、深さ32cmである。埋土は、図68のように2層に分かれる。出土遺物はなく時期不明であるが、埋土に拳大の花崗岩が1個含まれていた。

121土坑(図68)

先述した90土坑の南約3.3mに位置する。平面円形で、直径70～74cm、深さ9cm。埋土は、10YR5/4にぶい黄褐色シルトで、細砂、炭化粒、10YR6/8明黄褐色シルトの小ブロックを含む。北西部に人頭大の珎岩がみられる他、瓦器碗片、土師器小片、鉄釘1点、鉄滓が出土した。鎌倉時代に属するか。

125土坑(図68)

90土坑の西北西約1mに位置する。平面円形で、直径75～87cm、深さ23cmを測る。埋土は、図68のように2層に分かれる。出土遺物は、土師器3片のみ。時期不詳。

以上の他に、第2面の土坑やピットから次の遺物が出土した。遺構のデータは表2を参照されたい。

42土坑とその周辺の第1層および第2層から破片となって図69-258の須恵器把手付甕が出土した。

61土坑から出土した259は須恵器平瓶の把手であろうか。一辺約1.5cmの断面正方形の粘土紐を折り曲げて把手とし、各角を面取りしている。

67土坑からは260の須恵器杯が出土した。7世紀の所産であろう。

73土坑から261の鉄鉢形の須恵器が出土した。外面は回転ケズリの後、ヘラミガキが施されている。内面は回転ナデにより平滑に仕上げられている。底部を欠く。8世紀後半に類例がある。262(写真図版32)は鼓形の特異な形状をなす。直径の大きい方を下にして器台的に用いられたと推定する。外面にはタキが施され、その中位には貼り付け突帯状のものがはげれた痕跡がある。素焼きの土器で、土師

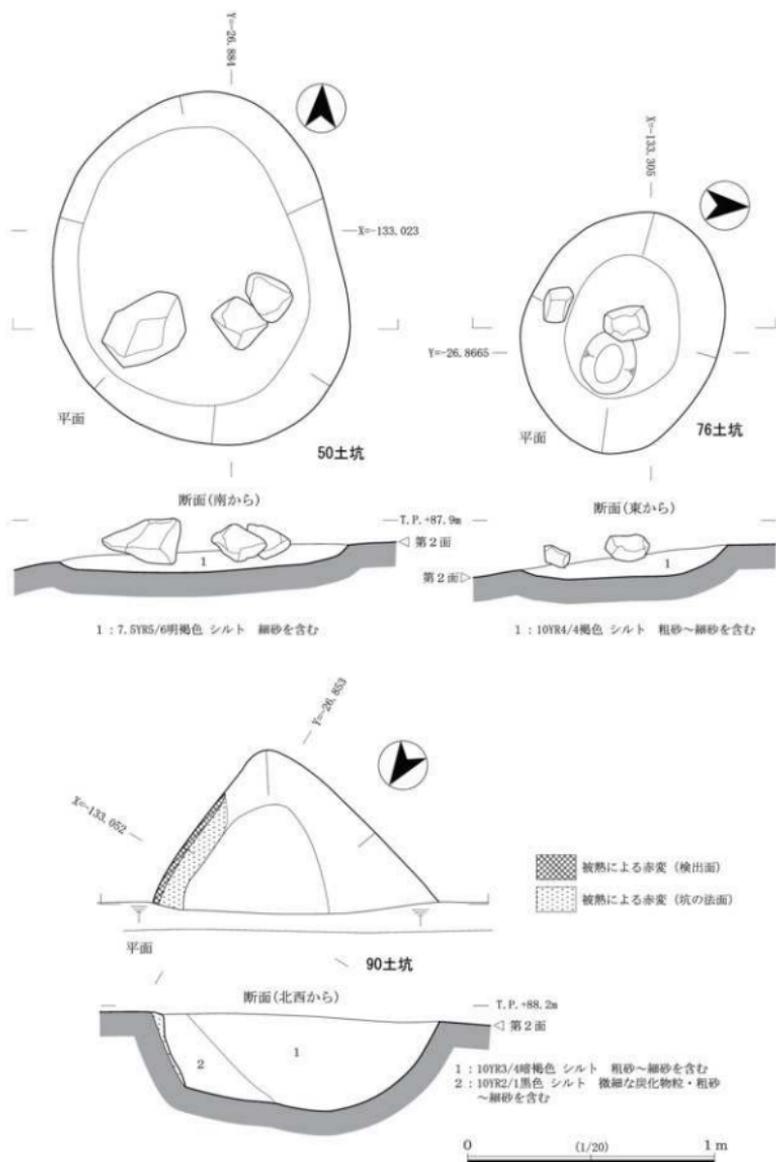
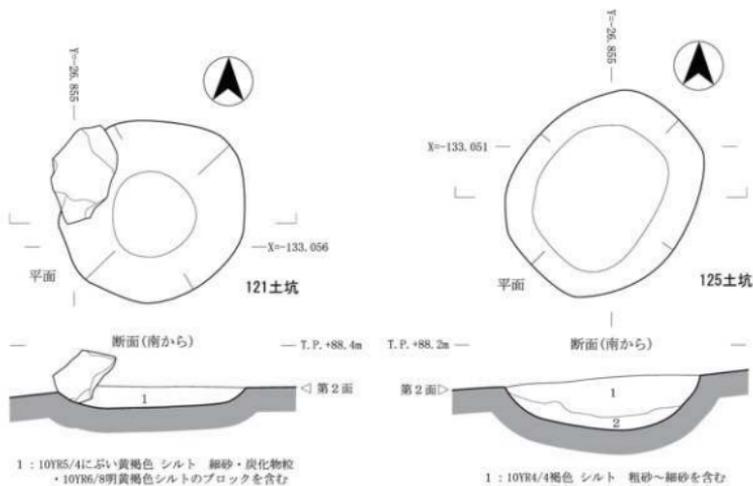
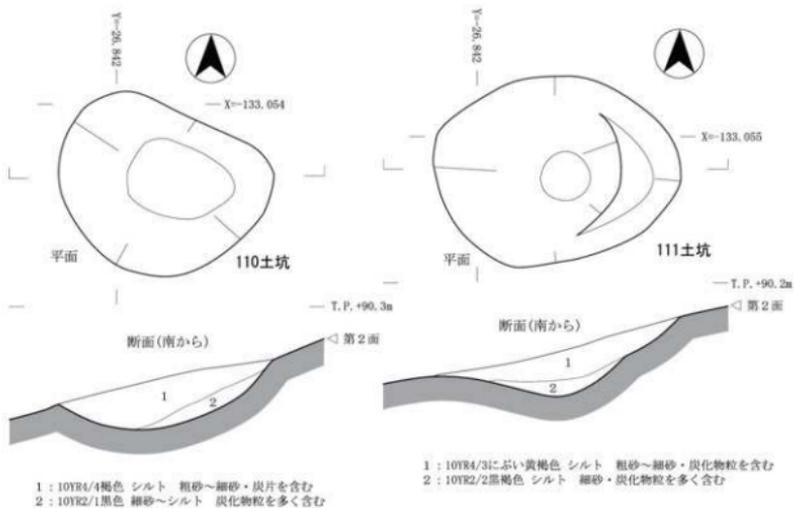


図67 08-2調査区 第2面50・76・90土坑



0 (1/20) 1 m

図68 08-2調査区 第2面110・111・121・125土坑

表2 08-2調査区 第2面土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土	出土遺物
				長径	短径	深さ		
33ピット	9K-8b	円		28	23	8	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器 鉄釘
34ピット	9K-8b	楕円	北西	58	42	23	2.5Y5/4黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
35ピット	9K-8b	楕円	北東	42	28	16	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
36ピット	9K-8b	楕円	北北東	52	18	18	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
37土坑	9K-8b	楕円	北北西	274	73	31	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器
38土坑	9K-8b	楕円	北東	134	58	7	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
39ピット	9K-8b	円		45	39	18	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
40ピット	9K-8b	楕円	北東	54	38	1	10YR4/4褐色シルト 木の根?・粗砂～細砂を含む	
41ピット	9K-7b	円		39	29	17	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
42土坑	9K-9c	楕円	北北西	132	84	16	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器
44ピット	9K-9c	不整円	北北西	83	55	14	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
45ピット	9K-9c	楕円	北北東	62	39	14	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
46ピット	9K-9c	円		73	66	17	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器
47ピット	9K-9c	楕円	東西	84	33	18	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む 46ピットより粗砂が多い	須恵器
48ピット	9K-9c	円		32	26	9	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
49ピット	9K-9c	楕円	北北東	78	35	5	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
50土坑	9K-9c	楕円	北	142	112	13	7.5YR5/6明褐色シルト 細砂を含む	土師器
51土坑	9K-9c	不整円	北東	141	82	27	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
52土坑	9K-9c	不整円	北	225	88	13	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
53土坑	9K-9c	楕円	北東	181	143	33	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
54ピット	9K-10c	円		34	33	11	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
55ピット	9K-10c	隅丸方	北西	96	58	10	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器
56ピット	9K-10c	不整円	北	99	62	17	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器
57土坑	9K-9c	不整円	北西	284	218	33	10YR3/3暗褐色シルト 細砂を含む	土師器 須恵器 瓦器 瓦
58土坑	9K-9c	不整円	東西	319	103	45	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
59土坑	9K-9c-9d	不整円	北東	122	72	18	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器
60土坑	9K-9c	楕円	北	114	89	9	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器
61土坑	9K-9d	不整	北東	318	223	40	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器 弥生土器
63ピット	9K-9d	楕円	北東	70	50	10	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
64土坑	9K-9d	不整	東西	194	113	20	10YR2/2黒褐色シルト 粗砂～細砂を含む 炭化 籾も混じる 木の根か?	土師器 洋 焼土塊
65土坑	9K-9d	不整	東西	210	55	15	10YR3/2黒褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
66ピット	9K-8d	楕円	東西	54	42	6	10YR3/3暗褐色シルト 細砂を含む	
67土坑	9K-8d	楕円	北西	108	36	15	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器 土師器
68ピット	9K-8d	?		42	32	14	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
69ピット	9K-8d	円		26	24	8	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	

表2 08-2調査区 第2面土坑・ピット一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土	出土遺物
				長径	短径	深さ		
70ピット	9K-8d	円		16	14	7	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
71土坑	9K-8d	楕円	北西	102	68	15	10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 瓦
72土坑	9K-8d	楕円	北	103	29	7	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器
73土坑	9K-8d	不整円	北東	155	118	21	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器 瓦質土器
74ピット	9K-7c	楕円	北東	34	25	14	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
75ピット	9K-7d	楕円	北北東	30	22	7	10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
76土坑	9K-7d	楕円	東西	98	76	19	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	瓦器
77ピット	9K-7d	円		70	59	16	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
78ピット	9K-7d	円		31	28	11	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
79ピット	9K-7d	円		40	38	10	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器 土師器
80ピット	9K-6e	円		18	17	16	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
81ピット	9K-6e	円		70	53	30	10YR2/3黒褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
82土坑	9K-6e	楕円	北北西	192	99	21	10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 瓦器 瓦質土器 焼土塊 石器
85ピット	9K-7f	?		33	19	32	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器
86ピット	9K-7f	円		40	35	37	10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器
87ピット	9K-7f	円		32	27	16	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
88ピット	9K-6g	円		36	32	35	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
90土坑	9K-6f	異形状?		100?80?	39	図67参照		土師器 瓦器
91ピット	9K-6f	円		40	35	6	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
94ピット	9K-6g	円		19	18	14	10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
95ピット	9K-5g	楕円	東西	40	18	21	10YR2/1黒色シルト 微細な炭化粒・焼土塊を含む	瓦器 土師器 鉄釘 焼土塊
96ピット	9K-5g	円		25	20	23	10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	瓦器 土師器 焼土塊
97ピット	9K-6g	?		56	32	10	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む 炭化粒を少量含む	
98ピット	9K-6g	楕円	北	27	16	7	10YR5/8黄褐色シルト 粗砂と炭化粒が混じる	
99ピット	9K-6g	楕円	東西	45	35	11	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
100ピット	9K-6g	楕円	東西	42	30	14	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
101ピット	9K-5g	円		24	22	10	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
102ピット	9K-5g	円		23	20	7	10YR5/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	瓦器
103ピット	9K-5g	円		30	28	11	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
104土坑	9K-5g	円		69	63	12	10YR5/4にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
105土坑	9K-5f	楕円	北	112	83	48	10YR3/4暗褐色シルト 礫～細砂を含む	土師器 須恵器
106土坑	9K-5f	楕円	北北西	66	37	11	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
107土坑	9K-5f	楕円	北西	128	83	28	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	瓦器 土師器
109土坑	9K-5f	楕円	北	92	60	33	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
110土坑	9K-5f	楕円	東西	86	64	34	図68参照	土師器 炭

表2 08-2調査区 第2面土坑・ピット一覧(3)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土	出土遺物
				長径	短径	深さ		
111土坑	9K-5f	楕円	東西	94	72	37	図68参照	
112ピット	9K-5f	円		27	24	13	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
113ピット	9K-5f	不整形	東西	64	25	21	10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
115土坑	9K-5g	円		72	60	22	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	鉄釘
116ピット	9K-4g	?		25	13	14	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
117ピット	9K-4g	?		40	15	10	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
118ピット	9K-4g	円		29	26	10	10YR4/6褐色シルト 礫～細砂を含む	
120ピット	9K-6f	円		48	44	9	5YR5/6明赤褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
121土坑	9K-6f	円		72	66	13	図68参照	瓦器 土師器 鉄釘 滓
122ピット	9K-6f	円		22	19	10	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
123土坑	9K-7c	楕円	北	136	103	45	10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む 炭化粒を少量含む	土師器 瓦器
124ピット	9K-8c	?		26	13	19	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
125土坑	9K-6f	円		83	70	20	図68参照	土師器
132ピット	9K-5g	円		25	24		10YR3/4暗褐色シルト 焼土塊小片・炭化粒・粗砂～細砂を含む	土師器 焼土小塊
133ピット	9K-5g	円		21	19	?	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	

器というよりは弥生土器に近い印象がある。近畿地方よりも西の地域の影響かという指摘もあるが、具体的には探し当てていない。

86ピットからは263(写真図版32)の土師器甕が出土した。外面には横方向のハケの後、縦方向の粗いハケが施される。体部内面の上半には横方向の細かなハケメがみられる。8世紀の所産であろう。

95ピットとその周辺の第1層および第2層からは264の須恵器盤が出土した。底部と体部との境は不明瞭で、口縁端部は水平な面となる。底口径24.0cmの大形品で、器壁も厚い。

105土坑からは265の須恵器杯が出土した。7～8世紀に属する。

115土坑からは266・267の鉄釘が出土した。両者とも断面四角形の和釘である。

43落ち込み

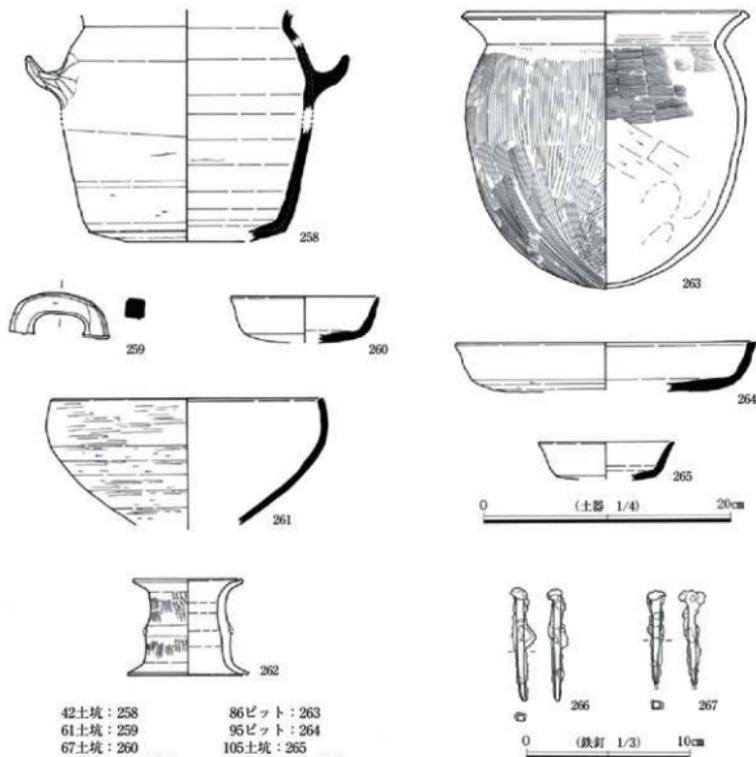
調査区北西部、北から南に緩やかに下る斜面に位置する。平面は不整形で、東西約6.4m、南北約3.5m。北側半周はおおむね半円を描いているが、南辺は出入りがはげしい。斜面にあるので高低差では約40cmになるが、埋土の厚さは10～15cmで、10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

出土遺物は、古代の須恵器や土師器が主体を占め、古代の瓦、鉄釘、滓、炭片なども少量混じる。

図70-268～280は須恵器。

268(写真図版32)は蓋。扁平な宝珠形つまみが付く。その周囲は平らで外縁が高くなっている。そこから裾広がりに口縁部にいたる。口縁部は垂直な面をもつ。上面には灰がかぶっている。7世紀後半に類例がある。

269～271は杯蓋。269・270の内面口縁部近くにはかえりがあるが、口縁部より下方までは伸びない。この2点は7世紀後半の所産。271の天井部にはふくらみがなくほぼ平らになり、端部は下方に短く屈



42土坑：258	86ビット：263
61土坑：259	95ビット：264
67土坑：260	105土坑：265
73土坑：261・262	115土坑：266・267

図69 08-2調査区 第2面土坑、ビット出土遺物

曲している。復原径は26.2cmと大きい。8世紀の所産であろう。

272～275は杯身。272は厚みのある高台が比較的内側に回る。これとは対照的に273には断面形が四角形から崩れた高台が底部の外側に付く。272は7世紀、273～275は8世紀に属する。

276は平瓶または壺の口縁部と推定される。277は壺の口縁部～肩部で、外面に自然釉が付着している。

278は甕の口縁部。口縁端部は直立気味になり、端面はわずかに内外に張り出しほぼ水平の面をなす。第2層出土の破片と接合した。7世紀後半に属するか。

279(写真図版32)は鉄鉢形の鉢。口縁部は内彎し、底部は緩やかな球状をなす。内外面とも丁寧なナデで平滑に仕上げている。この43落ち込みを中心として周辺に分布する破片と接合した。

280(写真図版32)は杯底部を転用した硯。見込み部の中央部が磨かれて平滑になっている。

281(写真図版32)は筒部分を上にすると異形の蓋にもみえるが、口縁部内面に油の炭化物が付着しているので灯明皿として用いられたと考えられる。その場合、中空になった筒に下から丸棒を差し込んで燭台のように掲げたものであろう。一見すると褐釉陶器に似るが、胎土は砂っぽく、成形も異なる。

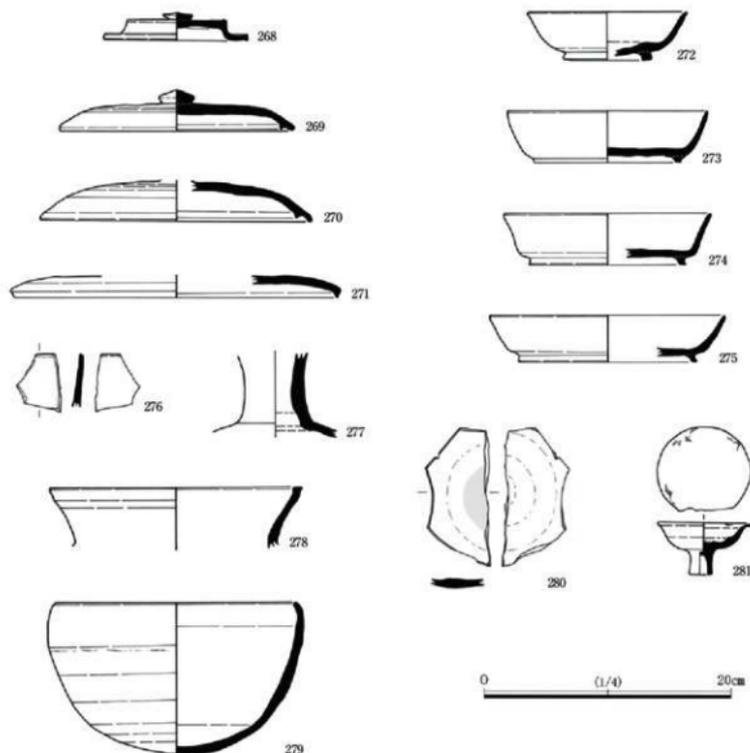


図70 08-2調査区 第2面43落ち込み出土遺物

以上、43落ち込みの出土遺物には時期不詳の灯明皿も混じるが、主体は7～8世紀の須恵器である。

83落ち込み

調査区中央部やや南、先述の89石群の北側一帯に広がる。平面形は溝状で、89石群の北では南北に伸び、そこから南西に屈曲している。延長約16m、幅26～5.1m、深さは最大で70cmに及ぶ。埋土は中層以上を10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む層が占め、下部に10YR3/3暗褐色シルトに粗砂～細砂を含む層が堆積している。

出土遺物では、火頭形三尊埴仏と埴仏鋳型が特筆される。

図71-282(カラー写真図版5)は火頭形三尊埴仏の向かって左側上部の破片である。周縁部分は高まっている。天蓋はシャープに表現され、鈴を表現したと思しき直径4mmほどの円形の高まりがその上に2個、下に1個みられる。表面には金箔が点々と残る。胎土はきめ細かい。類例は7世紀後半の白鳳時代にみられる。出土位置は、83落ち込み内の86ビットの東側である。

283(カラー写真図版5)は三尊埴仏の鋳型。282と同様に素緑の周縁が高まっている埴仏とも考えたが、

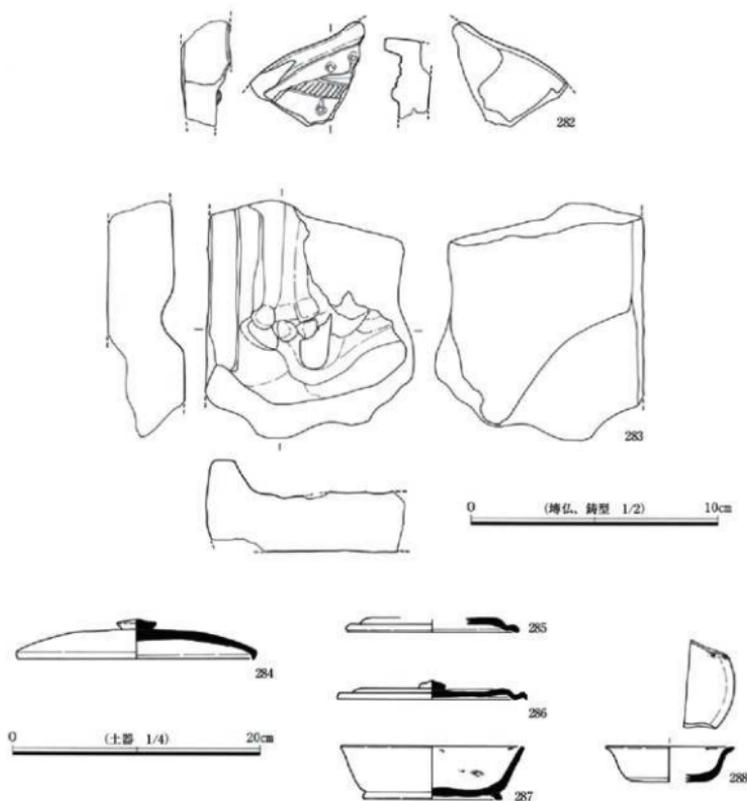


図71 08-2調査区 第2面83落ち込み出土遺物

脇侍の足元と蓮華座の部分が掘り込まれていることから鑄型と判断した。押出仏の原型を鑄造するためのものか。表面は細かな砂が浮きザラザラしており、被熱により黒くなっている部分がある。

284～288は須恵器。

284～286は杯蓋。284は中央に扁平な宝珠形つまみが付き、口縁端部は下方に短く屈曲する。285の天井部は平らで、口縁端部はふくらみ気味である。286の天井部はむしろくぼみ、口縁部はS字状に屈曲し、端部は下外方を向く。

287・288は杯。287はやや外に開く高台が底部の外周近くに付く。体部は直線的に外上方に開く。8世紀の所産。288は破片資料だが、短く外反する口縁部の内面の一部に油の炭化物が付着していることから灯明皿に転用されたと考えられる。9世紀に属するか。

以上、83落ち込みの出土遺物は、古代の土師器や須恵器が主体を占める。しかし、この他に古代の瓦、中世の瓦器、弥生土器片なども混じっており、一括性はない。

第5節 第2-2面の遺構と遺物

第2-2面(図72 写真図版18)とした範囲は、第2面と第2-2面との間の「第2層(上層)」を除去したその下面である。具体的には図72に示すように、調査区の中央部から北西にかけての範囲で、室町時代後半の遺物を含む中央谷によって分断されている。

第2-2面も第1面・第2面と同様に北東から南西に傾斜しており、面の高さは調査した範囲の北端でT.P.+89.3mと高く、南側でT.P.+86.2mと低い。遺構として、焼土坑、土坑・ピット、落ち込み、計56か所[番号126～131・134～183]を調査した。

以下、第2-2面の134土坑、135焼土坑、土坑・ピット、156落ち込みの順に報告する。

134土坑(図73 写真図版19)

調査区北部に位置する。平面楕円形で、北東-南西を主軸とし、長径140cm、短径59cmを測る。検出面からの深さは12cmだが、石の存在を勘案すると本来の深さは20cm以上あったと推定される。

出土土器は土師器のごく小片と奈良時代の須恵器杯片のみ。加えて土坑の南東部に石が3個みられた。中央寄りの大振りなものは珎岩で、外周に近い2個は花崗岩である。

135焼土坑(図73 写真図版19)

調査区中央、中央谷の北側に位置する。平面はやや北に張り出した隅丸方形で、西北西-東南東を主軸とし、長径134cm、短径60cm、深さ18cmを測る。

埋土は図73のように4層に分かれる。その外周は被熱のため赤変しているが、底面には被熱による明瞭な赤変は認められない。

出土遺物を層ごとにとみると、1層からは須恵器と土師器の小片が出土した。須恵器の1片は灯明皿として用いられていた。

遺構内のはば下半分を占める3層は黒色を呈し、遺構外周の被熱部分の存在と相まって、何らかの被熱した遺物の出土が予想された。そこで、3層を北西・北東・南西・南東の4区画に分けて持ち帰り、遺物検出のために水洗した。その結果、3層の各区画からは指頭大以下の炭片がまんべんなく出土した。分量は、北西・北東・南西部では各々拳ひとつ程度、南東部ではその半分程度であった。米粒大以下の焼土塊も、北西・南西・南東部から少量出土した。それら以外には、北西部から須恵器杯の底部と土師器細片がみられたのみであった。

2層と4層からの出土遺物はない。

遺構外周の被熱部分は取り上げようとするバラバラに崩壊し、多くは米粒大以下の粒状となった。それらも全て取り上げ、水洗した。微細な炭片が少量混じるが、それ以外の出土遺物はなかった。

第2面の93焼土坑が東辺と底面の盛り上がった部分が被熱しているのに対し、この135焼土坑は底は被熱していないが壁面の全周が被熱している。

135焼土坑の場合、炭片が比較的多く出土しているが、土器はきわめて少なく、金属滓や骨などは検出できなかった。93焼土坑と同様に火化施設あるいは製炭窯と考えられる。

以上の134土坑、135焼土坑を含めて、55か所の土坑やピットを調査した。埋土は単層のものがほとんどで、柱痕や石を伴うものはない。出土遺物も少なく、土師器や須恵器の細片のみである。これらの土器には明らかな中世以降のものは含まれず、基本的に古代の所産といえる。個々の遺構のデータは表3にまとめた。

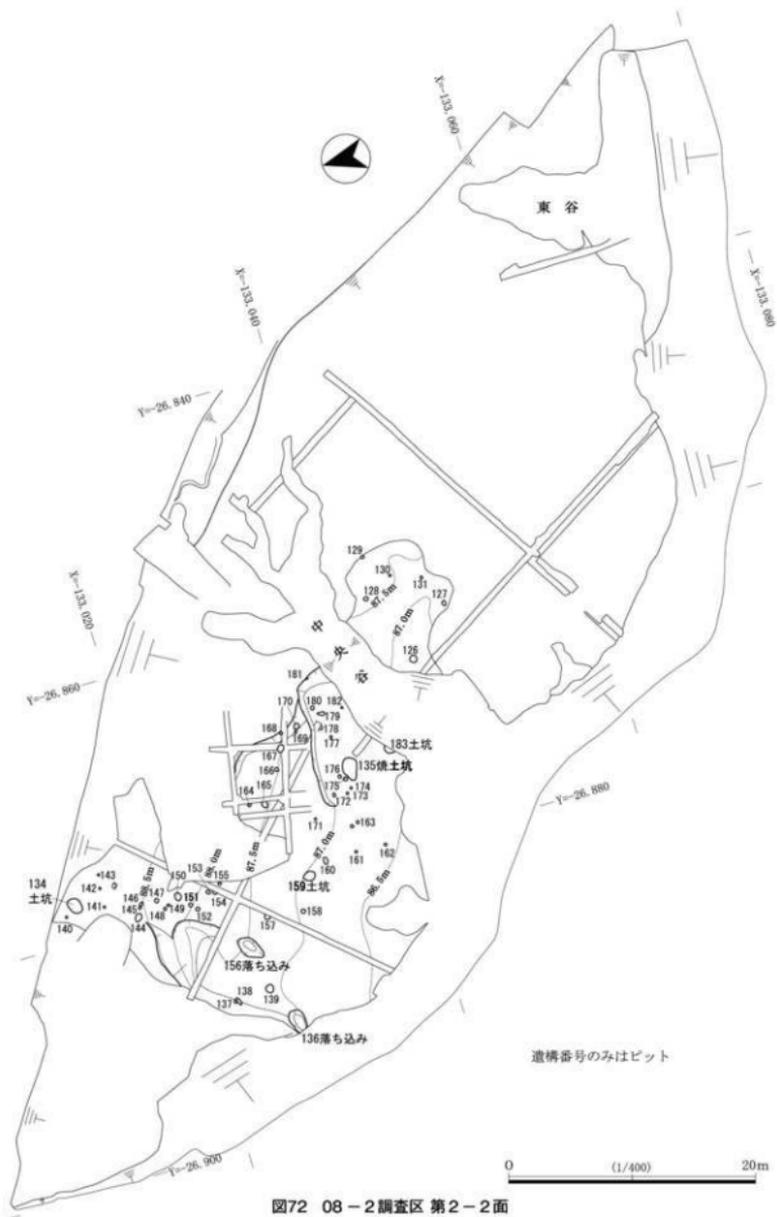


図72 O8-2調査区 第2-2面

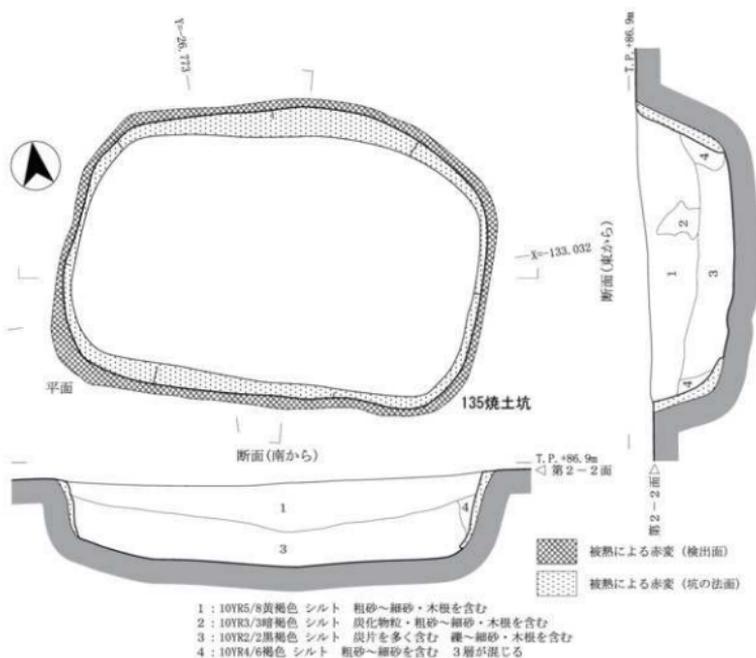
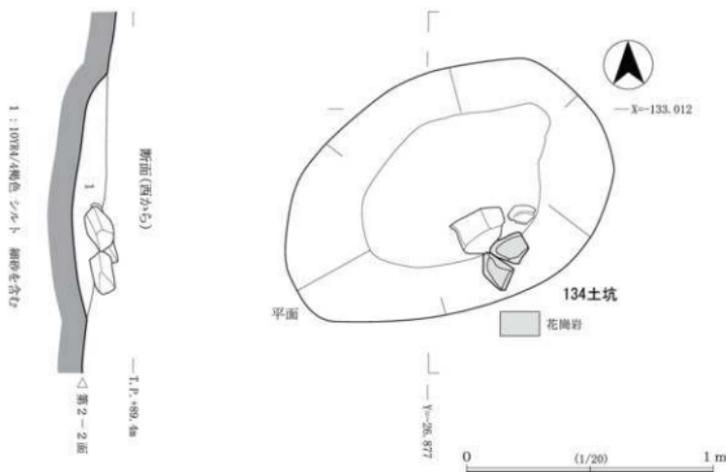


図73 08-2調査区 第2-2面134土坑、135焼土坑

表3 08-2調査区 第2-2面土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土	出土遺物
				長径	短径	深さ		
126ピット	9K-7e	楕円	東西	67	64	18	10YR4/4褐色シルト 細砂・炭化粒を含む	
127ピット	9K-7e	楕円	東西	48	34	27	10YR3/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
128ピット	9K-6e	円		33	32	4	10YR3/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
129ピット	9K-6e	円		23	22	18	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
130ピット	9K-6e	円		19	18	4	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
131ピット	9K-6e	円		18	18	12	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
134土坑	9K-8b	楕円	北東	140	59	12	図73参照	土師器 須恵器
135焼土坑	9K-8d	隅丸方	西北西	134	60	18	図73参照	須恵器 土師器
136土坑	9K-10c	楕円	北東	179	107	16	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂・木の根を含む	土師器 須恵器
137ピット	9K-9c	円		30	29	5	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
138ピット	9K-9c	楕円	北東	68	28	7	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
139ピット	9K-9c	円		69	66	14	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂・木の根を含む	土師器
140ピット	9K-8b	円		26	23	7	10YR4/6 褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
141ピット	9K-8b	円		20	18	13	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
142ピット	9K-8b	円		21	19	12	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
143ピット	9K-8b	円		20	17	9	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
144ピット	9K-8b	楕円	北西	75	56	14	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
145ピット	9K-8b	円		27	23	11	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
146ピット	9K-8b	楕円	北西	41	27	10	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
147ピット	9K-8b	円		28	26	6	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
148ピット	9K-8b	円		30	27	15	10YR3/3暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器
149ピット	9K-8b	円		24	21	13	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
150ピット	9K-8c	円		59	49	14	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
151ピット	9K-8c	円		34	30	38	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
152ピット	9K-9c	円		33	32	31	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
153ピット	9K-8c	円		43	39	9	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
154ピット	9K-8c	円		56	?	12	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
155ピット	9K-8c	円		30	26	7	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
157ピット	9K-9c	楕円	北西	50+	45	13	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂・木の根を含む	
158ピット	9K-9c	円		36	32	31	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
159土坑	9K-8d-9d	楕円	北	94	79	11	10YR褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器
160ピット	9K-8d	楕円	東西	52	35	21	10YR4/3にぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
161ピット	9K-8d	円		23	21	6	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
162ピット	9K-8d	円		22	19	6	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
163ピット	9K-8d	円		24	23	4	10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	

表3 08-2調査区 第2-2面土坑・ピット一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土	出土遺物
				長径	短径	深さ		
164ピット	9K-8c	円		20	19	15	10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
165ピット	9K-8c	楕円	東北東	52+	42	11	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
166ピット	9K-8d	円		36	31	7	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
167ピット	9K-7d	楕円	北西	64	40	3	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
168ピット	9K-7d	楕円	北	32	23	11	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
169ピット	9K-7d	円		22	20	3	10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
170ピット	9K-7d	円		56	46	5	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器
171ピット	9K-8d	円		16	15	11	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
172ピット	9K-8d	不整円	東西	26	22	3	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
173ピット	9K-8d	円		20	19	3	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
174ピット	9K-8d	円		23	20	3	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
175ピット	9K-8d	円		34	31	8	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
176ピット	9K-8d	円		34	30	6	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	須恵器
177ピット	9K-7d	円		30	27	10	10YR4/3にぶい褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
178ピット	9K-7d	円		53	48	9	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
179ピット	9K-7d	楕円	北北東	58	26	8	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
180ピット	9K-7d	円		27	25	6	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
181ピット	9K-7d	円		25	24	9	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
182ピット	9K-7d	円		18	18	4	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
183土坑	9K-9d	円?		120		21	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	

156落ち込み

調査区北西部、第2面43落ち込みのやや南側に位置する。平面は楕円形で、北東-南西に長く、長径約2.4m、短径1.3m、深さは33cmであるが斜面に位置するため、底と南西側のレベルはほぼ同じである。埋土はこの周辺に分布する第2層(上層)の10YR4/1褐灰色粗砂で礫を含む。

出土遺物は、古代ともしき土師器壺片と第Ⅱ様式の弥生土器の底部のみである。両者とも著しく磨耗しており二次堆積物と考えられる。

第6節 第3面の遺構と遺物

第3面(図74 写真図版20)は、花崗岩が風化したいわゆる地山の上面である。

第1面や第2面では、南西の谷側にある程度の平坦部分が確保されていたが、この第3面では旧地形のままに北東から南西に傾斜している。面の高さは山側の北東部でT.P.+91.6mと高く、谷側の南西部ではT.P.+86.0mまで下がる。遺構として、石群、土坑・ピット、落ち込み、計51か所[番号184～234]を調査した。

中央谷から北西側ではピット3個の検出に止まった。これに対し南東側では多くの土坑、ピット、落ち込みを調査した。

以下、第3面の231石群、土坑・ピット、落ち込みの順に報告する。

231石群(図75)

調査区南東部、南西に傾斜する斜面で検出した。長径20～30cm程度の石7個と拳大の石1個が南北56cm、東西44cmの範囲に平面卵形に並んでいた。一見すると炉のようにみえるが、石で囲まれた範囲内の土も周辺の土と同じであり、火を使った形跡はない。石材は花崗岩が6個、玢岩が2個用いられている。出土遺物はない。

土坑やピットについては、出土遺物を掲載した191ピットと埋土が複数の層に分かれる227ピットを以下に記述し、その他は表4にまとめた。

191ピット

調査区南東部、196落ち込みの北西約3mに位置する。平面円形で、直径20～22cm、深さ9cm。埋土は、10YR4/3にぶい黄褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

図76-289の土師器皿のみ出土した。

227ピット(図75)

調査区南東部、225落ち込みの底に位置する。平面楕円形で、東西40cm、南北30cm、深さ27cm。埋土は、図75のように2層に分かれる。

出土遺物は、古代と考えられる土師器甕の口縁部1片のみ。

195落ち込み

以下の4か所の落ち込みは、いずれも調査区南東部に位置する。平面は不整形で、北北西-南南東に長く、長径2.3m、短径1.3m、深さ51cmを測る。埋土は、10YR5/8黄褐色シルトに細砂を含む。出土遺物はない。

196落ち込み

195落ち込みの西約1mに位置する。平面は東西にやや長い楕円形で、東西6.0m、南北5.1m、深さ約80cm。埋土は、この周辺の第2層と同じく7.5YR5/6明褐色シルトに粗砂～細砂を含む。

出土遺物は、中世の瓦器や瓦質土器片と土師器皿片、古代の平瓦であった。

197落ち込み

196落ち込みの南西約3mに位置する。平面は不整形で、北西-南東の長径が2.5m、短径約1.5m、深さ約70cm。埋土は、10YR5/8黄褐色シルトに細砂や木の根を含む。出土遺物はない。

225落ち込み

調査区南部、崖際に位置する。平面は基本的に円形だが、東側で内側にくびれる。東西4.8m、南北

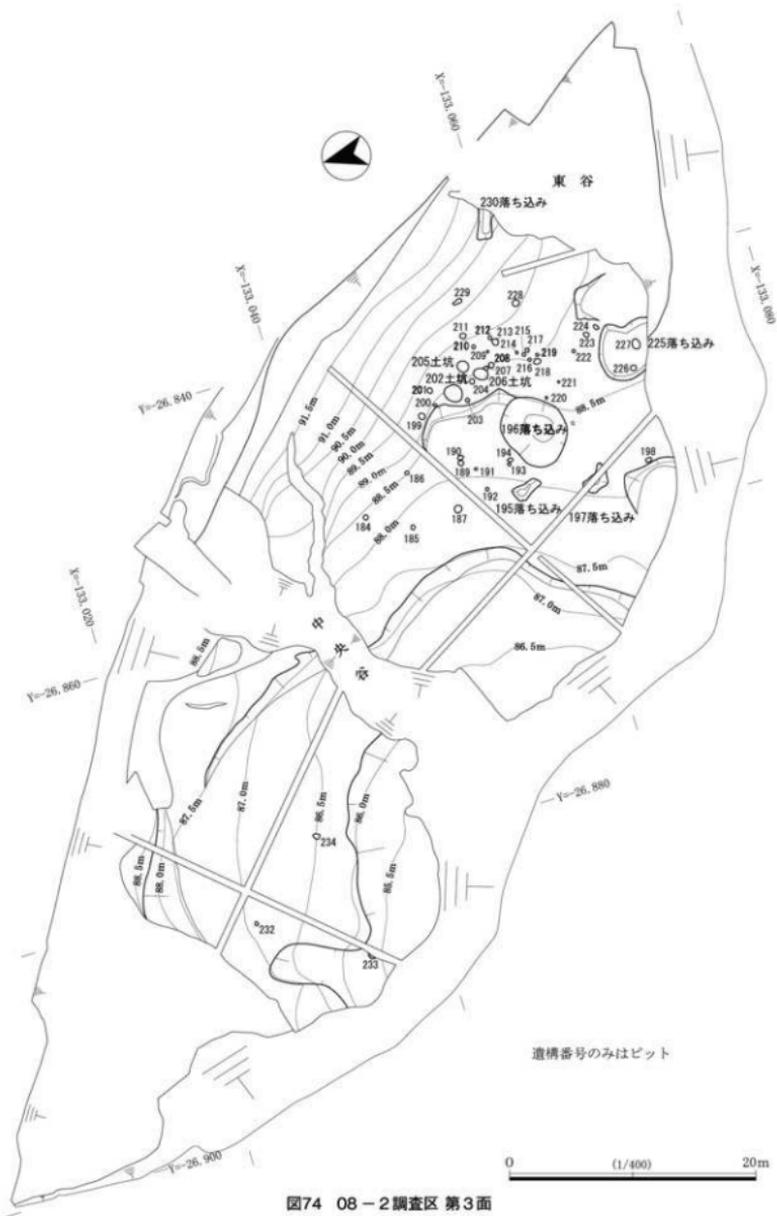


図74 08-2調査区 第3面

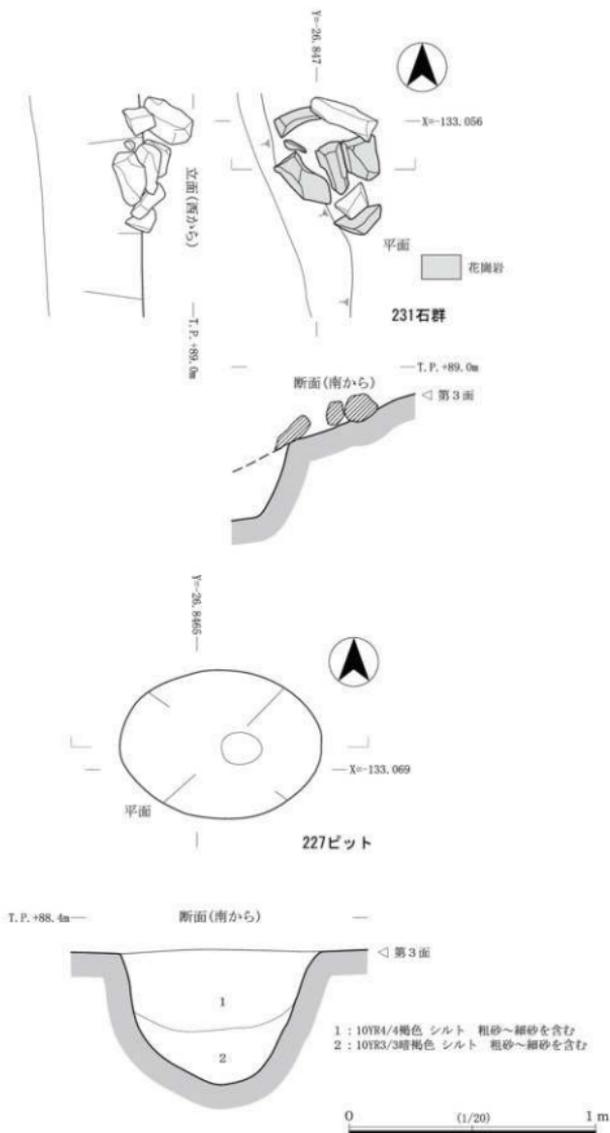


図75 08-2調査区 第3面231石群、227ピット

表4 08-2調査区 第3面土坑・ピット一覧(1)

遺構番号	グリッド	平面形状	主軸方向	寸法 cm			埋土	出土遺物
				長径	短径	深さ		
184ピット	9K-6e	楕円	北西	43	34	11	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
185ピット	9K-6e	円		39	35	16	10YR5/4いぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
186ピット	9K-6e	円		36	36	10	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
187ピット	9K-6f	不整円		61	54	12	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
188ピット	9K-6f	円		18	17	14	10YR4/4褐色シルト 細砂を含む	
189ピット	9K-6f	円		52	47	19	10YR4/3いぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
190ピット	9K-6f	楕円	北西	51	35	8	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
191ピット	9K-6f	円		22	20	9	10YR4/3いぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
192ピット	9K-6f	円		30	25	3	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
193ピット	9K-6f	円		25	24	14	10YR3/4暗褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
194ピット	9K-6f	楕円	北	53	38	17	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
198ピット	9K-6g	楕円	北	47	35	16	10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
199ピット	9K-5f	円		50	49	18	10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
200ピット	9K-5f	不整円		27	17	7	10YR4/3いぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
201ピット	9K-5f	円		47	42	31	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
202土坑	9K-5f	楕円	北東	159	120	37	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 瓦質土器
203ピット	9K-5f	円		35	31	10	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
204ピット	9K-5f	円		49	43	7	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
205土坑	9K-5f	円		91	90	15	10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
206土坑	9K-5f	楕円	北東	125	89	13	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 須恵器
207ピット	9K-5f	円		42	35	7	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
208ピット	9K-5f	楕円	北北西	62	52	40	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
209ピット	9K-5f	円		26	21	10	10YR5/4いぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
210ピット	9K-5f	楕円	東西	34	27	11	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
211ピット	9K-5f	楕円	北西	62	45	16	10YR5/6黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
212ピット	9K-5f	楕円	北東	39	29	9	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
213ピット	9K-5f	円		66	60	8	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	瓦器 土師器
214ピット	9K-5f	円		20	18	11	10YR5/4いぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
215ピット	9K-5f	円		35	35	13	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
216ピット	9K-5g	円		29	27	14	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
221ピット	9K-5g	円		22	19	9	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
222ピット	9K-5g	円		26	25	8	10YR4/6褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器
223ピット	9K-5g	楕円	北東	45	32	10	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
224ピット	9K-5g	楕円	北東	44	28	19	10YR4/3いぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
228ピット	9K-5g	円		54	51	16	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
227ピット	9K-5g	円		80	71	54	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器

表4 08-2調査区 第3面土坑・ピット一覧(2)

遺構番号	グリッド	平面形	主軸方向	寸法 cm			埋土	出土遺物
				長径	短径	深さ		
228ピット	9K-5g	円		66	50	28	10YR4/3Lこぶい黄褐色シルト 粗砂～細砂を含む	土師器 炭小塊
229ピット	9K-4f	瓢箪	北北西	75	31	8	10YR4/4褐色シルト 粗砂～細砂を含む	
232ピット	9K-9c	円		35	31	3	10YR5/6黄褐色 細砂～シルト 礫を含む	
233ピット	9K-9d	?		62	7		10YR6/8明黄褐色 細砂～シルト 木の根跡	
234ピット	9K-8d	楕円	北東	63	53	19	10YR6/8明黄褐色 細砂～シルト 木の根跡	

4.6m以上。底面がほぼ平らで、そこにピットも2個存在したことから、堅穴の可能性も考えて調査したが、人為的な加工痕は認められなかった。埋土は、196落ち込みと同様に周辺の第2層と同じく7.5YR5/6明褐色シルトに粗砂～細砂を含むであった。

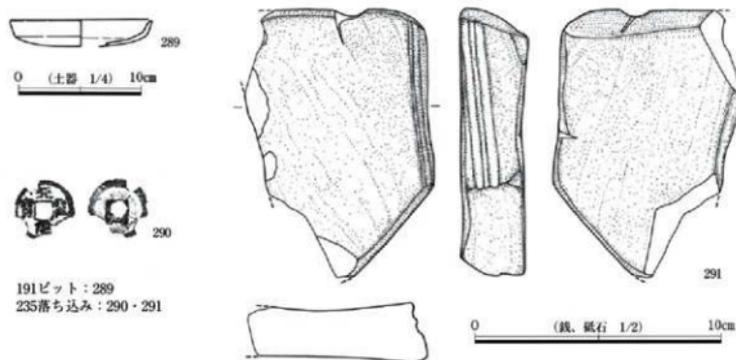
出土遺物は、瓦質土器片、須恵器片、天聖元寶、砂岩製砥石で、一括性はない。

図76-290(写真図版46)は天聖元寶。遺存状態は悪い。現状で2.0g。北宋1023年初鑄。

291は砂岩製砥石。表裏両面とも研磨によりくぼんでいる。さらに側面に断面U字形の溝が2条みられる。現状で278.9g。

230落ち込み

調査区東端、北東から南西に傾斜する斜面に位置する。時期不詳の東谷に切られている。主軸方位は西北西-東南東で、長径は2.5m以上、短径は1.2m、深さ68cm。この周辺の第2層である10YR4/2灰黄褐色粗砂～細砂に礫を含む層で埋まっている。出土遺物はない。



191ピット: 289
235落ち込み: 290・291

図76 08-2調査区 第3面191ピット、225落ち込み出土遺物

第7節 包含層出土遺物

08-2調査区の調査では、これまでに報告してきた各面の遺構のみならず、機械掘削の対象である旧表土上の盛土、整地層や多量の土砂層をはじめとする包含層からも多くの遺物が出土した。

機械掘削層・第0層からは中世あるいはそれ以降、第1層からは中世を主体に古代の遺物も、第2層の北西部では古代が、南東部では中世がそれぞれ主体となる傾向にはある。

しかし、調査区が斜面に立地するために上方からの流下や下方への転落などのため、出土遺物は必ずしも上層の新しいものから下層の古いものへと整然と変遷するのではなかった。そこで、包含層出土遺物については、種類ごとに報告する。

石器

図77-292(写真図版33)はナイフ形石器。サヌカイトの縦長剥片を素材とする。背部は丁寧に調整されている。新欠部分を除き、全体に風化している。19.3gを量る。第2層出土。

293・294(写真図版33)は打製石鏃。293は凹基式で、両面とも丁寧に調整されている。先端部分を欠損する。1.2g。294は平基式で、全体に丁寧な押圧剥離が施されているが、裏面側に素材面を残す。やはり先端部分を欠損する。現状で3.4g。2点とも第1層出土。

295(写真図版33)は尖頭器の未成品。山形の自然面の頂点を打面として剥離した剥片を素材としている。先端部の自然面と折損面を除去できなかったため、尖頭器としての製作を途中で廃棄したものか。サヌカイト製。74.2g。第2面82土坑からの出土遺物として取り上げられたが、明らかに下層からの混入品である。

296(写真図版33)は石包丁。直線刃の明瞭な片刃で、刃部には斜め方向の研磨痕が残る。刃部・背部ともに潰れはない。紐穴は少なくとも4個あり、折損部の2個は縦に近接しており1個は背部に非常に近い。粘板岩製で、出土時には石の目に沿って数枚の薄片状に分離していた。現状で38.5g。

297(写真図版33)は大形石包丁と推定される。残存部に紐穴はみられない。大きさの割に厚さは7mmと薄く、刃先は鋭い。緑泥片岩製。現状で54.7g。両者とも第2層出土。

縄文土器

図78-298～300は突帯文土器。磨耗が著しく直接接合もしないが、まとまって出土しており、胎土や色調が似ていることから同一個体の可能性が高い。298(写真図版34)は口縁部ではなく体部であり、2条突帯の長原式土器であろう。第2層出土。

301と302(写真図版34)は胎土や色調から同一個体と推定される。磨耗のため明瞭ではないが、301の内面の口縁部直下とくびれ部には凹線状のくぼみがある。鉢の口縁部とも推定されるが、時期や器形は不詳である。両者とも第2層出土。

弥生土器

303・304は弥生土器の底部。

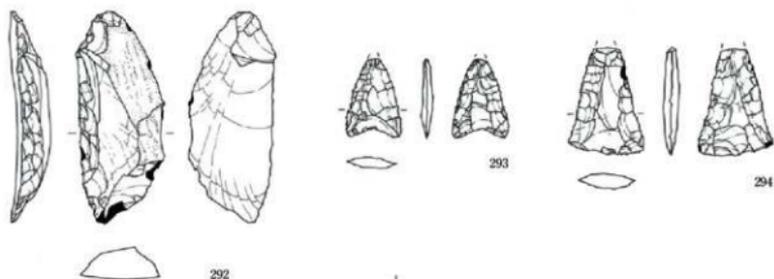
303(写真図版34)の外面には縦方向のハケメがみられ、底には木葉痕がある。Ⅱ様式に属する。

304は磨耗が著しく調整など不詳だが、形状から中期と考えられる。

いずれも第2層出土。

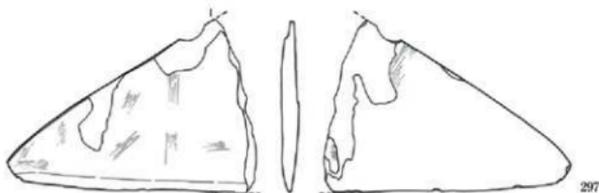
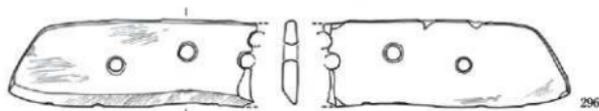
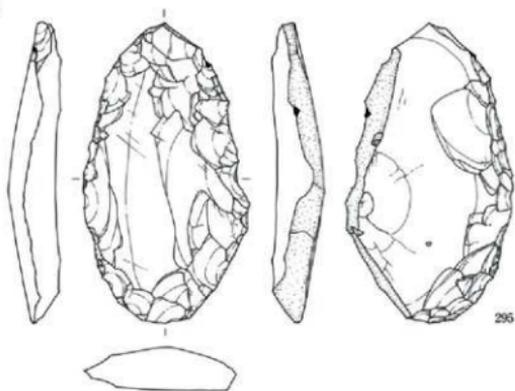
銅型

図79-305(カラー写真図版5)は土製銅型。図示した上部が湯口で、鋳込まれた面は被熱により一



第1層：293・294
 第2層：292・296・297
 82土坑：295

0 (打製石器 2/3) 5cm



0 (石包丁 1/2) 10cm

圖77 08-2調查區 包含層出土石器

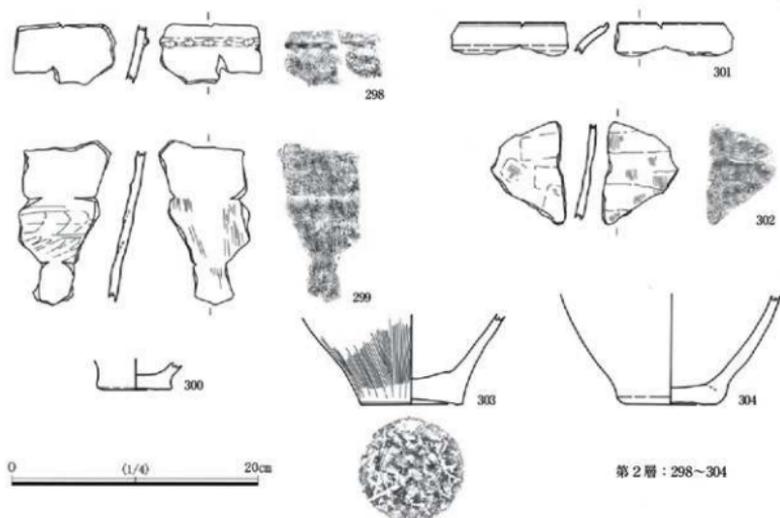


図78 08-2調査区 包含層出土縄文土器、弥生土器

皮剥けたようになっている。火頭形埴仏の鋳型であろう。第2面83落ち込みから出土した鋳型(図71-283)よりも細砂が多く混じりザラザラ感がある。第0層出土。

埴仏

306(カラー写真図版5)は縦4.0cmの小形独尊埴仏。左右を欠くことから連座の可能性も検討したが、類例から独尊と推定する。頭部は大きめで、蓮台に結跏趺坐している。あまり明瞭ではないが、膝の上に組んだ両手に布をかけているようにみえる。胎土は粗い。奈良時代の所産であろうか。第2層出土。

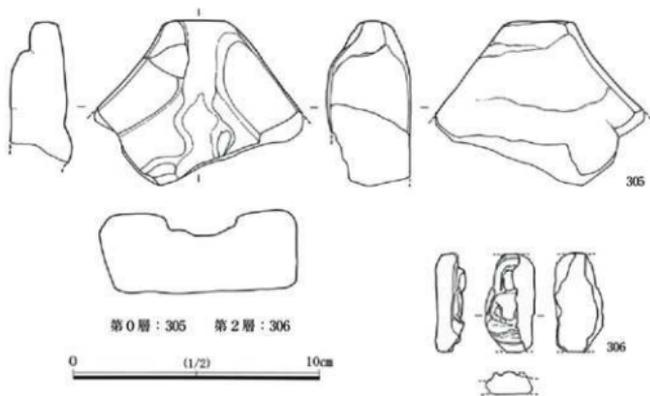


図79 08-2調査区 包含層出土鋳型、埴仏

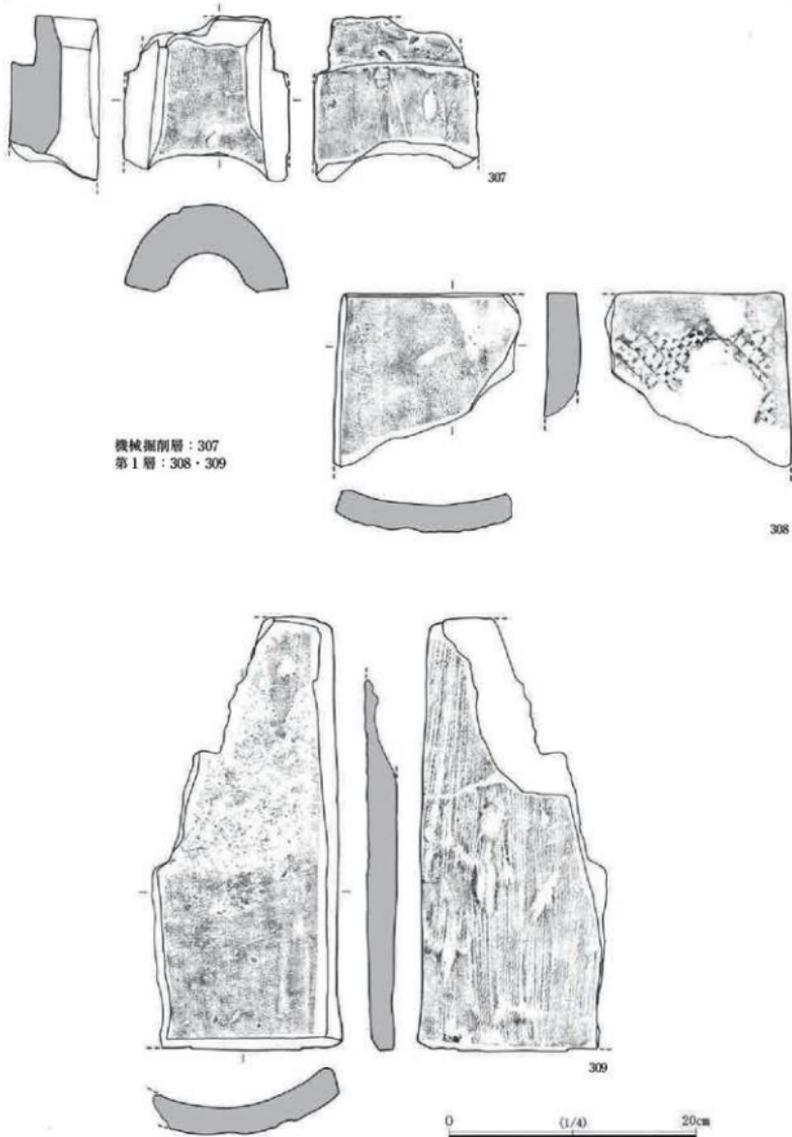


図80 08-2調査区 包含層出土古代の丸瓦、平瓦（1）

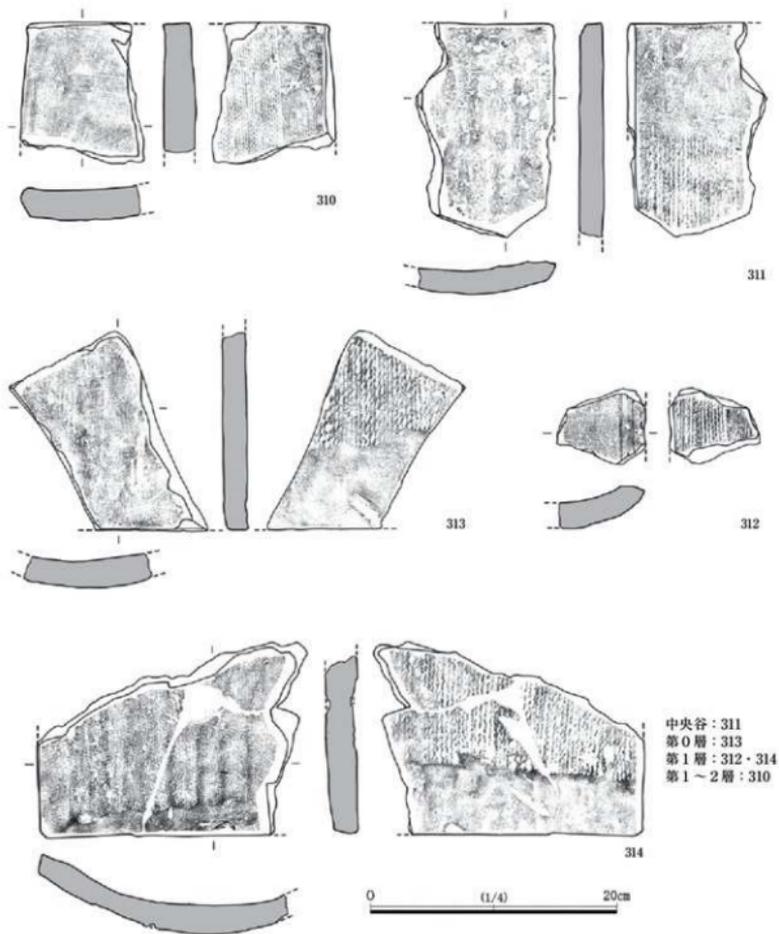


図80 08-2調査区 包含層出土古代の平瓦(2)

古代の瓦

図80-307(写真図版34)は丸瓦。厚みがあり、内面と玉縁の外面に布目圧痕跡が残る。機械掘削層出土。

308(写真図版34)～図81-314(写真図版35)は平瓦。

308(写真図版34)の凹面には布目痕跡は確認できるが模骨痕は確認できない。凸面には斜格子タタキが施される。第1層出土。

309は凹面に布目圧痕が残るが、狭端側約半分は摩滅している。この部分は葺き足(平瓦の重なり部分)

にあたるため、磨耗したと考えられる。凸面には縄タタキが施されているが、縦方向に数単位交錯している。また縄タタキ痕の上には、数単位の指頭圧痕が残る。乾燥前に持ち運ばれた際に付いたと考えられる。312には凹面だけでなく側面に布目痕がみられる。凸台上での成形時に凸面にまで布がかぶせられていた可能性があり、奈良時代後半から平安時代前半にみられる凸面布目圧痕技法により成形されたと考えられる。いずれも凹面に布目痕、凸面に縄タタキ痕が確認できる。313では凸面の広端から約6cmまでの範囲に横方向のナデ調整が施されている。308～313は一枚作りの可能性が高い。313は第0層、309・312・314は第1層、310は第1層～第2層、311は中央谷から出土した。

一方、314の凹面には明瞭な模骨痕がみられることから、桶巻き作りの可能性が考えられる。広端から約5cmまでの範囲に横方向のナデ調整が施されている。第1層出土。

古代の土師器

図82-315(写真図版35)は皿。底部外面はユビオサエ、他はナデ調整される。口径18.8cm、高さ2.5cmの大形品。9世紀後半頃に属するか。第2層(上層)出土。

316(写真図版35)は土師器甕。口縁端部はわずかにつまみ上げ。口縁部はナデ調整。体部外面は縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメがみられる。8世紀の所産。機械掘削層出土。

317(写真図版35)は土師質の移動式かまどの焚口部分であろう。外面にはハケメが顕著に残る。第2層出土。

古代の須恵器

図83-318～324は杯蓋。

318(写真図版36)は天井頂部にやや扁平な宝珠つまみが付く。口縁部内面のかえりは下方に伸びるが短く、口縁部以下には突出しない。7世紀後半に属する。第0層出土。319はつまみを欠くが、口縁部内面のかえりが痕跡的に残る。第2層出土。

320はほどよくふくらんだ優美な宝珠つまみ。第1層出土。

321の天井頂部には扁平なつまみが付く。口縁端部は下方に短く屈曲する。第1層出土。322・323のつまみは宝珠形のおもかけを残す。2点とも第2層出土。321～323は8世紀初頭の所産であろう。324は扁平なつまみと平らな天井部をもち、口縁端部は下方に短く屈曲する。8世紀後半に属する。第0層出土。

325は8分の1周程度の破片から図上復原したもので、天井頂部中心よりに回転ナデの存在によりつまみが付いていたと想定されることから壺など大振りの器の蓋と考えられる。第1層と第2層(上層)から出土した破片が接合した。

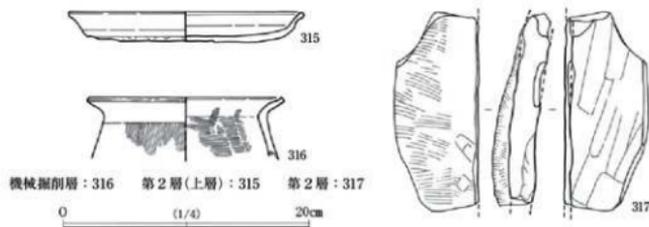


図82 O8-2調査区 包含層出土古代の土師器

326(写真図版36)は蓋と考えられる。天井頂部はヘラ切り後ナデで整えられている。口縁部は著しくゆがむ。口縁部内面に点々と漆状の物質が付着している。第2層(上層)出土。

327～344は杯。

327(写真図版36)～329(写真図版36)は高台のない杯で、口縁部は外上方にわずかに外反しながら伸び、端部は丸くおさめられている。7世紀後半の所産。327・328は第2層、329は第2層(上層)の出土。

330の底部はやや突出し、その外面底部はヘラ切り後ナデられている。口縁部は外反する。7世紀末～8世紀初頭に属する。第2層出土。

331～338は高台のある杯。全て貼り付け高台である。

331(写真図版36)の貼り付け高台は太く、内端部で接地する。7世紀後半の所産か。第2層出土。

332～335は平らな底部から緩やかな曲線を描いて体部が立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。336・337(写真図版36)はわずかに外反しながら高く立ち上がる体部をもつ。高台は、内端部で接地する335・337・338、凹面をなす334、外端部で接地する333(写真図版36)・336といった違いはあるが、底部のやや内側に付きわずかに外方にふんばる形状の貼り付け高台である点で共通する。332～338の高台のある杯は、個々については新旧の要素もつが、器形や高台の付く位置からみてもおおむね8世紀後半前後の所産と考えられる。332・335は第0層、333・338は第1層、334・337は第2層、336は第2層(上層)から出土した。

339～341は小形の杯。

339は小振りで平らな底部から大きく外反して口縁にいたる。第1層出土。340は丸味のある底部に外反する口縁が付く。第2層(上層)出土。341の口縁端部は外方に伸びる。第1層出土。

342は皿。底と体部の境は明瞭に屈曲する。表面全体が非常に丁寧に仕上げられている。第1層と第2層から出土した破片が接合した。

343(写真図版37)は杯。口縁部が外反する器形で、底部外面に「萬」字がヘラ書きされている。この土器は、第2層(上層)の遺物チェック中に「萬」字がヘラ書きされた部分を含め3片見出したもので、その周辺グリッドや上下層の遺物も合わせて探索したところ、東隣のグリッドの同一層から先の3片に囲まれる部位の1片が見つかった。内面には灯明皿として使われていた痕跡である油の炭化物が斑に付着している。

344(カラー写真図版6)は杯。平底から外上方に体部が伸びる。内面と断面の一部に赤色顔料が付着している。9世紀に属する。第2層出土。

345～349は須恵器を転用した碗。

345(写真図版37)は高杯を転用した碗。杯の内面底部が磨られて平滑になっている。第2層(上層)出土。

346～348(写真図版37)は杯蓋を転用した碗。346は宝珠つまみの形状から8世紀に属すると考えられる。3点とも第1層出土。

349(写真図版37)は甕の体部を転用したいわゆる猿面碗。甕とした場合の内面が碗面とされ、磨られて青海波状の紋様が不明瞭になっている。周辺のグリッドや上下の層の遺物も探索したが接合するものはなく、全体の形状は明らかではない。第1層～第2層出土。

図34～350は短頸壺。球状の体部に短く直立する口縁部が付く。肩部と内面底部には自然釉が付着し

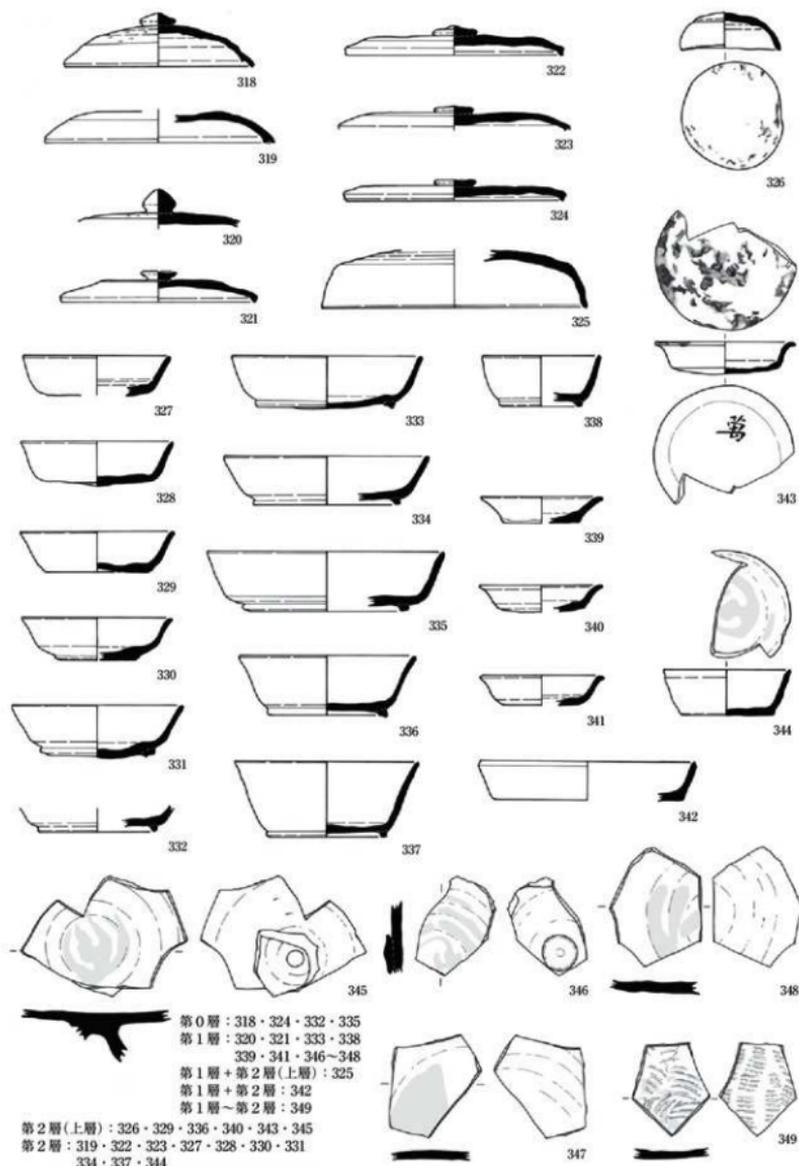


図83 08-2調査区 包含層出土古代の須恵器(1)、転用硯

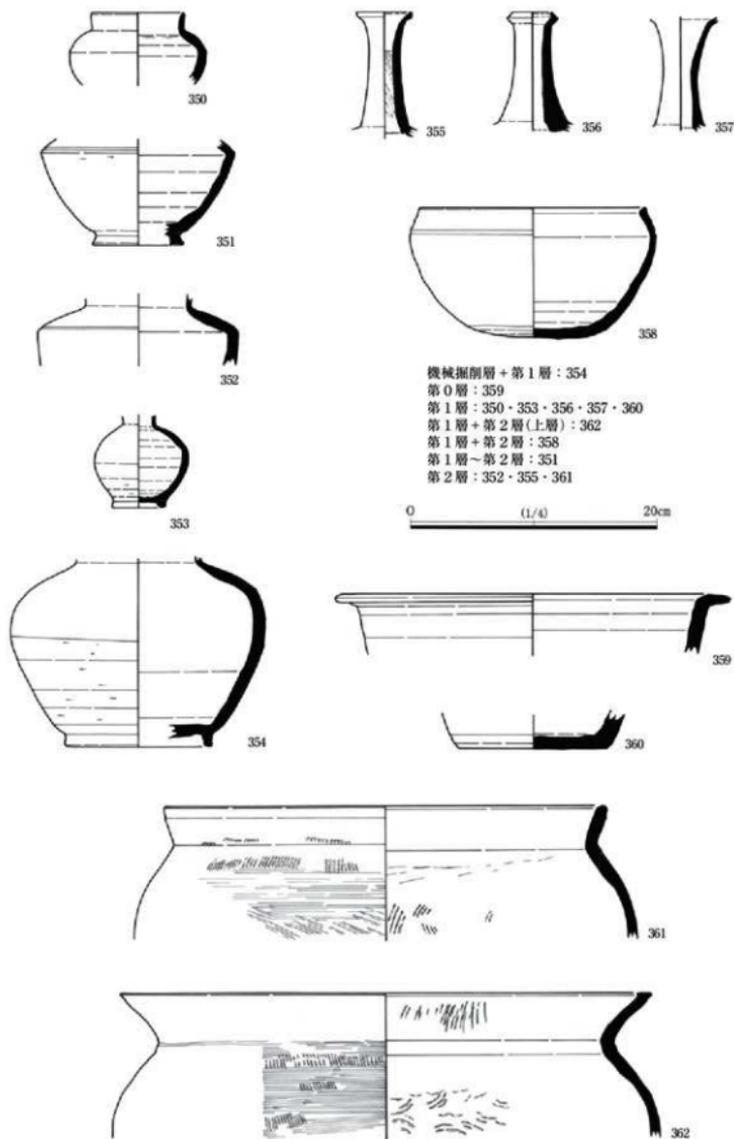


図84 08-2調査区 包含層出土古代の須恵器(2)

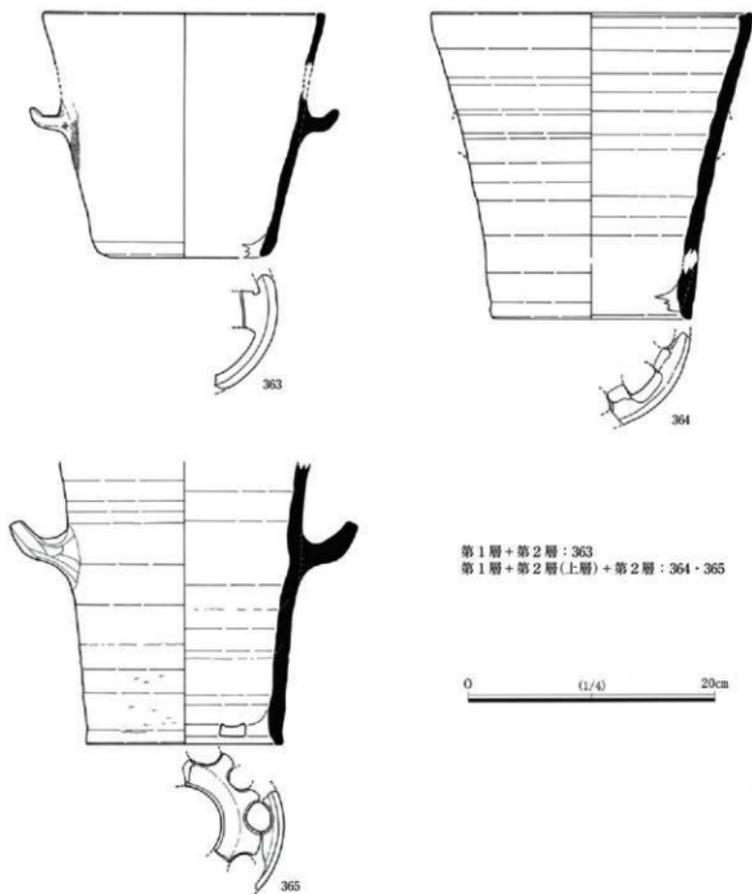


図85 08-2調査区 包含層出土古代の須恵器(3)

黄緑色に発色している。第1層出土。

351は長頸壺。肩が張った器形で、最大径の直上に凹線状のくぼみが巡る。肩部には自然釉が付着し黄緑色に発色している。7世紀の所産。第1層～第2層出土。

352も壺。頸部外面には自然釉が付着し黄緑色に発色している。肩部には沈線が1条巡る。7世紀末～8世紀初頭に属する。第2層出土。

353(写真図版37)は小形瓶。球状の体部にわずかに外に広がる高台が付く。底部外面はナデられている。8世紀末の所産。第1層出土。

354(写真図版38)はいわゆる葉壺形の壺。肩部に自然釉が付着している。機械掘削層と第1層の各

グリッドから出土した破片が接合した。

355～357は水瓶の口頸部。

355の外表面の一部に灰がかぶっている。内面には絞り目が顕著にみえる。第2層出土。356の口縁部は袋状になっている。外面に自然釉が付着し黄緑色に発色している。第1層出土。357は口縁端部を欠く。第1層出土。いずれも8世紀の所産であろう。

358(写真図版38)は鉄鉢形の鉢。口縁部は内増し、体部最大径の部分に沈線が1条巡る。平底である。7世紀後半～8世紀初頭の所産。第1層と第2層の各グリッドから出土した10片が接合した。

359は甕の口縁部。口縁端部は外側に伸び、その上下が水平な面をなす。第0層出土。

360は甕の底部と考えられる。器壁が厚く重量感がある。8～9世紀に属する。第1層出土。

361・362も甕。361(写真図版38)の口縁部と頸体境のくびれ部とは強くナデられ、口縁の外表面直下は沈線状にくぼむ。頸部にはタタキの原体が当たった跡が残る。復原口径は36cm弱。第2層出土。362(写真図版38)の体部外面にはタタキの後カキミがみられ、内面には同心円タタキの後ナデが施されている。第1層と第2層(上層)から出土した破片が接合した。

図85-363～365は瓶。

363の底部の穴はヘラを用いて鋭角に切り抜いている。第1層と第2層から出土した破片が接合した。364は把手の部位は4分の1周しか出土しておらず、その部分には把手は見当たらないが、類例からみて2か所に把手が付くと考えられる。365の底の穴は丸い。364・365とも第1層、第2層(上層)、第2層の各グリッドから出土した破片が接合した。363の孔の開け方に古い要素がみられるが、3点とも平安時代の所産であろうか。

緑釉陶器

図86-366～369(カラー写真図版6)は緑釉陶器片。4片出土した。いずれも壺あるいは水注の小片で、出土層位やグリッドは異なるが同一個体の可能性もある。これらの破片では産地や時期の特定は難しいが、強いていえば10世紀後半の近江ないし美濃産と推定される。366と367は機械掘削層、368は第1層、369は第2層から出土した。

灰釉陶器

370(カラー写真図版6)は灰釉陶器広口壺(瓶)。肩部は丸みを帯びる。高台は器の大きさの割には華奢な印象がある。図中のアミフセの薄い部分は1度、濃い部分は2度にわたって施釉されている。底

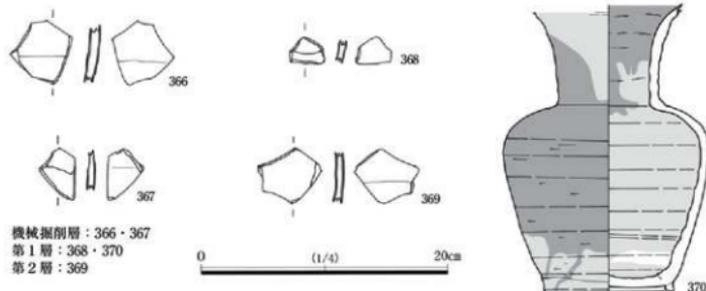


図86 08-2調査区 包含層出土緑釉陶器、灰釉陶器

部外面は黒い。東濃(美濃東部)地域の10世紀後半の所産と考えられる。第1層の広範囲にわたる各グリッド下から出土した破片を接合したが口縁部は見当たらなかったため、第2面62墓・114墓・119墓の灰釉陶器や須恵器と同様に口縁部を打ち欠いて蔵骨器として使われた可能性がある。

中世の土師器

図87-371～392(写真図版39・40)は土師器皿。

371～373は口径約7cm、374～388は約8cmの小形、389は9.5cmの中形、390～392は12.4～13.2cmの大形である。胎土は橙色系。13世紀前後の所産。371～373・389は機械掘削層、374～381・390～392は第1層、382～388は第2層から出土した。

393(写真図版40)は羽釜。口縁は内傾し、外面に比較的幅広の羽(鐙)が巡る。第0層出土。

瓦器・瓦質土器

図88-394～397は無高台の瓦器小椀。

394(写真図版41)の口縁端部は外上方に伸びて丸く取まる部分と、外側に屈曲する部分とがある。口径6.7cm。395・396の口縁部はわずかに厚みを帯び、外上方に直線的に伸びる。397の口縁端部は短く外に屈曲する。

398～405は高台のある瓦器小椀。

399(写真図版41)の口径6.8cm、高さ2.8cm。403・404(写真図版41)の器表面への炭素の吸着は弱いが、口縁端部の一部には煤状の付着物がある。

以上394～405の小椀は全て第1層から出土した。高台の形状や暗文の状況からみて、次の瓦器椀と同時期の13世紀後半頃に属すると考えられる。

406～415は桶葉型瓦器椀。

いずれも口縁部は直立気味であるが、409の口縁部はわずかに外反し、412と414(写真図版42)の口

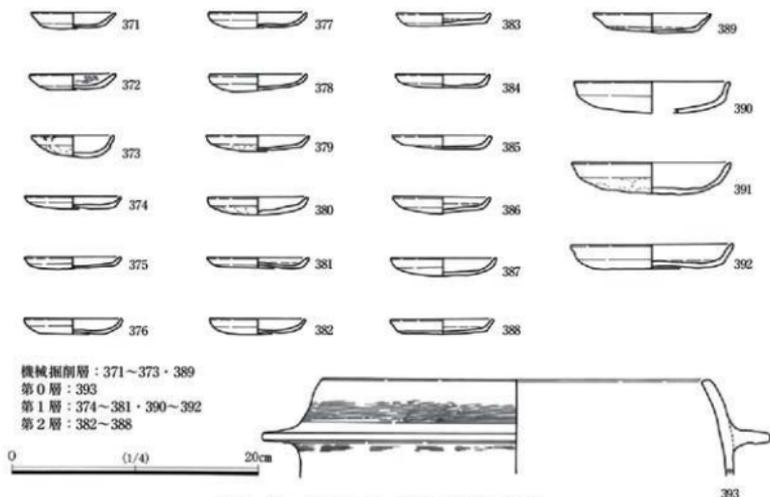


図87 06-2調査区 包含層出土中世の土師器

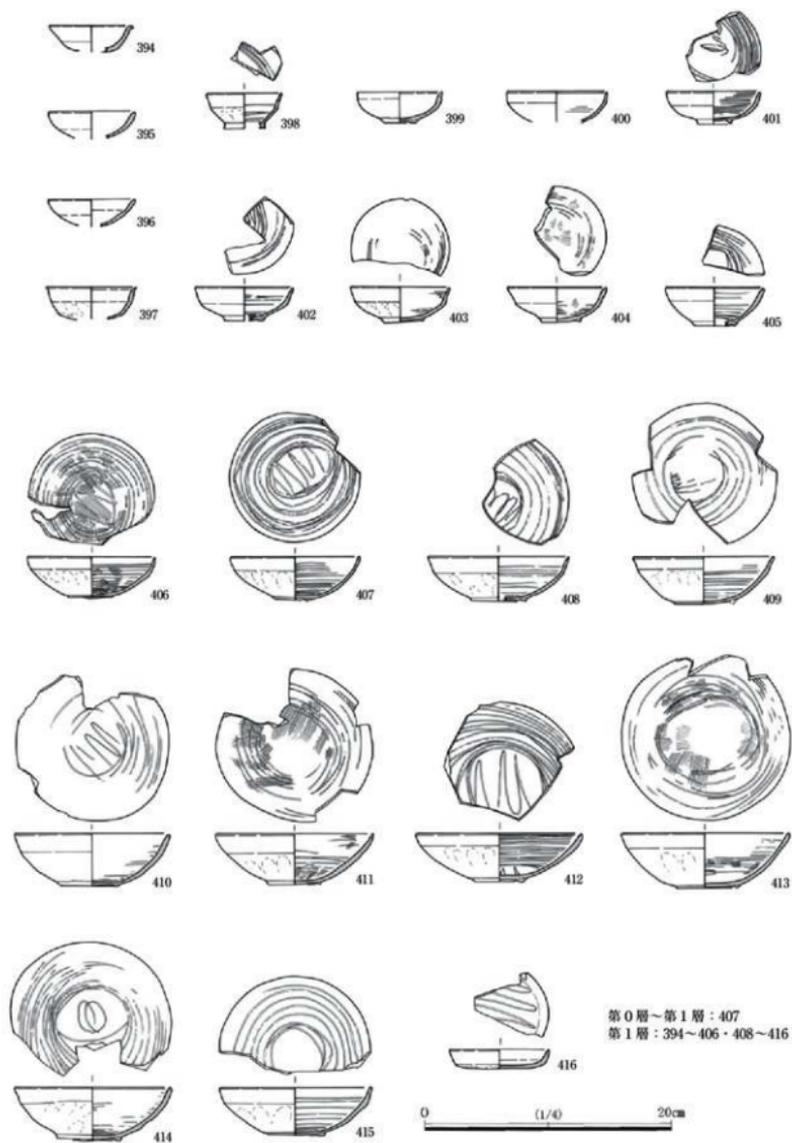


图88 08-2 調査区 包含層出土瓦器

縁端部内面には沈線がみられる。断面三角形の細い高台が付く。外面に暗文はない。体部内面の暗文は渦巻状で、見込み部の暗文は406・407(写真図版41)・410(写真図版41)・412では簡素な鋸歯状、408・414ではルーズならせん状である。最少の406で口径10.2cm、高さ3.4cm、器高指数33、最大の413で口径は13.3cm、高さ4.5cm、器高指数34である。大きく、ヘラミガキが緻密で、高台のしっかりした413や414が相対的に古い傾向にあるが、いずれも桶葉型Ⅲ-3期~Ⅳ-1期に属し、13世紀中頃~後半の所産といえる。以上の瓦器碗は407が第0~1層から出土した以外は、全て第1層からの出土。

416は瓦器皿。見込み部に鋸歯状の暗文がみられる。そのヘラミガキの幅は1mm程度と細い。口径8.0cm、高さ1.5cm。第1層出土。

図89-417(写真図版42)は瓦質の三足鉢。底部内面に細いヘラミガキが施される。灰白色を呈することと三足という器形から平安京で8世紀中頃から12世紀中頃までみられる白色土器とも考えたが、瓦質焼成の土器の炭素が飛んだものと判明した。ただし例の少ない器形なので、同時期の白色土器を模倣した可能性もある。11~12世紀以降の所産と考えられる。第0層出土。

418(写真図版42)は瓦質甕。外面にはタタキが顕著に残る。調査区南法面から出土した。

419(写真図版42)は瓦質鍋。口縁部は断面L字形で受け口状になっている。口縁上端面はわずかにくぼむ。外面の磨耗が著しいが、それでもユビオサエの痕跡が残る。一部に煤が付着している。内面には横方向に細かなハケメがみられる。第0層出土。

420(写真図版42)は瓦質釜。口縁部に外上方から直径5.5mmの孔が開いている。体部外面には炭化物が厚く付着している。機械掘削層出土。

421は瓦質の三足釜。第1層出土。422は同一個体ではないが三足釜の脚部。第0層出土。

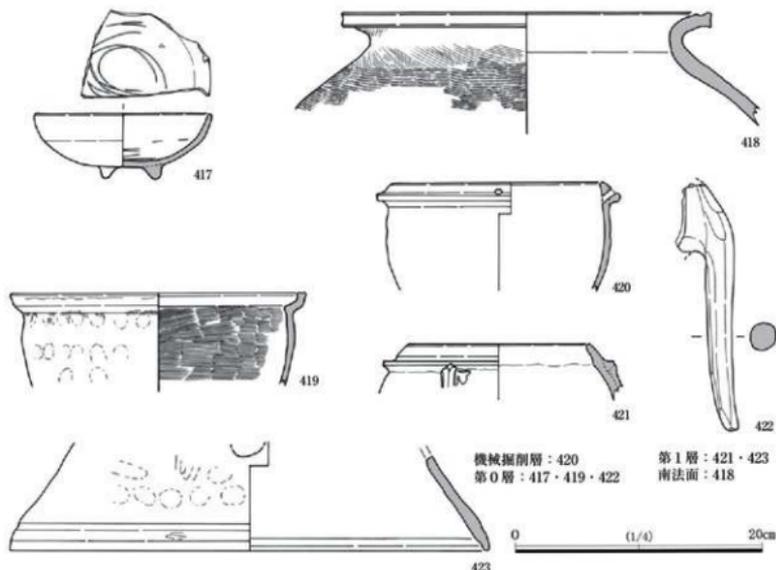


図89 08-2調査区 包含層出土瓦質土器

423は炬の台であろうか。円形の窓が開いている。外面にはミガキが施される。使用によるものか内面の磨耗が著しい。第1層出土。

東播系須恵器

図90-424～426は東播系須恵器の片口鉢。3点とも、底部と体部の境は丸みを帯び、体部は直線的に外上方に伸びて口縁に至る。外面には成形時のナデの痕が明瞭に残る。一方、内面下半は使用による摩滅が著しい。

しかし、口縁端部の形状に違いがある。424の口縁端部は細く上方に伸びる。底部はヘラ切り未調整。4分の1周しか残っていないため片口部はみられないが、類例から片口をもつと考えられる。復原口径26.5cm、高さ10.1cm。森田分類第Ⅱ期第1段階に属し、12世紀中葉～後半に位置づけられる。機械掘削層、第0層、第1層の各グリッドから出土した多数の破片が接合した。

425の口縁端部はわずかに肥厚する。片口部は小さく傾きも弱い。口縁部内面の一部が被熱している。第0層と第1層から出土した破片が接合した。

426(写真図版43)の口縁部は拡張され、断面L字状を呈する。第Ⅲ期第1～2段階で、13世紀後半～14世紀前半の所産。機械掘削層、第2層(上層)から出土した破片が接合した。

古瀬戸

427(写真図版44)は古瀬戸の筒形容器。外面と口縁部内面には厚く釉がかり、黄緑色に発色している。後期様式で15世紀に位置付けられる。機械掘削層と第0層から出土した破片が接合した。

常滑焼

428(写真図版43)は常滑焼(知多窯)の甕。口縁部は小さく外反し、端部内面がわずかにくぼむ。肩部が張り、腰部が屈曲するが体部は比較的直線的な構成をもつ。内外面とも施釉されている。常滑焼に特徴的な体部外面の押印紋は明瞭ではない。口径22.5cm、最大径37.2cm、高さ35.3cm。中野分類3～4形式で、12世紀後半～13世紀初頭の所産であろう。第0層、第1層、第2層の各グリッドから出土した多数の破片が接合した。

青磁

図91-429～435(カラー写真図版7)は青磁碗。

429は体部外面に鎬蓮弁紋を有する。内面は無紋。口縁部はわずかに内彎し、端部は尖り気味になる。口径13.0cm、高さ6.2cm、高台の厚みが薄くその径も3.2cmと小さい。高台部豊付けおよびその内側は露胎である。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅲ-2C類。13世紀中頃～14世紀初頭前後の所産。第1層出土。

430・431の口縁部は外反するが、429と同類であろう。430は第0層、431は第1層出土。

432・433も体部外面に鎬蓮弁紋を有するが、内面は無紋である。大宰府分類龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類で、13世紀前半の所産。432は機械掘削層と第0層、433は第0層出土。

434は体部下半のみの破片で、他の青磁碗に比べて若干肉厚である。外面にはヘラケズリの痕跡が明瞭に残る。第1層出土。

435も龍泉窯系青磁碗、削り出し底部。豊付けより内側は無施釉。第0層出土。

436・437は青磁皿。

436は底部と口縁部の境で屈曲し、口縁部は外上方に伸びる。外面には飛鉋の跡がみられる。底部外面は無施釉。口径10.0cm、高さ2.1cm。大宰府分類龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2a類で、12世紀中頃～後半の所産。437も青磁皿の口縁部。2点とも第1層出土。

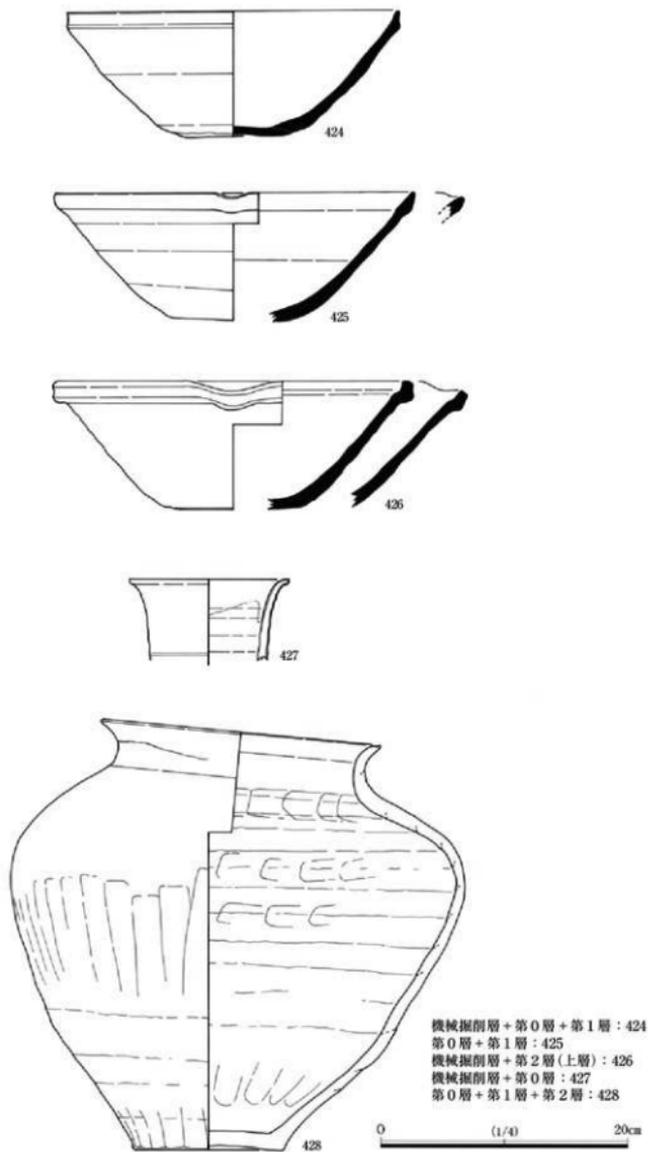
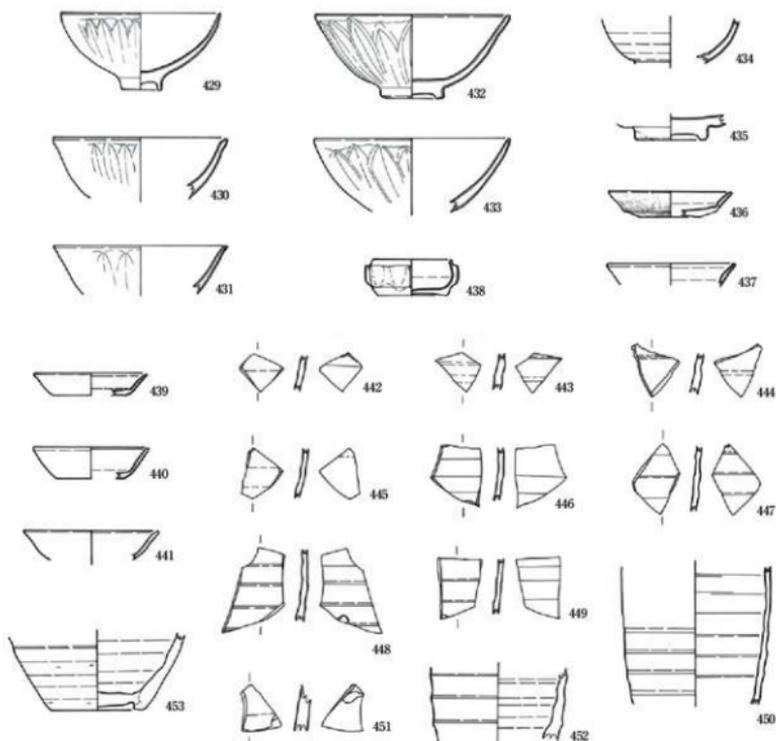


图90 08-2調査区 包含層出土束播系須恵器、古瀬戸、常滑焼



機械掘削層+第0層: 432
 第0層: 430・433・435・440・441・449・450
 第0層+第1層: 453
 第1層: 429・431・434・436~438・442~448・452
 第2層: 439
 北法面: 451

図91 08-2調査区 包含層出土輸入陶磁器

青白磁

438(カラー写真図版7)は青白磁(影青)合子の身。外形は菊花形で、口縁端部は器の内面に沿って薄く短く立ち上がり蓋受けとなる。型づくり成形であろう。内面から体部外面までは施釉されているが底部外面は露胎である。素地は白っぽくほとんど夾雑物を含まない。第1層出土。残念ながら蓋は出土しなかった。

白磁

439~441は白磁皿。いずれも破片資料だが、口縁端部が口禿げである以外は現存する範囲では底部も含めて全面に施釉されている。胎土は灰白色で硬質である。

439の口縁部は短く直線的である。大宰府分類白磁皿Ⅸ-1 a類。第2層出土。440は439よりも口径が少し大きく深い。皿Ⅸ-1 b類。第0層出土。441は復原口径11.0cmを測り、皿Ⅸ-1 c類。第0層出土。これらの類例は13世紀後半~14世紀前半に多い。

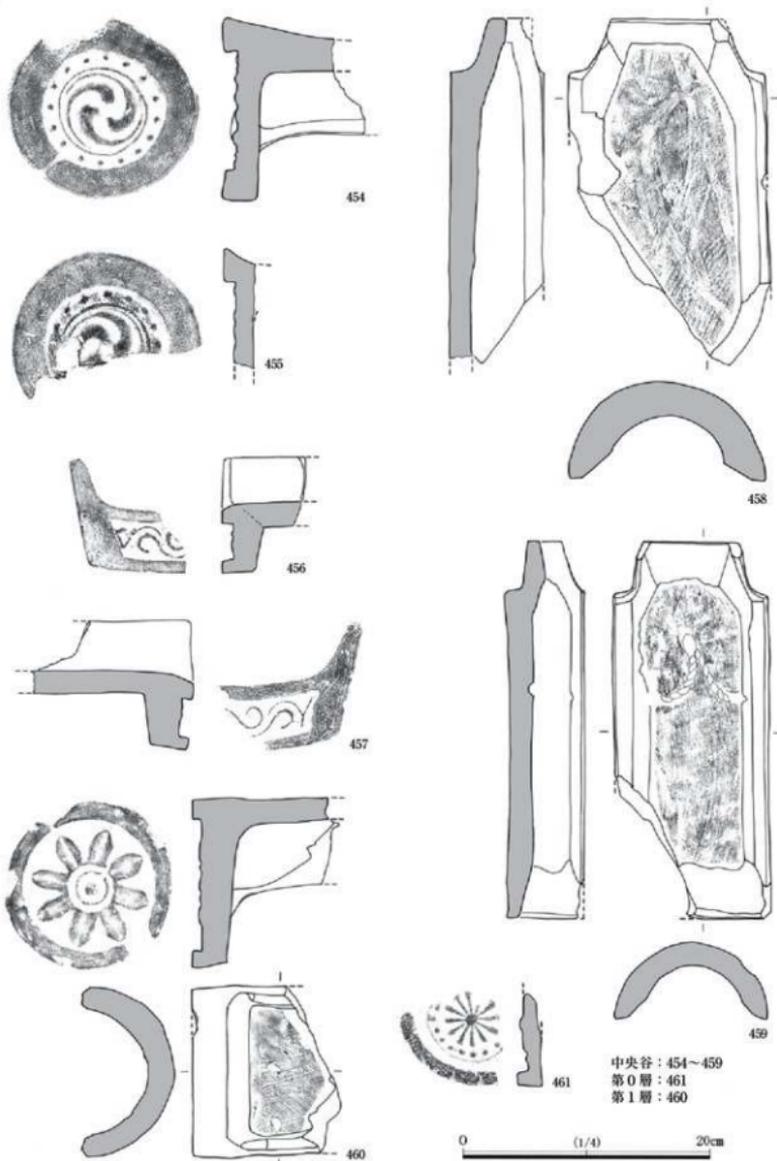


図92 08-2調査区 包含層出土中世の軒瓦、丸瓦

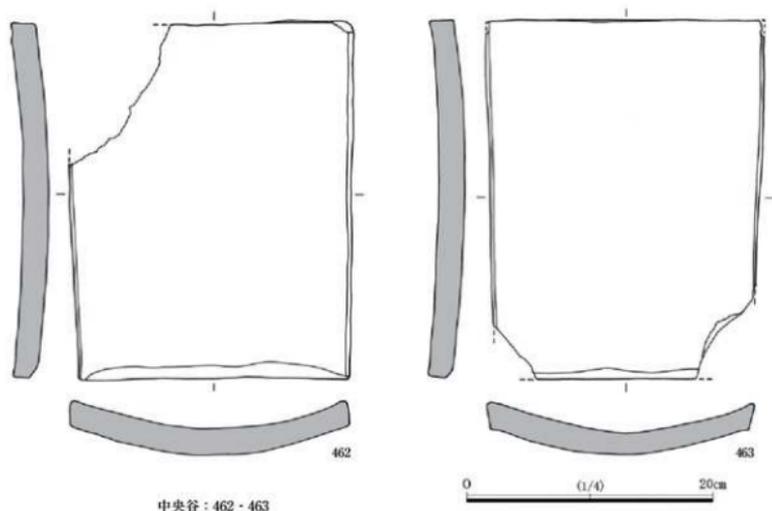


図93 08-2調査区 包含層出土中世の平瓦

褐釉陶器

442～453(カラー写真図版8)は褐釉陶器。

442～450は胴部片、451・452は胴下部片で、外面はいずれも粗く回転ヘラケズリされ凹凸がみられる。器壁は5mm程度と薄い。453の底部は上げ底風になっており、外面のヘラケズリは粗い。胎土には黒色斑点が含まれる。大宰府分類陶器壺(無耳壺)Ⅳ類に属し、13世紀後半～14世紀前半の所産であろう。449・450は第0層、453は第0層と第1層の破片が接合、442～448・452は第1層、451は調査区北西部の法面から出土した。なお、口縁部や頸部は出土していない。

中世の瓦

図92-454(写真図版44)・455は巴紋軒丸瓦。2点とも中央谷からの出土だが、3建物出土の瓦と同工である。

456・457(写真図版44)は唐草紋軒平瓦。456は瓦当左側に縦棧が付く。中央谷出土。

458・459は丸瓦。中央谷出土。

460(写真図版44)は軒丸瓦。単弁八弁、葉研彫り。瓦当内区中心に半球状の珠点があり、その外側に圓線が巡る。13～14世紀の復古瓦か。第1層出土。

461は菊花紋軒丸瓦。3建物出土の図41-138～147と同範。第0層出土。

図93-462・463は平瓦。凹凸面ともにナデ調整を施す。中央谷出土。

石鍋

図94-464(写真図版44)は石鍋。口縁部10分の1周程度の破片資料で現存部には隻取手穴はみられない。口縁部下に断面台形の鑿が削り出されている。木戸分類Ⅲ類-a-2に該当する。12世紀中頃～後半の所産。第1層出土。

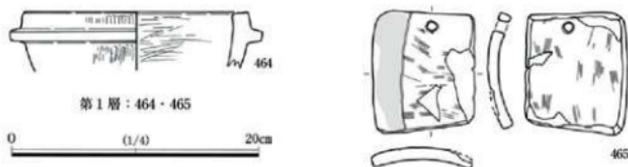


図94 08-2調査区 包含層出土滑石製品

温石

465(写真図版44)は滑石製石鍋を転用した温石。口縁部を活かし、平面台形に成形しているが、断面は元の石鍋の形状に沿って湾曲している。図示した上部には直径8mmの穴が開けられている。図中にアミフセしたのは罫が削り取られた部分で、その下部には痕跡が線状に残る。罫の位置からみて12～13世紀の石鍋を転用したものである。第1層出土。

火輪

図95-466は五輪塔の火輪。火輪としては比較的小振りで、下面の柄穴は深く角張っている。凝灰岩製だが、石英、角閃石、チャートが目立つことから二上山産ではなさそうである。遺存状況は悪く、半分しか残っていない上に上面の大半は剥落している。機械掘削層出土。

地輪

図95-467～図96-475(写真図版45)は五輪塔の地輪。機械掘削層から9基出土した。いずれも高さの低い直方体で、上面中央に水輪を受けるための半球形の柄穴がある。468の一面面は被熱している。全て薄片麻状黒雲母花崗岩である。

各地輪を採寸すると、

- 1: 高さ5寸各辺7尺の467(高さ15～16cm、各辺21～22cm)・468(高さ約16cm、各辺約21cm)
- 2: 高さ5寸各辺7尺の469(高さ約16cm、各辺26～27cm)
- 3: 高さ約6寸5分各辺9尺前後の470(高さ約19cm、各辺26～27cm)・471(高さ約19cm、各辺約27cm)・472(高さ約20cm、各辺約26cm)・473(高さ約19cm、各辺約29cm)
- 4: 高さ7寸各辺9寸の474(高さ約21cm、各辺26～27cm)・475(高さ約21cm、各辺約27cm)

に4分類できる。

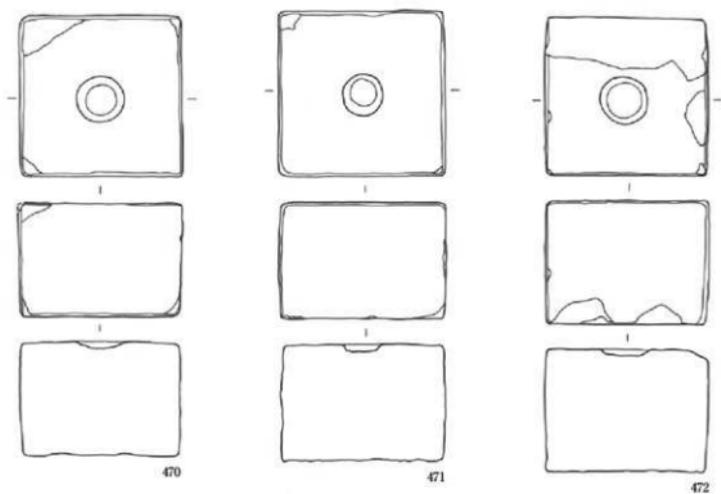
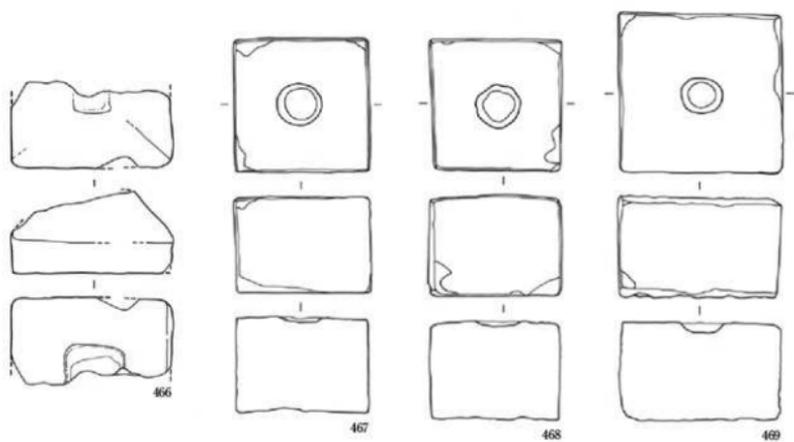
一般に五輪塔の地輪は低いものから高いものに変遷するとされるが、出土した9基の地輪は高さ5寸(約15cm)～7寸(約21cm)、各辺7寸～9寸(約27cm)の範囲におおむね収まり、時期は15～16世紀と推定される。

金属製品

図97-476～484は青銅製品。

476(カラー写真図版5)は唐の鏡を模倣し国産されたいわゆる唐式鏡の破片。縁は断面三角形に肥厚している。図示した背面側の左端が若干内側に屈曲していることから、八花鏡の可能性はある。全体に髹が立っており鑄造品としての質は悪い。8～9世紀のものと推定される。現状で127gを量る。機械掘削層出土。

477(カラー写真図版5)は青銅製の提子の提梁の座。上部から見ると金具の湾曲がほとんどない。環状部の左右にある直径2mmの穴に鉤を打ち本体に留める。向かって右側の穴には鉤が残っている。上



機械圖例層：466～472

0 (1/8) 40cm

图95 08-2調查区 包含層出土五輪塔火輪、地輪（1）

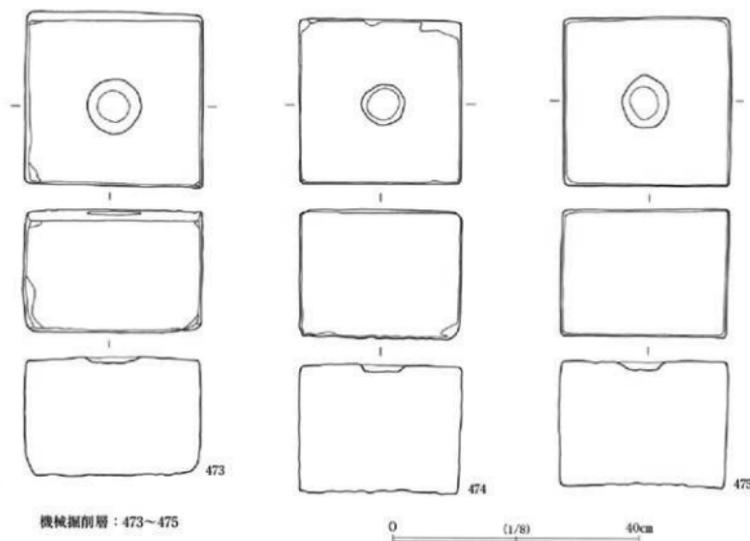


図96 08-2調査区 包含層出土五輪塔地輪(2)

部の直径5mmの穴で提梁と接合する。10.0g。15～16世紀に類例が多い。機械掘削層出土。

478～484(写真図版46)は銭貨。

478は開元通宝。2.1g。唐621年初鑄。第1層出土。この開元通宝には背面に文字が入っていないので、845年に補鑄したものではない。

479は和銅開珎。3.1g。日本708年初鑄。第2層出土。

480は神功開宝。1.6g。日本765年初鑄。第2層出土。

481は景德元宝。1.5g。北宋1004～1007年鑄造。機械掘削層出土。

482は紹聖元宝。1.7g。北宋1094～1097年鑄造。第1層出土。

483は聖宋元宝。2.3g。北宋1101年初鑄。第1層出土。

484は大観通宝。2.3g。北宋1107年初鑄。第0層～第1層(南法面)出土。

以上の7枚の他に、津田遺跡08-2区の調査では既に述べた第1面3建物の聖宋元宝1枚と大観通宝2枚、第1面の大観通宝1枚、第3面225落ち込みの天聖元宝1枚が出土した。

485～496は鉄製品。

485～493は釘。いずれも断面四角形のいわゆる和釘である。多くは頭部が犬状に変形している。485～490は機械掘削層、491・492は第0層、493は第1層から出土した。

494は鏝であろう。断面は長方形である。機械掘削層出土。

495は鑿と推定される。第1層出土。

496は鎌。刃長12.3cm。刃幅3.2cm。同一個体と考えられる茎も出土した。茎の刃部に近い部分の断面は長方形だが、柄の中に入る部分はさらに薄くなっている。第2層出土。

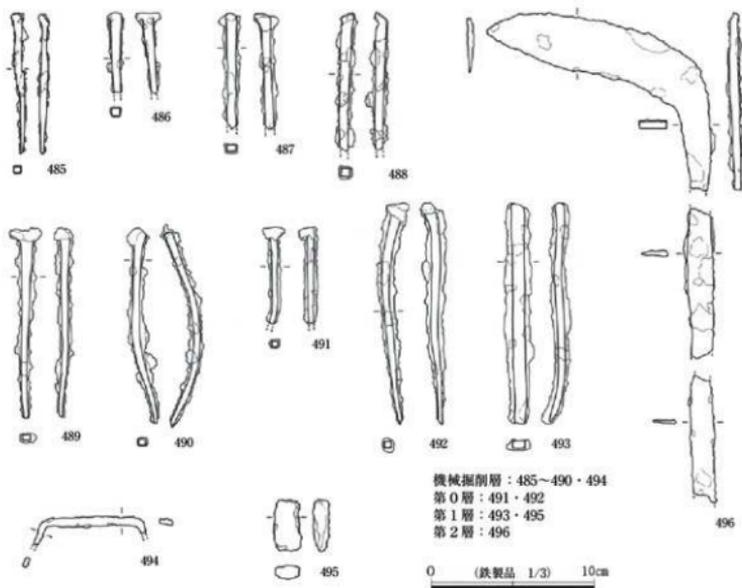
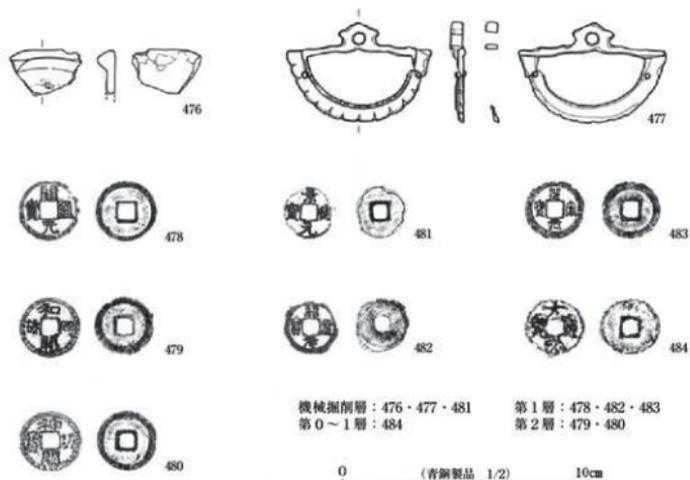


図97 08-2調査区 包含層出土金属製品

第8節 まとめ

第5章第3節～第7節で述べたように、08-2調査区では各遺構面で検出された遺構や包含層から出土した遺物は、傾向として上層が新しく下層が古い状況はみられた。しかし、斜面に立地するために上方からの流下や下方への転落、あるいは調査区内での自然と人為による削平や堆積が繰り返されたことによって、同一面で検出された遺構でも必ずしも同時期のものではなかった。

そこで、本節では出土遺物を手がかりとして各時代の遺構の変遷を整理しておく。

旧石器時代

第2層から、サヌカイト製の縦長剥片を素材とするナイフ形石器(図77-292)が出土した。ただし、風化が進んでおり原位置も保っていない。

縄文時代

第2層から、晩期の長原式土器がおそらく1個体分(図78-298～300)出土した。他に縄文土器と思しき土器片(301・302)も出土したが、時期や型式の認定はできなかった。

弥生時代

第2層から、中期の土器底部(図78-303・304)や石包丁(図77-296・297)が出土した。

以上、旧石器時代から弥生時代については、包含層からわずかな遺物が出土したが、遺構は伴わない。

古墳時代

遺構・遺物とも検出していない。

飛鳥時代～奈良時代(図98)

飛鳥時代から奈良時代の遺構は主に調査区北西部に分布し、具体的には第2面37・42・50・59・60・61・65・67・72・73土坑、43・83落ち込み、第2-2面134・136・159土坑、156落ち込みなど、土坑や落ち込みが多く、明確な建物などは見つからなかった。

なお、最下面にあたる第3面では、北西部では遺物を出土した遺構はなく、南東部の土坑やピットには中世の土器片が伴っており、わずかに225落ち込みの底に位置する227ピットから古代と思しき土師器片が出土したのみである。

遺構出土物としては、第2面83落ち込みの火頭形三尊埴仏(図71-282)と銅型(283)が特筆される。火頭形三尊埴仏は7世紀後半の淀川水系などに類例がみられる。この83落ち込みからは、古代の土師器や須恵器なども多く出土した。また、第0層出土の土製銅型(図79-305)や第2層出土の小形独尊埴仏(306)も、古代の仏教関連遺物として重要である。

第2面43落ち込みからは、7～8世紀の土器類、特に杯、蓋、壺、鉢、転用硯といった須恵器がまとまって出土した。

包含層からは、凹面に布目痕跡、凸面に縄タキがみられる平瓦など(図80-309～図81-314)が、第1層をはじめ機械掘削層や第0層といった中世の土器を多く含む層から、散発的に出土した。想像の域を出ないが、調査区よりも斜面の上方に古代の瓦を使った建物があり、それが中世以降に流されてきた結果とも考えられる。

古代の土師器は包含層からの出土は少なかった。

須恵器(図83-318～図84-362)は、第1層と第2層から比較的多く出土したが、特に先述の第2面43落ち込み周辺に多かった。

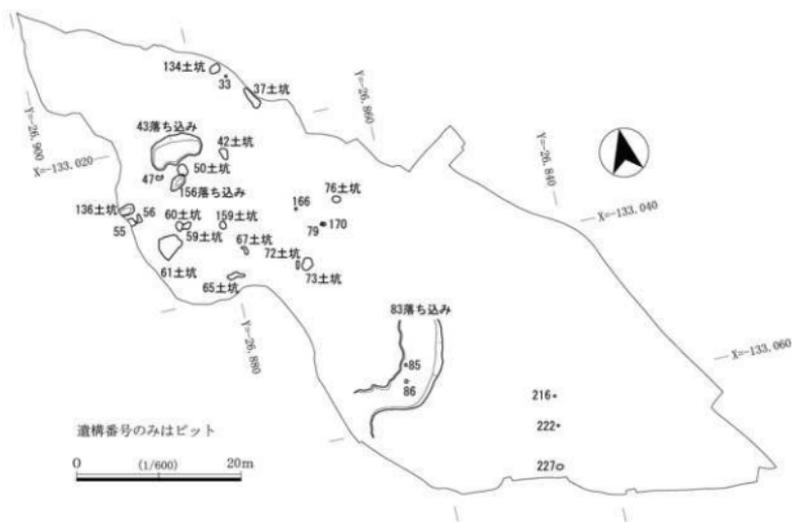


図98 08-2調査区 飛鳥時代~奈良時代の遺構

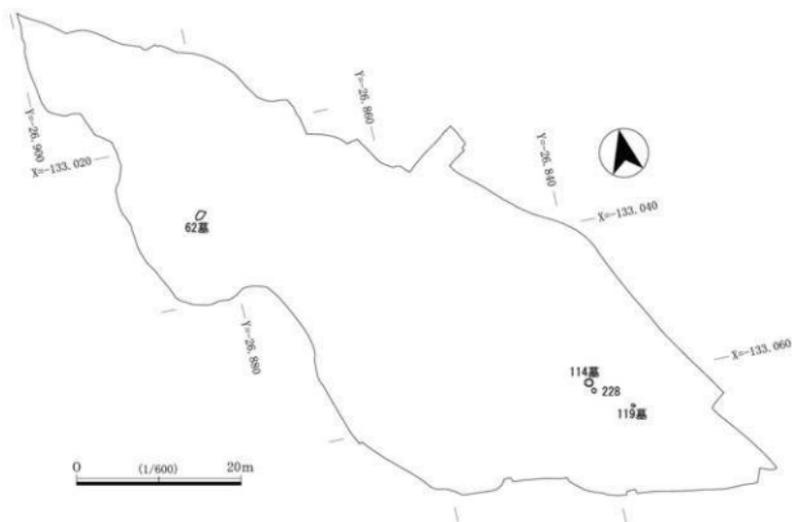


図99 08-2調査区 平安時代の遺構

平安時代(図99)

平安時代の遺構としては、第2面62・114・119墓(図65)がある。

62墓からは、9世紀中頃～後半の尾張地域産の灰軸陶器四耳壺(図66-237)と、土師器や須恵器の小片、鉄釘、焼土塊、炭化物、微細な焼骨片が出土した。四耳壺内には焼けた藁のような植物遺体と炭化物、小石、土師器皿片が入っていた。

114墓からは、9世紀後半～10世紀前半の播磨地方に類例のある須恵器双耳壺(瓶)(図66-240)と、灰軸陶器小瓶、鉄製毛抜き、鉄釘、10世紀前半の土師器「て」の字皿、土師器片、炭片が出土した。

119墓からは、9世紀後半～10世紀初頭の灰軸陶器長頸壺(瓶)(図66-257)が出土した。壺の中に焼骨(写真図版48)が納められていた。

3基とも土器は口縁部が打ち欠かれ、逆位に据えられていた。出土状況と内部に焼骨片が納められていることから火葬墓と考えるとよい。土器は9世紀中頃ないし後半から10世紀前半の所産で、62墓→119墓→114墓の順に構築されたと考えられるが、いずれも壺(瓶)が他地域産である点に注意を要する。

第3面228ピットからは、土師器「て」の字皿片が出土した。

包含層出土遺物では、10世紀後半の近江ないし美濃産と推定される緑釉陶器(図86-366～369)や灰軸陶器広口壺(瓶)(図86-370)、12世紀の東播系須恵器の片口鉢(図90-424)が目される。

鎌倉時代(図100)

遺構の最も多い時期である。主に瓦器椀や輸入陶磁器を伴うことを根拠に鎌倉時代としたが、ピットなどについては瓦器片を含むものをこの時代と推定した。第1面検出の遺構群、調査区南東部の第2面と第3面の遺構群が該当する。代表的な遺構として、第1面2墓、18竪穴、235溝、31溝がある。

2墓(図48)は周囲を石列で囲った墓である。鉄釘が出土したことから、木棺が納められていた可能性がある。青磁碗2点、青磁皿3点、瓦器椀1点、鉄製短刀1振、鉄釘などの一括遺物(図49)が特に重要である。伏せた状態で重なって出土した青磁碗2点(図49-190・191)は、大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類。3点の青磁皿(192～194)は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2a類とⅠ-3a類、同安溪系青磁皿Ⅰ-1a類。瓦器椀(196)は桶栗型Ⅳ-1期である。青磁碗・皿は大宰府編年によると12世紀中頃～後半だが、瓦器椀と土師器皿は13世紀中頃～後半に属することから2墓はこの時期の所産であろう。

18竪穴(図50)は、その床面に作業台と思しき大石や小鍛冶炉と考えられる24^号などがあり、埋土から瓦器、土師器、青磁碗、鉄釘、滓、焼土塊、輪の羽口などが出土した。

18竪穴周辺の22土坑や25・30ピットからも、滓や焼土塊などが出土した。

以上の状況から、18竪穴は、13世紀後半の鍛冶工房であったと考えられる。

なお、第2面93焼土坑(図64)や調査区中央部の135焼土坑(図73)は、周囲が被熱し、焼土塊や炭片が出土する状況から、火化施設あるいは製炭窯と推定した。出土したわずかな土師器片を手がかりに93焼土坑を中世の所産とすると、鍛冶工房である18竪穴に炭を供給する製炭窯と考えられる。ただし、135焼土坑出土の少量の須恵器や土師器では時期が確定しがたく、先に述べた平安時代の火葬墓に伴う火化遺構であった可能性も否定できない。

31溝と235溝(図52)は、調査区北西部、第1面3建物の北方に位置する。調査時には安土桃山時代以降の3建物の雨落ち溝とも考えたが、出土した瓦器椀や土師器皿から鎌倉時代の溝と判明した。

この他に、第1面1石群(図54)、4石組(図55・56)、5石列、第2面32石群(図61)、89石群(図62)、84石囲い(図63)といった、この周辺に産する花崗岩や珩岩を用いて構築された遺構も、検出状



図100 08-2調査区 縄倉時代の遺構



図101 08-2調査区 安土桃山時代の遺構

況や周辺から出土した遺物からみて鎌倉時代のものである可能性が高い。

包含層出土遺物には、瓦器や土師器の他に、東播系須恵器の片口鉢(図90-425・426)、常滑焼の甕(図90-428)、褐軸陶器(図91-442～453)などもみられた。

室町時代

遺構・遺物とも希薄であるが、包含層から古瀬戸後期様式の筒形容器(図90-427)が出土した。

安土桃山時代(図101)

寺と石仏列がみられる。

3建物(図29～32)は、礎石群と瓦などの多量の遺物で特徴付けられる。掘方のある8個の礎石を中心に復原すると、2間×2間の宝形堂などが想定できる。南側には沓観石らしき石も存在し、その周辺の土は三和土のように締りが良い。

約5000片出土した瓦は、巴紋軒丸瓦、宝珠唐草紋軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦、雁振瓦、文字瓦、隔木蓋瓦など16世紀後半のもの(図33-96～図40-137)が主体を占めるが、13世紀後半の小型菊花紋軒丸瓦や剣頭紋軒平瓦(図41-138～図42-158)も含まれる。土師器皿、石塔の相輪、鉄釘などもみられた。さらに、悪仏の尊像部(図43-169)、線刻十一面観音鏡像(170)、獅子喃形鍔座(171)、金銅製の鈴(172)、取手(173)、覆輪(174)といった宗教色の強い青銅製品も出土した。

26石仏列(図45)の石仏は、16世紀後半の作と推定される阿彌陀如来である。調査時には4体が、顔を西に向け、南北に並んで立っていた。その南側で伏していた1体と機械掘削中に出土したもう1体と合わせて、6体が並んでいた可能性がある。

門、塔、鐘楼、経蔵、僧房などは検出できなかったが、以上の状況から一堂と阿彌陀仏列が認められ、安土桃山時代あるいはその後この地に寺院が存在したことが明らかとなった。

さて、調査地が面する円通谷とそこを流れ下る円通川はともに「エンツ」と呼ばれている。地元ではこの地名はかつてこの地に存在した「円通寺」に由来すると言い伝えられ、「興福寺官務標疏」なる古文書に記された天平3(731)年創建と記される津田寺がこれに相当するともいう。また津田の集落に現存する専光寺所蔵の天和2(1682)年の文書と伝えられる「当郷田跡名勝誌」には、平安時代に惟喬親王が凱遊した際この寺で休憩したということ、南北朝から室町期にはこの寺の衆徒も地元の豪族とともに争乱に加わったこと、つづく戦国末期の天正年間にはこの堂宇を破却してその材を転用して南河内の小山城を修築したこと、その後荒れるにまかせたままの状態となっていたが寛文9(1669)年に小堂が建てられたこと、それがやがて現在の場所に移されたことなどが記されている。

しかし、近年の馬部隆弘氏の研究(馬部隆弘 2004「城郭由緒の形成と山論—津田城主津田氏」の虚像と北河内戦国史の実態—」『城館史科学』第2号 城館史科学会、同 2005「偽文書からみる畿内国境地域史—「椿井文書」の分析を通して—」『史敏』2005春号(通巻2号) 史敏刊行会、同 2008「椿井政隆による偽文書創作活動の展開」『忘れられた霊場をさぐる 3—近江における山寺の分布』栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団)などによると、「興福寺官務標疏」は江戸時代の19世紀初頭に創られた偽書であり、その記述に基づく後世の文書類についても厳密な検討が必要だとされる。

ただし、今回の調査では、白鳳時代7世紀後半と思しき火頭形三尊埴仏、平安時代9～10世紀の火葬墓、鎌倉時代13世紀の菊花紋小形軒丸瓦と剣頭紋軒平瓦、安土桃山時代16世紀後半の礎石建物などが出土した。伝承や文書がそのままには信用できないとしても、この地に時代を超えて宗教や埋葬に関連の深い遺構・遺物が存在していたことは事実として認められる。

第6章 津田遺跡出土石材の石種とその採石地

奥田 尚

はじめに

津田遺跡から出土した建物の礎石、石造物など、及び遺跡東方の山中にみられる石造物4体の石材を観察した。また、石造物の石材産地と推定される谷に分布する岩石の調査もした。清水谷に残る石切り場の石材調査については枚方市教育委員会と財団法人枚方市文化財研究調査会の方々の協力を得た。調査の結果について述べる。

石種の特徴

観察した石種はアブライト質黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩、弱片麻状黒雲母花崗岩、片麻状斑状黒雲母花崗岩、玢岩A、玢岩Bである。

アブライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が4～10mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が4～10mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2～3mm、量がごくごく僅かである。

このような岩相を示す石は当遺跡西方の清水谷の入口付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相に似ている。黒雲母花崗岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が4～8mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が3～8mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2～3mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は当遺跡から南に入る円通谷や西方の清水谷流域にみられる。

斑状黒雲母花崗岩：色は灰白色である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～3mm、量が多い。長石は灰白色で、斑晶と基質をなすものがある。斑晶をなす長石は、粒径が6～10mm、量が僅かである。基質をなす長石は、粒径が1～3mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1～2mm、量がごく僅かである。

このような岩相を示す石は交野市森付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

弱片麻状黒雲母花崗岩：色は灰白色で、微かに片麻状を示す。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1.5～2mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が2～4mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、粒状で粒径が1～2mm、量が僅かである。

このような岩相を示す石は交野市森付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

弱片麻状斑状黒雲母花崗岩：色は灰白色で、微かに片麻状を示す。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～3mm、量が中である。長石は灰白色で、斑晶と基質をなすものがある。斑晶をなす長石は、粒径が6～8mm、量が僅かである。基質をなす長石は、粒径が1～3mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1～2mm、量が中である。

このような岩相を示す石は交野市森付近に分布する黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。

玢岩A：色は暗灰色である。斑晶鉱物は長石と角閃石である。長石は灰白色、柱状で粒径が0.5～1mm、量が中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が0.5mm、量が中である。石基はガラス質、やや粒状である。

このような岩相を示す石は岩脈として分布する石で、当遺跡の西方にある清水谷の入口付近にみられる。

玢岩B：色は暗灰色である。斑晶鉱物は長石と角閃石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が2～6mm、量が多い。角閃石は黒色、柱状で、粒径が1～3mm、量が僅かである。石基はガラス質、やや粒状である。

このような岩相を示す石は岩脈として分布する石で、当遺跡の西方にある清水谷の入口付近にみられる。

石材の使用傾向

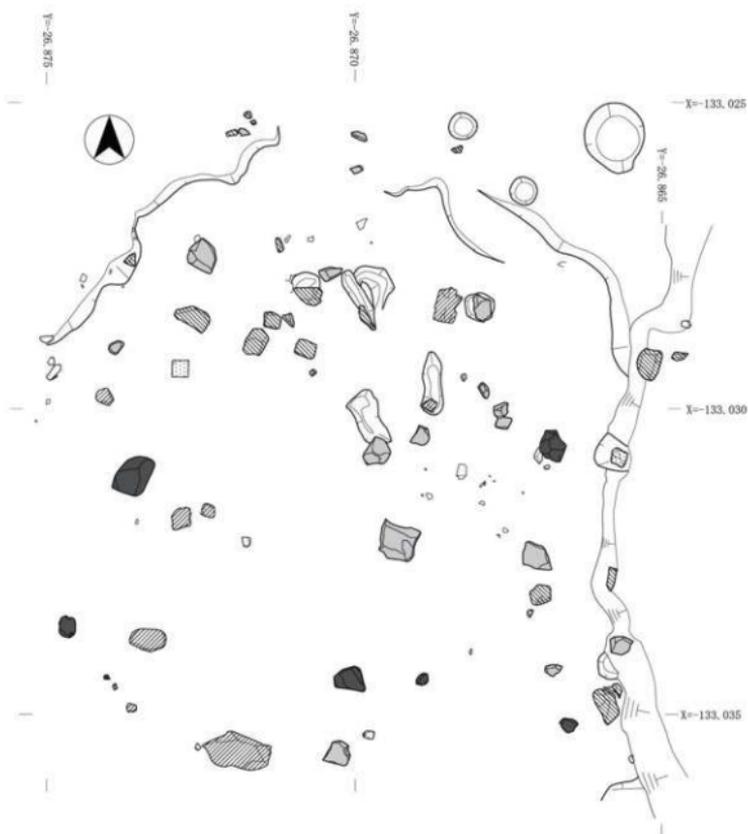
調査地に分布している自然石および自然石の礎石の石種はアブライト質黒雲母花崗岩、弱片麻状黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、玢岩A、玢岩Bであり、石造物の石種は弱片麻状黒雲母花崗岩、アブライト質黒雲母花崗岩である(図102)。また、遺跡東方の山中にみられる石造物は片麻状斑状黒雲母花崗岩、斑状黒雲母花崗岩である。

石仏・五輪塔など(第5章)のような加工された石材についてみれば、斑状黒雲母花崗岩、弱片麻状黒雲母花崗岩、片麻状斑状黒雲母花崗岩で、交野市森付近にみられる黒雲母花崗岩の岩相の一部に似ている。しかし、礎石や散在する自然石のアブライト質黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、玢岩A、玢岩Bは、清水谷入口付近で採石できる石であり、黒雲母花崗岩は遺跡の横にある円通谷の川原で採石できる石である。

清水谷中流域の西側斜面には石材を切り出した跡がみられる。枚方市津田の春日神社境内にある天保3(1832)年銘の石鳥居や天保8(1837)年銘の石橋は斑状花崗閃緑岩である。この石鳥居や石橋の石材は清水谷の石切り場跡にみられる花崗閃緑岩の岩相と似ている。石鳥居の石材は「清水谷から切り出した」と伝えられている。出土した現代の唐白の石材もこの石切り場跡にみられる黒雲母花崗岩の岩相と似ている。幕末の文久頃に築造されている楠葉台場跡にみられる石材にもアブライト質黒雲母花崗岩や黒雲母花崗岩と同質の石材が使用されている。また、吹田市の旧西尾家の庭にある4基の石燈籠もこの石切り場跡の黒雲母花崗岩と岩相的に似ている。このようなことから、清水谷の石切り場では近世末から近代にかけて盛んに採石をされていたようである。

加工された出土石造物に清水谷の石切り場跡付近の岩相を示す石材がみられないことから、近くではあるが、出土した加工石造物は清水谷の石切り場が稼行していた時期とは異なる時期の可能性がある。

編者注：奥田 尚氏には、図102に掲げた第1面3建物の石材以外にも、第1面26石仏列や包含層出土の五輪塔地輪等についても石材を鑑定して頂いた。それらの成果については、第5章の当該箇所に記載している。



石材の石種の凡例

- アブライト質黒雲母花崗岩
- 黒雲母花崗岩
- 弱片麻状黒雲母花崗岩
- 珩岩 A
- 珩岩 B

0 (1/80) 4 m

図102 08-2調査区 第1面3建物石材

表5 土器・瓦等観察表

調査区	調査番号	遺物番号	写真 位置 図版	出土遺物 →部位	器種	口径 高さ 底径 (cm)	色 調	胎 土	成形・調整など	備 考
06 1 調査区	3	4	—	—	砂質磁層	17.22 —	外)2.5/8/2/灰白色 内)10/10/8/3/黄褐色	3mm以下の長石、石英、チャート、赤褐色鉄、微細な雲母を多く含む	外)瓶口縁方向のハケム 内)口縁部後方のハケム、体部はハケムせず	第I種式
					2次堆積層	外)10/8/7/2/2/5/黄褐色 内)10/10/8/1/灰白色 底)10/10/8/1/灰白色	3mm以下の長石、石英、微細な雲母を多く、1.5mm以下のチャートを少し含む	外)ナガム、微細直線紋2層→(体部7.5/1.1cm幅)内)ユビオヤシ	第II種式	
	14	5	—	—	砂質磁層	— 3.7	外)10/10/8/3/黄褐色 底)5/2/1/黒色 内)10/10/8/3/黄褐色	3mm以下の長石、2.5mm以下の石英を多く、2mm以下のチャートを少し含む	外)磨滅のため不明 内)ユビオヤシ後削りハケム	底面外縁部底面外 部生中層
					5次落ち込み	33.22 —	外)10/10/7/3/2/5/黄褐色 内)10/10/8/2/2/5/黄褐色 底)10/10/8/3/2/5/黄褐色	3mm以下の石英、長石、微細な雲母を多く、2mm以下のチャート、赤褐色鉄を多く含む	外)ユビオヤシ、ナゲ 内)ユビオヤシ後ハケム	唇子、及び口縁以降、口縁部上面に黒点あり 底生後部
	15	7	50	—	土師器 杯	19.00 —	外-(内)6/10/7/8/褐色	3mm以下の白色鉄、微細な石英、長石、雲母を多く含む	外)底面→ラケツリ 内)放射状埋文	足船筋 平城宮前 8世紀前半
						8	50	土師器 杯	20.60 —	外-(内)2.5/7/5/8/赤褐色 底)10/10/8/3/黄褐色
		9	21	50	土師器 杯	13.20 3.0	外)17.5/10/6/褐色 内)17.5/10/8/3/黄褐色 底)7.5/10/6/褐色 2.5/2/2/1/黒色	1mm以下の長石、石英、チャートを少し含む	外)ユビオヤシ、ナゲ	8世紀か-
						10	50	土師器 甕	23.22 —	外)17.5/10/7/4/2/5/褐色 内)5/17/7/6/褐色 底)10/10/7/3/2/5/黄褐色
		11	50	土師器 甕	16.70 —	外)17.5/10/6/4/2/5/褐色 内)17.5/10/7/6/褐色	2mm以下の長石、石英、1mm以下の黒色鉄、微細な雲母を多く、1mm以下のチャートを少し、3mmの長石を1粒含む	外)唇子明き後カサメ 内)ケツリ	8世紀	
					12	50	甕形器 杯蓋	16.60 —	外-(内)6/10/6/灰白色	3mm以下の長石、石英を多く、1.5mm以下のチャートを少し含む
		13	50	甕形器 杯蓋	16.60 —	外)17.5/10/6/1/灰白色 内)5/17/7/1/灰白色	3mm以下の長石、石英、微細な雲母、2mm以下の黒色鉄を多く含む	回転ナゲ	古代 尾島V 7世紀末→8世紀初頭	
					14	50	甕形器 杯	12.4 4.2	外-(内)6/10/7.5/17/1/灰白色	2.5mm以下の長石を多く、3mm以下の石英、1mm以下の赤褐色鉄を少し含む
		15	50	甕形器 杯	12.60 3.5	外-(内)6/10/7/1/灰白色	2mm以下の長石を多く、1mm以下の石英を少し、2.5mmのチャートを1粒含む	外)底面回転→ラケツリ後削り 内)ナゲ	平城宮 I 7世紀末→8世紀初頭	
					16	21	50	甕形器 杯	13.7 3.7	外-(内)7/10/7/10/3/灰白色 内)17/10/8/10/6/赤褐色
17	50	土師器 杯	14.13 3.2 39.00	外-(内)17.5/10/7/4/2/5/褐色 底)5/10/6/6/褐色	1.5mm以下の長石、石英、1mm以下の赤褐色鉄を少し、微細な雲母を多く含む	外)回転→ラケツリ	甕形器の製作手法 平城宮 I 7世紀末→8世紀初頭			
			18	50	甕形器 杯	— — —	外-(内)7.5/17/1/灰白色 底)17/10/8/10/6/赤褐色	1.5mm以下の長石、石英、3mm以下の長石を少し、微細な雲母を多く含む	外)底面回転→ラケツリ	平城宮 I～II 7世紀末→8世紀初頭
19	50	土師器 杯	17.5/10/7/4/2/5/褐色 17.5/10/7/6/褐色	3mm以下の長石、石英、チャート、赤褐色鉄、微細な雲母を多く含む	外)底面回転→ラケツリ	甕形器の製作手法 平城宮 I 7世紀末→8世紀初頭				
			20	50	甕形器 杯	17.5/10/7/4/2/5/褐色 17.5/10/7/6/褐色	2mm以下の長石、長石を多く含む	外)底面回転→ラケツリ	平城宮 I 7世紀末→8世紀初頭	
21	50	甕形器 杯	15.5 4.1 11.4	外-(内)10/6/10/灰白色 底)17/10/8/10/6/赤褐色	3mm以下の長石、長石、チャートを多く、3mmの花崗岩を少し含む	外)胎土層上げ後削り、 底面回転→ラケツリ後削り	高台2箇所→ひび割れ 平城宮 III 8世紀前半			
			22	21	50	甕形器 杯	15.2 4.6 8.8	外-(内)5/16/1/黄褐色 底)10/10/6/1/灰白色	2mm以下長石を多く、3mmの長石を1粒含む、2mm以下の石英を少し、微細な雲母を多く含む	外)底面回転→ラケツリ後削り 内)ナゲ
23	50	甕形器 杯	— — —	外-(内)10/6/10/灰白色	1.5mm以下の長石、長石を多く含む	外)底面回転→ラケツリ、 体部回転→ラケツリ後削り	平城宮 I 7世紀末→8世紀初頭			
			24	50	甕形器 杯	— — —	外-(内)10/6/10/灰白色 底)10/6/10/6/赤褐色	3mm以下の長石、長石を含む	外)底面回転→ラケツリ	平城宮 I 7世紀末→8世紀初頭
25	50	甕形器 杯	— — —	外-(内)10/6/10/灰白色 底)17/10/8/10/6/赤褐色	1mm以下の長石、石英、黒色鉄を多く含む	外)底面回転ナゲ	底面外縁にひび入る 平城宮 I～II 7世紀末→8世紀初頭			
			26	50	甕形器 杯	— — —	外-(内)5/17/1/灰白色 底)17.5/17/1/灰白色	1.5mm以下の長石、石英、チャート、微細な雲母を多く、2.5mmの長石を1粒含む	外)底面回転→ラケツリ	やや磨滅 平城宮前 8世紀前半
27	21	50	—	甕形器 杯	10.00 4.5 6.4	外-(内)6/10/7.5/16/1/灰白色	1.5mm以下の長石、長石、微細な雲母を多く、3mmの長石を1粒含む	外)回転→ラケツリ後削り 内)ナゲ	平安京 I 割 8世紀前半	

調査区	調査番号	出土遺構・層位	遺構	口径 高さ 底径 (cm)	色調	胎土	成形・調整など	備考	
OS 1 調査区	28	50層	甕形器 蓋	—	外)N7/0R白 内)N5/0R白 期)N6/0R白	3mm以下の灰石、石灰を多く含む	外)底部へラブリ	7世紀	
	29	50層	甕形器 蓋	— (8.6)	外)N5/0R白 内)N7/0M白	2mm以下の灰石、石灰を少し含む	外)底部へラブリ	内)底部に灰を被る 8世紀	
	30	50層	甕形器 鉄線形鉢	(18.0)?	外)7.5V5/1R白 内)期)7.5V6/1R白	1mm以下の灰石、石灰を多く含む	外)内)側面ナゲ後縁の 横方向へラブリ	8世紀	
	31	21	50層	甕形器 蓋	—	外)・内)期)7.5V5/1R白	3mm以下の灰石、2mm以下の石灰を 少し、5mmのチャートを1粒含む	縦方向のナゲ	底面5角形状 古代
	32	20層	瓦 筒	(10.9) —	外)2.5V8/1R白 内)2.5V7/2R黄褐色 内)期)2.5V6/1R白	2mm以下の灰石、1.5mm以下の長石、 微細な雲母、赤褐色粒を多く含む	外)体部の縦へ横方向の へラブリ	灰面の吸着不良、吸熱、 内)部に紅土層あり 横断面1-1-2型か 13世紀後半～14世紀前 半か	
	33	50層上層	土師器 皿	(7.4) 1.2	外)・内)10V7/2Cに灰い黄褐色 期)10V8/2R白	1mm以下の灰石、石灰、雲母を多く、 チャートを少し含む	ナゲ、口縁部横方向ナゲ	12～13世紀	
	34	50層上層	土師器 皿	(7.1) 1.2	外)7.5V8/2Cに灰い褐色 内)10V7/2Cに灰い黄褐色 期)5V7/2Cに灰い褐色	1mm以下の灰石、石灰、雲母を多く、 チャートを少し含む	口縁部横方向ナゲ 外)体部へラブリ	12～13世紀	
	35	50層上層	瓦 筒	(13.9) —	外)・内)N5/0R白 期)7.5V8/1R白	微細な石灰、長石を少し、3mm大の 石灰を1粒、微細な雲母を多く含む	外)土師土結合あり 内)縦へ横断面あり	横断面型2-2-3型 13世紀前半	
	36	50層上層	平瓦	—	外)・内)期)N6/0R白	3mm以下の灰石、長石、微細な雲母 を多く、2mm以下のチャートを少し含む	内)コゴケ、縦へ横 方向のナゲ 期)右目圧痕(6本/3mm)、 縦へ横、端部取付幅2mm	横断面 鎌倉時代	
	37	51瓦路	甕形器 杯蓋	(14.0) —	外)・内)N5/0R白 期)2.5V8/2R赤色	3mm以下の灰石、石灰、赤色粒を多 く、5mmのチャートを1粒含む	外)側面へラブリ	横断面に灰を被る 受け差大 平城宮前 8世紀前半	
	38	51瓦路	土師器 皿	(7.2) 1.5	外)・内)10V7/2Cに灰い黄褐色 期)10V7/2Cに灰い黄褐色	1mm以下の灰石、石灰、微細な雲母 を多く、2mm以下の赤褐色粒を少し 含む	外)コゴケ、ナゲ	12～13世紀	
	39	51瓦路	土師器 皿	(7.3) —	外)・内)期) 10V7/2Cに灰い黄褐色	1mm以下の灰石、石灰、チャート、赤 褐色粒を少し、微細な雲母を多く含む	外)コゴケ、ナゲ 内)工具の当たり?	12～13世紀	
	40	51瓦路	土師器 皿	(8.7)? —	外)・内)7.5V7/2Cに灰い褐色 期)7.5V8/2R黄褐色	1.5mm以下の灰石、長石、赤褐色 粒、微細な雲母を多く含む	ナゲ	12～13世紀	
	41	51瓦路	瓦 筒	—	外)・内)N3/0R灰 期)N8/0R白	1mm以下の石灰を少し含む	外)口縁部に横へ横方向 へラブリ	横断面型3-3型～横1- 1型 12世紀後半～13世紀 前半	
	42	51瓦路	瓦 筒	—	外)N4/0R白 内)N3/0R灰 期)7.5V7/1R白	3mm以下の灰石、長石、1.5mm以下の チャート、微細な雲母を多く含む	内)縦断面ナゲ 期)右目圧痕(6本/3mm)、 右端部取付幅2.5mm、 側面の取付幅2.5mm	室町時代	
44	中世洪水砂 層	土師器 杯	(15.4) —	外)・内)期)5V8/6褐色	1mm以下の灰石、長石、赤色粒、雲 母を多く、2mm以下の赤褐色粒を少 く含む	外)縦へ横方向のへラ ブリ	平城宮前 8世紀前半		
45	中世洪水砂 層	土師器 杯	—	外)・内)5V8/6褐色 期)5V8/4Cに灰い褐色	2.5mm以下の白色粒、1mm以下の長 石、石灰、雲母、2mm以下の赤褐色 粒を多く含む	外)縦へ横方向のへラ ブリ	平城宮前 8世紀前半		
46	中世洪水砂 層	土師器 杯	(16.7) —	外)・内)5V7/6褐色 期)7.5V7/6褐色	1mm以下の灰石、長石、1.5mm以下の チャートを少し含む	外)底部へラブリ 内)放射状腐文	平城宮前 8世紀前半		
47	中世洪水砂 層	土師器 杯	— (13.0)	外)・内)5V8/6褐色 期)5V8/4Cに灰い褐色	3mm以下の長石を僅かに、2mm以下 の石灰、チャート、赤褐色粒を少し 含む	内)縦断面ナゲあり?	平城宮前か 8世紀前半		
48	中世洪水砂 層	土師器 筒	(11.0) —	外)10V8/2黄褐色 内)10V7/2Cに灰い黄褐色 期)10V8/2R白	1mm以下の灰石、長石、雲母、1.5mm 以下のチャートを多く、5mm以下の赤 褐色粒を少し含む	外)ナゲ 内)放射状工具による横方向 のナゲ	平城宮前 7世紀末～8世紀初頭		
49	中世洪水砂 層	土師器 筒	(8.9) —	外)7.5V8/2黄褐色 内)7.5V8/4黄褐色 期)7.5V7/4Cに灰い褐色	1.5mm以下の灰石、石灰、チャート、 微細な雲母を多く含む	外)コゴケ、ナゲ 内)横方向のへラブリ	8世紀後半		
50	中世洪水砂 層	土師器 筒	(19.2) —	外)7.5V7/4Cに灰い褐色 内)7.5V8/4黄褐色 期)7.5V8/4Cに灰い褐色	1mm以下の灰石、石灰、赤色粒、雲 母を多く、赤褐色粒を少し含む	横方向ナゲ	8世紀か		
51	中世洪水砂 層	土師器 筒	(21.0) —	外)7.5V7/4Cに灰い褐色 内)10V7/2Cに灰い黄褐色 期)10V8/2黄褐色	2mm以下の灰石、石灰、微細な雲母 を多く、1.5mm以下のチャートを少し 含む	外)斜めなし、縦方向のハ ケ	口縁部に灰面あり 8世紀前半		
52	中世洪水砂 層	土師器 筒	(19.4)? —	外)・内)10V7/2Cに灰い黄褐色 期)7.5V7/4Cに灰い褐色	2mm以下の灰石、微細な雲母を多く、 1.5mm以下のチャートを少し含む	外)内)横方向のナゲ	8世紀か		
53	中世洪水砂 層	土師器 筒	(28.0) —	外)10V8/4黄褐色 内)10V8/2黄褐色 期)7.5V8/4黄褐色	1mm以下の灰石、石灰、チャート、雲 母を多く、赤褐色粒を少し含む	外)体部は斜め方向のハ ケ	8世紀		
54	21	中世洪水砂 層	土師器 筒	—	外)・内)7.5V7/6褐色 期)7.5V8/2黄褐色	3mm以下の灰石、長石を多く、3mm以 下のチャート、赤褐色粒を少し含む	外)縦方向のハ ケ 内)コゴケ後縁一部放射 状工具によるナゲ	肥前991付 8世紀	

調査区	調査点	写真 番号	出土遺構 ・層位	器種	器高 或径 (cm)	色調	胎土	成形・調整など	備考
OS 1 調査区	55	中世洪水砂 層	土師器 黄	外・内) 10YR7/2に灰・黄褐色 層) 10YR7/2に灰・黄褐色	1.5mm以下の石末、石末を多く、 1mm以下の赤褐色を少し含む	ナデ	惣子外面に一部付着 平灰層 I 8世紀前半～9世紀前半		
	56	中世洪水砂 層	灰土層 杯蓋	つば径3.0	外・内) 8YR/N7/8灰白色	1mm以下の石末、石末を少し、3.5mm の長石を1粒、2mmの石末を数含む	外) 回転ヘラケツ 内) 回転ナデ	外面に灰を被る 平灰層Ⅱ～Ⅲ 8世紀前半	
	57	中世洪水砂 層	灰土層 杯蓋	(17.8) つば径3.0	外) 5Y7/1灰白色 内) 8Y2.5/7.2灰黄色	2mm以下の石末、長石、チャート、微 細な雲母を多く含む	外) 天舟部回転ヘラケツ 内) 天舟部回転ヘラケツ	平灰層Ⅲ 8世紀前半	
	58	中世洪水砂 層	灰土層 杯蓋	つば径3.0	外) 8Y2.5/7.2灰黄色 内) 2.5Y7/1灰白色	2mm以下の石末、長石、微細な雲母 を含む	外) 天舟部回転ヘラケツ 内) 天舟部回転ヘラケツ	焼け灰大、外面に直径11 cm程度の 平灰層Ⅲ 8世紀前半	
	59	中世洪水砂 層	灰土層 杯	(10.6) 3.0	外) 7.5Y5/1灰白色 内) 7.5Y6/2に灰・褐色 層) 7.5Y6/2に灰・褐色	2.5mm以下の石末、長石、赤褐色を 少し含む	外) 回転ヘラ切り機軸ナデ 内) 回転ナデ	平灰層Ⅳ 7世紀末～8世紀初頭	
	60	中世洪水砂 層	灰土層 杯	(12.4) —	外・内) 8YR/N7/8灰白色	2mm以下の石末、石末を多く、1mm以 下のチャートを少し含む	外) 回転ヘラケツ 内) 回転ナデ	口縁部1箇所ひび割れ 平灰層Ⅲ 8世紀前半	
	61	中世洪水砂 層	灰土層 杯	(20.6) —	外・内) 8YR/N6/8灰白色	1mm以下の石末、長石を多く、1.5mm 以下のチャートを少し含む	外) 回転ナデ、底部回転 ヘラケツ後ナデ 内) 回転ナデ	平灰層Ⅲ 8世紀前半	
	62	中世洪水砂 層	灰土層 杯	(17.8) 4.8 12.2)	外・内) 8YR/N5/8灰白色	2～3mmの長石、石末を多く、1mm 以下の長石、石末を多く含む	外) 回転ヘラ切り機軸ナデ 内) 回転ナデ	平灰層Ⅲ 8世紀前半	
	63	中世洪水砂 層	灰土層 杯	— (9.0)	外・内) 8YR/N6/8灰白色	1mm以下の石末、石末を多く、チャ ートを多く含む	外) 底部ヘラ切り機軸ナデ 内) 底部ヘラ切り機軸ナデ	平灰層Ⅲか 8世紀前半	
	64	中世洪水砂 層	灰土層 皿	— (8.6)	外) N5/0灰白色 内) 8YR/N6/8灰白色	3mm以下の石末、石末、黒色粒を少 し含む	外) 底部に粘土層を上げ たため、底部回転ヘラ切 り機軸ナデ	平灰層Ⅰか 7世紀末～8世紀初頭	
	65	中世洪水砂 層	灰土層 鉄線鉢鉢	(18.0) — —	外) 5P5/4暗青灰色 内) 5P5/1青灰色 層) 5P5/1青灰色 5R5/1紫灰色	1mm以下の長石を少し、1.5mmの長石 を1粒含む	外・内) 回転ナデ後縁の 横方向のヘラケツ	8世紀	
	66	中世洪水砂 層	土師器 皿	(8.2) 1.2	外・内) 8YR/7.5YR7/2に灰・褐色	1mm以下の雲母、赤褐色を多く含む	外) 底部ハビオサニセナデ	12～13世紀	
	67	中世洪水砂 層	土師器 皿	(13.2) —	外・内) 10YR8/4黄褐色 層) 10YR/1灰白色	2mm以下の石末、石末、1mm以下の 黒色粒、微細な雲母を多く、2mm以 下のチャートを少し含む	外) ユビオサニ、ナデ	12～13世紀か	
	68	中世洪水砂 層	土師器 皿	(12.8) 2.2	外・内) 10YR5/2灰黄褐色 層) 5Y4/1灰白色	1mm以下の石末、石末、雲母を多 く含む	外) ユビオサニ、ナデ	13世紀か	
	69	中世洪水砂 層	土師器 皿	(12.1) 2.0	外) 10YR8/2灰白色 内) 7.5YR8/3黄褐色 層) 10YR/1灰白色	1mm以下の石末、石末を少し、1.5mm 以下の赤褐色粒、微細な雲母を多 く含む	外) ユビオサニ、ナデ	12～13世紀	
	70	中世洪水砂 層	土師器 皿	(13.4) 2.4	外・内) 7.5YR8/3黄褐色 層) 10YR8/3黄褐色	2mm以下の石末、長石、チャート、微 細な雲母を多く、赤褐色を少し含 む	外) ユビオサニ、ナデ	13世紀	
	71	中世洪水砂 層	灰土層 碗	(13.6) — —	外・内) 2.5Y2/1黒色 層) 2.5Y8/1灰白色	微細な長石、黒色粒を多く含む	外) 底部に縦方向のヘラ ケツ 内) 今や縦方向のヘラ ケツ	口縁部内面に沈着した 灰白色層(A)層か 12世紀後半～13世紀 前半	
	72	中世洪水砂 層	灰土層 碗	(14.8) — —	外・内) N3/0黒灰色 層) 2.5Y8/2灰白色	1mm以下の石末、黒色粒を少し含む	外) 口縁部に縦方向ヘラ ケツ 内) 今や縦方向のヘラ ケツ	口縁部内面に黄・灰 褐色層Ⅱ 8世紀後半～13 世紀前半	
	73	中世洪水砂 層	灰土層 碗	(14.4) — —	外) N4/0灰白色 内) 8YR/N8/8灰白色	2mm以下のチャートを含んでいて、1 mm以下の石末、長石を少し含む	内) 底部に縦方向の機軸収 束、見込み機軸収束文	機軸型Ⅲ-3類 13世紀前半	
74	中世洪水砂 層	灰土層 鉢	(25.0) — —	外・内) 2.5GY6/1オリーブ灰色 層) 5GY6/1オリーブ灰色	1.5mm以下の石末、石末、チャートを 多く、微細な雲母を少し含む	回転ナデ	底部下方内面に機軸 型機軸型Ⅲ-3類 14世紀後半		
75	中世洪水砂 層	陶器 鉢	— (13.1)	外) 2.5Y7/1灰白色 内) 8Y2.5/7.2灰黄色	2mm以下の石末、石末、微細な雲母 を多く、3mmの長石を1粒、2.5mmの黒 色粒を数含む	外) 底部を横方向のヘラ ケツ 内) 横方向ナデ	黄膏 片口鉢Ⅲ器形式 14世紀後半		
30	76	1層	陶器 皿	— (8.6)	外) N6/0灰白色 内) 5YR5/2灰褐色 層) N6/0灰白色 5YR1/2灰褐色	2mm以下の石末、長石、チャート、赤 褐色粒を多く含む	外) 底部回転ヘラケツ、 底部機軸切機軸 内) 回転ナデ	備前 赤瀬黒器か 近畿か	
	77	群土層	灰土層 杯蓋	— (9.4)	外) N4/0灰白色 内) 2.5Y5/1灰褐色 層) 5Y6/1灰白色	3mm以下の石末、長石、微細な雲母 を多く、1.5mm以下のチャート、赤褐 色粒を少し含む	外) ユビオサニ、ナデ 内) ハケ	中世	
	78	近世洪水砂 層	灰土層 杯	— (11.2)	外・内) 8YR/10Y6/1灰白色	2mmの石末、石末、雲母、黒色粒を 少し、微細な長石、石末を多く含む	外) 底部回転ヘラ切り機 軸ナデ 内) 底部回転ヘラ切り機 軸ナデ	平灰層Ⅲ 8世紀前半	
	79	近世洪水砂 層	土師器 碗	(23.6) — —	外・内) 10YR7/2に灰・黄褐色 層) 10YR7/2に灰・黄褐色	2mm以下の石末、石末、雲母を多く、 1mm以下のチャートを少し含む	外) 底部縦方向の粗いハ ケツ 内) 底部縦方向の粗い ハケツ	8世紀	
	80	近世洪水砂 層	土師器 碗	(28.0) — —	外・内) 10YR7/2に灰・黄褐色 層) 10YR8/3黄褐色	3mm以下の石末、石末、微細な雲母 を多く、1.5mmの石末を1粒、1mm以 下のチャートを少し含む	外) 底部縦方向のヘラ ケツ 内) 底部縦方向のヘラ ケツ	8世紀	
	81	近世洪水砂 層	土師器 杯	(15.0) — —	外・内) 7.5YR7/2に灰・黄褐色 層) 10YR7/2に灰・黄褐色	微細な長石、石末、雲母を多く含む	外・内) 横ナデ、ヘラケ ツ後収束不具	平安京Ⅰか 9世紀前半	

調査区	図面番号	写真図版	出土遺構・層位	層様	口径 器高 底径 (cm)	色調	胎土	成形・調整など	備考				
08-1 調査区	30		82	近世洪水砂層	土師器Ⅱ	9(4.0) 1.3 —	外:J.5V87/4C25・黄褐色 内:10V87/3C25・黄褐色 底:10V87/3C25・黄褐色	1.5mm以下の石英、長石、1mm以下の赤褐色、黒褐色の雲母を多く含む	コビオオス、ナデ	器壁が薄手 12～13世紀			
			83	21 近世洪水砂層	土師器Ⅱ	8.1 1.3 —	外:J.5V87/4C25・黄褐色 内:J.5V87/3C25・黄褐色 底:J.5V87/3C25・黄褐色	2mm以下の石英、長石を多く、1.5mm以下のチャートを含む	コビオオス、ナデ	底面外側に粘土線合痕あり 12～13世紀			
			84	近世洪水砂層	土師器Ⅱ	(12.7) 1.9 —	外:内:J.5V87/3C25・黄褐色 底:10V87/3C25・黄褐色	1mm以下の石英、石炭、雲母を多く、チャートを少し含む	外)コビオオス、ナデ	12～13世紀			
			85	近世洪水砂層	瓦器Ⅱ	(11.8) — —	外:内:8C2.5V8/1R1白色	1mm以下の石英、石炭、雲母、黒色粒を少し含む	表面磨滅のための詳細不明	横方向ナデ	横帯型Ⅱ-3期 13世紀前半		
			86	近世洪水砂層	瓦器Ⅱ	(13.8) — —	外:内)N4/0R1白色 底)N8/0R1白色	1mm以下の長石を少し、1.5mmの黒色粒を少し含む	外)口縁部に粘土を短く足した磨滅痕あり、底部に磨滅のへラミギキ 内)やや密な縦線状文	口縁部内面に2段階の横帯型Ⅱ-1・2期 13世紀前半			
			87	近世洪水砂層	瓦器Ⅱ	(14.1) 4.3 4.0	外:内)2.5V2/1R1白色 底)2.5V8/1・8/2R1白色	1mm以下の石英、赤褐色粒を少し含む	外)口縁部にヘラミギキ 内)やや密な横方向の磨滅	口縁部内面に2段階の横帯型Ⅱ-1期 12世紀末～13世紀初頭			
			88	近世洪水砂層	瓦器Ⅱ	(15.0) — —	外:内)N4/0R1白色 底)N8/0R1白色	1mm以下の黒色粒を少し含む	外)外部にコビオオス後軽クナデ 内)磨滅して残らぬ横方向のヘラミギキ	横帯型Ⅱ-2・3期 13世紀前半			
			89	近世洪水砂層	瓦器Ⅱ	(12.3) — —	外)N4/0R1白色 内)N8/0R1白色 底)J.5V8/1R1白色	1mm未満の雲母、黒色粒を少し含む	外)外部に粘土線合痕あり、口縁部に残らぬヘラミギキ 内)やや密な横方向のヘラミギキ	表面磨滅のための詳細不明 横帯型Ⅱ-2・3期 13世紀前半			
			90	近世洪水砂層	瓦器Ⅱ	— — 5(5.0)	外:内)N4/0R1白色 内)N8/0R1白色	1mm以下の黒色粒を少し含む	内)外部に縦線状文、見込み磨滅状文	横帯型Ⅱ-3期 13世紀前半			
			92	近世洪水砂層	瓦器土師器Ⅱ	(14.2)± — —	外:内)N3/0R1白色 底)2.5V7/1R1白色	1mm以下の石英、2mm以下の長石を多く含む	横方向ナデ	14世紀前半			
			93	近世洪水砂層	磁器(染付焼)	(10.0) 5.0 4(2)	外)5C9/1R1白色 底)5K4/4R1白色 内)5C9/1R1白色 底)10V8/1R1白色	磨	横付は無施	二系調目紋 裏面内側に有 18世紀前半			
			94	近世洪水砂層	磁器(国産青磁)	— — —	輪)2.5G7/1明ナツブ灰色 底)J.5V8/1R1白色	磨	施施	内面に片切り彫りの紋様 18世紀前半			
			33			96	21 第1面3建物	軒瓦Ⅱ	軒瓦径: 15.0	△)N5/0R1白色 △)N6/0R1白色 △)N7/0R1白色	2mm以下の石英を多く、長石、5mm以下のチャートを少し含む	磨)布目、ヘラによるナデ	左巻き三巴紋 16世紀後半
						97	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	幅:14.8	△)N5/0R1白色 △)N6/0R1白色 △)5V87/1明褐色	2mm以下の長石を多く含む	磨)コビオス	左巻き三巴紋 16世紀後半
98	第1面3建物	軒瓦Ⅱ				—	△)N4/0R1白色 △)5P8/1暗褐色 △)J.5V7/1R1白色	2mm以下の石英を少し、2mm以下の長石を含む	磨)布目	左巻き三巴紋 16世紀後半			
99	第1面3建物	軒瓦Ⅱ				軒瓦径: 15.0	外:内)8P5/1暗褐色 底)2.5V8/1黄褐色	2mm以下の石英、2mm以下のチャートを少し含む	ナデ	左巻き三巴紋 16世紀後半			
100	第1面3建物	軒瓦Ⅱ				—	外)N5/0R1白色 内)8P5/1暗褐色 底)10V87/1R1白色	1.2mm以下の長石を多く、2mm以下の石英、チャートを少し含む	ナデ	左巻き三巴紋 16世紀後半			
34						101	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	長さ:37.5 幅:15.2	△)N5/0R1白色 △)5P5/1暗褐色 △)10R6/1赤褐色	2mm以下の石英を少し、2mm以下の長石、1mm以下のチャートを多く含む	磨)ヘラケツ、布目、コビオス、内面施	左巻き三巴紋 16世紀後半
			102	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	幅:15.1	△)N6/0R1白色 △)5P4/1暗褐色 △)J.5V87/1暗褐色	2mm以下の長石、1.5mm以下の石英、チャートを多く含む	磨)布目、内面施、面取り	左巻き三巴紋 16世紀後半			
			103	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	長さ:29.0 幅:25.0	△)内)N4/0R1白色	2mm以下の長石、1mm以下のチャート、0.5mmの雲母を少し、2mm以下の石英を微かに含む	△)縦方向のナデ、本件は△)縦方向のナデ	宝珠蓮華紋 16世紀後半			
35			104	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	長さ:28.5 幅:25.0	△)内)N5/0R1白色	2mm以下の長石を少し、1mm以下のチャートを多く含む	磨)布目	宝珠蓮華紋 16世紀後半			
			105	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	幅:25.0	△)内)N5/0R1白色 △)N7/0R1白色	2mm以下の長石、1.5mm以下の石英、1mm以下のチャートを少し、0.5mmの雲母を微かに含む	△)縦方向のナデ後横方向のナデ △)縦方向のナデ	宝珠蓮華紋 16世紀後半			
			106	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	—	△)内)N4/0R1白色 △)10V87/1R1白色	1mm以下の長石、2mm以下のチャートを少し、0.5mmのチャートを微かに含む	△)縦方向のナデ	宝珠蓮華紋 16世紀後半			
			107	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	—	△)N5/0R1白色 △)N6/0R1白色 △)10V87/1R1白色	1mm以下の長石、チャート、2mm以下の石英を少し、0.5mmの雲母を微かに含む	△)縦方向のナデ	宝珠蓮華紋 16世紀後半			
			108	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	長さ:28.5	△)内)N4/0R1白色 底)2.5V7/1R1白色	2mm以下の長石、石英、1mm以下のチャートを多く含む	△)縦方向のナデ	宝珠蓮華紋 16世紀後半			
			109	第1面3建物	軒瓦Ⅱ	—	△)内)N4/0R1白色 底)J.5V88/1R1白色	2mm以下の長石、1mm以下のチャートを少し含む	△)縦方向のナデ	宝珠蓮華紋 16世紀後半			
			110	第1面3建物	瓦Ⅱ	長さ:30.3 幅:11.9	△)内)N8/0R1白色	1.5mm以下の長石、チャートを含む	磨)布目、内面施、面取り	16世紀後半			

調査区	国産品	調査品	写真 写真 写真	出土遺構 ・層位	器種	口径 器高 底径 (cm)	色調	胎土	成形・調整など	備考
36	36	111	24	第1層 3層物	丸瓦	長さ:33.7 幅:14.3	△・節N6・0灰色	1cm以下の長石を少し、2cm以下のチャートを含む	節)布目, 表面緑焼, コビキ	
		112	24	第1層 3層物	丸瓦	長さ:35.0 幅:15.5	△)N3・0暗灰色 節)N4・0灰白色	3cm以下の長石, 2cm以下の石英, 金雲母を含む	節)布目, 表面緑焼, コビキ	
		113	24	第1層 3層物	丸瓦	幅:15.2	△)節N6・0灰白色 節)10Y86/1暗灰色	3cm以下の長石を多く、石英, チャート少しを含む	節)ヘラケズリ, 布目, 表面緑焼, コビキ, 濡り止め	
37	37	114	24	第1層 3層物	平瓦	長さ:29.3 幅:22.5	△)N5・0灰白色 節)N4・0灰白色	3cm以下の長石, 石英を多く、チャート, 黒雲母を少し含む	片念なナゲ洲, の高調整不明	
		115	24	第1層 3層物	平瓦	長さ:29.2 幅:22.5	△)5Y96/1暗灰色 節)N6・0灰白色	3cm以下の長石, チャート, 2cm以下の石英, 黒雲母を多く含む	片念なナゲ洲, の高調整不明	
		116	24	第1層 3層物	平瓦	長さ:29.0 幅:22.6	△)節N6・0灰白色 節)5Y97/1明褐色色	3cm以下の長石, 1cm以下の石英, 3cm以下のチャート, 0.5mmの雲母を少し含む	片念なナゲ洲, の高調整不明	
		117	24	第1層 3層物	平瓦	幅:22.8	△)節N5・0灰白色 節)2.5Y97/1明赤灰色	3cm以下の長石, 石英, 2cm以下のチャート, 0.5mmの雲母を少し含む	片念なナゲ洲, の高調整不明	
38	38	118	24	第1層 3層物	行基型丸瓦	幅:14.7	△)N6・0灰白色 節)N5・0灰白色 節)5Y96/1暗灰色	3cm以下の長石を多く、2cm以下の石英を少し含む	節)コビキ	
		119	25	第1層 3層物	平瓦		△)10Y96/1暗灰色 節)N6・0灰白色 節)10Y96/1暗灰色	1cm以下の長石を多く、チャート, 2cm以下の石英を少し含む	端面に竹管状工具による○印の痕	
		120	25	第1層 3層物	平瓦		△)節・節)N6・0灰白色	3cm以下の長石を多く、チャート, 2cm以下の石英を少し含む	端面に竹管状工具による○印の痕	
		121	25	第1層 3層物	平瓦		△)節N6・0灰白色 節)2.5Y97/1黄灰色	1cm以下の長石を少し、3cm以下の長石, チャートを多く含む	端面に竹管状工具による○印の痕	
		122	25	第1層 3層物	平瓦		△)節・節)N6・0灰白色	2cm以下の長石を多く、1cm以下の石英, チャート少し含む	端面に竹管状工具による○印の痕	
		123	25	第1層 3層物	平瓦		△)節N6・0灰白色 節)7.5Y97/2明褐色色 節)7.5Y96/1暗灰色	1cm以下の長石, チャートを少し、2cm以下のシャベットを含む	端面に竹管状工具による○印の痕	
		124	25	第1層 3層物	平瓦		△)節・節)10Y96/1暗灰色	1cm以下の長石, チャート, 3cm以下の石英を少し、1cm以下の消化粉を含む	端面に竹管状工具による○印の痕	
		125	25	第1層 3層物	隅瓦		△)節)50P5/1黄灰色 節)7.5Y96/1暗灰色	3cm以下の長石, 石英を少し、0.5mmの黒雲母を多く、金雲母を多く含む	△)縦方向のナゲ	
		126	25	第1層 3層物	面戸瓦		△)節)N5・0灰白色 節)10Y97/1灰白色	1cm以下の長石を少し、3cm以下のチャートを多く含む	節)布目	
		127	25	第1層 3層物	面戸瓦		△)N3・0暗灰色 節)N6・0灰白色 節)2.5Y7/1灰白色	3cm以下の長石, 5cm以下のチャート, 2cm以下の石英を少し含む	節)布目, 表面緑焼	
		128	25	第1層 3層物	面戸瓦		△)節)N5・0灰白色 節)10Y96/1暗灰色	3cm以下の長石を多く、2cm以下の石英, チャートを少し含む	節)布目	
		39	39	129	25	第1層 3層物	藤組瓦		△)N6・0灰白色 節)N4・0灰白色 節)5Y7/1灰白色	3cm以下の長石, 2cm以下の石英, 4cm以下のチャートを多く含む
130	25			第1層 3層物	藤組瓦		△)節)N6・0灰白色 節)5Y97/1明褐色色	3cm以下の長石を多く、1cm以下の長石, 3cm以下のチャートを少し含む	△)ナゲ 節)コビキ	
131	25			第1層 3層物	藤組瓦		△)N6・0灰白色 節)N5・0灰白色 節)10Y97/1灰白色	1cmの石英, 2cm以下の長石を多く、5mmのチャートを1粒含む	△)細かヘラケズリ, ナゲ 節)コビキ	
132	25			第1層 3層物	藤組瓦	幅:23.9	△)5Y7/1灰白色 節)N6・0灰白色 節)10Y7/1灰白色	2cm以下の長石, 1.5cm以下の石英, 5cm以下のチャートを含む	△)ヘラケズリ, ナゲ 節)コビキ	
133	26			第1層 3層物	行基型丸瓦		△)N5・0灰白色 節)5Y97/1明褐色色 節)N6・0灰白色	3cm以下の長石, 3cm以下の石英, 1cm以下のチャートを少し含む	△)文字へう書き	
40	40	134	25	第1層 3層物	瓦(水磨形)		△)N5・0灰白色 節)5Y97/1明褐色色 節)N6・0灰白色	1cm以下の長石, 石英, チャートを含む	ケズリナゲ	
		135	26	第1層 3層物	隅木蓋瓦	サテ:22.2	△)N6・0灰白色 △)5Y96/1暗灰色 節)N7・0灰白色	3cm以下の長石, 石英を多く、5cm以下のチャートを少し含む	内)ケズリ, 隅)ナゲ	
		136	26	第1層 3層物	平瓦		△)内)N6・0灰白色 節)7.5Y96/1暗灰色	1cm以下の長石を少し、3cm以下の石英を多く含む	外)内)ナゲ	
		137	26	第1層 3層物	瓦		△)N6・0灰白色 △)N5・0灰白色 節)7.5Y96/2灰褐色色	3cm以下の長石を多く、1cm以下の石英, 2cm以下のチャートを少し含む	外)内)ナゲ	
41	138	26	第1層 3層物	軒丸瓦	軒丸径:10.0	△)N6・0灰白色 節)5Y96/1暗灰色	2cm以下の長石, チャート, 1mmの石英を少し、0.5mmの雲母を多く含む	△)ナゲ 節)布目	小形梅花紋 山崎編年・中世前期 に該当	

調査区	調査市町	写真番号	出土遺構・層位	器種	口径 器高 口径 (cm)	色調	胎土	成形・調整など	備考	
OS 1-2 調査区		139	第1層 3埋物	軒丸瓦	△(B)-黒	10YR6/1黒灰色	2mm以下の長石、1mm以下の石英を少し含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半	
		140	第1層 3埋物	軒丸瓦	△(黒)	10YR6/1黒灰色 10R9/1黒灰色	1mm以下の長石、2mm以下の石英を少し含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半	
		141	第1層 3埋物	軒丸瓦	△(B)-黒	N6/0灰色	2mm以下の長石を多く、石英、4mm以下のチャートを少し、0.5mmの霏石を多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半	
		142	第1層 3埋物	軒丸瓦	△(黒)	5YR6/1黒灰色 10N5/0灰色	2mm以下の長石を多く、石英を多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半	
		143	第1層 3埋物	軒丸瓦	△(P)-黒	N6/0灰色	2mm以下の長石を多く、石英、チャートを少し、霏石を多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半	
		144	第1層 3埋物	軒丸瓦	△(P)-黒	N6/0灰色	2mm以下の長石、4mm以下のチャートを少し、3mm以下の石英を多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半	
		145	第1層 3埋物	軒丸瓦	△(P)-黒	10YR6/1黒灰色	2mm以下の長石、1mm以下の石英を少し、4mm以下のチャートを多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半	
		146	第1層 3埋物	軒丸瓦	幅:10.0	△(黒)	10YR6/1黒灰色 10N7/0灰白色	2mm以下の長石を多く、1.5mm以下の霏石、1mmの石英を少し含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半
		147	第1層 3埋物	軒丸瓦	幅:10.0	△(黒)	N6/0灰色 10YR7/1黒灰色 10YR6/1黒灰色	2mm以下の長石、1mmの霏石を多く、石英を多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	小笠原花紋 山崎編年中世前期 13世紀後半
		148	第1層 3埋物	軒丸瓦	幅:15.6	△(黒)	N6/0灰色 10YR6/1黒灰色 10YR7/1黒灰色	0.5mmの長石、霏石、2mm以下の石英を少し、チャートを多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		149	第1層 3埋物	軒丸瓦	幅:16.5	△(A)	7.5YR6/1黒灰色 10YR6/1黒灰色 10YR7/1黒灰色	2mm以下の長石を多く、1mmの石英を少し、シャレット、霏石、チャートを多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		150	第1層 3埋物	軒丸瓦	幅:16.2	△(A)	N6/0灰色 10YR6/1黒灰色 10YR7/1黒灰色	2mm以下の長石、2mm以下のチャートを多く、シャレット、霏石を多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		151	第1層 3埋物	軒丸瓦	長さ:19.9	△(A)	10Y7/1灰白色 10W6/1灰色 5YR6/1黒灰色	2mm以下の長石、チャートを少し、石英を多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		152	第1層 3埋物	軒丸瓦	長さ:20.0 幅:15.5	△(B)	N6/0灰色 10YR7/1黒灰色	2mm以下の長石、石英、1mm以下のチャートを多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		153	第1層 3埋物	軒丸瓦	幅:16.3	△(B)	N6/0灰色 10YR7/1黒灰色	2mm以下の長石、石英を多く、2mm以下の石英、長石、シャレットを多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		154	第1層 3埋物	軒丸瓦	長さ:19.9	△(A)	7.5YR6/1灰色 10YR6/1黒灰色 10YR7/1黒灰色	2mm以下の長石を多く、2mm以下の石英、1mm以下のチャートを少し、霏石の塊状を含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		155	第1層 3埋物	軒丸瓦	長さ:19.8	△(A)	5YR6/1黒灰色 10Y7/1灰白色 10N7/0灰白色	2mm以下の長石、チャートを多く、石英、シャレット、霏石を多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		156	第1層 3埋物	軒丸瓦	長さ:19.8	△(B)	N6/0灰色 10YR7/1黒灰色	1mm以下の長石、石英、チャート、0.5mmの霏石を少し含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
		157	第1層 3埋物	軒丸瓦	幅:16.0	△(A)	N6/0灰色 10Y6/1黒灰色	2mm以下の長石、石英を多く、チャートを少し含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 二次焼成あり 13世紀後半
		158	第1層 3埋物	軒丸瓦	長さ:19.9 幅:15.7	△(A)	10YR7/1灰白色 10Y7/1灰白色 2.5YR7/2灰白色	2mm以下の長石、0.5mm以下の霏石を少し、2mm以下の石英、4mm以下のチャートを多く含む	△(A)ナデ 刷目布目	御厨院 13世紀後半
159	第1層 3埋物	土師器 皿	φ9.0 2.1	△(A)	5YR7/2赤赤褐色 10R6/3に少し赤褐色 5YR6/2赤褐色	1mm以下の長石、0.5mmの石英、霏石を少し、チャートを多く含む	外(3)ナデ、 内(2)ナデ	16世紀		
160	第1層 3埋物	土師器 皿	6.6 1.4	△(P)	7.5YR7/2明褐色	2mmの石英を少し、1mm以下の長石、霏石を含む	外(3)ナデ、 内(2)ナデ	湯の池化体付着、灯明土 16世紀後半		
161	第1層 3埋物	土師器 皿	6.6 1.2	△(P)	7.5YR7/2明褐色 2.5YR7/2赤赤褐色	2mm以下のチャート、0.5mmの霏石を少し、1mm以下の石英、シャレットを多く含む	外(3)ナデ、 内(2)ナデ	湯の池化体付着、灯明土 16世紀後半		
162	第1層 3埋物	瓦質土師 大倉	φ16.5 3.1 07.0	△(P)	N6/0灰色 7.5YR7/2明褐色	0.5mmの砂粒を含む	外(3)ナデ、 内(2)ナデ	14～15世紀		
163	第1層 3埋物	瓦質土師 大倉	— (17.0)	△(P)	N6/0灰色 7.5YR7/2明褐色	0.5mmの砂粒を含む	外(3)ナデ、 内(2)ナデ	14～15世紀		
178	第1層 29土坑	軒丸瓦	軒丸径:15.0 幅:14.3	△(黒)	N6/0灰色 5YR7/2明褐色	2mm以下の長石、2mm以下のチャートを多く、石英を少し含む	△(A)7mm程度の赤紫に丁字な縦方向のナデ 刷目布目、赤のナデ	左巻き三巴紋 16世紀後半		
179	第1層 29土坑	軒丸瓦	軒丸径:15.0	△(黒)	N5/0灰色 10YR7/2に少し黄褐色	2mm以下の長石、石英を多く、チャートを少し含む	△(A)ナデ 刷目布目	左巻き三巴紋 16世紀後半		
180	第1層 29土坑	丸瓦	幅:15.7	△(黒)	N6/0灰色 7.5YR7/1灰白色	1mm以下の長石、チャートを少し、3mm以下の石英を多く含む	△(A)1.0cm程度の丁字な縦方向のナデ、縦向き 刷目布目、赤のナデ	16世紀後半		

調査区	調査点	写真 番号	出土遺構 ・層位	部材	口徑 高さ 底径 (cm)	色調	胎土	成形・調整など	備考																		
08-1 調査区	41	181	第1層 29土坑	軒平瓦		外)凸部 5R/6/1黄灰色 内)10V/8/1黄灰色	1mm以下の長石を多く、2mm以下の石片、1mm以下のチャート、0.5mmの金雲母を少し含む	面)布目	網眼状 13世紀後半																		
										190	第1層 2層	青磁 皿	16.8 7.5 6.2	外)5V/5/2灰オリーブ色 内)5V/6/1灰色 底)10V/8/2黄褐色	密	外)無紋 内)口縁部下に3本の沈 降、黄雲母、見込み部に 草文様	大分府分組 瀬原遺跡系1-4a層 12世紀中頃～後半										
																		191	第1層 2層	青磁 皿	16.0 7.0 6.0	外)5V/6/1灰色 内)5V/5/1オリーブ灰色 底)10V/8/1黄灰色	密	内)黄雲母、見込み部無 紋	大分府分組 瀬原遺跡系1-4a層 12世紀中頃～後半		
										192	第1層 2層	青磁 皿	19.7 10.7 7.0	外)・内)5G/7/1網緑灰色	密	外)無紋、口縁一部打ち次 ぎ	大分府分組 瀬原遺跡系1-2a層 12世紀中頃～後半										
																		193	第1層 2層	青磁 皿	16.4 2.1 4.8	外)10V/2/1灰白色 内)2.5V/7/1灰白色	密	無紋	大分府分組 瀬原遺跡系1-1a層 12世紀中頃～後半		
										194	第1層 2層	青磁 皿	10.0 2.1 4.6	外)7.5V/8/2灰白色 内)5V/7/1灰白色	疎	無紋	大分府分組 神位遺跡系1-1a層 12世紀中頃～後半										
																		195	第1層 2層	青磁 皿		外)・内)10V/8/2黄褐色 底)10V/8/2黄褐色	密	藍緑			
										196	第1層 2層	瓦割 小瓶	12.0 3.9 4.0	外)N6/0灰色 内)5R/6/1黄灰色	2mm以下の長石を多く、0.5mmの金雲母を少し含む	外)ヨコナゲ、形削正直、 黄右側の付け残オサエ 内)内縁・縁部2.5mm、ハケテ	瀬原遺跡IV-1層 13世紀中頃～後半										
																		197	第1層 2層	土師器 皿	7.0 0.9 4.0	外)・内)赤 2.5V/7/2赤赤褐色	1mm以下の長石、0.5mmの金雲母を 少し含む	外)ヨコナゲ、ナゲ 内)ナゲ	13世紀中頃～後半 内)ナゲ		
										198	第1層 2層	土師器 皿	01.60 2.1 —	外)・内)7.5V/2/1灰～黄褐色	2mm以下の長石を少し、0.5mmの金雲母を 多く含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ、 ナゲ 内)ナゲ	13世紀中頃～後半										
																		199	第1層 2層	土師器 皿	10.6 2.1 —	外)5V/2/1灰～黄褐色 内)5V/2/2明褐色	1mm以下の長石、シャレットを少し、 0.5mmの金雲母を多く含む	外)ヨコナゲ、ナゲ 内)不定方向のナゲ	内面二漆の炭化物付着、 灯明遺 13世紀中頃～後半		
										08-1 調査区	51	305	第1層 18型穴	瓦割 小瓶	06.0 3.0 0.8	外)灰(2.5V/7/1灰白色 内)5V/6/1黄灰色 底)2.5V/6/1黄灰色	1mm以下のチャート・骨片を少し含む									外)ヨコナゲ、厚付け高台 内)渦巻状の暗文	13世紀前半頃
																		206	第1層 18型穴	瓦割 小瓶	06.4 3.0 0.8	外)N3/0暗灰色 内)N5/0暗色 底)5V/6/1灰白色	0.3mmの長石を僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ、 高台側の付け残オサエ、沈 降状の付込み 内)渦巻状の暗文	13世紀前半頃		
										208	第1層 18型穴	青磁 皿	01.60 — —	外)10V/5/1灰色 内)2.5G/5/1オリーブ灰色 底)5V/7/1灰白色	密	外)縁部無紋 内)無紋	大分府分組 瀬原遺跡系1-5b層(5a+5b) 層-2a層 13世紀										
211	第1層 31層	土師器 皿	7.0 1.1 —	外)10V/8/6黄褐色 内)10V/8/4黄褐色 底)2.5V/2/3赤赤褐色	0.5mmの長石を僅かに含む	外)ヨコナゲ、不定方向の ナゲ 内)不定方向のナゲ	13世紀																				
								212	第1層 31層	土師器 皿	01.20 1.9 —	外)7.5V/2/2灰～黄褐色 内)2.5V/2/3赤赤褐色 底)5V/6/2灰褐色	0.5mmの長石、石英を僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)不定方向のナゲ	13世紀												
213	第1層 31層	土師器 皿	01.80 1.8 —	外)5V/2/3灰～黄褐色 内)7.5V/2/2明褐色 底)7.5V/2/3灰～黄褐色	2mmの長石、金雲母を僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)不定方向のナゲ	13世紀																				
								215	第1層 235層	土師器 皿	7.6 1.2 —	外)10V/8/3灰～黄褐色 内)5V/6/4灰～黄褐色	1mm以下の長石を少し、2mm以下の シャレット、金雲母を多く含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)ナゲ	13世紀後半												
216	第1層 235層	土師器 皿	07.80 1.0 —	外)・内)7.5V/2/3灰～黄褐色 内)7.5V/2/2明褐色	0.3mm以下の長石、金雲母を僅かに 含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)不定方向のナゲ	13世紀後半																				
								217	第1層 235層	土師器 皿	8.0 1.1 —	外)5V/2/3灰～黄褐色 内)5V/6/2灰褐色	1mm以下の長石、2mm以下の石英、 金雲母を含む	外)ヨコナゲ 内)不定方向のナゲ	13世紀後半												
218	第1層 235層	土師器 皿	8.0 1.3 —	外)・内)7.5V/2/3灰～黄褐色	2mm以下の長石、石英、金雲母を含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)ナゲ	口縁部に欠損あり 13世紀後半																				
								219	第1層 235層	土師器 皿	06.20 1.1 —	外)・内)7.5V/2/3灰～黄褐色	1mm以下の長石、2mm以下の石英、 金雲母を含む	口縁部に欠損あり、欠損あり ナゲ 13世紀後半													
220	第1層 235層	土師器 皿	8.2 1.1 —	外)・内)7.5V/2/4灰～黄褐色	2mm以下の長石、石英、シャレット、 金雲母を含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)不定方向のナゲ	口縁部に欠損あり 13世紀後半																				
								221	第1層 235層	土師器 皿	01.60 2.3 —	外)・内)10V/8/2黄褐色	1.5mmのシャレットを含む	外)ヨコナゲ、不定方向の ナゲ 内)不定方向のナゲ	13世紀後半												
222	第1層 235層	土師器 皿	11.8 2.3 —	外)5V/8/3黄褐色 内)2.5V/2/3赤赤褐色 底)2.5V/2/2明褐色	1mm以下の長石、0.5mmの石英、金雲母、 砂粒を少し含む	外)ヨコナゲ 内)ナゲ	13世紀後半																				
								223	第1層 235層	土師器 皿	02.80 1.8 —	外)7.5V/2/3灰～黄褐色 内)5V/2/2明褐色 底)7.5V/2/2明褐色	1.5mm以下の長石を僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)ナゲ	13世紀後半												

調査区	調査中	遺物番号	出土遺構・層位	器種	口径 高さ 底径 (mm)	色調	胎土	成形・調整など	備考																																																																																
53	224	31	第1層 235層	瓦器 —	11.0 4.0 4.0	外・内) N5・0灰色	密	外) コナダ、ヒビオナエ、 胎土付着 内) 細い線刻とが	縄文期IV-1期 13世紀後半																																																																																
										231	第1層 4石皿	平皿	—	外・内) N6・0灰褐色 胎) 2.5V86/2R赤色	3mm以下の長石、石英を多く、チャー トを少し含む	外) 回転ナダ 内) 布目	古代																																																																								
																		233	第1層 15土坑	土師器 皿	8.0 1.3 —	外) 5V87/41に赤い褐色 内) 7.5V87/41に赤い褐色	1mm以下の長石、シャレットを少し、 0.5mm以下の金箔を多く含む	外) コナダ、ヒビオナエ 後ナダ	13世紀後半																																																																
																										234	第1層 16石群	土師器 皿	11.4 1.8 —	外) 5V87/2明褐色 内) 7.5V87/2明褐色	2mm以下の長石、1mm以下の石英を 少し、0.5mmの金箔を多く含む	外) コナダ 内) ナダ	13世紀後半																																																								
																																		236	第1層 28ピット	瓦器 —	10.6 — —	外・内) N5・0灰色	1mm以下の長石を少し、0.5mmの金箔 を多く含む	外) コナダ、ヒビオナエ 後ナダ 内) 線刻とが	縄文期IV-2期 13世紀末～14世紀初期																																																
																																										237	第2層 4石皿	灰釉陶器 四耳壺	11.2 20.5 11.6	外) 10V87/1R白 内) 10V86/1R灰色	砂粒を少し含む	外) ケワコナダ、高台貼 り付け後底部ナダ、底部 磨削 内) ナダ、底部磨削直前	一部自然釉付着、内面一 部灰より黒く灰色 灰釉地 9世紀中葉～後半																																								
																																																		240	第2層 114壺	須恵器 双耳壺(板)	— — 10.8	外・内) 赤) N6・0R色	密	外) 肩部に突帯が走る、耳 なし 内) ナダ	9世紀後半～10世紀前半																																
																																																										241	第2層 114壺	灰釉陶器 小瓶	— — 3.8	外) 10V87/1R白 胎) 2.5V7/1R白	密	外) ケワコナダ	外面一部に自然釉付着 9世紀後半～10世紀初期																								
																																																																		242	第2層 114壺	土師器 皿	10.0 1.0 —	外・内) 赤) 7.5V87/31に赤い褐色	密	外・内) コナダ、ヒビオナ エ	10世紀前半																
																																																																										243	第2層 114壺	土師器 皿	10.4 0.9 —	外) 10V85/1褐色 内) 7.5V86/31に赤い褐色	密	外) コナダ、ヒビオナエ 後ナダ 内) コナダ	10世紀前半								
																																																																																		257	第2層 119壺	灰釉陶器 長頸壺(板)	— — 9.0	外) 10V87/1R白 胎) 10V87/21に赤い黄褐色	密	境成層穿孔、口縁内面の 一部に外巻部から底部 下方に4つて線刻	東濃(濃東東)産 9世紀後半～10世紀初期
259	第2層 61土坑	須恵器 平縁肥子	— — —	外・内) 赤) 7.5V85/1褐色	2mm以下の長石を少し含む	粘土層を斜切り各角を 面取り	平安時代																																																																																		
								260	第2層 67土坑	須恵器 杯	11.8 3.7 —	外) 2.5V8/1黄灰色 内) 5V6/1R色 胎) 5V5/1R色	2mm以下の長石を少し、1mm以下の チャートを多く含む	外) 回転ナダ 内) 回転ナダ	7世紀																																																																										
																261	第2層 73土坑	須恵器 鉄鉢形	12.0 — —	外) 10V87/21に赤い黄褐色 内) 赤) 5V7/1R白	0.5mmの砂粒を多く含む	外) 回転ナダ後ヘラズギ 内) 回転ナダ	8世紀後半																																																																		
																								262	第2層 73土坑	土師器 器台(規形)	9.6 7.8 9.6	外) 5V86/31に赤い褐色 内) 7.5V86/31に赤い褐色 胎) 7.5V86/2R褐色	3mm以下の長石、石英、0.5mmのシャ レットを少し、1mm以下のチャー トを多く含む	外) ケワ 内) ナダ	8世紀後半																																																										
																																263	第2層 86ピット	土師器 甕	12.2 22.7 —	外) 7.5V86/2R褐色 内) 2.5V86/31に赤い褐色	1mm以下の長石、2mm以下の石英、 0.5mmの金箔を少し含む	外) 横方向の後ナダ後 方向の粗いナダ 内) 横方向の磨削ハケメ	8世紀																																																		
																																								264	第2層 93ピット	須恵器 甕	12.0 4.0 —	外) N6・0R色 内) 2.5V6/1黄灰色 胎) 5V6/1R色	1mm以下の長石を少し、3mm以下の 石英、1mm以下のチャートを多く 含む	外) コナダ、ケワ 内) コナダ、不定方向の ナダ	8世紀																																										
																																																265	第2層 105土坑	須恵器 杯	10.0 3.2 —	外) 7.5V6/1R色 内) 赤) 10V8/1R色	砂粒を多く含む	外・内) 回転ナダ	7～8世紀																																		
																																																								266	第2層 43落ち込み	須恵器 杯蓋	11.4 2.3 —	外・内) 赤) 5V6/1黄灰色	0.5mm以下の長石、石英を少し含む	外) 瓦割、降灰、前面 回転ナダ	7世紀後半																										
																																																																269	第2層 43落ち込み	須恵器 杯蓋	18.8 3.3 —	外) 7.5V85/1褐色 内) 2.5V6/1黄灰色 胎) 2.5V5/1黄灰色	3mm以下の長石を含む	外) 回転ナダ、回転 ナダ 内) 回転ナダ	7世紀後半																		
																																																																								270	第2層 43落ち込み	須恵器 杯蓋	12.0 — —	外・内) 赤) N6・0R色	2mm以下の長石、1.5mm以下の石英 を少し、チャートを多く含む	外) ケワ、灰割、ナダ 内) ナダ	7世紀後半										
																																																																																271	第2層 43落ち込み	須恵器 杯蓋	10.6 2.3 —	外) N6・0R色 内) 赤) N7・0R白	1mmの石英を多く含む	外) ヘラケワ、回転ナ 内) 回転ナダ後不定方 向のナダ	8世紀		
																																																																																								272	第2層 43落ち込み
273	第2層 43落ち込み	須恵器 杯	10.2 4.2 11.8	外・内) 赤) N7・0R白	2mm以下の長石、チャートを多く 含む	外) 回転ナダ、胎付け高 台、底部ヘラケワ後ナ 内) 回転ナダ	8世紀																																																																																		
								274	第2層 43落ち込み	須恵器 杯	10.6 4.2 12.4	外) 2.5V6/1黄灰色 内) 10V86/1褐色 胎) 10V8/1R色	0.5mmの石英、1mm以下のチャー トを多く含む	外) 回転ナダ、胎付け高 台、底部ケワ後ナダ 内) 回転ナダ	外面に自然釉付着 8世紀																																																																										
																275	第2層 43落ち込み	須恵器 杯	18.8 3.8 14.4	外・内) 赤) 2.5V6/1黄灰色	2mm以下の長石、1mm以下の石英を 少し、3mm以下のチャートを多く 含む	外) 回転ナダ、胎付け高 台、底部ヘラケワ後ナ 内) 回転ナダ	8世紀																																																																		
																								276	第2層 43落ち込み	須恵器 —	— — —	外) N5・0R色 内) 7.5V86/1褐色 胎) 5V6/1黄灰色	チャートを含む	外・内) 回転ナダ	7～8世紀																																																										

調査区	調査中	調査番号	出土遺構・層位	遺構	口縁部高或径(m)	色調	胎土	成形・調整など	備考
01-2調査区	70	277	第2層 43落ち込み	須恵器 皿	横径6.2 —	外・内)N7/0灰白色	チャートを多く含む	外)内)回転ナデ	外面に自然磨り付着 7~8世紀
		278	第2層 43落ち込み	須恵器 皿	縦径4.0 —	外)10YR5/1黄灰色 内)10YR6/1黄灰色 脚)2.5Y6/1黄灰色	3mmの長石、砂粒を含む	外)内)回転ナデ	7世紀後半
		279	第2層 43落ち込み	須恵器 鉄鉢形鉢	(19.4) 12.4	外・内)N7/0灰白色	1mm以下の長石、3mm以下のチャートを少し含む	外)内)回転ナデ	7~8世紀
		280	第2層 43落ち込み	須恵器 タテ11.3 (杯) 船用鏡	タテ:11.3 コ:5.2	外・内)N7/0灰白色 脚)5R6/1黄灰色	砂粒を少し含む	外)回転ナデ、ヘラツナデ 内)回転ナデ	7~8世紀
		281	第2層 43落ち込み	須恵器 皿	7.6 4.2 1.9	外・内)赤)5YR6/1黄灰色	1.5mm以下の長石、2mmのチャートを多く含む	外)内)回転ナデ	口縁部内面に漆の炭化物付着、白明瓦 時層不詳
		282	第2層 83落ち込み	大塚形三尊 博伝	横径タテ: (4.3) コ:(4.1)	外・内)5YR3/1黒褐色 脚)7.5YR3/2黒褐色	精良	外)ナデ、金蓋が壊れる	白銅時代 7世紀後半
		283	第2層 83落ち込み	三尊博伝 陶型	横径タテ: (9.7) コ:(9.5)	外・内)10R5/1赤灰色 5YR6/3に赤い橙色 脚)2.5YR5/2赤褐色	長石を少し含む	外)ナデ	
		284	第2層 83落ち込み	須恵器 杯蓋	(18.9) 3.3	外・内)5Y7/1灰白色 脚)7.5Y6/1灰白色	3mmの長石、石英を少し含む	外)回転ヘラツナデ、宝珠 彫り付け後回転ナデ 内)回転ナデ	古代
		285	第2層 83落ち込み	須恵器 杯蓋	(13.8) —	外)5Y6/1灰白色 内)赤)N6/0灰白色	1.5mm以下の長石を多く含む	外)ケズリ後ナデ、回転ナ デ内)回転ナデ	古代
		286	第2層 83落ち込み	須恵器 杯蓋	(15.4) 1.5	外・内)赤)N7/0灰白色	精良	外)回転ナデ、フタ彫り 付け 内)回転ナデ	古代
		287	第2層 83落ち込み	須恵器 杯	(14.6) 4.4 11.1)	外)5P67/1明赤灰色 内)赤)2.5Y7/1灰白色	1.5mm以下の長石、1mmの石英、2.5 mm以下のチャートを多く含む	外)回転ナデ、高石彫り付 け後蓋部ナデ 内)回転ナデ	白明瓦 内面に漆の炭化物付着 9世紀
		288	第2層 83落ち込み	須恵器 杯	(10.1) 2.9	外・内)2.5Y6/1黄灰色 脚)5Y7/1灰白色	1mmの長石、黒色粒を含む	外)コクロコテ、不整方向 のナデ 内)コクロコテ	白明瓦 9世紀
	70	第3層 191ビント	土師器 皿	(11.4) 2.2	外・内)7.5YR5/1黄灰色 脚)7.5YR3/4黄褐色	0.5mmの長石を多く含む	外)コナデ、不定方向の ナデ		
	296	第2層	縄文土師 突形文	—	外)赤)7.5YR3/2黒褐色 内)5YR6/1黄灰色	2mm以下の長石、1mm以下のチャート を少し、2mm以下の石英を多く含む	外)2条突形	長原式土師	
	299	第2層	縄文土師 突形文	—	外)7.5YR6/2灰褐色 内)7.5YR6/1黄灰色 脚)7.5YR5/1黄灰色	1mm以下の長石、石英を少し、1mm以 下のチャートを多く含む	外)縦方向にケズリ後ナデ	長原式土師	
	300	第2層	縄文土師 突形文	—	外・内)7.5YR5/2灰褐色 脚)7.5YR3/1黒褐色	2mm以下の石英を多く、3mm以下の チャート、長石を少し含む	磨粒数し調整不明	長原式土師	
	301	第2層	縄文土師	—	外・内)赤)7YR7/2明赤灰色	2mm以下の長石、チャートを多く、石 英を少し含む	磨粒数し調整不明	時層不詳	
	302	第2層	縄文土師	—	外・内)7.5YR6/2灰褐色 脚)5YR6/2灰褐色	1mm以下の長石、チャートを多く、石 英、磨粒を少し含む	外)内)ハケメ	時層不詳	
	303	第2層	弥生土師 覆底部	—	外)7.5YR7/3に赤い橙褐色 内)2.5YR6/2に赤い橙褐色 脚)5YR6/2灰褐色	2mmの長石、雲母を含む	外)縦方向のハケメ、底部 木腐れ 内)ユビオサユ、ナデ	器形式	
	304	第2層	弥生土師 覆底部	—	外)2.5YR5/6明赤褐色 内)7.5YR6/2に赤い橙褐色 脚)2.5YR6/2に赤い橙褐色	2mm以下の長石、チャートを多く、石 英を少し含む	磨粒数し調整不明	弥生時代中期	
	305	第0層	大塚形博伝 陶型	横径タテ: (6.7) コ:(6.4)	外・内)5YR6/2に赤い橙褐色 脚)5YR6/2灰褐色	粒が細かく揃っているが、焼きが均一 で、砂塵のよりに表面がざらつて脆 い	裏面、前面に土粒をこね、 成形した痕跡		
	306	第2層	小形雄傳 博伝	タテ:4.0 厚:1.2	外・内)2.5YR6/4に赤い橙褐色 脚)N5/0灰白色	粗い	外)ナデ	奈良時代	
	307	第3層	縄文土師	—	外)N5/0灰白色 脚)10YR/1灰白色	3mmの長石を含む	外)ヘラツナデ、強いナデ 部)白土質	古代	
	308	第3層	平瓦	—	外)5YR6/3に赤い橙褐色 内)5YR7/3に赤い橙褐色 脚)2.5YR6/2に赤い橙褐色	2mm以下の長石、チャートを少し、0.5 mmの雲母を多く含む	外)斜格子タタキ 部)白土質	古代	
	309	第3層	平瓦	長さ:35.3 —	外)7.5YR7/2明赤灰色 内)赤)7.5YR6/2灰褐色	5mmの赤褐色粒、2mmの長石を含む	外)横タタキ、指原江底 部)白土質	古代	
	310	第3層 〜第2層	平瓦	—	外)5YR4/2灰褐色 内)赤)10YR5/2灰褐色	3mmの長石、3mmの黒色粒を含む	外)タタキ、ケズリ 部)白土	古代	
	311	中央谷	平瓦	—	外)7.5YR6/2に赤い橙褐色 内)2.5YR7/4暗赤褐色 脚)2.5YR6/4に赤い橙褐色	3mm以下の長石を少し、5mm以下の チャートを多く含む	外)タタキ 内)縦方向に幅2mm程の條	古代	
312	第3層	平瓦	—	外)N6/0灰白色 脚)5YR6/1に赤い橙褐色	3mmの長石を含む	外)横タタキ類 部)白土質	白土質技法 奈良時代後半〜平安時 代前半		

調査区	調査番号	出土遺構・層位	層様	口徑 器高 底径 (cm)	色 調	胎 土	成形・調整など	備 考
81	313	第0層	平瓦		外・内)SV7/3に淡い褐色 断)2.5V86/3に淡い褐色	2mm以下の長石, 3mm以下の石英を 多く含む	外)横方向のナゲ 内)非目録	古代
	314	第1層	平瓦		外)SP96/1青灰色 断)断)N6/0灰色	断, 0.5mmの長石を含む	外)横タテナゲ 内)横タテ横, 横方向のナゲ	縄巻8作り 古代
	315	第2層 (上層)	土師器 皿	19.8 2.5 —	外・内)H96/6に淡い赤褐色	2mmの石英, 0.5mmの雲母を少し含む	外)ヨコナゲ, ユニズエ 内)ナゲ	9世紀後半
82	316	縄絨層別部	土師器 甕	15.63 — —	外・断)H976/3に淡い黄褐色 内)H976/4に淡い黄褐色	2mmの褐色顔, 1mmの石英を含む	外)縦方向のハケメ 内)横方向のハケメ	8世紀
	317	第2層	土師器 小皿	タテ)16.2 ヨコ)6.8 —	外・断)7.5V77/3に淡い褐色 断)2.5V77/3断赤褐色	0.5mmの長石, チャート, 雲母を少し 含む	外)ハケメ 内)ナゲ	古代
	318	第0層	須恵器 杯蓋	15.1 4.3 —	外)N6/0灰色 内)7.5V96/1褐色	1mm以下の長石, 0.5mmのチャートを 含む	外)回転ナゲ, ケズリ後ナゲ 内)回転ナゲ	7世紀後半
319	第2層	須恵器 杯蓋	18.4 — —	外)5V6/1灰色 内)2.5V96/1赤灰色 断)5V96/1灰色	1.5mm以下のチャートを多く含む	外)回転ナゲ, ハケズリ 内)回転ナゲ	古代	
320	第1層	須恵器 杯蓋	つまみ径: 2.6	外)2.5V7/1灰白色 内)5V7/1灰白色 断)10V96/1褐色	1mm以下の長石, 0.5mmのチャートを 多く含む	外)ケズリ, 回転ナゲ 内)回転ナゲ	古代	
321	第1層	須恵器 杯蓋	15.6 (2.5)	外)2.5V6/1黄灰色 内)10V96/1褐色 断)5V6/1灰色	3mm以下の長石, 0.5mmの石英を多く 含む	外)ハケズリ, 回転ナゲ 内)回転ナゲ	8世紀初期	
322	第2層	須恵器 杯蓋	17.63 2.4 —	外)N6/0灰色 内)断)7.5V96/1褐色	1.5mmのチャートを少し, 1mm以下の 長石, 0.5mmの石英を多く含む	外)ハケズリ, 回転ナゲ 内)回転ナゲ	8世紀初期	
323	第2層	須恵器 杯蓋	つまみ径: 3.2	外・断)N6/0灰色 内)SP96/1紫灰色	2.5mmの長石を少し含む	外)ハケズリ 内)回転ナゲ, 不定方向の ナゲ	8世紀初期	
324	第0層	須恵器 杯蓋	17.63 3.7 —	外)N6/0灰色 内)2.5V6/1黄灰色 断)10V96/1褐色	1mmの石英を多く含む, 3mm以下の チャートを含む	外)ハケズリ, 回転ナゲ 内)回転ナゲ	8世紀後半	
325	第1層 第2層 (上層)	須恵器 杯蓋	21.4 — —	外)N7/1灰白色 内)断)N6/1灰色	3mmの長石, 石英を含む	外)回転ナゲ, 回転 内)不定方向のナゲ, 回転 ナゲ	上層に回転ナゲの1個 層がみつままの可能性 古代	
326	第2層 (上層)	須恵器 杯蓋	28.0 3.1 —	外・内)N6/0灰色	1mm以下の長石を少し, 2mm以下の チャートを多く含む	外)回転ナゲ, ハケズリ後 ナゲ 内)回転ナゲ, ナゲ	口縁部に著しい歪みの ナゲ	
327	第2層	須恵器 杯	11.83 3.3 —	外)10V96/1褐色 内)2.5V6/2灰色	3mmの石英, 0.5mmの長石, 1mm以下 のチャートを多く含む	外)回転ナゲ, 不定方向の ナゲ 内)回転ナゲ	7世紀後半	
328	第2層	須恵器 杯	12.23 3.6 —	外)10V96/1褐色 内)7.5V6/1赤灰色 断)5V96/1褐色	2mmの長石と黒色顔を含む	外)回転ナゲ, 底部へケズ リ未調整 内)回転ナゲ, 不定方向の ナゲ	7世紀後半 8世紀前半	
329	第2層 (上層)	須恵器 杯	12.23 3.4 9(4)	外)10V96/1褐色 内)7.5V6/1赤灰色 断)5V96/1褐色	3mm以下の長石, 1mmのチャートを多く 含む	外)回転ナゲ, 底部へケズ リ後ナゲ 内)回転ナゲ	7世紀後半	
330	第2層	須恵器 杯	12.63 3.5 9(6)	外)N5/0灰色 内)SP96/1青灰色 断)5V96/1褐色	1.5mm以下のチャートを多く含む	外)回転ナゲ, 底部へケズ リ後ナゲ 内)回転ナゲ	7世紀末~8世紀初期	
331	第2層	須恵器 杯	13.63 4.4 7(8)	外・内)N6/0灰色	3mm以下の長石を少し, 0.5mmの石英 を多く含む	外)回転ナゲ, 島付付け高 台, 底部調整し後ナゲ 内)回転ナゲ	7世紀後半	
332	第0層	須恵器 杯	— — 9(4)	外・内)N6/0灰色 断)10V96/1褐色	1mm以下のチャートを少し含む	外)回転ナゲ, 島付付け高 台, 底部ケズリ後ナゲ 内)回転ナゲ	8世紀後半前後	
333	第1層	須恵器 杯	15.2 4.4 11.0	外)10V96/1褐色 内)2.5V96/2赤褐色	1mm以下のチャートを少し含む	外)回転ナゲ, 島付付け高 台, 底部調整し後ナゲ 内)回転ナゲ, 不定方向の ナゲ	8世紀後半前後	
334	第2層	須恵器 杯	16.4 4.0 (12.6)	外)5V7/1灰白色 内)断)7.5V77/1明褐色	1mm以下の長石を少し含む	外)回転ナゲ, 島付付け高 台, 底部ケズリ後ナゲ 内)回転ナゲ, 不定方向の ナゲ	8世紀後半前後	
335	第0層	須恵器 杯	19.0 4.9 (12.2)	外・内)断)N6/0灰色	1mm以下の長石, 石英を含む	外)回転ナゲ, 島付付け け時ナゲ, 底部調整へケ ズリ 内)回転ナゲ	前面全体に灰を被る 8世紀後半前後	
336	第2層 (上層)	須恵器 杯	14.33 5.0 9(8)	外・内)N6/0灰色 断)N5/0灰色	0.3mm以下の褐色顔を含む	外)回転ナゲ, 島付付け け時ナゲ, 底部へケズリ 内)回転ナゲ	8世紀後半前後	
337	第2層	須恵器 杯	15.03 6.2 9(4)	外)10V97/1灰白色 内)7.5V77/1明褐色	0.5mmの長石, 1mm以下の石英, 2mm 以下のチャートを多く含む	外)回転ナゲ, 島付付け高 台, 底部ケズリ後ナゲ 内)回転ナゲ	8世紀後半前後	
338	第1層	須恵器 杯	19.0 4.2 9(8)	外)2.5V96/1オリーブ灰色 内)5V96/1褐色 断)N6/0灰色	0.3mmの石英を多く含む	外)回転ナゲ, 島付付け け時ナゲ 内)回転ナゲ	8世紀後半前後	
339	第1層	須恵器 杯	10.03 2.1 9(8)	外)5V77/1明褐色 内)断)H9V77/1灰白色	1mm以下の石英を多く含む	外)ナゲ, 底部未調整 内)ナゲ	古代	

調査区	遺物番号	写真番号	出土遺構・層位	器種	口径 高さ 底径 (cm)	色調	胎土	成形・調整など	備考
08-2 調査区	340	第2層 (上層)	甕蓋跡 杯	(10.00 2.4 7.0)	外・内(赤)N6/0灰色	微細な長石、石英を微かに含む	外)ナゲ、底部へラ切手ナゲ 内)ナゲ	古代	
	341	第1層	甕蓋跡 杯	(10.00 2.4 6.2)	外・内(赤)N6/0灰色 内)SP95/1青灰色	2mm以下の長石を少し含む	外)ナゲ、底部未調整 内)ナゲ	外面に自然釉付着 古代	
	342	第1層 第2層	甕蓋跡 皿	(17.23 3.2 11.5,4)	外)N4/0灰色 内・内(N)N7/1灰白色	2mmの長石、1mmの褐色粒を含む	外)割転ナゲ、底部取り取り 外割転ナゲ 内)割転ナゲ	古代	
	343	第2層 (上層)	甕蓋跡 杯	11.0 2.6 —	外)2.5V7/1灰白色 内(赤)2.5V7/2灰黄色	2mm以下のチャートも微かに含む	外)割転ナゲ、底部に「万 字へラ書き 内)割転ナゲ	灯明皿 内面に漆の炭化跡付着 古代	
	344	第2層	甕蓋跡 杯	(10.23 3.7 7.5)	外)2.5V6/1黄灰色 内)SV96/1褐色灰色 内)SV94/1黄灰色	0.3mmの褐色粒を含む	外)コロコナゲ、底部へラ 切手 内)コロコナゲ	赤色顔料付着 9世紀	
	345	第2層 (上層)	甕蓋跡 (高杯) 貼付破	口:13.4	外・内(赤)N6/0灰色	1mm以下の長石を多く、砂粒を少し 含む	外)割転ナゲ 内)割転ナゲ、中央部横 方向ナゲ	古代	
	346	第1層	甕蓋跡 (高) 貼付破	タテ:8.1 口:6.5	外・内(赤)N7/0灰白色	2mm以下の長石を少し、1mmの石英、 0.5mmのチャートも微かに含む	外)割転ナゲ 内)割転ナゲ、中央部横 方向ナゲ	8世紀	
	347	第1層	甕蓋跡 (高) 貼付破	タテ:8.4 口:7.4	外・内)N7/0灰白色 内)SP96/1青灰色	精良	外・内)割転ナゲ	古代	
	348	第1層	甕蓋跡 (高) 貼付破	タテ:9.9 口:7.3	外・内(赤)N6/0灰色 内)N7/0灰白色	1mm以下の長石、砂粒を少し含む	外・内)割転ナゲ	古代	
	349	第1層 ～第2層	甕蓋跡 (寛) 貼付破	タテ:7.6 口:6.2	外)G7/1灰白色 内(赤)N6/0灰色	2mm以下の長石、砂粒を少し含む	外)タタキ後ナゲ	鎌倉期 古代	
	350	第1層	甕蓋跡 短頸蓋	(7.4 — —)	外)2.5V6/1黄灰色 内)NS/0灰色 内)SP94/1褐色灰色	3mm以下の長石を多く、0.5mmの チャートも少し含む	外・内)割転ナゲ、肩部接 合痕	外面肩部、内面底部に自 然釉付着 古代	
	351	第1層 ～第2層	甕蓋跡 長頸蓋	— — 7.2)	外)10Y2/1チャート褐色 内)7.5V9/1灰白色 内)NS/0灰色	1mm以下の長石を少し、0.5mmの チャートも微かに含む	外)ケズリ後ナゲ、器内付け 長石、1条状痕 内)ヨコナゲ	7世紀	
	352	第2層	甕蓋跡 皿	— — 7.2)	外)N6/0灰色 内)10R6/1赤灰色 内)10R6/1赤灰色	1mm以下の長石を少し、2mm以下の 石英を微かに含む	外)割転ナゲ、1条状痕 内)割転ナゲ	自然釉付着 7世紀～8世紀初期	
	353	第1層	甕蓋跡 小形瓶	— — 4.4	外・内(赤)2.5V6/1黄灰色	2mm以下の長石、砂粒を含む	外)ケズリ、器内付け長石、 底部ナゲ	10c.50 9世紀末	
354	第1層	甕蓋跡 特殊型有蓋	— — 11.5)	外)10Y6/1褐色灰色 内(赤)7.5V96/1褐色灰色	0.5mmの長石、砂粒を多く含む	外)ケズリ後ナゲ、器内ナ ゲ、底部ケズリ 内)ヨコナゲ、不定方向 のナゲ	外面に自然釉付着 古代		
355	第2層	甕蓋跡 水瓶	(4.0 — —)	外・内)SP94/1褐色灰色 内)SP97/1明褐色	1mm以下の長石、石英を含む	外)割転ナゲ 内)割転ナゲ、底部	外面一部灰かぶり 9世紀		
356	第1層	甕蓋跡 水瓶	(1.0 — —)	外)10Y96/1褐色灰色 内)7.5V96/1褐色灰色	0.5mmの石英を二微かに含む	外)ヨコナゲ 内)ナゲ	自然釉付着 8世紀		
357	第1層	甕蓋跡 水瓶	— — —)	外・内(赤)10Y96/2灰黄褐色 軸)SV4/2灰オリーブ色	1.5mm以下の長石を多く、1mm以下の 石英を微かに含む	外)ヨコナゲ 内)ナゲ	外面、内面上部施釉 9世紀		
358	第1層 第2層	甕蓋跡 砂鉢形鉢	(18.23 10.7 —)	外)2.5V7/1灰白色 内)SV97/1明褐色灰色 内)7.5V96/1褐色灰色	1mm以下の長石を少し、0.5mmの チャートも微かに含む	外)割転ナゲ、ケズリ、1条 状痕 内)割転ナゲ、ナゲ	7世紀後半～8世紀初期		
359	第0層	甕蓋跡 数ナ	(12.00 — —)	外)N6/0灰色 内)SV97/1明褐色灰色 内)SV96/1褐色灰色	長石、砂粒を含む	外・内)割転ナゲ	古代		
360	第1層	甕蓋跡 甕	— — 11.23)	外)10Y96/1褐色灰色 内(赤)SV6/1褐色灰色	2mmの長石を含む	外・内)割転ナゲ、不整 方向のナゲ	8～9世紀		
361	第2層	甕蓋跡 甕	(15.63 10.60 —)	外(赤)SV6/1灰白色 内)2.5V9/1灰白色	3mmの長石を含む	外)割転ナゲ、ケズリ、タタ キ、沈着痕のび込み 内)ナゲ	一部タタキが露出した 痕跡 古代		
362	第1層 (上層)	甕蓋跡 甕	(13.00 — —)	外)NS/0灰色 内)N6/0灰色	2mm以下の長石、砂粒を微かに含む	外)タタキ後ナゲ 内)同心円タタキ後ナゲ	古代		
363	第1層 第2層	甕蓋跡 瓶	(22.63 10.60 13.63)	外)10Y97/1灰白色 内(赤)7.5V97/2明褐色灰色	2mmの長石を少し含む	外)割転ナゲ、把手器内付 けナゲ 内)割転ナゲ、把手器の付 け跡ゴビロキヤニ	平安時代		
364	第1層 第2層(上層) 第2層	甕蓋跡 瓶	(26.00 125.00 16.00)	外)SV96/1褐色灰色 内)7.5V97/1明褐色灰色 内)SV7/1灰白色	3mm以下のチャートも多く、0.5mmの 長石、炭粒を少し含む	同転ナゲ	平安時代		
365	第1層 第2層(上層) 第2層	甕蓋跡 瓶	— — 11.80)	外)N6/0灰色 内)2.5V7/1灰白色 内)2.5V9/1灰白色	1mm以下の長石、石英、0.5mmの炭粒 を少し、2mm以下のチャートも多く 含む	外)ナゲ、ケズリ後ナゲ 内)ヨコナゲ	平安時代		
366	第1層 第2層	特殊型有蓋 緑釉陶器	— — —)	外)SV5/1チャート灰色 内)10Y96/2灰黄褐色 内)10Y96/2灰黄褐色	密	外・内)施釉	近江にある1号実成 10世紀後半		

調査区	遺物番号	写真記録	出土遺構・層位	部材	口縁器底径(m)	色調	胎土	成形・調整など	備考
86	367	3016	輪縁残存層	緑釉陶器	—	外)5G75/1オリーブ灰色 内)2.5YR6/2R黄褐色 附)10YR7/1R1白色	密	外・内)施釉	近江あるいは美濃産 10世紀後半
	368	3017	第1層	緑釉陶器	—	外)10C98/1緑灰色 内)7.5Y7/1R1白色 附)5Y7/1R1白色	密	外・内)施釉	近江あるいは美濃産 10世紀後半
	369	3018	第2層	緑釉陶器	—	外)5G75/1オリーブ灰色 内)10YR5/2オリーブ灰色 附)10YR6/2R黄褐色	密	外・内)施釉	近江あるいは美濃産 10世紀後半
	370	3019	第1層	灰釉陶器 底(板)	— (10.4)	外・内)P-黒 2.5Y7/1R1白色	1mm以下の長石、2mm以下のチャート を少し含む	外)口縁部ナデ、ケズリナ デナデ、胎の付け高台、底部 ケズリ取った胎部 内)口縁部ナデ、底部ニヒ オナデ	東濃(美濃東部)産 10世紀後半
	371	39	輪縁残存層	土師器 皿	7.0 1.4 —	外)5YR7/3に赤い褐色 内)10R6/4に赤い赤褐色	1mm以下の長石、シャモットを少し、1 mm以下の金雲母を多く含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ、ヒビオナエ	13世紀前後
	372	39	輪縁残存層	土師器 皿	7.0 1.3 —	外)7.5YR7/3に赤い褐色 内)5YR7/3に赤い褐色	1mm以下の長石、シャモットを少し含む	外)ヨコナデ、ナデ 内)ナメ方向のハケム痕	13世紀前後
	373	39	輪縁残存層	土師器 皿	6.6 1.9 —	外)7.5YR7/3に赤い褐色 内)2.5YR6/4に赤い褐色	1mm以下の長石、0.5mm以下の金雲 母を少し含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ	打明器 13世紀前後
	374	39	第1層	土師器 皿	7.8 1.1 —	外)5YR7/3に赤い褐色 内)2.5YR7/4鉄赤褐色	2mm以下の長石、石英、シャモット、 金雲母を含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ	13世紀前後
	375	39	第1層	土師器 皿	7.8 1.0 —	外)7.5YR7/4に赤い褐色 内)10YR7/4に赤い黄褐色 附)5Y5/3Rオリーブ色	2mmの長石を含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 後ナデ 内)ヨコナデ	13世紀前後
	376	39	第1層	土師器 皿	8.0 1.3 —	外)7.5YR7/3黄褐色 内)2.5YR7/3鉄赤褐色	1mmの長石、シャモット、金雲母を 多く含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ	13世紀前後
377	39	第1層	土師器 皿	8.0 1.3 —	外)10YR6/2R黄褐色 内)10YR7/3に赤い黄褐色	3mm以下の長石を少し、0.5mmの金雲 母を多く含む	外・内)ヨコナデ	13世紀前後	
378	39	第1層	土師器 皿	8.0 1.4 —	外・内)7.5YR7/3に赤い褐色	2mm以下の長石、3mm以下の石英、 シャモットを含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ	13世紀前後	
379	39	第1層	土師器 皿	8.4 1.3 —	外・内)赤 7.5YR7/3に赤い褐色	0.5mmの雲母を少し、2mm以下の長 石、シャモットを多く含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ	13世紀前後	
380	39	第1層	土師器 皿	8.0 1.5 —	外・内)5YR7/4に赤い褐色	1mm以下の長石を少し、石英、0.5mm の金雲母を多く含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ	13世紀前後	
381	39	第1層	土師器 皿	8.3 1.0 —	外・内)赤)2.5YR7/4鉄赤褐色	0.5mmの長石、石英、金雲母を多く 含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ	13世紀前後	
382	39	第2層	土師器 皿	7.8 1.3 —	外)7.5YR7/4に赤い褐色 内)赤)7.5YR7/3に赤い褐色	2mmの褐色粒を含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 後ナデ 内)ヨコナデ	13世紀前後	
383	39	第2層	土師器 皿	7.7 1.1 —	外)5YR6/4に赤い褐色 内)2.5YR6/4褐色	1mmの褐色粒を多く含む	外・内)ヨコナデ、不定方 向のナデ	13世紀前後	
384	39	第2層	土師器 皿	7.6 1.1 —	外)5YR7/6褐色 内)5YR6/4に赤い褐色 附)7.5YR5/2R褐色	1.5mmの褐色粒、0.5mmの褐色粒を含 む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 後ナデ 内)ヨコナデ、回転方向の ナデ	13世紀前後	
385	49	第2層	土師器 皿	8.0 1.1 —	外)5YR7/4に赤い褐色 内)赤)5YR6/4に赤い褐色	3mmの長石、1mmの褐色粒を含む	外・内)ヨコナデ、不定方 向のナデ	13世紀前後	
386	49	第2層	土師器 皿	8.0 1.4 —	外・内)赤)5YR7/6褐色	1.5mmの褐色粒、0.5mmのシャモットを 含む	外・内)ヨコナデ	13世紀前後	
387	49	第2層	土師器 皿	8.5 1.5 —	外)7.5YR7/4に赤い褐色 内)7.5YR6/4に赤い褐色	1mmのシャモットを多く含む	外・内)ヨコナデ	13世紀前後	
388	49	第2層	土師器 皿	8.3 1.2 —	外)5YR7/4に赤い褐色 内)赤)5YR6/4に赤い褐色	1.5mmのシャモットを多く含む	外)ヨコナデ、不定方向の ナデ 内)ヨコナデ	13世紀前後	
389	49	輪縁残存層	土師器 皿	9.5 1.7 —	外)7.5YR7/3に赤い褐色 内)7.5YR7/2暗黒灰色	0.5mm以下の金雲母を多く、1mmの石 英を多く含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ヨコナデ	底辺傾度あり 13世紀前後	
390	49	第1層	土師器 皿	12.4 2.6 —	外)7.5YR7/4に赤い褐色 内)7.5YR7/3に赤い褐色	3mm以下の長石を少し、1mm以下の 石英、0.5mmのチャート、雲母を多く 含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)磨耗の甚不明	13世紀前後	
391	49	第1層	土師器 皿	12.8 2.7 —	外)5YR7/6褐色 内)7.5YR7/3に赤い褐色	2mm以下の長石、1mm以下のチャ ート、シャモット、0.5mmの雲母を少し 含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ	13世紀前後	
392	49	第1層	土師器 皿	13.2 2.1 —	外・内)7.5YR7/4に赤い褐色	0.5mm以下の長石を少し含む	外)ヨコナデ、ヒビオナエ 内)ナデ	13世紀前後	
393	49	第1層	土師器 羽釜	01.0 —	外・内)7.5Y7/6褐色 附)10YR8/4黄褐色	1mmの褐色粒、3mmの長石、石英を含 む	外)左方向へ調整の痕跡、 ハケム痕	中世	

調査区	調査中	遺物番号	出土遺構・層位	層様	口径 器高 底径 (cm)	色調	胎土	成形・調整など	備考
OS 1 2 調査区	第1層	394	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	6.7 2.2 —	外)P1)N5/0灰白色	密	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)ヨコナゲ	13世紀後半
		395	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	8.0 — —	外)2.5V7/1灰白色 内)8V97/1明褐色	砂粒を少し含む	外)ヨコナゲ 内)磨耗の丸調整不明	13世紀後半
		396	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	7.0 — —	外)N6/0灰白色 内)10R6/1黄褐色 磨)N8/0灰白色	砂粒を含む	外)ヨコナゲ 内)磨耗の丸調整不明	13世紀後半
		397	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	7.0 — —	外)7.5V97/1明褐色 N6/0灰白色 内)N7/0灰白色 磨)10V97/1灰白色	微細な長石、石英を僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)ヨコナゲ	13世紀後半
		398	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	8.0 2.9 0.2	外)N6/0灰白色 内)SP65/1黄褐色 磨)10V7/1灰白色	密	外)ナゲ 内)ヘラヒギキ	13世紀後半
		399	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	6.8 2.8 0.6	外)N5/0灰白色 内)N6/0灰白色	1mmのチャートと1粒、0.5mmの石英を 僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 後ナゲ 内)埴文	13世紀後半
		400	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	8.0 — —	外)N6/0灰白色 10V97/1灰白色 内)8V97/1明褐色	微細な長石とごく僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 後不定方向のナゲ 内)磨耗し、一部ヒギキが見える	13世紀後半
		401	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	7.4 2.7 0.4	外)N5/0灰白色 内)N4/0灰白色 磨)5V97/1灰白色	密	外)ヨコナゲ 内)埴文	13世紀後半
		402	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	7.8 2.8 0.0	外)10V97/1灰白色 N4/0灰白色 内)7.5V7/1明褐色 磨)5V98/1灰白色	0.5mm以下のチャートをごく僅かに含 む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 後ナゲ 内)埴文	13世紀後半
		403	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	8.0 3.0 3.1	外)N5/0灰白色 内)N7/0灰白色	0.5mmの砂粒、チャートを僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)磨耗し、一部ヒギキが見える	13世紀後半
		404	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	8.0 2.9 3.1	外)2.5V7/1灰白色 内)N6/0灰白色	密	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)埴文、底面と側面にハケメ	13世紀後半
		405	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	7.8 3.3 0.4	外)N3/0暗灰色 内)5V97/1明褐色 磨)5V97/1灰白色	微細な石英とごく僅かに含む	外)ヨコナゲ 内)埴文	13世紀後半
		406	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	10.2 3.4 3.4	外)10V97/1灰白色 N6/0灰白色 内)N6/0灰白色 磨)10V98/1灰白色	微細な金雲母を少し含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)1/4径後見込み部磨 状埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半
		407	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	10.2 3.7 2.5	外)N6/0灰白色 内)N5/0灰白色	3mmのチャートを1粒、微細な黒色粒 を含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)見込み部磨状埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半
		408	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	10.2 3.7 0.4	外)P)SP65/1黄褐色 磨)10V97/1灰白色	3mmの石英を1粒含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半
		409	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	11.4 3.9 0.7	外)P)N6/0灰白色 磨)N8/0灰白色	密	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 後ナゲ 内)埴文、一部磨耗	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半
		410	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	12.4 4.3 0.5	外)P)N6/0灰白色	砂粒を少し含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)磨状埴文、一部磨 耗	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半
		411	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	12.6 4.2 4.2	外)10V97/1灰白色 N6/0灰白色 内)2.5V6/1黄褐色 磨)10V98/1灰白色	密	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 後ナゲ 内)ハケメ埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半
		412	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	13.2 4.3 0.0	外)P)N5/0灰白色 磨)N8/0灰白色	1mm以下のチャートをごく僅かに含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)磨状埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半
		413	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	13.0 4.5 4.9	外)P)N5/0灰白色 磨)5V97/1灰白色	2.5mmのチャートを1粒含む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 後ナゲ 内)ハケメ埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半
414	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	12.6 4.4 5.0	外)P)N5/0灰白色	密	外)強いヨコナゲ、ユビオサエ 内)埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半		
415	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	12.2 3.9 4.6	外)P)N6/0灰白色 磨)N8/0灰白色	1mm以下の長石、チャートを僅かに含 む	外)ヨコナゲ、ユビオサエ 内)埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半		
416	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	8.0 1.5 —	外)P)N5/0灰白色 磨)N7/0灰白色	密	内)ヨコナゲ、磨)ハケ メ後ナゲ、見込み部磨 状埴文	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半		
90	417	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	14.2 5.4 —	外)P)5V7/1灰白色 内)5V97/1灰白色	1mmの黒色粒を含む	内)底面に強いヘラヒギキ	11～12世紀以降	
	418	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	09.6 — —	外)N5/0灰白色 内)磨)10V97/2に強い黄褐色	2mmの長石を含む	外)タタキ後ヨコナゲ、平 行タタキ 内)横方向のナゲ	横巻型部-3層～IV-1層 13世紀中頃～後半	
	419	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	09.0 — —	外)P)10V97/1灰白色 内)N7/0灰白色	1mm以下の長石、雲母、砂粒を少し 含む	外)ユビオサエ 内)磨)1/4径のハケメ	一部に底が付着	
	420	瓦器 小瓶	瓦器 小瓶	16.4 — —	外)P)N4/0灰白色 磨)7.5V95/2黄褐色	3mmの長石を僅かに含む	外)磨)1/4径のヨコナゲ、 ナゲ 内)横方向ナゲ	体部外面に炭化物が附着 付着	

調査区	面番 面番 面番	写 真 図 説	出土遺構 ・層位	跡形	口徑 器高 底径 (cm)	色 調	胎 土	成形・調整など	備 考
89	421	第1層	瓦質土層 三足土	—	31.63	外)N4/0灰色 内)K5/0灰色 脚)2.5V7/1灰白色	1mm以下の長石、砂粒を含む	外)強いナデ 内)ナデ	
	422	第0層	瓦質土	跡の長さ: 20.3	—	外)50%/1灰白色 内)脚)7.5V7/1明褐色	砂粒を少し含む	ヘタケツノ後ナデ	
	423	第1層	瓦質土層 砂の付?	—	28.63	—	1mm以下の長石を少し、砂粒、炭屑 を多く含む	外)コビオオシユ、ナデ、ミダ 斗笠 内)層位の為詳細不明	内形の意あり
90	424	機械探知器 第0層	灰緑系 灰赤土層 片口跡	29.5 10.1 99.0	—	外)P-内)N6/0灰色	10mmの粒を含む	外)同層ナデ、底部へ少 なり土調整 内)不整方向のナデ	森田分類第1層第1段階 12世紀中葉～後半
	425	第0層	灰緑系 灰赤土層 片口跡	29.83	—	外)5V7/1灰白色 内)脚)7.5V7/1灰白色	3mmの長石、2mmの黒色粒を含む	外)同層ナデ 内)左上方向へナデ	口縁部内面の一部被熱
	426	機械探知器 第1層(上段)	灰緑系 灰赤土層 片口跡	29.23 10.4 10.23	—	外)10V96/1褐色 内)P0 10V97/1灰白色	磁石が多く、7.6mmの長石を含む	外)同層ナデ、ヤマガタ ノズルによる成形時のナデ 底部土調整 内)不整方向のナデ、同層 ナデ	雲居層第1～2段階 13世紀後半～14世紀初 半
	427	機械探知器 第0層	古瀬戸 陶器容器	313.03	—	外)5V7/3黄褐色 内)脚)7.5V7/2明褐色	チャートを含み	茶碗、鉢	後周様式 15世紀
	428	第0層	青灰色 土層(加多氣) 層	22.53 25.3 12.0	—	外)5V6/2灰オリーブ色 内)5V14/1茶系黒色 内)2.5V9/1褐色	1mm以下の長石、チャートを少し含む	外)コナナデ、ケズリ後ナデ、 蓋跡 内)コナナデ、縦方向のナデ、 蓋跡	中野分類3～4形式 12世紀後半～13世紀初 半
	429	第1層	青磁 碗	313.03 8.2 53.2	—	外)7.5GV6/1緑灰色 内)5GV6/1オリーブ灰色 脚)5V6/1灰色	密	外)緑蓮弁状 内)無状	大牟前分類 蓮秋葉系Ⅱ-2a類 13世紀中頃～14世紀初 頭前後
	430	第0層	青磁 碗	314.03	—	外)2.5GV6/1オリーブ灰色 内)10V6/2オリーブ灰色 脚)5V7/2灰白色	密	外)緑蓮弁状	大牟前分類 蓮秋葉系Ⅱ-2a類 13世紀中頃～14世紀初 頭前後
08-2 調査区	431	第1層	青磁 碗	314.03	—	外)5GV6/1オリーブ灰色 内)7.5GV6/1緑灰色 脚)2.5V7/2灰白色	密	外)緑蓮弁状	大牟前分類 蓮秋葉系Ⅱ-2a類 13世紀中頃～14世紀初 頭前後
	432	機械探知器 第0層	青磁 碗	315.63 8.8 4.2	—	外)2.5GV6/1オリーブ灰色 内)2.5GV7/1明オリーブ灰色	密	外)緑蓮弁状、削り出さ 高 内)無状	蓮秋葉系Ⅱ-3類 13世紀後半
	433	第0層	青磁 碗	316.03	—	外)P-内)10V6/2オリーブ灰色 脚)2.5V7/1灰白色	密	外)緑蓮弁状 内)無状	蓮秋葉系Ⅱ-3類 13世紀後半
	434	第1層	青磁 碗	—	—	外)7.5V5/2灰オリーブ色 内)10V6/2オリーブ灰色 脚)5V6/1灰色	密	外)ヘタケツノの磁跡	
	435	第0層	青磁 碗	—	35.83	外)5V5/1灰色 内)2.5V5/2暗灰黄色 脚)2.5V6/2灰白色	密	外)削り出さ 底部	蓮秋葉系
	436	第1層	青磁 皿	310.03 2.1 54.0	—	外)7.5GV7/1明緑灰色 7.5V96/2灰褐色 脚)10V7/1灰白色	密	外)磁跡、クシ目後ケ ズリナデ、黒地の跡	大牟前分類 蓮秋葉系Ⅰ-2a類 12世紀中頃～後半
	437	第1層	青磁 皿	310.43	—	外)P-内)7.5V6/2灰オリーブ色 脚)7.5V7/1灰白色	密	外)P-内)磁跡	12世紀中頃～後半
	438	第1層	青白磁 (影射) 合子	6.2 2.9 5.6	—	外)5G7/1明緑灰色 10V96/2灰白色 内)2.5GV7/1明オリーブ灰色	密	外)菊花形	
	439	第2層	白磁 皿	39.2 1.8 96.0	—	外)P-内)5V6/1灰白色 脚)NT/0灰白色	密	外)P-内)磁跡、口黄	大牟前分類IX-1a類 13世紀後半～14世紀初 半
	440	第0層	白磁 皿	39.4 2.5 95.0	—	外)P-内)5V6/1灰白色 脚)2.5V7/1灰白色	密	外)P-内)磁跡、口黄	大牟前分類IX-1b類 13世紀後半～14世紀初 半
441	第0層	白磁 皿	311.03	—	外)P-内)NT/0灰白色 脚)2.5V7/1灰白色	密	外)P-内)磁跡、口黄	大牟前分類IX-1c類 13世紀後半～14世紀初 半	
08-3 調査区	442	第1層	胎軸陶器 皿	—	—	外)P-内)N6/0灰色 脚)50%/1灰白色	密	外)ヘタケツノ 内)コナナデ	13世紀後半～14世紀初 半
	443	第1層	胎軸陶器 皿	—	—	外)N6/0灰色 内)SP96/1青灰色 脚)10V96/1褐色	密	外)ヘタケツノ 内)コナナデ	13世紀後半～14世紀初 半
	444	第1層	胎軸陶器 皿	—	—	外)P-内)N6/0灰色 脚)2.5V96/1赤灰色	密	外)ヘタケツノ 内)コナナデ	13世紀後半～14世紀初 半
	445	第1層	胎軸陶器 皿	—	—	外)P-内)N6/0灰色 脚)N5/0灰色	密	外)ヘタケツノ 内)コナナデ	13世紀後半～14世紀初 半
	446	第1層	胎軸陶器 皿	—	—	外)P-内)N6/0灰色 脚)NT/0灰白色	密	外)ヘタケツノ 内)コナナデ	13世紀後半～14世紀初 半

調査区	調査中	遺物 番号	写真 図番	出土遺構 ・層位	器種	口徑 器高 底径 (cm)	色 調	胎 土	成形・調整など	備 考	
91		447	コナ 1 8	第1層	船輪陶器 皿		外)10Y76/1赭灰色 内)5Y76/1赭灰色 脚)7.5Y76/2灰褐色	密	外)ヘラケズ 内)ヨコナデ	13世紀後半～14世紀前半	
		448	コナ 1 8	第1層	船輪陶器 皿		外)10Y76/1赭灰色 内)7.5Y76/2灰褐色 脚)7.5Y76/1赭灰色	密	外)ヘラケズ 内)ヨコナデ	13世紀後半～14世紀前半	
		449	コナ 1 8	第0層	船輪陶器 皿		外)5Y76/1赭灰色 脚)2.5Y76/1赤灰色	密	外)ヘラケズ 内)ヨコナデ	13世紀後半～14世紀前半	
		450	コナ 1 8	第0層	船輪陶器 皿		外)5Y76/1赭灰色 脚)5R76/1赤灰色	密	外)ヘラケズ 内)ヨコナデ	13世紀後半～14世紀前半	
		451	コナ 1 8	北志田	船輪陶器 皿		外)2.5Y7/1灰白色 内)10Y76/1赭灰色 脚)2.5Y7/1灰白色	密	外)瓶い・甲船ヘラケズ 内)ヨコナデ	13世紀後半～14世紀前半	
		452	コナ 1 8	第1層	船輪陶器 皿		外)7.5Y76/1赭灰色 内)N6/0灰色 脚)10R6/1赤灰色	密	外)瓶い・甲船ヘラケズ 内)ヨコナデ	13世紀後半～14世紀前半	
		453	コナ 1 8	第0層 第1層	船輪陶器 皿	— — (7.0)	外)2.5Y6/1黄灰色 内)10Y76/1赭灰色 脚)2.5Y7/1灰白色	黒色斑点を含む	外)瓶いヘラケズ 内)ヨコナデ	大宰府分館IV類 13世紀後半～14世紀前半	
		454	44	中央谷	軒丸瓦	軒丸径:15.0	外)N4/0灰色 脚)N5/0灰色 脚)5Y7/1灰白色	3mm以下の長石を多く、石英を少し含む	皿)布目		左巻き三巴紋 16世紀後半
		455	44	中央谷	軒丸瓦	軒丸径:15.0	外)N4/0灰色 脚)7.5Y7/1明褐色	3mm以下の長石を多く、石英、雲母を少し含む	皿)ヨコナデ		左巻き三巴紋 16世紀後半
		456	44	中央谷	軒平瓦		外)N5/0灰色 脚)2.5Y7/1灰白色	1mm以下の長石、2mm以下のチャート を少し含む	皿)ヨコナデ		宝珠蓮華紋 16世紀後半
92		457	44	中央谷	軒平瓦		外)N5/0灰色 脚)5Y7/1明褐色	3mm以下の長石、1mm以下のチャート を少し、2mm以下の石英を多く含む	皿)ヨコナデ		宝珠蓮華紋 16世紀後半
		458	44	中央谷	丸瓦	幅:16.0	外)N6/0灰色 脚)N5/0灰色 脚)5Y7/1明褐色	3mm以下の長石を多く、2mm以下の石 英を少し、金雲母を多く含む	皿)布目		
		459	44	中央谷	丸瓦	長さ:31.0 幅:12.4	外)N5/0灰色 脚)2.5Y7/1灰白色	1mm以下の長石、チャートを少し含む	皿)布目、再刷積		
		460	44	第1層	軒丸瓦	軒丸径:13.6 幅:13.8	外)5Y76/1黄灰色 脚)10Y76/1赭灰色 脚)7.5Y76/1赭灰色	チャートをごく僅かに含む	皿)布目		13世紀～14世紀の古瓦
		461	44	第0層	軒丸瓦		外)N4/0灰色 内)10Y5/1灰白色 脚)2.5Y7/2黄褐色	3mm以下の長石、石英、チャート、雲 母を多く含む	ナデ		菊花紋 中世前期 13世紀後半
		93		462	44	中央谷	平瓦	長さ:28.9 幅:22.7	外)N5/0灰色 脚)5Y7/1明褐色	1mmの長石を多く、3.5mm以下の チャートを少し含む	皿)瓶いナデ 皿)縦方向のナデ
463	44			中央谷	平瓦	長さ:29.3 幅:21.6	外)N6/0灰色 脚)2.5Y7/1灰白色	3mm以下の長石、2mm以下の石英、 0.5mmのチャートを少し含む	皿)ナデ 皿)縦方向のナデ		

写真図版



第1面北部(南から)



第1面中部(北から)



第1面南部(西から)



第3面全景(北から)



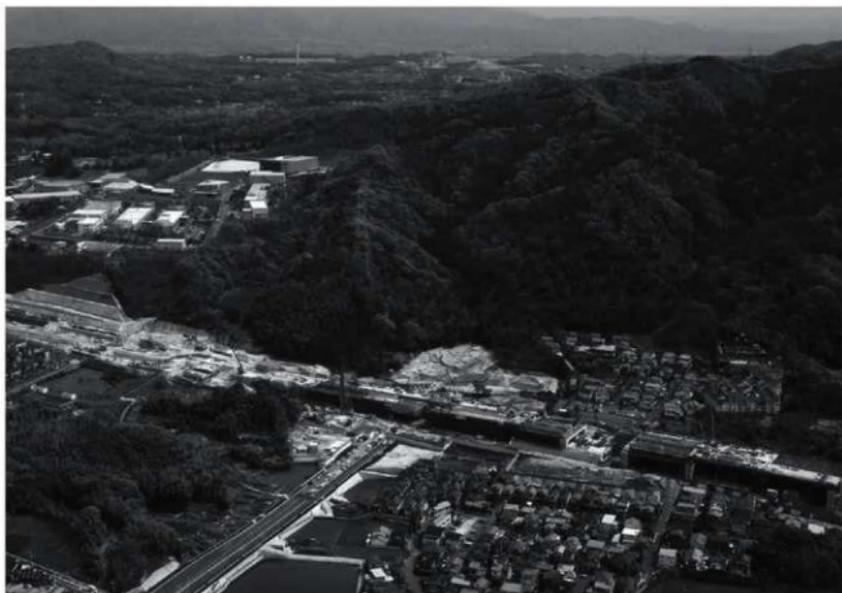
第3面全景(南西から)



空風輪出土状況(西から)



50溝土器出土状況(南西から)



調査区遠景(西から)



調査前状況(南から)



第1面全景(西南西から)



3建物(手前)と2墓(中央奥)(南から)



3 建物検出状況(北東から)



3 建物遺物出土状況(北東から)



3建物大観通宝出土状況(南東から)



3建物青銅製品等出土状況(南から)



3建物遺物出土状況(南から)



3建物遺物出土状況(西から)



244礎石断面(東から)



239礎石断面(南から)



3 建物遺物取り上げ後状況(北東から)



3 建物完掘状況(北西から)



26石仏列(西から)



1石群(西から)



1石群断面(南から)



2墓検出状況(南から)



2墓完掘状況(南から)



4石組(南から)



4石組断面(南東から)



18 竪穴(北西から)



18 竪穴内24 炉(右)・25 ピット(左)断面(東から)



235 溝(南東から)



第2面全景(南西上空から)



第2面全景(西北西から)



32石群(北から)



32石群(南東から)



32石群断面(南西から)



89石群(西から)



89石群(北から)



84 石囲い 検出土状況 (西北西から)



84 石囲い 断面 (北北西から)



84 石囲い 石出土状況 (南南西から)



84 石囲い 完掘状況 (南南西から)



84 石囲い 完掘状況 (北北東から)

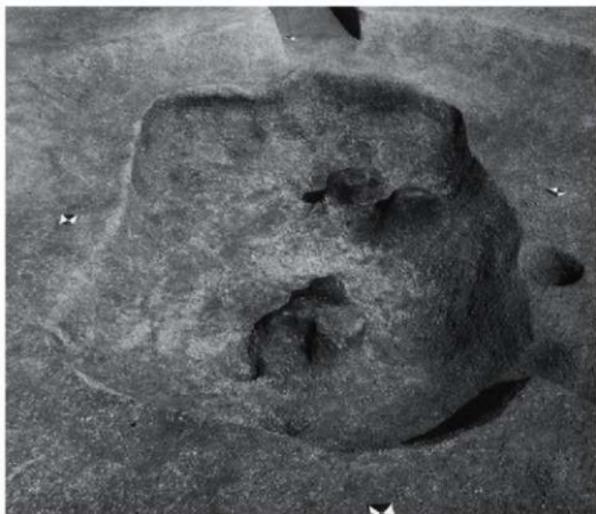


84 石囲い 掘方断面 (北北西から)

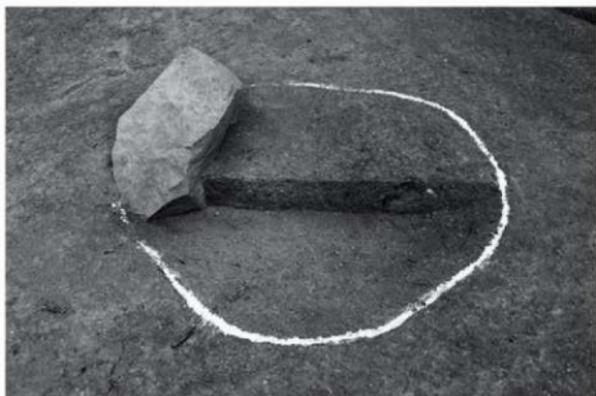


(左上) 93 焼土坑断面(北西から)

(上右) 93 焼土坑断面(西から)



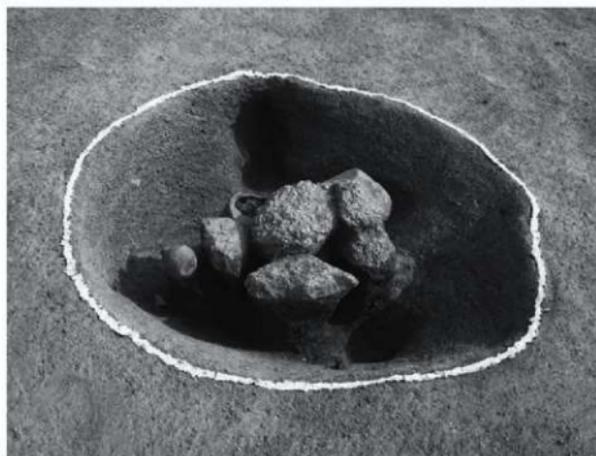
93 焼土坑完掘状況(西から)



121ピット(南から)



62墓(北から)



114墓(北から)



112墓(南から)



第 2 - 2 面北西部 (北東から)



第 2 - 2 面南東部 (南東から)

134 土坑 (南西から)



135 焼土坑断面 (東南東から)



135 焼土坑完掘状況 (南南西から)





第3面北西部(東から)



第3面南東部(北から)



第3面50溝出土遺物



第3面出土五輪塔空風輪



中世洪水砂層出土遺物



近世洪水砂層出土遺物





103



104



105



106



107



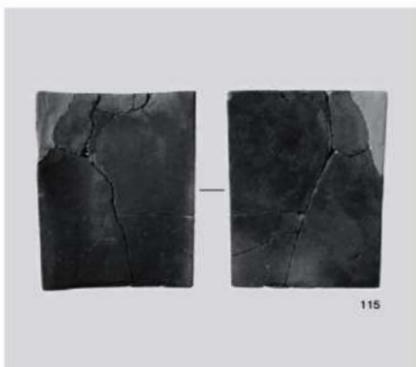
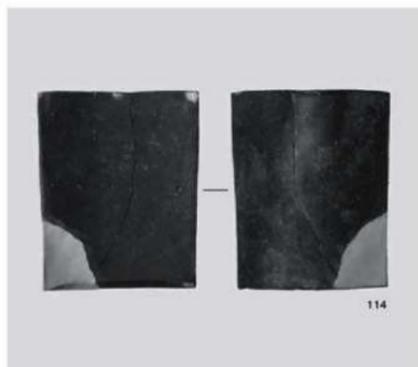
108



109



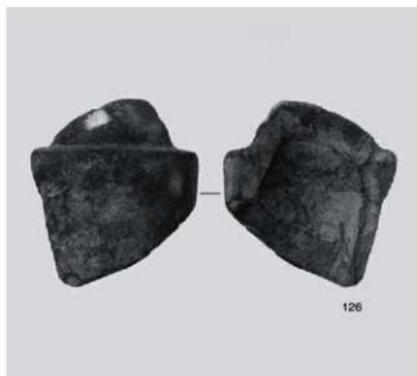
丸瓦



平瓦



竹管文のある平瓦



面戸瓦



雁振瓦

道具瓦



文字瓦



隅木蓋瓦



138



141



143



144

菊花文軒丸瓦



148



149



150



152

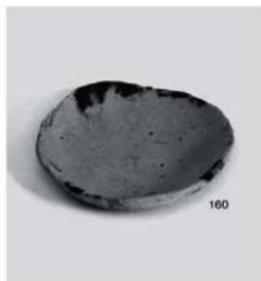


153



157

剣頭文軒平瓦



160



161



164



178



179

3 建物出土遺物

29 土坑出土瓦



184



185

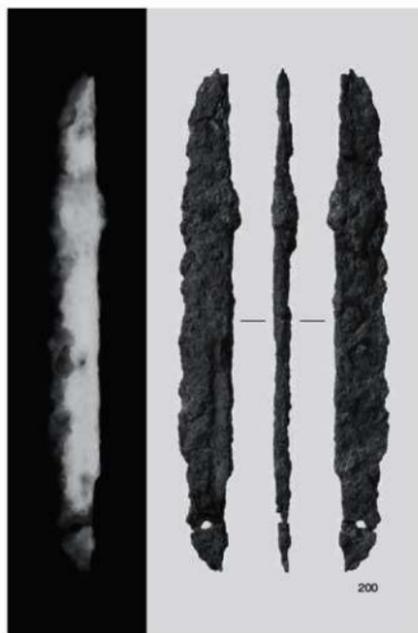
26 石仏列 (1)



26石仏列(2)



石仏





2墓出土土器



18壁穴出土土器



15土坑出土土器



16石群出土土器



22土坑出土石鍋



28ピット出土土器



4石組出土五輪塔空風輪



215



217



218



220



221



222



224



211



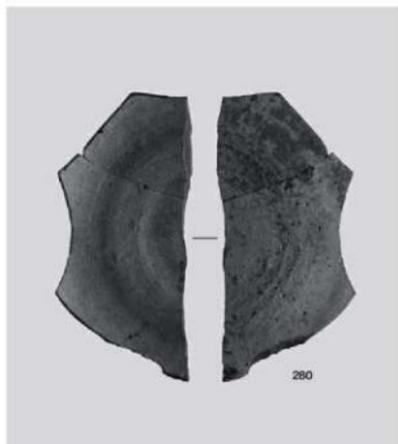
73土坑出土土器



266



83ピット出土土器



260



279



281

43落ち込み出土土器



292



293



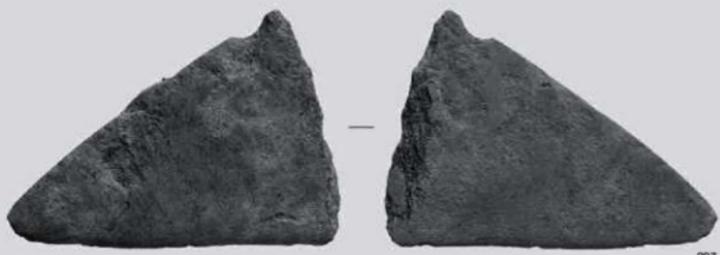
294



295



296

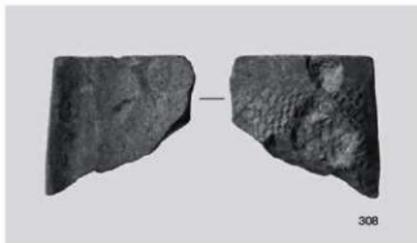


297

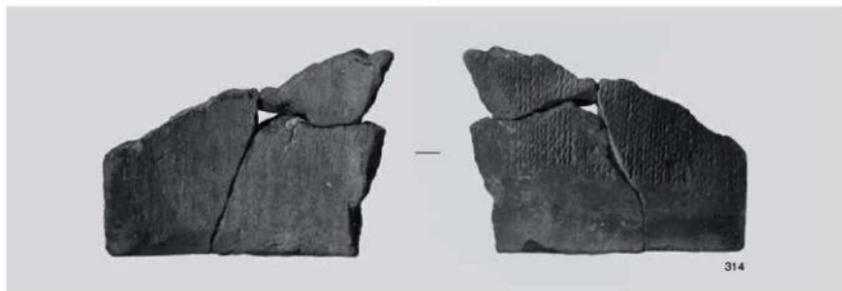
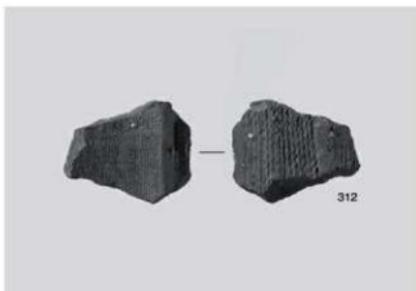
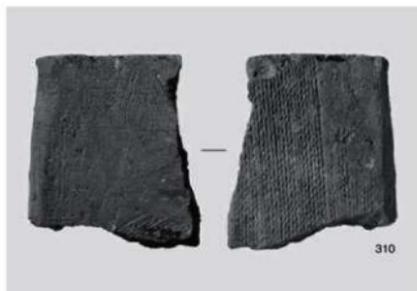


縄文土器

弥生土器



古代の瓦(1)



古代の瓦(2)



古代の土師器



318



326



327



329



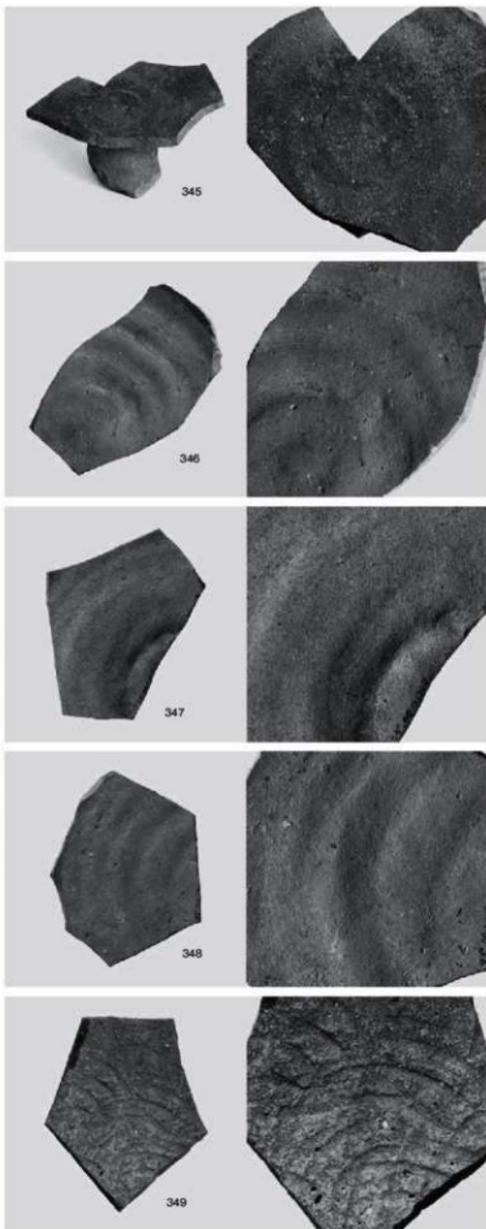
331

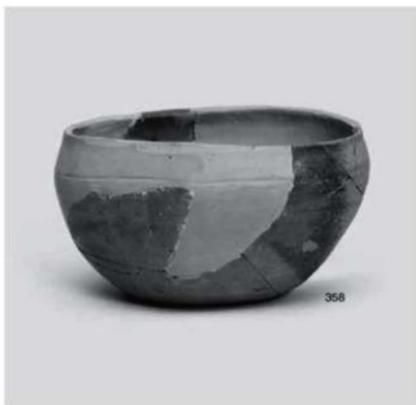


333



337







371



372



373



374



375



376



377



378



379



380



383



384







瓦器



瓦質土器



東播系須恵器



常滑焼



古瀬戸



454



464



457



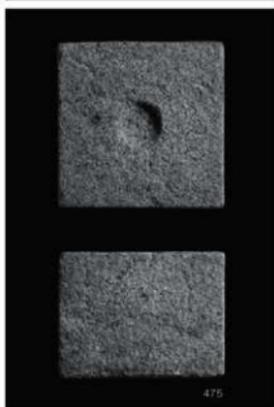
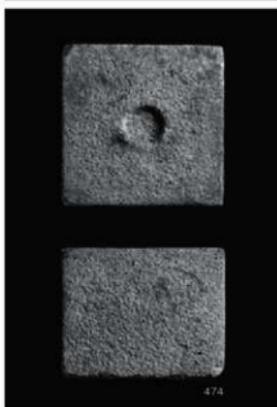
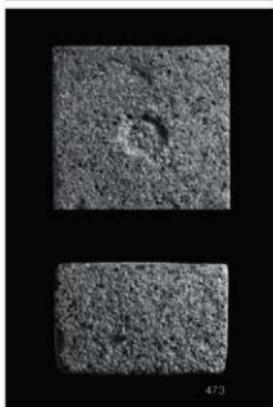
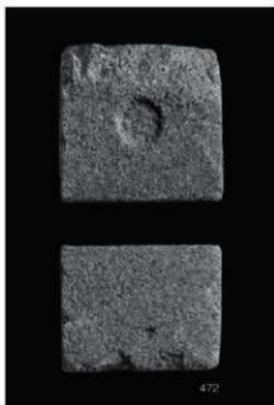
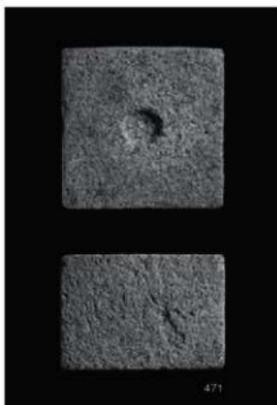
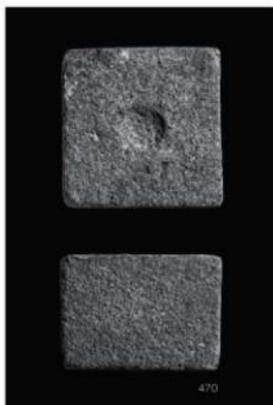
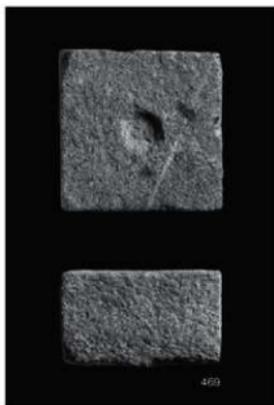
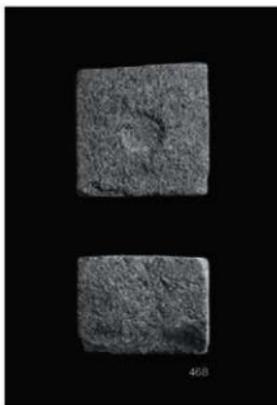
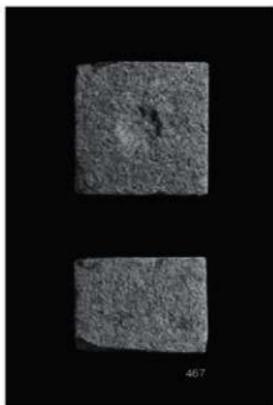
465

滑石製品



460

中世の瓦





175



176



177



230



290



478



479



480



481



482



483



484



175



176



177



230



290



478



479



480



481



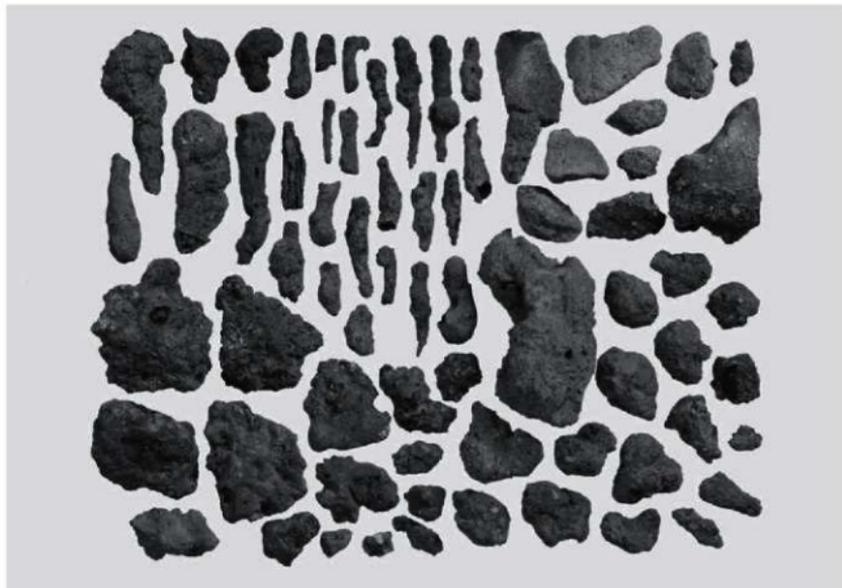
482



483



484



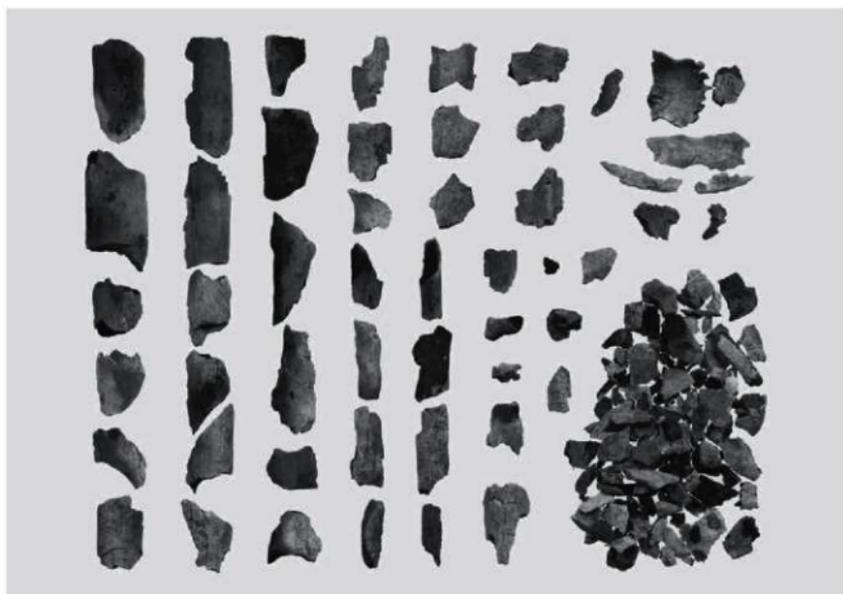
18 竪穴出土鉄釘・滓等



25ピット出土鉄釘・滓



22土坑出土鉄釘・滓等



119墓出土骨

報告書抄録

ふりがな	つだいせきに							
書名	津田遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第200集							
編著者名	本間元樹 三好孝一 村上富喜子 奥田 尚							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 ☎ 072(299)8791							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
津田遺跡	おおさかひらかたし 大阪府 枚方市 つだいなみまち 津田南町1・2丁目	27210	63	34° 48' 01"	135° 42' 23"	2008.6.20 ～ 2009.5.29	3826㎡	一般国道1号 バイパス(大阪 北道路)・第二 京阪道路建設
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
津田遺跡	散布地	旧石器時代		ナイフ形石器				
	散布地	縄文時代		長原式土器				
	散布地	弥生時代		弥生土器 石包丁				
	集落	飛鳥～奈良時代	土坑 落ち込み	埴埴 銚型 須恵器 瓦	火頭形三尊埴埴出土			
	墓	平安時代	火葬墓	灰輪陶器 須恵器				
	墓		墓	輸入陶磁器 短刀	青磁碗2点と皿3点出土			
	生産	鎌倉時代	鍛冶工房	鉄釘 滓 焼土塊				
集落		溝 石群	瓦器 土師器					
社 寺	安土桃山時代	礎石建物 石仏列		瓦 青銅製品 石仏	懸仏 鏡像 阿弥陀如来			
要約	津田遺跡	<p>旧石器時代以降の遺物と、飛鳥時代から安土桃山時代までの各時代の遺構を検出した。なかでも、次の各時代の遺構・遺物が重要である。</p> <p>飛鳥時代～奈良時代では、落ち込みや包含層から出土した火頭形三尊埴埴、小形独尊埴埴、銚型が特筆される。須恵器をはじめ、土師器や瓦も出土した。</p> <p>平安時代では、3基の火葬墓を調査した。3基とも土器は、口縁部が打ち欠かれ、逆に据えられていた。いずれも9世紀から10世紀前半の所産で、尾張、播磨、美濃といった他地域産である点に注意を要する。</p> <p>鎌倉時代は遺構の最も多い時期である。青磁碗2点、青磁皿3点、瓦器椀1点、鉄製短刀1振、鉄釘などの一括遺物を伴った墓や、床面に大石やがのある堅穴などを検出した。さらに、溝や多くの石を使って構築された遺構も調査した。</p> <p>安土桃山時代には、寺と推定される礎石建物がある。多量の瓦に加え、懸仏尊像部や線刻十一面観音鏡像などの青銅製品も出土した。阿弥陀如来の石仏列もみられた。</p> <p>以上のように、各時代において宗教や埋葬に関連の深い遺構・遺物を調査した。</p>						

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第200集

津田遺跡Ⅱ

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日 / 2010年3月31日

編集・発行 / 財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本 / 岡村印刷工業株式会社
奈良県高市郡高取町大字車本215番地